

放射能災害下の保育問題研究

平成 27 年調査を中心に



発行 一般社団法人日本保育学会

編集 放射能災害にかかる保育問題研究委員会

はじめに

2017年度版「放射能災害下の保育問題研究」報告書をお届けします。2015年度調査結果を加えてまとめました。

本委員会（放射能災害にかかる保育問題研究委員会）は、2011年5月の日本保育学会第64回大会緊急シンポジウム後に発足した「災害時における保育問題検討委員会」の活動を受けて、2013年4月から2017年3月まで調査とそのまとめを行ってきました。東日本大震災後の放射能汚染による環境悪化の下で、子どもの健全な育ちをどのように支えるか、先が見えない中での保育の工夫の経過と子ども達の姿、園長、保育者、保護者の考えをできるだけ丁寧に捉えること、状況変容の過程から、危機的状态における保育についての考え方を明らかにすることなどを目指しながら実態調査を繰り返しました。本報告書は「災害を生きる子ども」（2013.5）（2011、2012年調査結果の報告）、「放射能災害下の保育問題」（2015.12）（2013年、2014年調査結果を中心に報告）に続く、報告書第3報です。これまでの調査の全容は以下に示したとおりです。調査用紙は巻末資料として掲載しました。

本報告書では、これまで報告してきました各時期の横断的、要因別状況結果にもとづいて、さらに時系列的分析、要因間の相互作用の分析をした結果を報告しました。平常時より環境変化が速い状況下での調査であったことにより、各章において具体的に指摘されており、要因間の関連検討や子どもの育ちの経過をたどることによって、保育現場の中で起こっていることについて、一部ではありますが具体的に捉えることが出来たと考えます。非常事態、環境の急変等起こりうる保育環境問題に直面した時の、おとなの対応の仕方、子どもの育ちや保育についての考え方について、いくつかの示唆が得られたものと考えます。

震災後日々の生活のご苦労が多い中、積極的に調査に応じてくださいました保育者、保護者の皆様のご協力によって、貴重な資料を得ることが出来たことに感謝申し上げます。当委員会活動は本年度を持って終了しますが、本報告書は最終報告書とは考えません。収集したデータの異なる視点から分析はまだ必要でしょう。また、何よりも子ども達は発達途上であり、保育現場はこの度の経験を踏まえた保育の取り組みを続けています。今後も見届け、研究手法の検討も含めた追跡研究の実施、そして、殊のほか私達がこの体験を生かしていくことが残された大きな課題でありましょう。

収集したデータは日本保育学会事務局で保存し、今後も研究材料として活用していただけると幸いです。

なお、本報告書及びこれまでの報告書は日本保育学会のHPからもダウンロードできるようにしていただきました。様々な場で活用していただけることを願ってやみません。

（放射能災害にかかる保育問題研究委員会一同）

「放射能災害下の保育問題研究」実施調査一覧

本報告のもとになった調査は以下のとおりである。なお、本調査は園単位に調査依頼をし、配布数（調査対象者数）が不確定のため、回収数を示した。

I 協力園保育の状況調査（郡山市4幼稚園 福島市3幼稚園）

（デーリープログラム、保育内容、エピソード記録等）

第1回調査 2011年5月配布 1012年3月回収

第2回調査 2013年4月配布 2014年3月回収

II 協力園保護者調査（郡山市4幼稚園 福島市3幼稚園）

第1回調査 2011年7月 保護者 753人

第2回調査 2012年1月 保護者 790人

第3回調査 2013年1月 保護者 633人

第4回調査 2014年1月 保護者 685人

III 協力園新入児対象保護者調査（郡山市4幼稚園 福島市4幼稚園）

* 比較対象園として徳島市1幼稚園）

第1回調査 2013年7月 保護者 281人

第2回調査 2014年9月 保護者 318人

IV 広域調査（福島県中通り地方 幼稚園・保育園・認定こども園）

* 第1回のみ比較対象関東圏幼稚園・保育園を含む）

第1回調査 2012年1月 園長142人 保育者657人 保護者4113人

第2回調査 2014年2月 園長57人 保育者358人 保護者1558人

第3回調査 2015年2月 園長69人 保育者215人 保護者1736人

V 協力園園児発達調査（* 第4回郡山市幼稚園のみ）

第1回調査 2012年3月 3歳児 223人 4歳児 291人 5歳児 340人

第2回調査 2013年3月 3歳児 215人 4歳児 357人 5歳児 315人

第3回調査 2014年3月 3歳児 259人 4歳児 319人 5歳児 362人

第4回調査 2015年3月 3歳児 111人 4歳児 206人 5歳児 215人

放射能災害にかかる保育問題研究委員会

（委員会メンバー）

関口 はつ江（委員長）・太田 光洋・賀門 康博・加藤 孝士・原野 明子

関 章信（平成24年度まで）・生駒 恭子（平成25年度から）

（本報告書関連データ分析、執筆ワーキングメンバー）

永井 知子・長田 瑞恵・山崎 晃

目次

はじめに	i
「放射能災害下の保育問題研究」実施調査一覧	ii
放射能災害にかかる保育問題研究委員会	ii
第1章 研究協力園保育実践調査	1
I 保育内容の変化概要について（平成23年度及び25年度の調査から）	1
II 平成25年度の保育者の気づきに関する記述内容から	5
III 子ども達の運動能力の変化について	8
IV 結びとして ～これからの福島の変化と保育について～	11
第2章 発達調査	15
I 平成26年度分の分析及び縦断データのコホート比較結果	15
II 4年間の発達調査領域別性別分析結果	30
第3章 保育者対象調査（2012年、2014年、2015年広域調査）	44
I 量的データの分析	45
II 自由記述の分析	55
III まとめ	71
第4章 保護者対象調査（2012年、2014年、2015年広域調査）	75
I 目的	75
II 方法	75
III 結果	76
IV まとめ	86
第5章 広域調査まとめ（2014年、2015年）	89
I 園長調査の再検討	89
II 園長調査と保育者調査の関係	92
III 園長調査と保護者調査の関係	100
IV まとめ	107

巻末付録：本研究で使用した調査用紙.....	112
I 協力園保育の状況調査用調査用紙.....	112
1. デイリープログラムの変化に関するアンケート（1回目）.....	112
2. デイリープログラムの変化に関するアンケート（2回目）.....	116
3. 園活動の記録（1回目）.....	120
4. 園活動の記録（2回目）.....	122
II 協力園保護者用調査用紙.....	125
III 協力園新入園児対象保護者用調査用紙.....	128
IV 広域調査用調査用紙.....	129
1. 園長用調査用紙.....	129
2. 保育者用調査用紙.....	131
3. 保護者用調査用紙（最終版）.....	134
編集後記.....	136

第1章 研究協力園保育実践調査

賀門 康博

はじめに

東日本大震災及び東京電力福島第一原発事故から早6年が過ぎた。その長くもあり、そしてあっという間とも言える時間の中で本委員会では保育現場における影響をアンケートや聞き取り調査など多方面から見つめ、保育者や保護者を含めた子どもを育てていく保育環境の変化やその意味を見つめてきた。私自身の調査内容は、福島県の中でも原発からの距離が離れている福島県中通り地方を中心としたものであった。今回、最終報告を行うに当たり、これまでの調査結果とこれまでの報告書には記しきれなかった資料などを振り返ることで、“ただちに健康被害は無い”といわれ、住む地を離れるべきか、留まるべきかの判断を一人ひとりに委ねられる結果となった地域の状況から見えてきた子どもの育ちを守る意味と必要なことを考えていきたいと考える。

I 保育内容の変化概要について（平成23年度及び25年度の調査から）

<調査概要>

福島県の中心方部（中通り地方）である福島市と郡山市から計7つの協力園（私立幼稚園（福島市3、郡山市4））を抽出。アンケートによる回答をKJ法を使い因子及びその関係について分析した。（1）

1. 平成23年度 I期（4～7月）

I期に関しては3.11に続く東京電力福島第一原発事故からの混乱から、卒園式、入園式を行い、福島に残っている目の前の子ども達に対して、どのように保育を行っていくかわからないまま保育を行っていた時期といえる。その保育のベースにあるものは、以前からの園庭や砂場などの外に、自由に行くことが出来るような生活を送りたいという、“3.11以前の当たり前保育”であり、それ故にその保育が出来ないという事からの喪失感が強く、それを「守り」補っていこうという意識が強く見られた時期であるとみることが出来る。

以下にあげるような内部被曝・外部被曝に対する「放射線対策」を行う中であらゆる制限が、保育を維持するという「防御意識」に繋がっていると考えられる。そうした中での保育から「運動・発散的活動」「異年齢児との関わり」「自然との関わり」「感覚刺激」といった保育の要素に対しての欠乏感が強くなり、そこをどう補填していこうかというなかで、「何かをしなければいけない」という意識が先に立ち、より多くの活動内容への刺激を行っているとも見られる。

そうした保育の中で、子ども達については比較的明確にわかる地震についての不安への対応は行っているものの、放射能汚染に対しては先に述べたような形での補填対応が強く出ており、子ども達自身も保育者からの関わりを含めての周囲の状況の変化に対して「我慢」をする気持ちが強かったと考えられる。

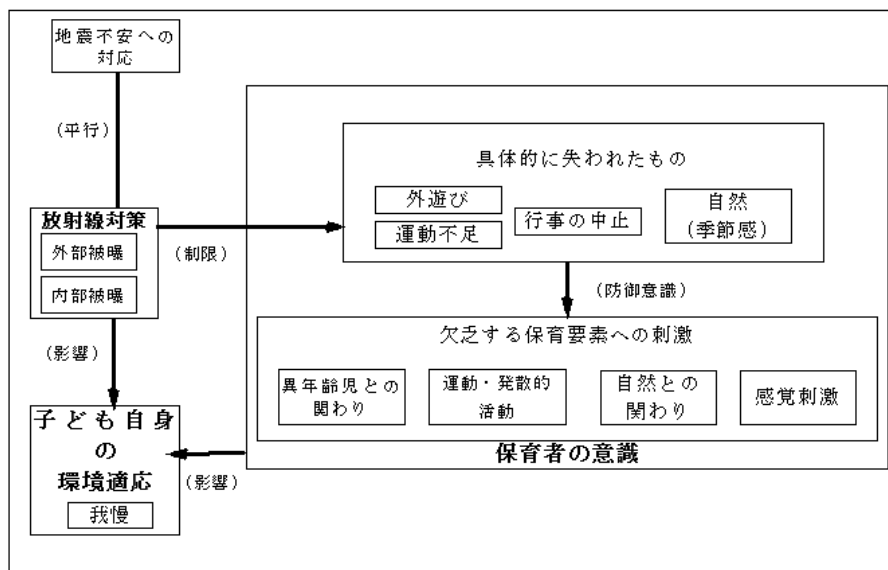


図1 平成23年度 1学期（4～7月）

2. 平成23年度 II期（8～12月）

II期については、震災・事故から半年近くが経ち、また夏休みを挟んだということから、子ども達も保育者自身もI期よりも落ち着いて状況を理解し、保育を進めることが出来はじめた時期であるとみることが出来る。

地震や津波からの直接的被害について、中通りという地域自体が岩手県・宮城県や福島県沿岸部（浜通り地方）に比べれば小さかったため、地震や津波に起因する対応は徐々に少なくなり、園全体の大枠の対応としては放射能対策が中心になってくる。地震、放射能両面への対応が急務であったI期に比べると、問題意識を放射能対応に集中することが出来てきたともいえる。

少しではあるが除染が進んだことで、一部の放射線量の低い園では外遊びの制限解除も見られ始めたのもこの頃ではあるが、マスク着用や衣類に放射性物質が付着することへの注意もあり、まだまだ制限や保護者の要望への配慮の方が強く、とりあえず外に出ることが出来るといった外の活用状況であったともいえる。

外遊びの制限解除など、状況の変化もあったが、依然として続く活動制限を補填しようと子どもにとって刺激的な活動を行った。その中で課題となる「三間」（仲間、時間、空間）への意識が、保育者の意識の中でより明確に出てきているのもこの時期からであった。

子ども達自身も放射能という言葉について、これまで周囲の大人がとっていた対応などから、漠然とではあるがその意味（危ないもの、汚いもの、触ってはいけないもの）を把握してきている。意味がわかってきたことで、自分の周囲の状況の変化（友だちとの別離、活動の制限）をより理論的に理解し始めている。

子どもと保育者が時間的にも空間的にも緊密にいる中で、子ども達自身の環境への適応と、保育者の（三間への）課題意識の二点について共有できたことで、I期に強かった「何かをしなくちゃ」という保育意識が少し弱まり、「自由遊びの重要性」に改めて気づかされるようになった時期であるとも言える。それと平行して、限られた時間と空間の中で、何をさせたいかをより意識して、時間を活用しようという意図も存在している。「遊

び」と「保育者からの意図した活動」という両面を、限られた空間でどう指導していくかを、より意識して保育にのぞんでいる姿が浮かび上がってきていると言える。

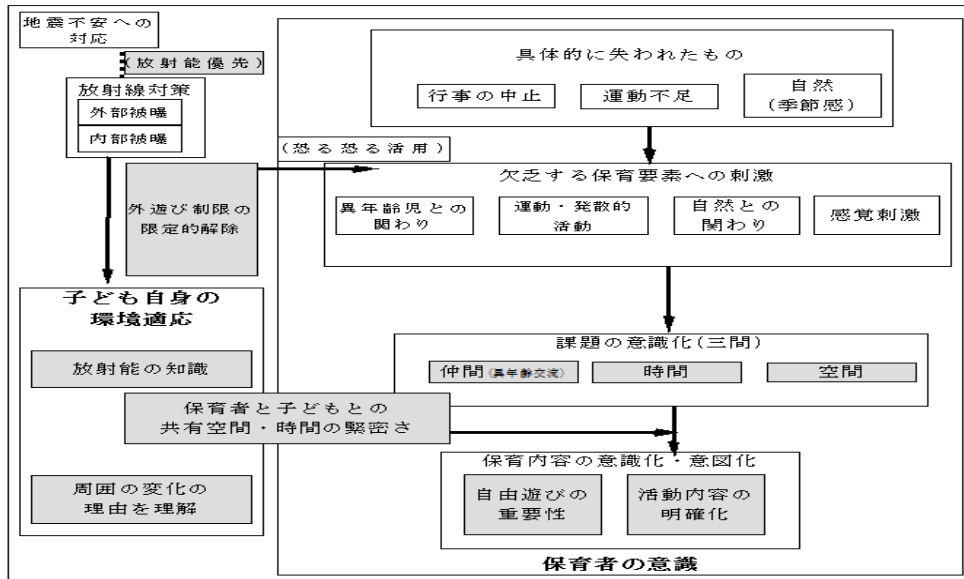


図2 平成23年度 2学期 (8~12月)

3. 平成23年度 III期 (1~3月)

III期については震災から1年近くが経ち、様々な情報からの「放射線知識の深まり」が強く感じられる内容となった。これまでは放射線からどう守っていくか、避けていくかという対応が中心であったが、放射能への十分な知識の獲得、放射能対策（除染）が進んだことで、保育の中の欠乏要素を埋めるための「積極的な活用」が進んできている。特に冬という自然環境の中での“雪に触れる、感じる”という経験については、“今しか出来ない経験”として、雪の放射能リスクを考えた上で経験させようとする姿も見られ、自然環境体験での疑似体験の限界を感じる中での活路を見いだしているように考えられる。

活動に関しては、II期において自由遊びと活動内容の明確化という意識を持った上で、その「活動自体の連続性」の重要性を重視し始めているともいえる。欠乏している保育要素がばらばらなものではなく、子どもの中では一つの流れであるべきであるという意識であり、また、子ども自身の生活が充実するためには各要素の補填、充実も重要であるが、それ以上に子どもの気持ちを個々の要素で見るのではなく、一つの塊として見ることの重要性を再認識出来る様になっているのではないだろうか。

子ども達自身の環境適応については、放射能対応への意識が深層化しているように見られる。例えば“外に出ないことが当たり前”になり、外に出られない事自体にはストレスは少なくなったものの、その奥底では時間の経過による「吹っ切った気持ち」に似たものも感じられる。特に年長児などについては、表だった「放射能だから……」という言葉は少なくなっている。以前の状況を思い起こしつつ、出口の見えない今の状況を受け入れて吹っ切ろうとしている様子が感じとれる。

そうした適応は家庭環境にも見られ、放射線量の高い自宅ではなく、県外などで週末を

過ごす“週末避難”が常態化し、生活の流れとして“あたりまえ”として組み込まれた感がある。状況を憂いつつ、あたりまえと考えることで、日常が安定してきたと考えられる。そう考えると、家庭においては放射線環境への適応という中での一つの「新たな生活のパターン」が成形されてきたと見ることもできるのではないだろうか。

保育者の放射能への不安を意識しつつ積極的に対応していきたいという意識と、保護者の吹っ切ろうとする意識との間に若干のズレがあるようにも考えられる。そこにどうアプローチしていくかが、保育を進めていく中での今後の課題とも見ることができないのではないだろうか。

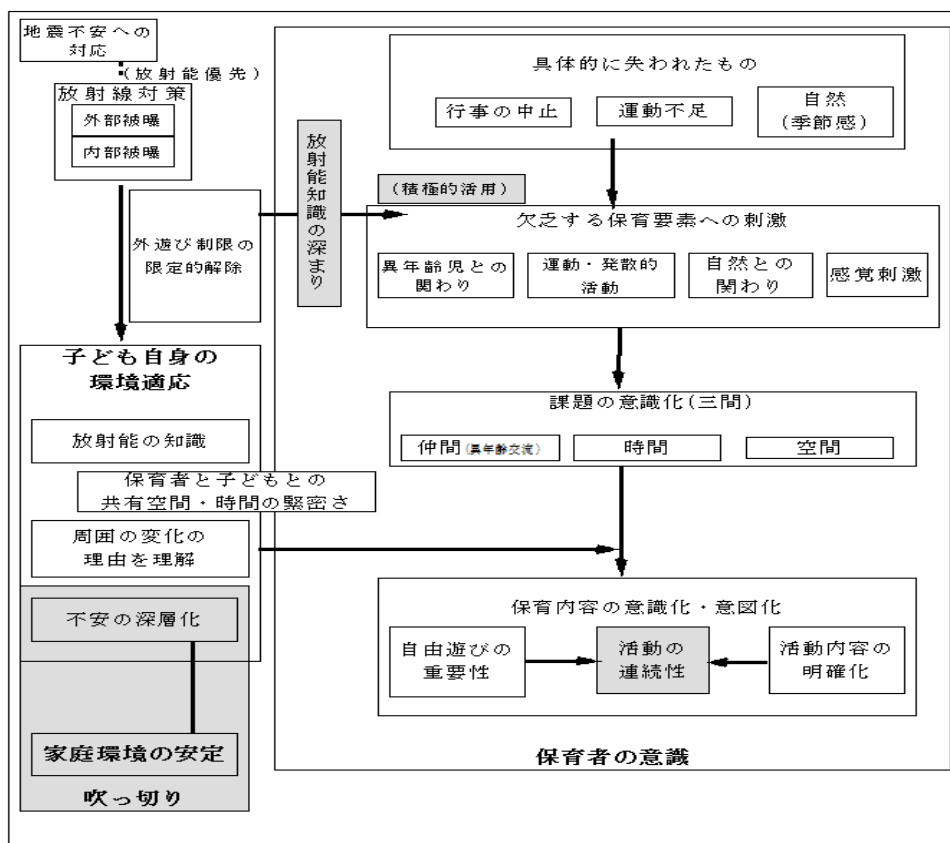


図3 平成23年度 3学期(1~3月)

4. 平成25年度調査(通年)(2)

前回調査に比べより明確に経験不足や、異年齢との関わり不足からの憧れとなるモデルの未形成、発達の差などが顕著になってきて、“申し訳ない思い”もどこかで感じつつ、除染等による状況の変化を少しずつ日々の保育の工夫の中に取り入れ、保育者一人ひとりが感じている“今、必要な経験”を得させようとしているのが、福島県の保育者達である。

とにかく、放射能問題に健康被害や、外遊びが出来ないという点に注意がいきがちな福島という環境であるが、環境に甘んじて「仕方ない」と思っているだけではなく、そこに必要な経験の必要性を強く感じているからこそ、日々の工夫が生まれているのではないだろうか。様々な生活経験の不足や自然との関わり不足などは、福島特有の問題ではなく、待機児童問題などで保育環境が悪化しやすい首都圏などでは、共通するところではないであろうか。それ故、今回のこうした状況にある子ども達を見る保育者の観点の数々は、今

の子ども達を保育する中で他山の石とすべきであり、そうすることが真に「子ども達を大切に育てる」ことに繋がるのではないだろうか。

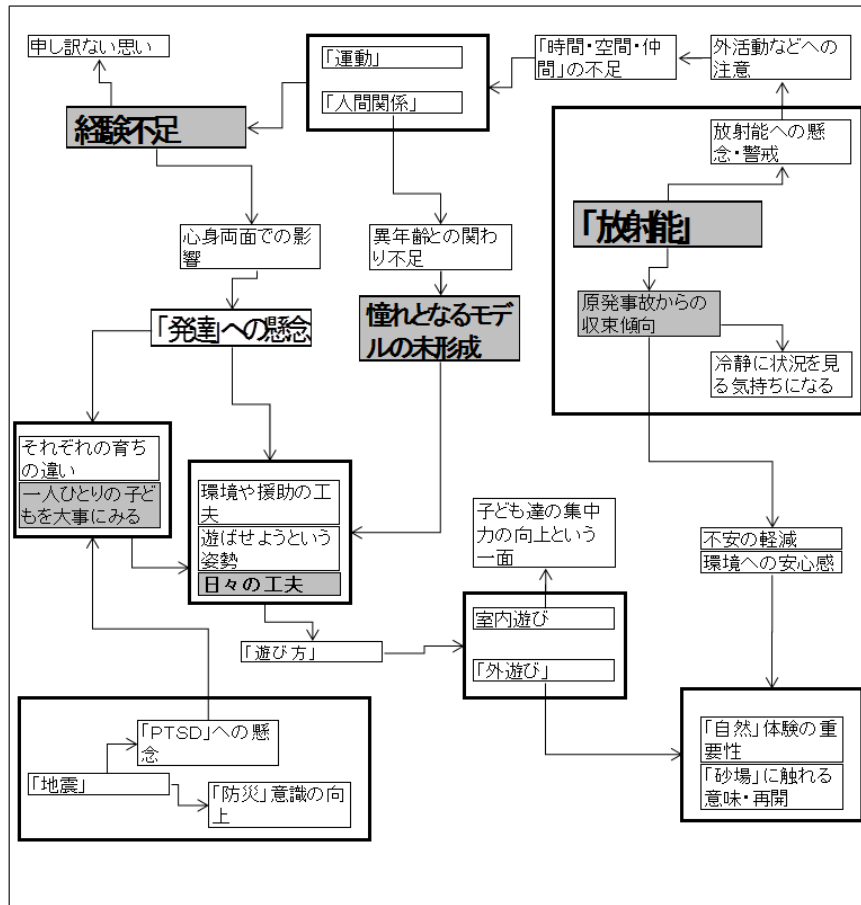


図4 平成25年度調査による保育者の保育についてのとらえ方の変化の概要図

II 平成25年度の保育者の気づきに関する記述内容から

先に示した概要図を作成する過程では、各要素についてラベルを付けてある程度のまとまりとして関係を見ていった訳であるが、一つひとつの回答については本来一括りに出来ない思いのかたまりである。ここでは、保育者からのアンケートへの回答の一部を原文のまま拾うことで、それらについての思いを少しでもすくい上げていくこととする。

1. 放射能という存在と子ども達

保育者からすると、本来は保育環境の中で意識することはなく、最も遠い存在であるべき放射能という言葉が、子ども達の中にごく普通にある事に、大きな違和感とやるせない思いを持たざるを得ない。目に見えない放射能が体や身近な物に付いていて、それを意識的に落としたりしないと触ることもすぐにしない（出来ない）子ども達の自然との関わりに危機感を感じているように思える。自然環境とはすなわち自分自身も含まれるものである。自と他との関係において、今後どういった影響があるのかが危惧されるのかもしれない。

(回答の一部)

- ・「せんせい ほうしゃのうが ついているから いしとか すなとか さわっちゃだめなのだよ」と子どもらが自ら話し、お互いに注意しあう姿が多く見られた。(年少組)
- ・「きれいなしみつけたからふくろちょうだい」と数名の男児。袋に石を入れると水道で水を入れ始める。「何しているの?」と聞くと、「ほうしゃのうがついているからあらわなきゃ!」と何度か水を入れ替えて洗い、「このくらいでだいじょうぶかなあ」と心配そうに聞く。「そうだね。先生も手伝うよ」と一緒に洗った。(年長組)
- ・朝の身支度を終えた子ども達。「せんせい きょうはおそと でられる?」と尋ねてきた。風が強い外を見ながら保育者が「うーん、今日はね…」と話そうとすると、「かぜつよくて ほうしゃのうがとんでいるから でられないんじゃない?」と他の子どもが言った。毎日保育者の判断を見ていたせい、子ども同士でも意識をしているようだ。(年長組)

2. 子ども達の遊びの変化

転んだりぶつかるという、わかりやすい運動面での変化も見られる(これについては、次項Ⅲにおいて、もう少し詳細に見ていく)が、それと並んで子ども達の心理面の変化を感じとっているようである。子ども達が「考えてみて、試してみる、挑戦してみる」という幼児期にこそ育まなければならない気持ちが、放射能という目に見えないものへの対応を、大人が先んじて制限してしまうことで、子どもの気持ちを削いでしまっているのではないか。そうした保育者の不安については、体力面とは違いすぐに目に見えるものではなく、今後の人生において影響を及ぼすものであると言える。運動面など目に見えて、具体化しやすい対応だけではなく、より保育の本質に近いともいえる子どもの理解を深め、心の成長を制限しないような対応が求められてきているともいえるのではないだろうか。

(回答の一部)

- ・体を動かしたいけど、場所も狭く、すぐにぶつかってしまう。特に鬼ごっこの時は転びやすい。(年長組)
- ・部屋の中で、それぞれが場所を確保して遊べるようにしたいが、上手く使えないでいる。(年長組)
- ・子ども達の中で「雪遊びをしたい」という要求を12月頃より言っていたが、「出来ないから仕方ない」と気持ちを抑える姿が見られる。(年長組)
- ・大ホールでの跳び箱や巧技台の活動は、今まで運動をする機会が少なかったため走る、跳ぶ、渉などのバランス感覚や挑戦する意欲が薄れていたように感じる。少しずつ「やってみたい」との声が聞かれたが、「やらない」「できない」と挑戦する前から諦める子どもも多かった。(年長組)
- ・本園の放射線量は他と比べて低い方だが、改めて恵まれた環境にいることを考えさせられ、その中で子の成長に大切なこと(心の成長、身体、運動面からの成長、他者との関わり、考えて気づくことや考えて行動に移すなど)は私たちが全力で守っていかなければならないことであると考えさせられた。(年中組)

3. 保護者の意識 ～隠れつつある不安～

時間の経過と共に保護者が持つ不安も時間の経過や子ども達の成長の姿から、少しずつ小さくなってきているようではあるが、直接的な避難といった不安への対応という形には出なくなってきただけで、口にするものへの対応（水筒持参）やマスク着用など、結果的に避難をせずここに住む中で不安を払拭するための対応へと、その姿が変わってきている様子が伺える。除染についても一応の区切りが付きつつある中で、放射能について気にする家庭と気にしない家庭との温度差が大きくなる中で、園としてどこまで対応するか、どこまで保育内容として削れないところを残し、保護者に説明し実施していくかという事を考えていく事が必要な段階に来ている様に、その内容から感じられる。放射能から守るのが健康被害だけではなく、その育ちである以上、園の保育理念が試されている段階と言えるのではないだろうか。

（回答の一部）

- ・（保護者から）震災などの影響で、体力が無く運動会はがんばれるのだろうかと思っていたが、大丈夫であった。（年長組）
- ・牛乳を注文する子が減り、水筒を持参する子が増えてきた。（年長組）
- ・各クラスの放射線量も測定し、毎週プリントにて保護者に知らせる。自宅より低い線量に安心する保護者が多い。（年長組）
- ・マスクをしている子どもには、お家の方からの要望により、大ホールへの移動の歳、片付けの時、窓を開ける際には必ず着用させるようにする。（年長組）
- ・ほぼマスク着用の子どもがいなくなった。家庭で徹底している家庭、そうでない家庭の温度差が大きくなる。（年長組）
- ・行事では「餅つき会」を中止とし、室内での昔遊びを中心とした参観に変更した。残念がる保護者も多数いた。（年少組）
- ・久しぶりにたくさん雪が降り、子の中にはブーツや長靴を履いてくる子、手袋を持ってくる子が少なかったため、今回は外での雪遊びは控えることにした。親も不安に思ったり、自分だけでは判断が付きにくいのだろう。他の人が行っているならやらせてみようという思いがあるのかもしれない。不安を示す方が多い時には、今後も控えようと思っているところだ。（年中組）

4. 保育を見つめ直すきっかけ

多くの回答に自然体験や運動への不安、ストレスを抱えている子ども達について不安視する内容があったが、そうした中でも自らの保育を振り返る中で保育の質の向上に繋がる一因になったという意見も見られた。大前提としてこうした震災や事故はあるべきものではないが、日常の当たり前の保育展開が根底から揺さぶられたことで、保育を違う視点から見直すきっかけにはなったのではないかと思える。とかく“教える”という立場で日々の保育や行事などに追われている保育者が、教える前に子ども達の今の姿を把握しなければならない状況に追い込まれたことで、保育本来の子どもから始まる保育の有り様に立ち戻ったともいえるのではないだろうか。震災・事故をきっかけとすることではあったがそうした経験を経たこと自体は、決してマイナスではないであろう。今後は、そうした経験が

ない震災後に就職した保育者とのそうした保育観の差や違いを、どう見ていくか、補っていくかも隠れた課題の一つではないかと考えられる。

(回答の一部)

- ・外遊びが十分出来なくても、バスを降りてクラスへくるわずかな時間でも、子どもは不思議や疑問を見つけ、季節を楽しんでいることが分かった。例年通りの“冬”を少しの間考えさせられたところでもある。(年中組)
- ・様々な遊び方を子ども達に教えていくことも大切だが、遊ぶ友だちの幅を広げていくことも大切にしていき、活動の幅を広げていきたいと思う。(年中組)
- ・気の合う仲間だけでなく、興味が同じ事で、関係が深まる姿があり、相手のことも思いやる気持ちは育っていると思う。(年長組)
- ・(夏祭りごっこで)皆で同じ目的を持ち、取り組むことをこの時期に経験できたことで、保育者が一人ひとりの育ちを再確認できた。(年長組)

Ⅲ 子ども達の運動能力の変化について

先の回答内容にも散見されたように、今回の事故による運動能力面への不安も決して無視することは出来ない。ここでは本委員会による直接的な調査ではないが、運動能力面の変化について、先の協力園の内1園では震災以前より各学年の4歳児(年中組)と5歳児(年長組)に対して行っている運動能力測定の結果から、その状況の一端を見ていくこととする。

[実施種目]

- ・25m走
- ・立ち幅跳び
- ・ボール投げ(当初は「ソフトボール」を投げていたが、市の協会との測定方法を統一により、25年度より「テニスボール」に変更した)
- ・体支え
- ・両足連続跳び越し
- ・捕球(25年度より)

現存する最も古いデータは平成8年度(年中組は平成9年度)のものである。その数値と平成22年以降のデータを比較し、20年程度前の運動能力と22年度以降とのそれを比較する中で、今回の震災と事故により懸念される子ども達の運動能力の状況について、一つの切り口として見ていくこととする。

<対象園児数>(単位:人)

		平成8年度	平成9年度	平成22年度	平成23年度	平成24年度	平成25年度	平成26年度
年長組	男児	54	/	13	14	13	22	15
	女児	31		21	24	24	18	13
	合計	85		34	38	37	40	28
年中組	男児	/	44	19	16	20	14	14
	女児		45	26	24	16	13	17
	合計		89	45	40	36	27	31

※平成8年度年中組及び平成9年度年長組のデータは無かったため、それぞれデータが存在する年度を利用した。

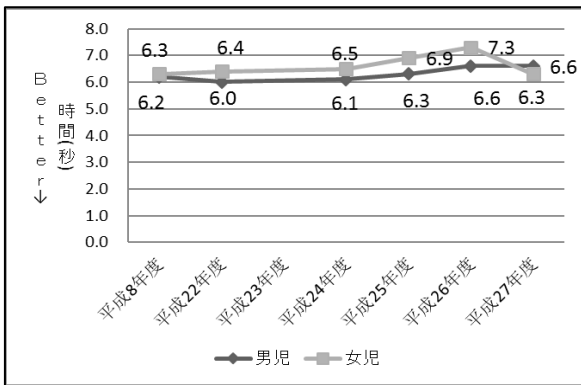
1. 結果について

<年長組（5歳児）について>

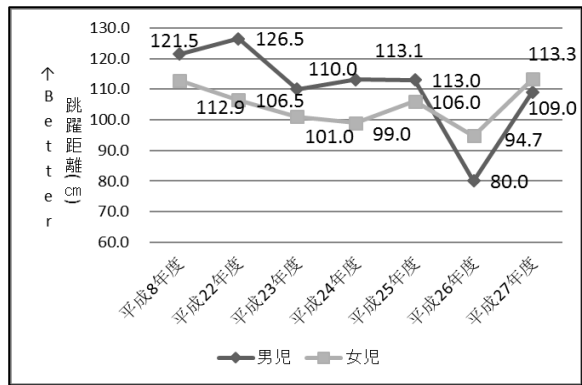
結果を見ると残念ながら全体的に運動能力は低下しており、その傾向は止められていないことが分析から見えてくる。これについては、幼稚園のカリキュラム変更内容のみならず、震災を含む社会環境での運動機会の低下も要因として考えられる。その中で唯一「捕球」に関しては結果が向上している。目と手の協調運動である補給能力が向上しているということは、そうした体全体での協調能力の向上の一旦とも受け取れる。

(年長組測定結果一覧)

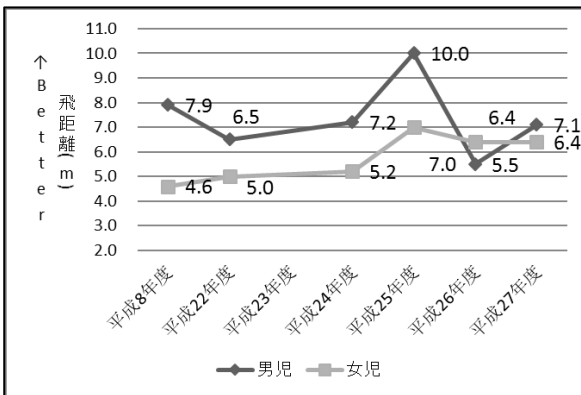
(1) 25m走



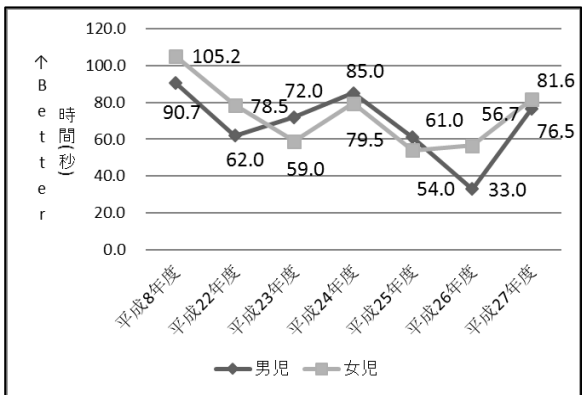
(2) 立ち幅跳び



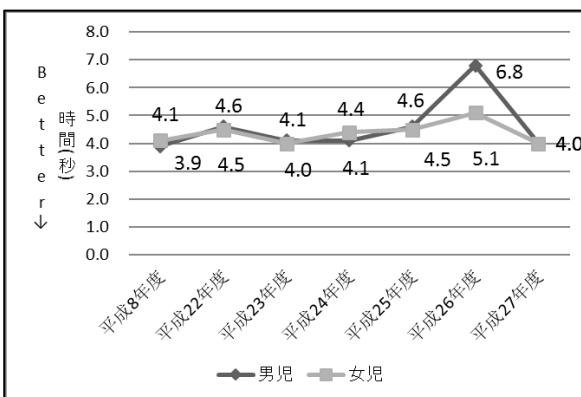
(3) ソフトボール投げ



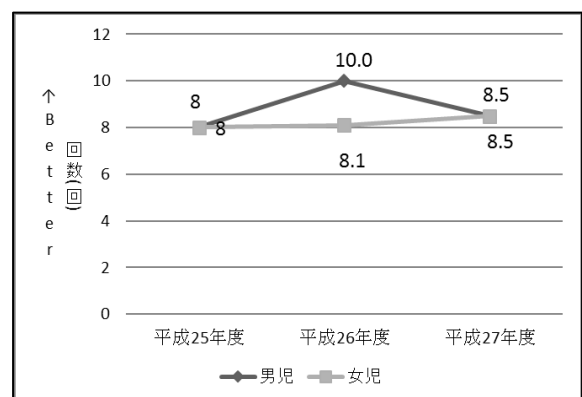
(4) 体支え



(5) 両足連続跳び越し



(6) 捕球



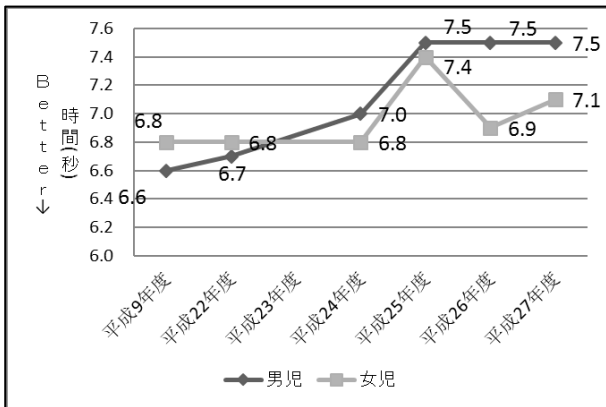
<年中組（4歳児）について>

年長組とは違い、こちらは昨年よりも全体的に運動能力が向上しており、落ちている種目は見られない。これについても、学年により多少の能力の上下があるので今後二次関数的に能力が向上していくか楽観は出来ないものの、良い結果が得られたと考える。

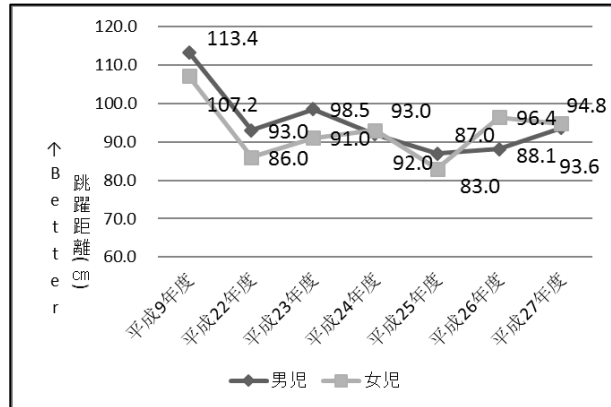
要因についても、震災後の1年目という最も運動遊びが出来にくかった時をいかに過ごしたかを調査することで、年長児との違いが見え、今後の運動能力向上のためのヒントが浮かび上がってくるのではないかと考える。

(年中組測定結果一覧)

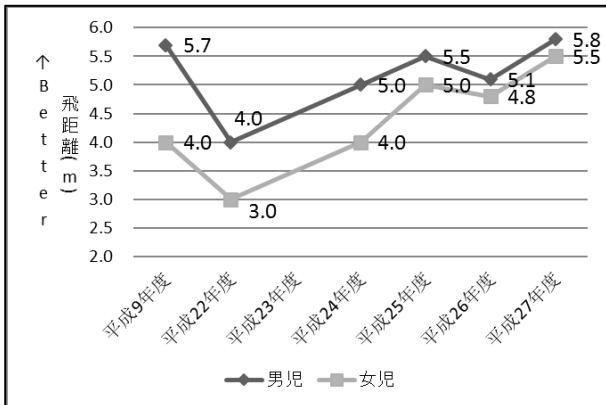
(1) 25m走



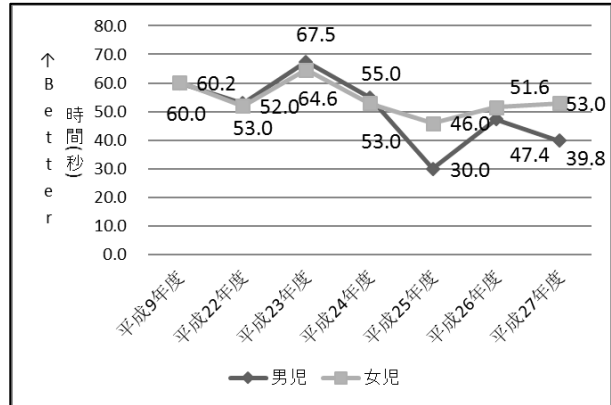
(2) 立ち幅跳び



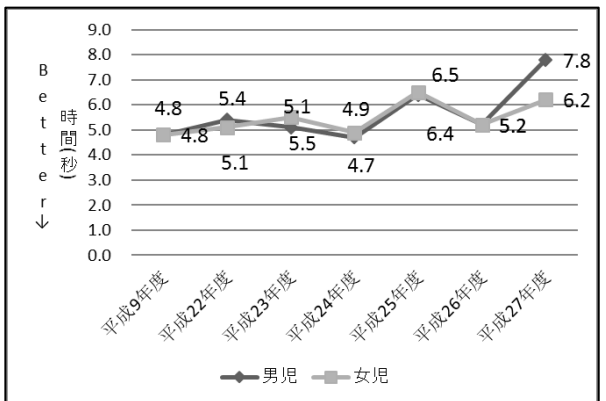
(3) ソフトボール投げ



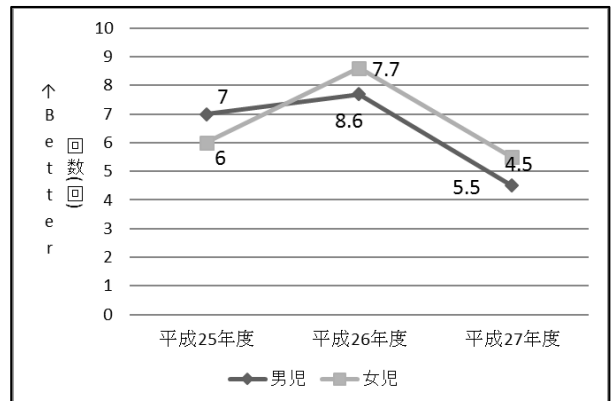
(4) 体支え



(5) 両足連続跳び越し



(6) 捕球



2. 結果からの考察

先にあげた結果に書いたように、震災前にもあった体力の低下傾向が震災・原発事故を境に一気に、顕著になったことがわかる。しかも、それは震災直後の24年度よりも2年経った25年度の方が、年長児の調査を見るとより顕著に表れている。これは24年度時点では前年度までの運動を含めた生活経験があったので、その伸びを何とか維持できていたと考えられるが、25年度以降では、震災当時3歳（年少組）以下の時の経験が不足していたことが、ここまで影響するということが推測される。そうした状況に対し保育者や保護者が意識的に運動を考え、家庭や園での保育の中で取り入れたことが、一定の成果として年中組の調査結果に表れてきていると言えるのではないだろうか。

今回の調査は年中・年長組の2学年に限ったものであったが、このような結果からも年中組以前の3歳までの生活経験の重要性が見えてくる。すなわち運動能力を獲得するための質の良い生活経験が幼児期、ひいては学童期や青年、成人期にまで影響が及ぼす可能性があるといえる。震災から6年が経ち、震災当時に年少組であった子ども達も小学校4年生になるまでに成長している。そうした子ども達への追跡調査なども行うことが、待機児童対策一辺倒で保育環境への配慮が二の次になりがちな、現在の子ども達を取り巻く保育環境において、乳幼児期に必要な質の良い生活経験を考えるきっかけの一つとなるのではないだろうか。乳幼児期の運動遊びについては工藤ら(2016)が保育の中にある運動遊びの要素についての研究考察を通じ、保育のあり方として①幼児の意が掻き立てられる遊びが準備されている、②同年齢・異年齢の仲間とのかかわりを大切にしている、③幼児の様子を見守り、認め、褒め、励ますかかわりを保育者はしていた、という3点を重要な点として抽出しつつ、「幼児が毎日楽しく体を動かすためには、幼児のことを良く理解している身近な保育者が、幼児との信頼関係の下に、様々な遊びを通して楽しく体を動かす機会を設けることが必要である」と述べている。⁽³⁾ こうした研究と、先に上げた運動能力の結果に関する結果を合わせて考えると、運動という能力を単体で考え、学童期以降の体育の授業を増やすような考えではなく、日々の園や家庭での生活を通じ、豊かな運動遊び経験をいかに増やしていくかを意識することが、求められると考えることが出来るのではないだろうか。

IV 結びとして ～これからの福島の変化と保育について～

表は前回の中間報告書にある、調査協力園における放射線量及び外遊びの制限の推移を一覧にしたものである。除染を行った結果、空間線量の推移を見ても震災後からの3年（表1）、郡山市内の調査結果のみになるが6年近く（表2）の中で、現時点での下限値までには低下し、時間が経つ中で徐々に低下している様子が分かる。この線量自体の影響についての研究は別の分野に任せるが、これからは除染を含めた直接的な放射能対策・対応や調査も継続しつつも、この地に住むことを決めた人達にとっての、住むことの質を向上させるための対応が必要になってくるのではないだろうか。住む中には当然（子どもを含めて）成長する意味や環境も含まれる。これまで見たように、保育の中でも保育者主導の保育から、子どもが出発点の保育へと意識が変わっていったように、行政としても住む人の気持ちを重視した上での復興計画作りが重要になってくるのではないだろうか。

	郡山市地域					福島市地域			
	A幼稚園	B幼稚園	C幼稚園	D幼稚園	平均	A幼稚園	B幼稚園	C幼稚園	平均
・震災直後(2011年5月)									
園庭	1.111	2.2	0.18	3.7	1.80	記述無し	2.35	1.083	1.7165
保育室	0.17	0.23	0.15	記述無し	0.18	〃	0.23	0.17	0.2
ホール	0.14	0.21	0.15	〃	0.17	〃	0.11	0.14	0.125
近隣の公園等	記述無し	2.6	記述無し	〃	2.60	〃	記述無し	0.63	0.63
2013年度3期									
園庭	0.139	0.13	0.1	0.12	0.12	記述無し	0.18	0.09	0.135
保育室	0.09	0.11	0.09	0.08	0.09	〃	0.07	0.083	0.0765
ホール	0.19	0.11	0.09	0.08	0.12	〃	0.11	0.067	0.0885
近隣の公園等	0.217	0.26	記述無し	記述無し	0.24	〃	記述無し	0.2	0.2

表1 各園の空間放射線量の状況(単位は μ Sv/h)

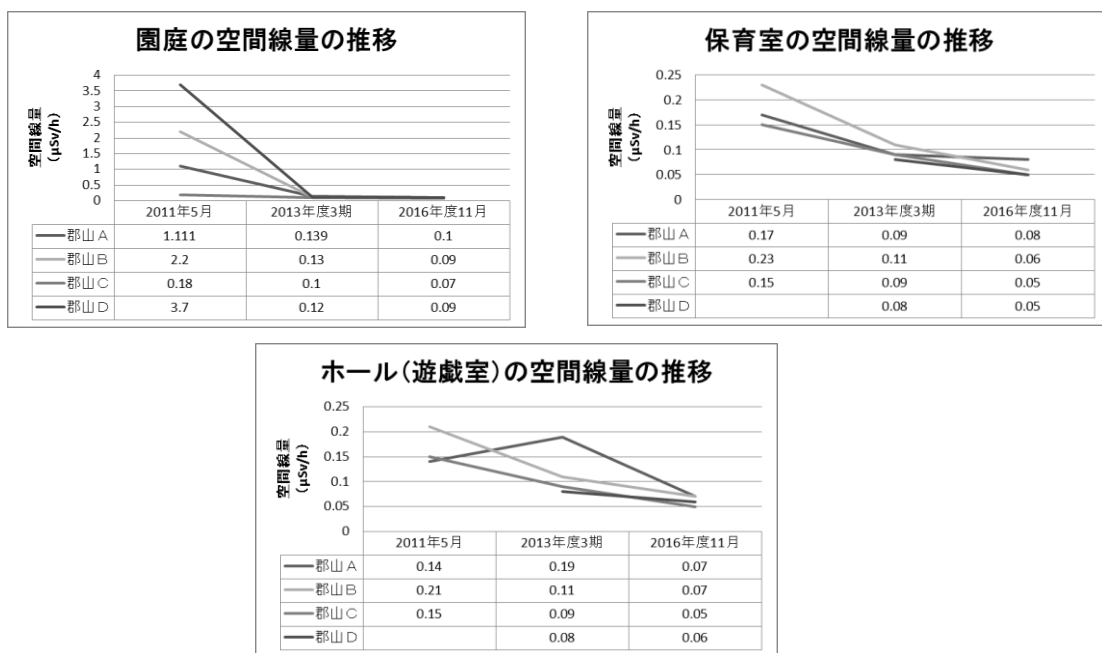


表2 郡山市の協力4園における空間線量の変化(2011年5月・2013年3月・2016年11月)

	2011年			2012年			2013年			2014年			2015年			2017年3月現在								
	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	5月		6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
郡山A	完全制限(外遊び0分)←			30分~60分まで←									120分まで←			制限解除								
郡山B	完全制限(外遊び0分)←						30分まで←			60分まで←(→制限解除)														
郡山C	完全制限(外遊び0分)←			完全制限(外遊び0分)←(→制限解除)																				
郡山D	完全制限(外遊び0分)←			完全制限(外遊び0分)←			30分まで←									60分程度								
福島A	完全制限(外遊び0分)←			30分まで←						60分程度(27年度も継続中)						制限解除								
福島B	完全制限			30分まで←			60分まで←(→制限解除)																	
福島C	完全制限(外遊び0分)←			40分まで←			60分まで←			120分まで←(→制限解除)														

表3 外遊びの制限の推移

(前回報告書の内容に2017年3月現在のデータを追記)

行政が行った市民への意識調査でも震災直後の様子からの意識の変化が見て取れる。図5は福島県の中心部に位置する郡山市が行った調査結果であるが、「災害に関すること」「子育て・教育に関すること」「親・子どもに関すること」といった、本調査で中心であった震災や事故への不安やそこに起因する子どもへの不安といった項目が大きく割合を減らしていることが分かる。災害に関することと、子育て・教育に関することについては40%近く割合を減らしているのに対し、親・子どもに関することについては14%程度の減少に止まっているのは、介護に関することが割合を増やしていることから、項目名に「親」が入っていることが要因ではないかと考えられる。こうした変化からも、一般的な住民も目に見えない将来的な不安を常に考える時期は終わり、それ以上に目の前にあり現実的な介護や健康といった点に不安が移ってきていると考えられる。見方によれば震災から立ち直り、前向きになっているともいえるが、これまで見たように表立った不安が出なくなったり、考えすぎて疲れしたりしたことで図3にあったような“吹っ切り”もしくはあきらめから出ている結果なのかもしれない。現実的な介護などの問題に目が行くことはやむを得ないことではあるが、子ども達の将来について、考えが止まってしまうことは避けなければならないのではないだろうか。

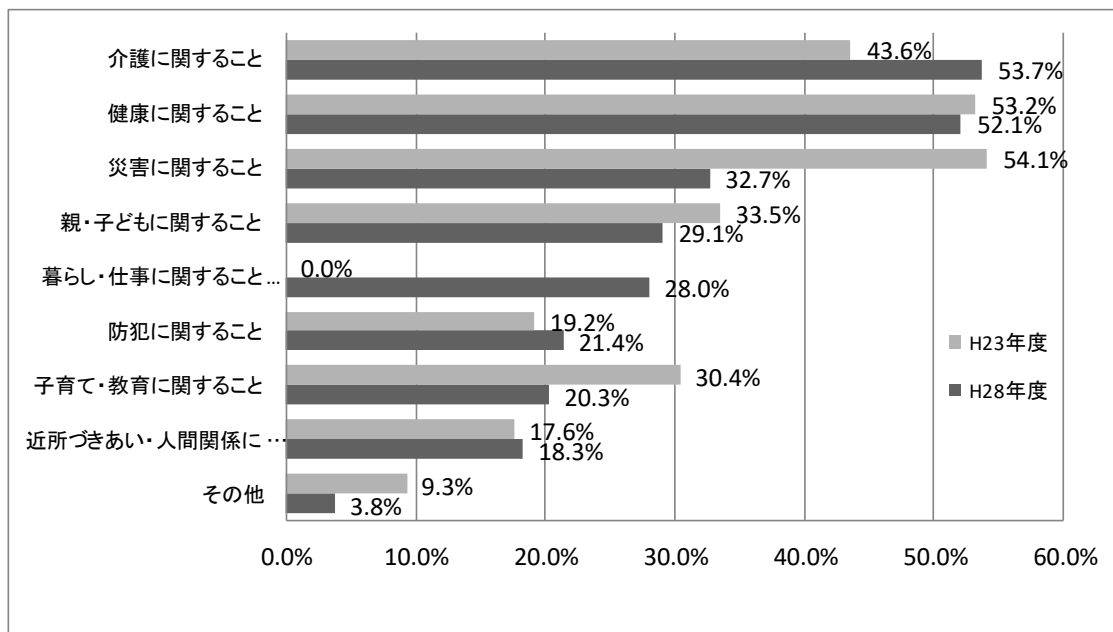


図5 暮らしの中で困ったり、不安に思うこと

(H23、H28 郡山市調査より作成) ※上位3項目の複数回答

本調査において見てきた、子どもの様子から考える目の前の子どもに必要なことを考える意識や姿勢についても過去のものとしてしまうことなく、その経験を保育者間や地域の中で繋げていかなければならないであろう。先の報告書でも述べたが、待機児童対策が最優先される昨今の保育状況では、震災や原発事故とはまた違う形で保育環境が良くも悪くも急激に変化している。その渦中にいる子ども達が本当に求めている思いや声を丹念に聞く姿勢を、今回の震災・原発事故下における保育現場の経験から、活かして欲しいと切に思うところである。

<引用文献>

- (1) 『震災を生きる子どもと保育』、日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013)
- (2) 『放射能災害下の保育問題研究 平成25年・26年調査報告書』、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2016)
- (3) 『幼児期の運動遊びの必要性ー毎日、楽しく体を動かすためにはー』、帯广大谷短期大学紀要 (第53号)、(2016)、工藤ゆかり・江刺家由子、p.36

第2章 発達調査

本章では、平成25年度報告書『震災を生きる子どもと保育』 第2部「放射能災害と保育問題 第1章 3. 協力園幼児の発達調査」に記載した調査結果の継続調査結果を報告する。今回は震災後1年を経過した平成24年3月の調査結果を、震災前の同地区の調査結果（平成17年度）とのコホート差を中心に報告した。本報告書では、その後同一の方法で実施した平成25年3月、平成26年3月、平成27年3月の調査によってとらえられた、4年間の発達の状態の違いを報告する。

I 平成26年度分の分析及び縦断データのコホート比較結果

長田 瑞恵

1. 4年間の発達調査結果

調査項目は表1のとおりであり、調査方法は平成25年度・26年調査報告書と同様である。2012年からの3年間は福島市、郡山市の7園による結果であるが、2015年調査は郡山市4園の結果である。

表1 調査項目

領域	項目番号	質問
知的	A1	かなで自分の姓名を書く
	A2	“右”と“左”の区別ができる、または、自分の左と右がわかる
	A3	“きのう”と“あした”の区別がわかる
	A4	“たて”と“よこ”の区別ができる
	A5	かなで書かれた自分の姓名を読む
	A6	両方の指が何本あるか、見ないで正しく言う
	A7	両方の指の数を正しく数える
	A8	黄色や緑など主な色の名前と実際の色がほぼ一致する
	A9	100円玉がわかる
	A10	自分の誕生日がわかる
	A11	四角形のお手本をまねしてかく
	A12	人数を数えて物を配ることができる
	A13	サイコロの出た目の数がわかる
	A14	カレンダーで何日というとその数字を指す
	A15	絵本やお話のあらすじを人に話す
	A16	今日は、何曜日かわかる
	A17	粘土で“～らしく”動物、乗り物、野菜など、かたちのあるものを作ろうとする
	A18	頭、胴体、四肢のそろった人物画を描く
	A19	時計がわかる(12時、3時など)
	A20	相手の(友達)の言葉を理解しながら会話が成立する

	A21	クラス全員への先生の話をも自分のこととして受け止め、理解する
	A22	動植物など自分の関心のあるものを本（図鑑）などでみる
	A23	自然現象（例えば雨が降るわけなど）の理由を尋ねたりする
	A24	ひらがなを読む
	A25	ひらがなを書く
運 動 的	B1	しきいの上（あるいは平均台）をまっすぐに両脚をかわりばんに踏み出して歩く
	B2	片足とび（ケンケン）をする、20センチぐらい
	B3	片足立ちをする
	B4	ブランコをこいでのる
	B5	でんぐり返しをする
	B6	スキップをする
	B7	相手が投げたボールを両手で受け止める
	B8	登り棒に登る
	B9	ボールをつづけて10回くらいつく
	B10	ひとりなわとびをする（数回つづける）
	B11	子ども同士でリレーをして遊ぶ
	B12	鉄棒で前まわりをする
	B13	うんていでぶら下がって渡る
	B14	箸で食べる
	B15	はさみを使って簡単な形（紙）を切る
	B16	服の前のボタンをひとりでかける
	B17	ひもをかた結びに結ぶ（たて結びでもよい）
	B18	片目だけつむる
	B19	200 m ぐらい続けて走る
	B20	60 c m の高さからとび下りる
情 緒 的	C1	友達の喜ぶことを自分から喜んでする
	C2	話を聞きながら想像して楽しむ
	C3	自分でよくしたいのに、できないとくやしがる
	C4	積み木を積んで、もう少しでできあがるところでくずれるとくやしがる
	C5	かなしい話を聞いて、かなしがる
	C6	遠足をたのしみに準備していて、中止になるとかなしがる
	C7	友達みんなのなかからはずれると、かなしがる
	C8	草や木などの自然物に親しむ
	C9	動物をかわいがる
	C10	小さい子をかわいがる
	C11	絵本や登場人物の、そのときどきの気持ちが言える
	C12	きれいなものを見て“きれい”という
	C13	風の音、雨の音などを感じ、言葉で表現をする

	C14	飼育していた小動物が死ぬとかわいそうがる
	C15	困っている子どもに共感して何かをしてあげようとする
	C16	自分から気がついて全体の役にたつ
	C17	友達の病気やけががよくなると喜ぶ
	C18	相手の気持ちを理解しようと、聞いたり考えたりする
	C19	必要なときは保育者の助けを（援助）を求める
	C20	自分の要求が通らなくても自分なりに気持ちをおさめる
	C21	自分の目標までやりとげようと、がんばる
	C22	ころんですりむいた膝（または手など）が痛くても泣かなくなる
	C23	おとな（先生や親）が喜ぶことをしようとする
	C24	相手や周りの人の気持ちを考えて自分の行動を変える
	C25	自分の大切なものが損なわれると悲しがる
社 会 的	D1	友達と遊んでいるとき、ほかの子の承諾や同意をもとめる
	D2	助けが必要なとき、ほかの子に助けを求める
	D3	ほかの子どもを援助したり、守ったりする
	D4	ほかの子どもたちに玩具をもってくる
	D5	ほかの子どもにめいわくをかけたら、おわびを言う。
	D6	競争心がある（他の子どもとの間で）
	D7	数人がいっしょになって、子どもの発案した遊びをいっしょにする
	D8	自分のしたことを保育者に話して聞かせる
	D9	自分のしたことに責任を負う（自分のあやまちを謝るなど）
	D10	まかされたことを責任をもってする
	D11	保護者がいてもいなくても、きまったことはちゃんとする
	D12	“わたし”とか“ぼく”とかいう言葉で自分を呼ぶ
	D13	自分より小さい子ができるまで待ってあげる
	D14	友達が何かしているとき、じゃまをしない
	D15	お店屋さんごっこで、おつりのやりとりをする
	D16	信号を見て、正しく渡る
	D17	じゃんけんで勝ち負けがわかる
	D18	共同の物を順番に使うことができる
	D19	けんかなどのとき、自分の考えを相手にはっきりいう
	D20	友達同士のトラブルの間に入って収拾しようとする
	D21	保育者が掃除など子どもの生活のための仕事をしているのを見て、手伝おうとする
	D22	いやなときは相手にはっきり「いや」という
	D23	悪いことや困ることをしている子に「いけない」と止める
	D24	クラスみんなで何かするときなど、みんなに合わせて行動する（遅れないなど）
	D25	助けられたり、して貰ったとき「ありがとう」と感謝する

生活習慣	E1	ソックス（短い靴下）をひとりではく
	E2	ひとりで鼻をかむ、または、自分で気がついて鼻をかむ
	E3	大便をひとりでする（全く手がかからない）
	E4	うがいをする
	E5	ひとりで歯ブラシを動かして歯をみがく
	E6	嫌いなものでも、がんばって食べようとする
	E7	汗をかいたら自分で着替える
	E8	水をこぼしたり、こぼれていたなら、自分からぞうきんでふく
	E9	自分から、遊んだあとの自分の遊具をかたずける
	E10	自分から、遊んだあとの皆の遊具をかたずける
	E11	手ぬぐいやぞうきんをしぼる
	E12	自分から“いただきます”や“ごちそうさま”をいう
	E13	いわれなくても食事の前に手を洗う
	E14	脱いだものを一応たたんで（きちんとでなくてもよい）決まった場所に置く
	E15	食事の片づけを自分でする
	E16	所持品の始末をきちんとする
	E17	挨拶（おはよう、さようならなど）を自分からする
遊び	F1	自分から遊びを見つけて遊び込む
	F2	遊びのなかで、新しいことを考えだしたり、新しいやりかたを工夫したりする
	F3	周囲の物を積極的に遊びに活用する
	F4	身のものや出来事に関心を持って、遊びを取り入れたり、発展させる
	F5	いっしょに遊ぼうと積極的に仲間に誘う
	F6	遊びに欲しいものがあるとき、順番に待ったり貸してといて、何とかして達成しようとする
	F7	遊びがうまくいかないとき、自分達で協力して解決しようとする
	F8	遊びに集中し、周りが騒いでも妨げられない
	F9	積み木やブロックで、遊びの場所をつくる
	F10	ごっこ遊びのとき、そのものになりきって遊ぶ
	F11	友達とおもしろいアイデアを出しあって遊ぶ
	F12	積極的に泥遊びや砂遊びを楽しむ（どちらか片方でよい）
	F13	遊びの中で新しい役割を考え出したり、自由に役割を交換したりして遊ぶ
	F14	友達の遊びに進んで加わったり、友達の提案に乗って協調して遊ぶ
	F15	同じ遊びを数日間継続して発展させながら遊ぶ
	F16	遊びのルール（陣地ではつかまらないなど）を理解して遊ぶ

2012年3月時点から2015年3月時点までの4時点の各地域、各学年の領域ごとの発達評価平均値と標準偏差、対象人数を表2に示す。

表2 4時点の各地域、各学年の領域ごとの発達評価平均値と標準偏差、対象人数

2012年3月時点										
領域	地域	3歳児			4歳児			5歳児		
		平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数
知的領域	郡山	3.1	0.7	163	3.7	0.6	203	4.5	0.5	239
	福島	2.9	0.6	60	3.9	0.6	88	4.3	0.6	101
運動的領域	郡山	2.9	0.5	163	3.7	0.6	203	4.4	0.6	239
	福島	3.1	0.6	60	4.1	0.5	88	4.4	0.5	101
情緒的領域	郡山	3.3	0.5	163	3.8	0.6	203	4.4	0.5	239
	福島	3.1	0.4	60	3.7	0.4	88	4.1	0.5	101
社会的領域	郡山	3.3	0.5	163	3.8	0.6	203	4.4	0.5	239
	福島	3.0	0.5	60	3.7	0.5	88	4.1	0.5	101
生活習慣	郡山	3.4	0.5	163	3.9	0.5	203	4.6	0.5	239
	福島	3.5	0.4	60	4.1	0.4	88	4.5	0.3	101
遊び	郡山	3.4	0.5	163	3.8	0.6	203	4.4	0.6	239
	福島	3.3	0.6	60	3.8	0.5	88	4.2	0.7	101
2013年3月時点										
領域	地域	3歳児			4歳児			5歳児		
		平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数
知的領域	郡山	3.0	0.8	125	4.0	0.6	244	4.4	0.6	197
	福島	3.0	0.7	90	3.7	0.6	113	4.3	0.5	118
運動的領域	郡山	2.9	1.0	125	3.9	0.7	244	4.3	0.6	197
	福島	3.3	0.6	90	3.7	0.5	113	4.2	0.6	118
情緒的領域	郡山	3.3	0.6	125	4.0	0.6	244	4.4	0.6	197
	福島	3.4	0.6	90	3.5	0.5	113	4.1	0.5	118
社会的領域	郡山	3.2	0.6	125	3.9	0.6	244	4.4	0.6	197
	福島	3.3	0.9	90	3.6	0.5	113	3.9	0.6	118
生活習慣	郡山	3.3	0.8	125	4.1	0.6	244	4.5	0.5	197
	福島	3.5	0.5	90	3.9	0.6	113	4.4	0.5	118
遊び	郡山	3.3	0.6	125	4.0	0.6	244	4.4	0.7	197
	福島	3.4	0.9	90	3.6	0.5	113	4.0	0.7	118
2014年3月時点										
領域	地域	3歳児			4歳児			5歳児		
		平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数
知的領域	郡山	2.5	0.9	154	3.9	0.6	190	4.5	0.6	249
	福島	3.2	0.9	105	3.6	0.7	129	4.2	0.5	113
運動的領域	郡山	2.5	0.8	154	3.8	0.6	190	4.4	0.6	249
	福島	3.3	0.7	105	3.8	0.7	129	4.1	0.5	113
情緒的領域	郡山	2.8	0.9	154	3.8	0.6	190	4.3	0.8	249
	福島	3.5	1.1	105	3.6	0.6	129	3.9	0.5	113
社会的領域	郡山	2.6	0.9	154	3.8	0.5	190	4.3	0.7	249
	福島	3.3	1.0	105	3.7	0.6	129	3.9	0.5	113
生活習慣	郡山	2.8	0.9	154	4.1	0.5	190	4.6	0.5	249
	福島	3.9	0.9	105	4.2	0.6	129	4.1	0.5	113
遊び	郡山	2.8	0.9	154	3.8	0.5	190	4.3	0.7	249
	福島	3.7	0.8	105	3.8	0.6	129	4.0	0.6	113
2015年3月時点										
領域	地域	3歳児			4歳児			5歳児		
		平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数	平均値	標準偏差	人数
知的領域	郡山	2.7	0.7	111	3.7	0.6	206	4.5	0.6	215
運動的領域	郡山	2.6	0.8	111	3.6	0.5	206	4.5	0.6	215
情緒的領域	郡山	3.2	0.6	111	3.8	0.5	206	4.6	0.6	215
社会的領域	郡山	3.0	0.7	111	3.7	0.5	206	4.6	0.6	215
生活習慣	郡山	3.1	0.8	111	3.9	0.5	206	4.7	0.5	215
遊び	郡山	3.2	0.7	111	3.8	0.5	206	4.6	0.6	215

2. 2015年3月（平成26年）分発達評価の分析

2015年3月時点の子どもの発達の実態を明らかにするために分析を行った。

【方法】

*材料と手続き 幼稚園時発達評価として知的領域25項目、運動的領域20項目、情緒的領域25項目、社会的領域25項目、生活習慣17項目、遊び16項目、合計項目計128項目から成る発達評価を用いた。マークシートを用い、それぞれの項目について、「出来る・よくする」から「出来ない・しない」の5段階尺度で担当保育者が記入するよう依頼した。

調査対象者と調査時期は表2に示したとおりであった。

【結果】

*学年（3）×領域（6）の反復測定分散分析（学年は被験者間要因、領域は被験者内要因）を行った（図1-1～図1-6）。その結果の分散分析表を表3に示す。

学年の主効果が有意であり、3歳児<4歳児<5歳児であった。また、領域の主効果も有意であり、その内容は以下のとおりであった。

- 知的領域>運動的領域
- 情緒的領域>知的領域
- 情緒的領域>運動的領域
- 情緒的領域>社会的領域
- 社会的領域>知的領域
- 社会的領域>運動的領域
- 生活習慣>知的領域
- 生活習慣>運動的領域
- 生活習慣>社会的領域
- 生活習慣>遊び
- 遊び>知的領域
- 遊び>運動的領域
- 遊び>社会的領域

表3 2015年3月時点
学年×領域分散分析表

	自由度	F値
被験者内要因		
領域	5	96.75 **
学年×領域	10	25.01 **
誤差(領域)	2645	
被験者間要因		
学年	1	369.94 **
誤差	529	

注) ****p<.01

さらに、学年×領域の交互作用が有意であった。その為、学年ごとに領域を従属変数とした反復測定分散分析を行った。各学年の分散分析表を表4に示す。

表4 2015年3月時点 学年ごとに領域を従属変数とした分散分析表

	3歳児		4歳児		5歳児	
	自由度	F値	自由度	F値	自由度	F値
領域	5	76.64 **	5	18.99 **	5	13.67 **
誤差(領域)	550		1025		1070	

注) ****p<.01

各学年で領域の主効果が有意であった。

3歳児では、以下の領域間に有意差があった。

- 情緒的領域 > 知的領域
- 情緒的領域 > 運動的領域
- 情緒的領域 > 社会的領域
- 社会的領域 > 知的領域
- 社会的領域 > 運動的領域
- 生活習慣 > 知的領域
- 生活習慣 > 運動的領域
- 生活習慣 > 社会的領域
- 遊び > 知的領域
- 遊び > 運動的領域
- 遊び > 社会的領域

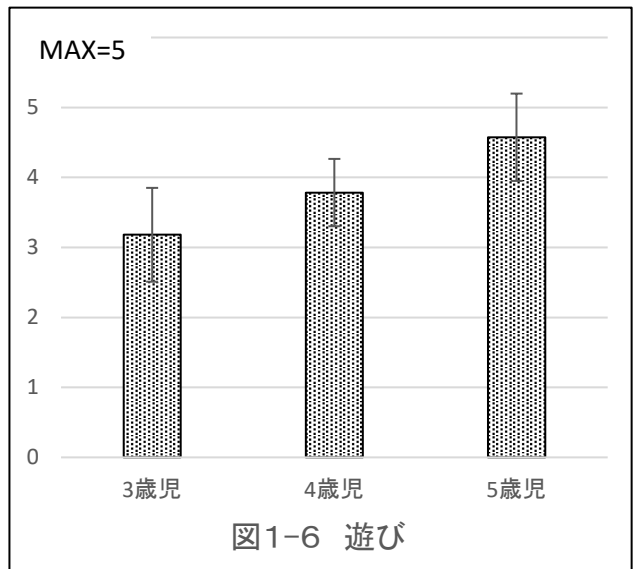
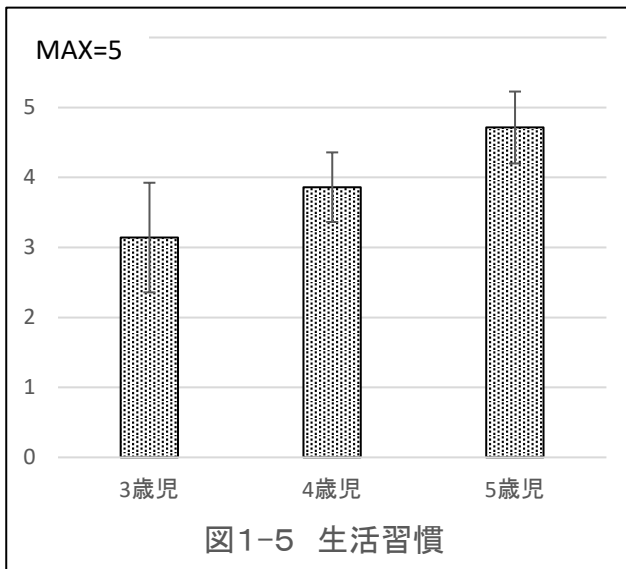
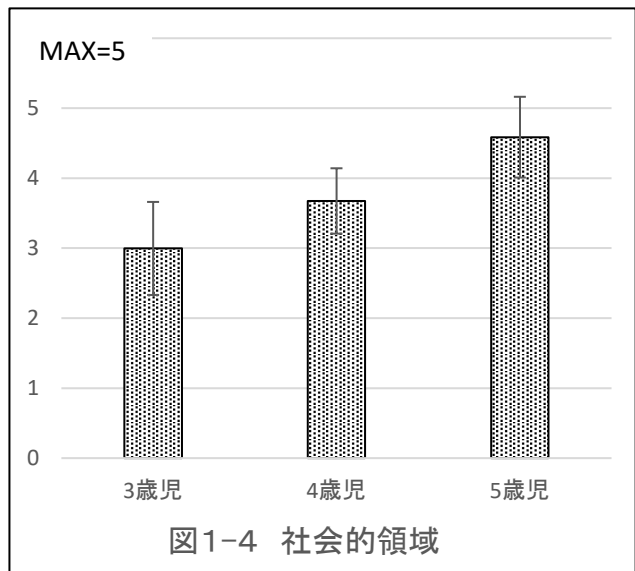
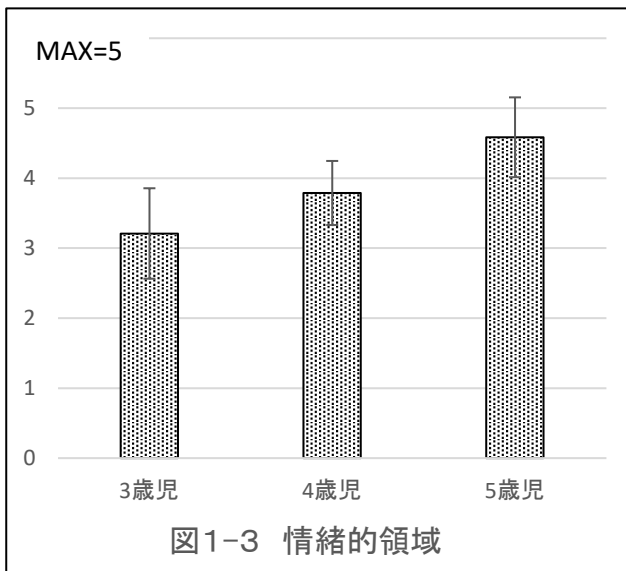
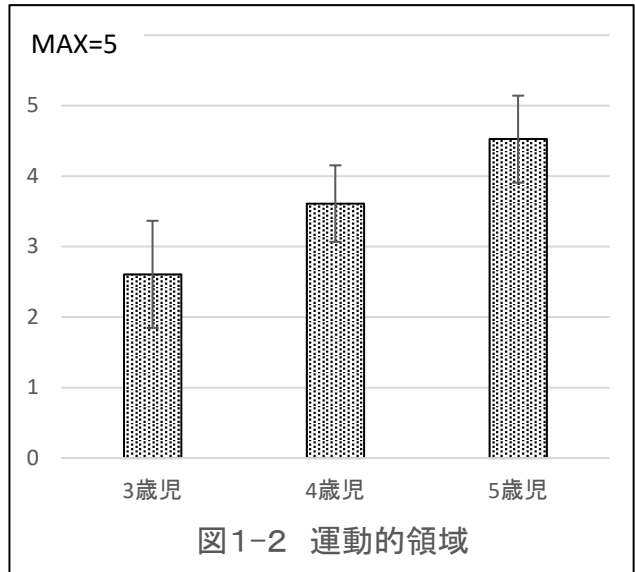
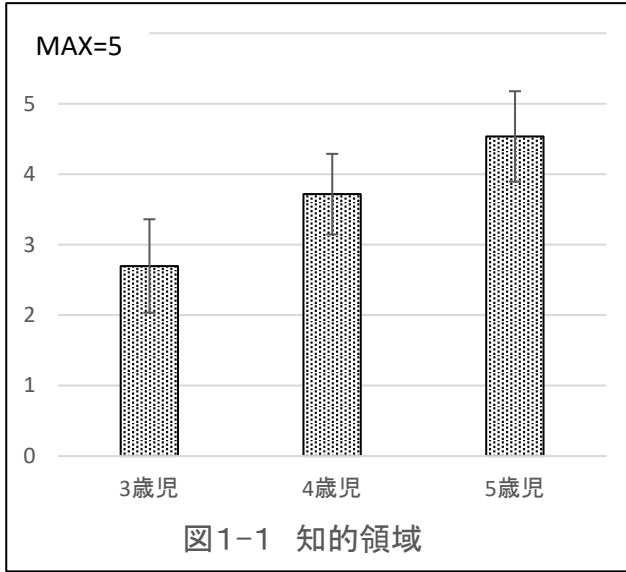
4歳児では、以下の領域間に有意差があった。

- 知的領域 > 運動的領域
- 情緒的領域 > 運動的領域
- 情緒的領域 > 社会的領域
- 生活習慣 > 知的領域
- 生活習慣 > 運動的領域
- 生活習慣 > 社会的領域
- 遊び > 運動的領域
- 遊び > 生活習慣

5歳児では、以下の領域間に有意差があった。

- 生活習慣 > 知的領域
- 生活習慣 > 運動的領域
- 生活習慣 > 情緒的領域
- 生活習慣 > 社会的領域
- 生活習慣 > 遊び

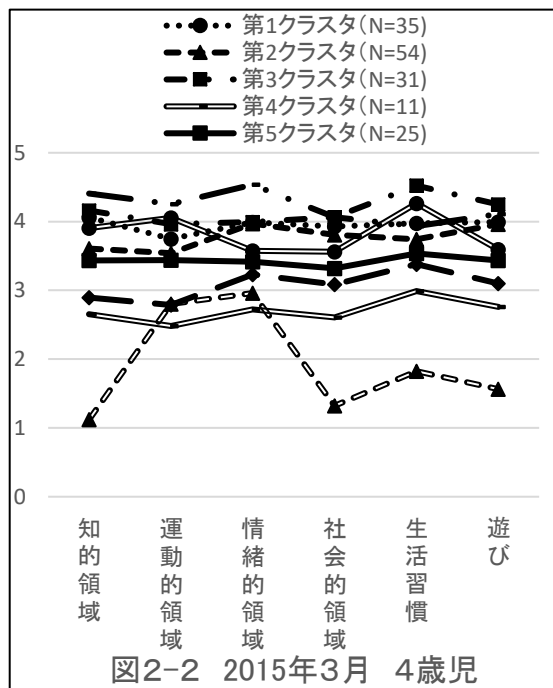
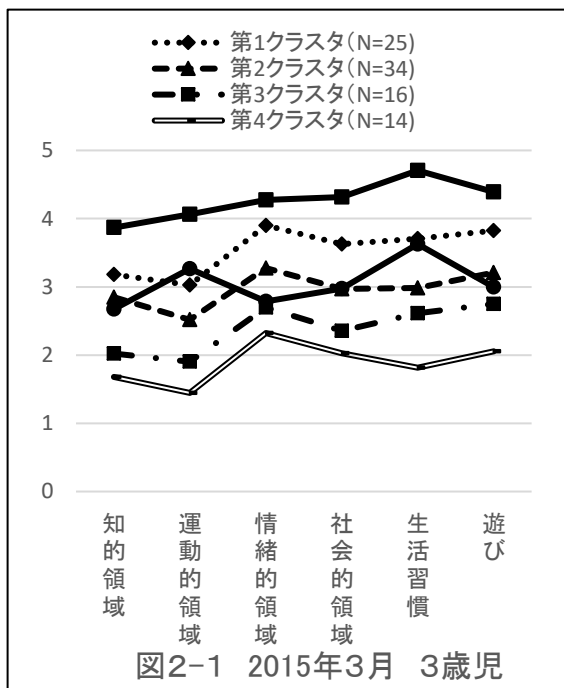
以上の結果を要約すると、2015年3月時点では、3歳児では情緒的領域、社会的領域、生活習慣、遊びの領域の発達が知的領域、運動的領域よりも進んでいるものが多かった。それが、4歳児では、知的領域が運動的領域より発進が進み、3歳児で見られた情緒的領域、社会的領域、生活習慣、遊びの領域の発達の進みの速さが目立たなかった。5歳児では、生活習慣のみ他領域より発進が進んでいることが顕著であった。



3. 2015年3月時点 発達パターンの検討：クラスタ分析

2015年3月時点の各年齢クラスごとに平均得点をZ得点に標準化したものを従属変数としたWard法による階層クラスタ分析を行った。各時点で抽出されたクラスタごとの評定平均値を図2-1から2-3に示す。

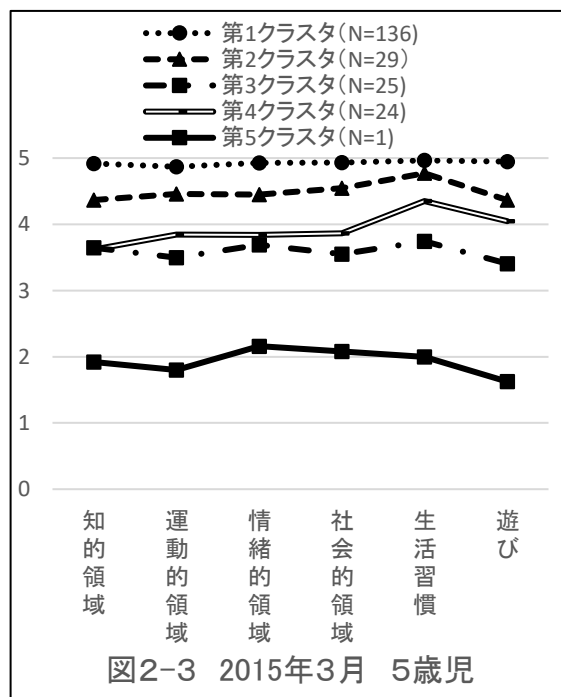
- ① 3歳児 下位クラスタ数 6
- ② 4歳児 下位クラスタ数 9
- ③ 5歳児 下位クラスタ数 5



全体的な傾向としては、3歳児クラスでは比較的クラスタ数が多く抽出され、それが得点の低い位置にあったものが、4歳児クラスでは一旦クラスタ数が増加し、5歳児クラスに再度クラスタ数が減少して得点の高い位置に収束するという傾向が見られた。

このような発達の傾向は震災前にも見られたものである（平成25年度・26年調査報告書参照）が、震災前との違いとして、全体的に抽出されるクラスタ数が少ないことがあげられる。

これらの結果から、これまでの3年間の結果と同様に、発達の領域によって、発達の進む速度や進み方に個人差があることが示唆された。さらに震災前と後とでクラスタ数の減少が見られた原因として、保育環境の変化が影響していた可能性が考えられよう。



4. 震災前後の幼稚園入園児の発達評価縦断データのコーホート比較

震災やそれに伴う放射能災害による環境変化が子どもの発達にどのような影響を及ぼしたのかを検討するために、マークシート式の6領域128項目から成る発達評価の結果について、震災前の2004年3歳児クラス入園児と震災後の2011年3歳児クラス入園児の3学年分（3歳児クラス、4歳児クラス、5歳児クラス）の縦断データを比較検討した。

【方法】

*対象 郡山市内の私立幼稚園に通う幼児。震災前群170名（男児81名、女児87名、不明2名）、震災後群119名（男児67名、女児51名、不明1名）。

*材料と手続き 幼稚園時発達評価として先行研究（e.g., 長田他、2005）と同じく、知的領域25項目、運動的領域20項目、情緒的領域25項目、社会的領域25項目、生活習慣17項目、遊び16項目、合計項目計128項目から成る発達評価を用いた。マークシートを用い、それぞれの項目について、「出来る・よくする」から「出来ない・しない」の5段階尺度で担当保育者が記入するよう依頼した。

*調査時期 震災前群については、2005年3月頃（3歳児クラス終盤）、2006年3月頃（4歳児クラス終盤）、2007年3月頃（5歳児クラス終盤）の3回、発達評価を依頼した。震災後群については、2012年3月頃（3歳児クラス終盤）、2013年3月頃（4歳児クラス終盤）、2014年3月頃（5歳児クラス終盤）の3回、発達評価を依頼した。

【結果と考察】

2コーホート分の3年分の発達評価の各領域の平均値を図3に示す。

震災前と震災後とでは発達評価の様相に違いがあることが図3からうかがえる。

そこで、発達評価の平均値を従属変数にコーホート（2：震災前・震災後）×学年（3：3歳児クラス・4歳児クラス・5歳児クラス）×領域（6：知的・運動的・情緒的・社会的・生活習慣・遊び）の反復測定分散分析を行った。コーホートのみ被験者間要因、学年と領域は被験者内要因であった。その結果を表5に示す。

学年の主効果、領域の主効果、コーホート×学年の交互作用、学年×領域の交互作用、コーホート×学年×領域の交互作用が有意であった。

最も高次の交互作用であるコーホート×学年×領域の交互作用の内容を明らかにするために、まず、コーホートごとに学年×領域の反復測定分散分析を行った。その結果を表6、表7に示す。

表5 コーホート×学年×領域の分散分析表

	自由度	F値
被験者内要因		
学年	2	511.16 **
コーホート×学年	2	48.06 **
誤差(学年)	574	
領域	5	46.52 **
コーホート×領域	5	1.31
誤差(領域)	1435	
学年×領域	10	50.25 **
コーホート×学年×領域	10	3.53 **
誤差(学年×領域)	2870	
被験者間要因		
コーホート	1	0.27
誤差	287	

注) **...p<.01

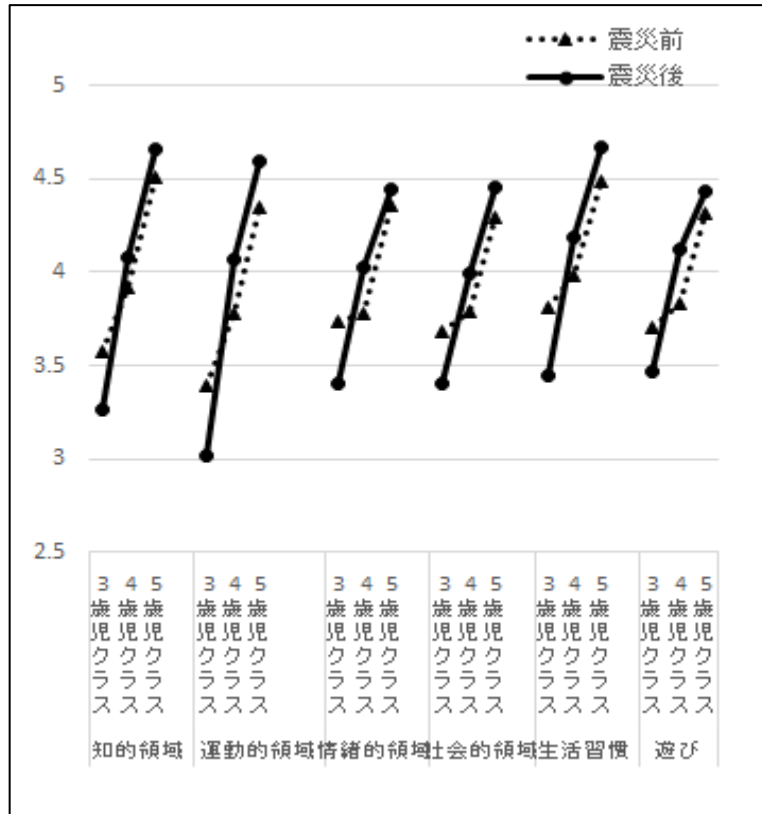


図3 放射能災害前後の発達評価平均値

表6 コーホートごとに学年×領域の反復測定分散分析表（震災前）

	自由度	F 値	
学年	2	211.74	**
誤差（学年）	338		
領域	5	32.11	**
誤差（領域）	845		
学年 x 領域	10	23.38	**
誤差（学年 x 領	1690		

注) ** . . . p<.01

表7 コーホートごとに学年×領域の反復測定分散分析表（震災後）

	自由	F 値	
学年	2	297.81	**
誤差（学年）	236		
領域	5	18.50	**
誤差（領域）	590		
学年 x 領域	10	28.16	**
誤差（学年 x 領	1180		

注) ** . . . p<.01

震災前についても震災後についても学年の主効果、領域の主効果、学年×領域の交互作用が有意であった。そこで、次に、コーホートごとに学年別の領域間の比較を行った。6領域それぞれの平均値についてコーホートごとに学年別に1要因反復測定分散分析を行った。表8と表9にそれぞれ結果を示す。

表 8 コーホートごと、学年別の領域間比較（震災前）

領域 誤差（領域）	3 歳児			4 歳児			5 歳児		
	自由度	F 値		自由度	F 値		自由	F 値	
	5	46.98	**	5	14.10	**	5	21.88	**
	845			845			845		
		<u>知的 > 運動的</u>			<u>知的 > 運動的</u>			<u>知的 > 運動的</u>	
		<u>情緒的 > 知的</u>			<u>知的 > 情緒的</u>			<u>知的 > 情緒的</u>	
		<u>社会的 > 知的</u>			<u>知的 > 社会的</u>			<u>知的 > 社会的</u>	
		<u>生活習慣 > 知的</u>			<u>生活習慣 > 運動</u>			<u>知的 > 遊び</u>	
		<u>遊び > 知的</u>			<u>生活習慣 > 情緒</u>			<u>生活習慣 > 運動</u>	
		<u>情緒的 > 運動的</u>			<u>生活習慣 > 社会</u>			<u>情緒的 > 社会的</u>	
		<u>社会的 > 運動的</u>			<u>生活習慣 > 遊び</u>			<u>生活習慣 > 社会</u>	
		<u>生活習慣 > 運動</u>						<u>生活習慣 > 情緒</u>	
		<u>生活習慣 > 社会</u>						<u>生活習慣 > 遊び</u>	
		<u>生活習慣 > 遊び</u>							
		<u>遊び > 運動的</u>							

注) ** ... p<.01 一重下線は震災前後で同じ関係の領域間差が有意だったもの、二重下線は震災前後で反対の領域間差が有意だったもの、下線なしは震災前後で差が異なる領域間で示されたもの。いずれも 5% 水準有意。

表 9 コーホートごと、学年別の領域間比較（震災後）

領域 誤差（領域）	3 歳児			4 歳児			5 歳児		
	自由	F 値		自由度	F 値		自由度	F 値	
	5	36.45	**	5	8.73	**	5	21.99	**
	590			590			590		
		<u>知的 > 運動的</u>			<u>知的 > 社会的</u>			<u>知的 > 情緒的</u>	
		<u>情緒的 > 知的</u>			<u>生活習慣 > 運動</u>			<u>知的 > 社会的</u>	
		<u>社会的 > 知的</u>			<u>生活習慣 > 情緒</u>			<u>知的 > 遊び</u>	
		<u>生活習慣 > 知的</u>			<u>遊び > 情緒的</u>			<u>運動的 > 情緒的</u>	
		<u>遊び > 知的</u>			<u>社会的 > 生活習</u>			<u>運動的 > 社会的</u>	
		<u>情緒的 > 運動的</u>			<u>社会的 > 遊び</u>			<u>運動的 > 生活習</u>	
		<u>社会的 > 運動的</u>						<u>生活習慣 > 社会</u>	
		<u>生活習慣 > 運動</u>						<u>生活習慣 > 情緒</u>	
		<u>遊び > 運動的</u>						<u>生活習慣 > 遊び</u>	

注) ** ... p<.01 一重下線は震災前後で同じ関係の領域間差が有意だったもの、二重下線は震災前後で反対の領域間差が有意だったもの、下線なしは震災前後で差が異なる領域間で示されたもの。いずれも 5% 水準有意。

全体的な違いとして震災前の方が震災後よりも多くの領域間に差が示された。また、5歳児クラスでは震災前は生活習慣の方が運動的領域よりも得点が高かったのに対し、震災後は運動的領域の方が生活習慣よりも得点が高かった。そして、震災前では運動的領域が他の領域よりも得点が高いことは全くなかったが、震災後は5歳児クラスになると運動的領域が他の領域よりも得点が高くなることが増加した。また、4歳児クラスでは、領域間の差が示される領域に類似性が少なかった。一方、震災前後の共通点としては、3歳児クラスではかなり多くの領域間で差が示されたものが、4歳児クラスになると一旦領域間の

差が示される領域が減り、5歳児クラスになると再度多くの領域間で差が示された。

さらに詳しく交互作用の内容を検討するために、コーホートごとに領域別に学年間の比較を行った。学年別の平均値についてコーホートごとに領域別に1要因反復測定分散分析を行った。表10と表11に結果を示す。

震災前後の最大の相違点は、情緒的領域で3歳児クラスと4歳児クラスに差があったかどうかである。表10と表11で下線がひかれた部分である。震災前では3歳児クラスと4歳児クラスには有意差は示されなかったが、震災後では3歳児クラスと4歳児クラスの間に有意差が示された。また、他の領域についても、震災前の方が学年間の差が小さく、震災後の方が学年間の差が大きいことが示された。

表10 コーホートごと、領域別学年間の比較（震災前）

	知的領域			運動的領域			情緒的領域		
	自由度	F値		自由度	F値		自由度	F値	
学年	2	249.72	**	2	216.65	**	2	135.33	**
誤差(学年)	338			338			338		
	3歳児<4歳児<5歳児			3歳児<4歳児<5歳児			<u>3歳児≒4歳児<5歳児</u>		

	社会的領域			生活習慣			遊び		
	自由度	F値		自由度	F値		自由度	F値	
学年	2	113.48	**	2	130.33	**	2	98.39	**
誤差(学年)	338			338			338		
	3歳児<4歳児<5歳児			3歳児<4歳児<5歳児			3歳児<4歳児<5歳児		

注) ** ... p<.01。下線は震災前後で相違が見られた箇所を示す。

表11 コーホートごと、領域別学年間の比較（震災後）

	知的領域			運動的領域			情緒的領域		
	自由度	F値		自由度	F値		自由度	F値	
学年	2	315.60	**	2	288.95	**	2	161.79	**
誤差(学年)	236			236			236		
	3歳児<4歳児<5歳児			3歳児<4歳児<5歳児			<u>3歳児<4歳児<5歳児</u>		

	社会的領域			生活習慣			遊び		
	自由度	F値		自由度	F値		自由度	F値	
学年	2	177.67	**	2	321.98	**	2	123.75	**
誤差(学年)	236			236			236		
	3歳児<4歳児<5歳児			3歳児<4歳児<5歳児			3歳児<4歳児<5歳児		

注) ** ... p<.01。下線は震災前後で相違が見られた箇所を示す。

最後に、領域ごとに学年別のコーホート間の比較を行った。その結果を表12に示す。

非常に特徴的なのは、3歳児クラスではすべての領域で震災前の方が震災後よりも得点が高かったのに対し、4歳児クラスではすべての領域で震災後の方が震災前よりも得点

高かったことである。そして5歳児クラスになると情緒的領域ではコーホート間の差が消え、遊びでも震災前後の差は有意傾向にまで小さくなった。それ以外の領域では5歳児クラスでも震災後の方が震災前よりも得点が高かった。

以上の分析から、最初に行ったコーホート×領域×学年の反復測定分散分析で示された最も高次の交互作用（コーホート×領域×学年）の主な理由は、3歳児クラスと4歳児クラス・5歳児クラスとで震災前後のコーホートの差が逆転すること、領域によって5歳児クラスになるとコーホート間の差がなくなることでありといえよう。

まとめると、震災後に入園してきた3歳児は、震災前に入園してきた3歳児よりも6領域すべてで低く評価されていた。それが1年経過した4歳児クラスでは反対に震災後に入園してきた子ども達の方が評価が高くなり、5歳児クラスになると領域によっては震災前後のコーホート間の差は小さくなる傾向があった。

震災前後の2コーホートで発達評価を比較検討した結果、保育者は3歳児クラス終盤の時点ではすべての領域で震災前に入園児より震災後に入園児の方が発達が遅れていると考えることがうかがえる。一方で、幼稚園での生活を約2年経験した4歳児クラス終盤には、震災後に入園児の能力は遅れを取り戻しただけでなく、震災前に入園児よりも発達が進んでいると考えているようである。そして幼稚園での生活が約3年経過した5歳児クラス終盤になると、領域によっては震災前後の差は小さくなり、必要な発達レベルに達していると考えているようである。

発達評価は保育者の目から見た子どもの姿であり、実際に上記のような2コーホートの違いや共通点があるのかは定かではない。しかし、震災によって保育環境は激変した。さらに、今回震災後の対象児とした子ども達は乳児期に震災や放射能災害を経験しているため、家庭での生活環境も激変したことが予想される。そのことが子ども達の発達に何らかの影響を与えていることは想像に難くない。

表12 領域ごと、学年別のコーホート間比較

	学年	領域	自由度	F 値		
コーホート	3 歳児クラス	知的領域	1	14.96	**	震災前 > 震災後
		運動的領域	1	28.24	**	震災前 > 震災後
		情緒的領域	1	27.75	**	震災前 > 震災後
		社会的領域	1	17.67	**	震災前 > 震災後
		生活習慣	1	23.68	**	震災前 > 震災後
		遊び	1	11.87	**	震災前 > 震災後
	4 歳児クラス	知的領域	1	7.12	**	震災前 < 震災後
		運動的領域	1	17.20	**	震災前 < 震災後
		情緒的領域	1	18.58	**	震災前 < 震災後
		社会的領域	1	12.29	**	震災前 < 震災後
		生活習慣	1	10.64	**	震災前 < 震災後
		遊び	1	20.19	**	震災前 < 震災後
	5 歳児クラス	知的領域	1	7.04	**	震災前 < 震災後
		運動的領域	1	15.32	**	震災前 < 震災後
		情緒的領域	1	1.61		
		社会的領域	1	5.99	*	震災前 < 震災後
		生活習慣	1	9.84	**	震災前 < 震災後
		遊び	1	2.82	†	震災前 < 震災後
誤差	3 歳児クラス	知的領域	287			
		運動的領域	287			
		情緒的領域	287			
		社会的領域	287			
		生活習慣	287			
		遊び	287			
	4 歳児クラス	知的領域	287			
		運動的領域	287			
		情緒的領域	287			
		社会的領域	287			
		生活習慣	287			
		遊び	287			
	5 歳児クラス	知的領域	287			
		運動的領域	287			
		情緒的領域	287			
		社会的領域	287			
		生活習慣	287			
		遊び	287			

注) ** … p<.01 , * … p<.05 , † … p<.10

II 4年間の発達調査領域別性別分析結果

山崎 晃

1. 方法

調査対象は郡山市と福島市の研究協力園7幼稚園の全園児（満3歳児を除く）である。前章の表1の項目（「知的領域」、「運動的領域」、「情緒的領域」、「社会的領域」、「生活習慣領域」、「遊び領域」の6領域からなる）について5件法で、担任保育者が評定した得点をもとに分析を行った。ここでは7園のデータを1つにまとめて分析対象とした。

2. 3年間の領域別性別調査結果

以下、領域ごとに、調査年、学年および性別による違いを検討した結果を述べたい。

(1) 知的領域について

表1に条件ごとの人数を、表2に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示している。

このデータについて、調査年（4：2012年・2013年・2014年・2015年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った。その結果、調査年、学年、性別の要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった（表3）。

調査年の主効果について、2012年と2013年は2014年と2015年より評定値が有意に高かった。2012年と2013年との間、2014年と2015年との間には有意差はなかった（図1）。学年の主効果について、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児が高く評定されていた（図2）。また、女子が男子より高いことが示された。調査年×学年の交互作用については、3歳児では調査年と共に次第に評定値が低くなっていた。4歳児では2013年をピークに次第に評定値が低くなっていた。また、5歳児では調査年による評定値に差はみられなかった（図3）。

その他の交互作用は有意ではなかった。

表1 知的領域における各条件の人数（度数）

		度数
調査年	2012年	851
	2013年	887
	2014年	923
	2015年	532
学年	3歳児	819
	4歳児	1174
	5歳児	1200
性別	女	1598
	男	1595

表2 知的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年	年齢	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年	3歳児	女	3.193	0.676	98
		男	3.005	0.613	123
	4歳児	女	3.920	0.587	156
		男	3.622	0.608	134
	5歳児	女	4.578	0.444	176
		男	4.362	0.576	164
2013年	3歳児	女	3.007	0.843	107
		男	2.987	0.739	108
	4歳児	女	3.994	0.604	173
		男	3.823	0.670	184
	5歳児	女	4.480	0.456	170
		男	4.276	0.630	145
2014年	3歳児	女	2.967	1.006	136
		男	2.701	0.823	136
	4歳児	女	3.882	0.617	159
		男	3.654	0.667	162
	5歳児	女	4.468	0.540	159
		男	4.340	0.655	171
2015年	3歳児	女	2.742	0.685	53
		男	2.478	0.682	58
	4歳児	女	3.760	0.431	90
		男	3.461	0.610	116
	5歳児	女	4.553	0.624	121
		男	4.414	0.735	94

表3 知的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F値	有意確率
修正モデル	1197.349 ^a	23	52.059	123.298	0.000
切片	39185.961	1	39185.961	92810.035	0.000
調査年月	17.540	3	5.847	13.847	0.000
学年	1074.213	2	537.107	1272.111	0.000
性別	29.179	1	29.179	69.108	0.000
調査年月 * 学年	21.940	6	3.657	8.660	0.000
学年 * 性別	0.937	2	0.469	1.110	0.330
調査年月 * 性別	1.377	3	0.459	1.087	0.353
調査年月 * 学年 * 性別	2.280	6	0.380	0.900	0.494
誤差	1338.005	3169	0.422		
総和	48756.430	3193			
修正総和	2535.355	3192			

a. R2乗 = .472 (調整済み R2乗 = .468)

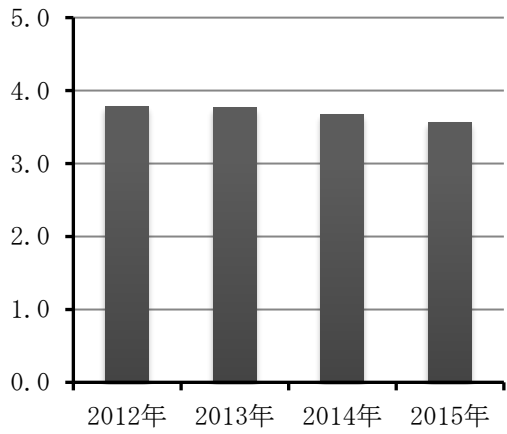


図1 知的領域における調査年別の評価値

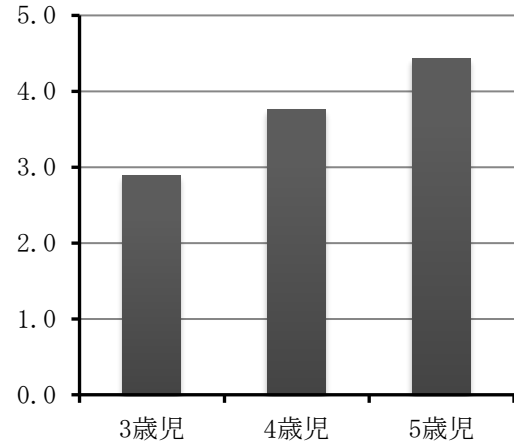


図2 知的領域における学年別の評価値

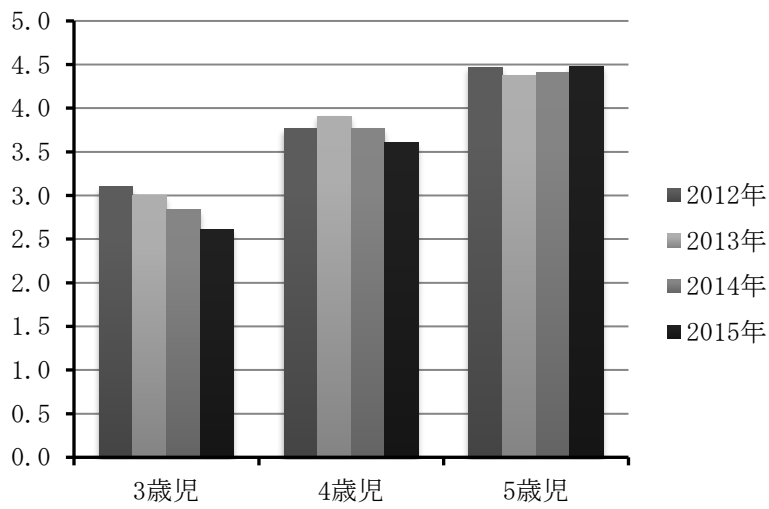


図3 知的領域における調査年×学年の評価値

(2) 運動領域について

表4に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

このデータについて、調査年（4：2012年・2013年・2014年・2015年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表5）。

その結果、調査年、学年、性別の要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった。その他の交互作用は有意ではなかった。

2012年と2013年は2014年と2015年より、2014年は2015年より評定値が高かった。2012年と2013年との間に差はみられなかった。また、3歳児より4歳児、5歳児が高く、5歳児は4歳児より評定値が高いこと（図5）、女子が男子より高いことが示された。

調査年×学年の交互作用については、3歳児では2013年をピークとして2014年、2015年と評定値が低くなった。4歳児では3歳児と同じ傾向であるが、調査年間の差は小さかった。5歳児では調査年による評定値の差ほとんどみられなかった（図6）。

表4 運動領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年	3歳児	女	3.071	0.462	98
		男	2.925	0.584	123
	4歳児	女	3.848	0.624	156
		男	3.712	0.614	134
	5歳児	女	4.510	0.461	176
		男	4.309	0.611	164
2013年	3歳児	女	3.066	0.943	107
		男	3.063	0.787	108
	4歳児	女	3.895	0.578	173
		男	3.792	0.709	184
	5歳児	女	4.320	0.546	170
		男	4.211	0.679	145
2014年	3歳児	女	2.968	0.861	135
		男	2.690	0.725	136
	4歳児	女	3.912	0.550	159
		男	3.659	0.639	162
	5歳児	女	4.317	0.572	159
		男	4.277	0.687	171
2015年	3歳児	女	2.518	0.878	53
		男	2.394	0.718	58
	4歳児	女	3.656	0.459	90
		男	3.442	0.600	116
	5歳児	女	4.536	0.566	121
		男	4.444	0.722	94

表5 運動領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	1132.771 ^a	23	49.251	117.336	0.000
切片	38179.750	1	38179.750	90960.245	0.000
調査年月	20.462	3	6.821	16.249	0.000
学年	1043.764	2	521.882	1243.343	0.000
性別	14.391	1	14.391	34.285	0.000
調査年月 * 学年	38.579	6	6.430	15.319	0.000
学年 * 性別	0.627	2	0.313	0.747	0.474
調査年月 * 性別	1.652	3	0.551	1.312	0.269
調査年月 * 学年 * 性別	3.134	6	0.522	1.244	0.280
誤差	1329.740	3168	0.420		
総和	47579.237	3192			
修正総和	2462.510	3191			

a. R2 乗 = .460 (調整済み R2 乗 = .456)

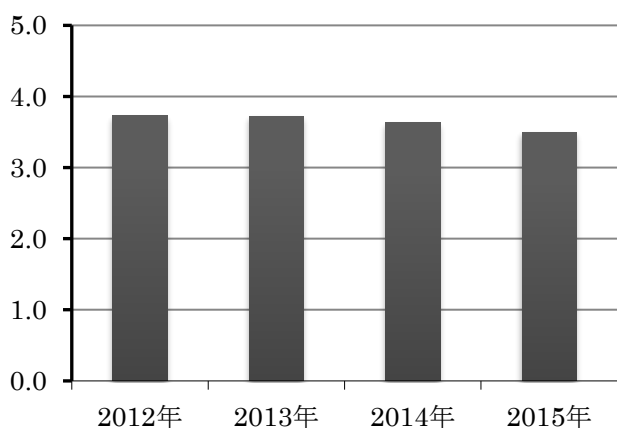


図4 運動領域における調査年ごとの運動的領域の評定

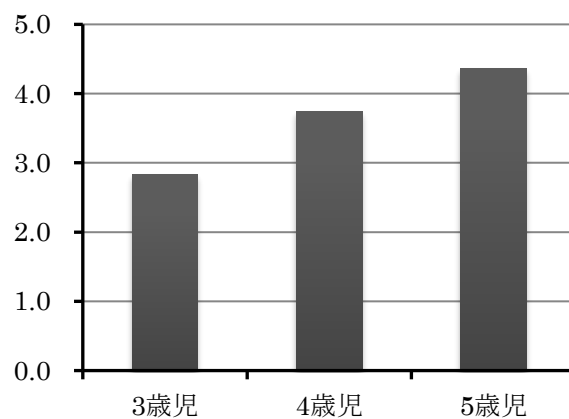


図5 運動領域における学年ごとの運動的領域の評定

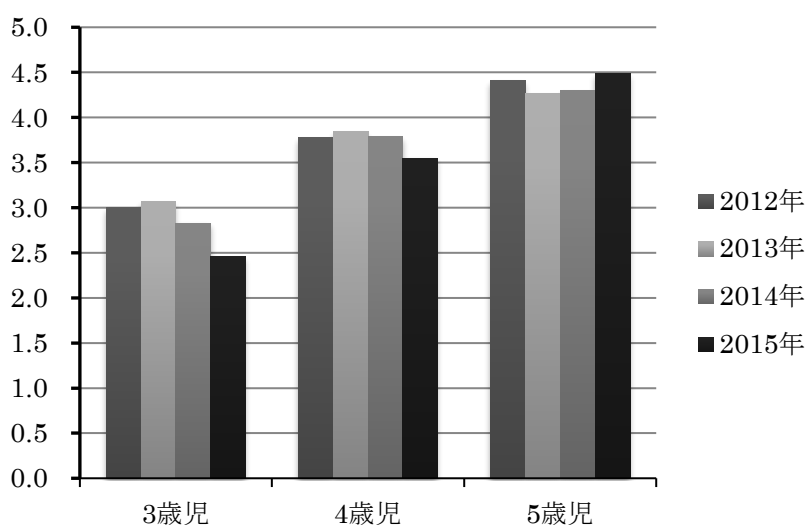


図6 運動領域における調査年×学年に関する評定値

(3) 情緒的領域について

表6に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

このデータについて、調査年（4：2012年・2013年・2014年・2015年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表7）。

その結果、調査年、学年、性別の要因の主効果が有意であり、調査年×学年の交互作用が有意であった。2012年と2013年と2015年は2014年より評定値が高く、2012年と2013年と2015年の間に差はみられなかった（図7）。また、3歳児より4歳児、5歳児が高く（図7）、5歳児は4歳児より評定値が高く（図8）、女子が男子よりも評定値が高かった。

調査年×学年の交互作用について、3歳児では2013年が他の調査年より高く評定され、4歳児では調査年による評定の差はほとんどないようであり、5歳児では2014年が他の調査年よりも低く、2015年が最も高く評定されていた（図9）。

その他の交互作用は有意ではなかった。

表6 情緒的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

調査年	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年	3歳児	女	3.364	0.542	98
		男	3.179	0.499	123
	4歳児	女	3.836	0.477	156
		男	3.737	0.558	134
	5歳児	女	4.433	0.516	176
		男	4.226	0.559	164
2013年	3歳児	女	3.417	0.633	107
		男	3.340	0.531	108
	4歳児	女	3.909	0.533	173
		男	3.762	0.603	184
	5歳児	女	4.377	0.536	170
		男	4.189	0.603	145
2014年	3歳児	女	3.231	1.086	130
		男	2.986	0.922	135
	4歳児	女	3.853	0.528	159
		男	3.649	0.597	162
	5歳児	女	4.245	0.643	159
		男	4.045	0.815	171
2015年	3歳児	女	3.284	0.624	53
		男	3.068	0.657	58
	4歳児	女	3.848	0.451	90
		男	3.679	0.506	116
	5歳児	女	4.623	0.554	121
		男	4.491	0.620	94

表7 情緒的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	632.194 ^a	23	27.487	70.505	0.000
切片	40985.626	1	40985.626	105131.084	0.000
調査年月	15.038	3	5.013	12.858	0.000
学年	543.997	2	271.999	697.696	0.000
性別	21.323	1	21.323	54.696	0.000
調査年月 * 学年	16.890	6	2.815	7.221	0.000
学年 * 性別	0.124	2	0.062	0.160	0.853
調査年月 * 性別	0.718	3	0.239	0.614	0.606
調査年月 * 学年 * 性別	0.938	6	0.156	0.401	0.879
誤差	1232.714	3162	0.390		
総和	48884.512	3186			
修正総和	1864.908	3185			

a. R2 乗 = .339 (調整済み R2 乗 = .334)

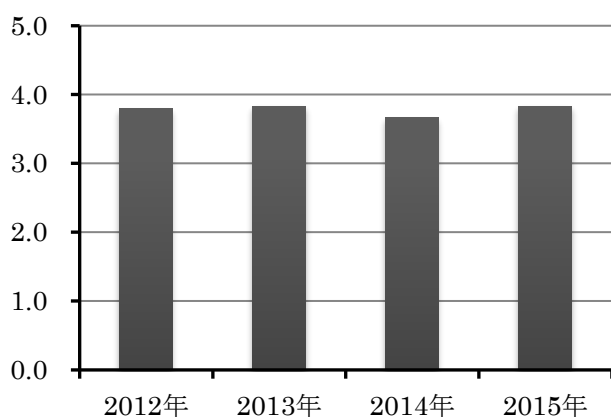


図7 情緒的領域における調査年ごとの評定値

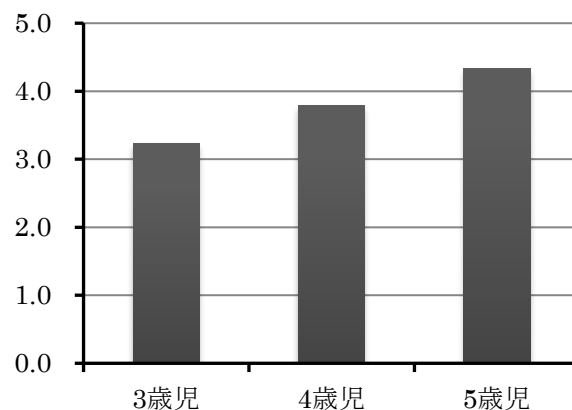


図8 情緒的領域における学年ごとの評定値

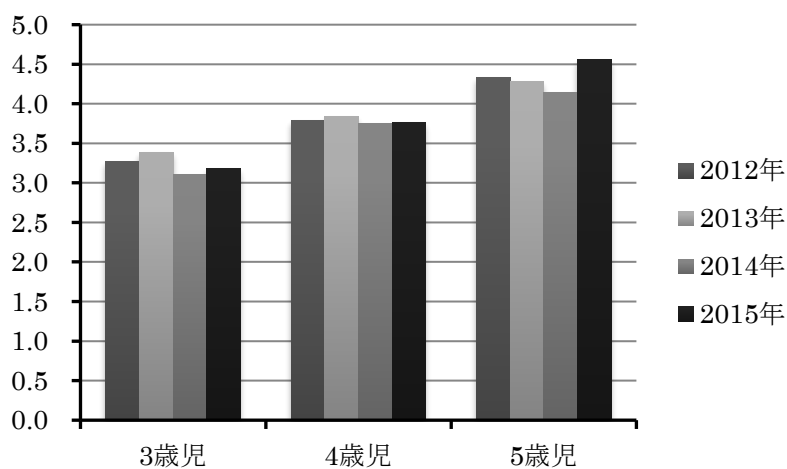


図9 情緒的領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

(4) 社会的領域について

表 8 に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

このデータについて、調査年（4：2012年・2013年・2014年・2015年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った(表9)。

その結果、調査年、学年、性別の要因の主効果が有意であった。調査年の主効果については、2012年と2013年と2015年は2014年より評定値が高く、2012年と2013年と2015年の間に差はみられなかった(図10)。学年の主効果については、3歳児より4歳児が、4歳児より5歳児が有意に高かった(図11)。

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった。3歳児では2012年と2013年の間には差はみられず、2014年と2015年との間にはも差はみられなかった。2012年と2013年と2014年、2015年より高く評定されていた。4歳児では調査年間に大きな差はみられないが、2013年が最も高く評定されているようであった。5歳児については2012年から2013年、2014年にかけて低く、2015年度は最も高く評定されていた(図12)。

その他の交互作用は有意ではなかった。

表 8 社会的領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年	3歳児	女	3.307	0.518	98
		男	3.129	0.517	123
	4歳児	女	3.813	0.523	156
		男	3.675	0.572	134
	5歳児	女	4.423	0.518	176
		男	4.220	0.514	164
2013年	3歳児	女	3.241	0.730	107
		男	3.227	0.736	108
	4歳児	女	3.911	0.502	173
		男	3.732	0.617	183
	5歳児	女	4.267	0.580	170
		男	4.126	0.661	145
2014年	3歳児	女	3.045	1.009	136
		男	2.815	0.898	136
	4歳児	女	3.848	0.495	159
		男	3.705	0.611	162
	5歳児	女	4.220	0.607	159
		男	4.074	0.763	171
2015年	3歳児	女	3.019	0.717	53
		男	2.839	0.635	58
	4歳児	女	3.720	0.398	90
		男	3.544	0.508	116
	5歳児	女	4.628	0.537	121
		男	4.511	0.627	94

表9 社会的領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	778.862 ^a	23	33.864	85.967	0.000
切片	39506.994	1	39506.994	100293.616	0.000
調査年月	11.290	3	3.763	9.554	0.000
学年	681.884	2	340.942	865.525	0.000
性別	16.953	1	16.953	43.036	0.000
調査年月 * 学年	38.682	6	6.447	16.367	0.000
学年 * 性別	0.010	2	0.005	0.013	0.987
調査年月 * 性別	0.538	3	0.179	0.455	0.713
調査年月 * 学年 * 性別	1.568	6	0.261	0.663	0.679
誤差	1247.917	3168	0.394		
総和	47715.128	3192			
修正総和	2026.780	3191			

a. R2 乗 = .384 (調整済み R2 乗 = .380)

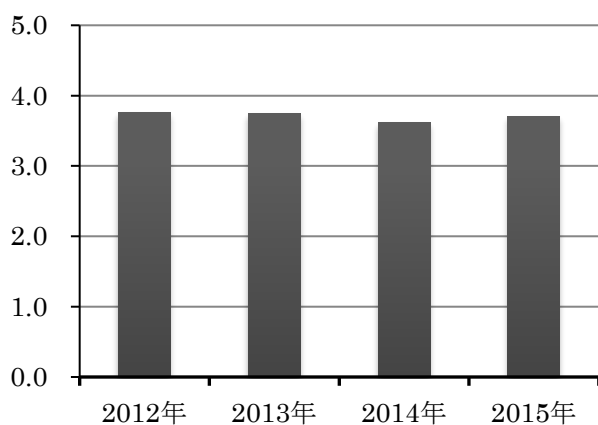


図10 社会的領域における調査年に関する評定値

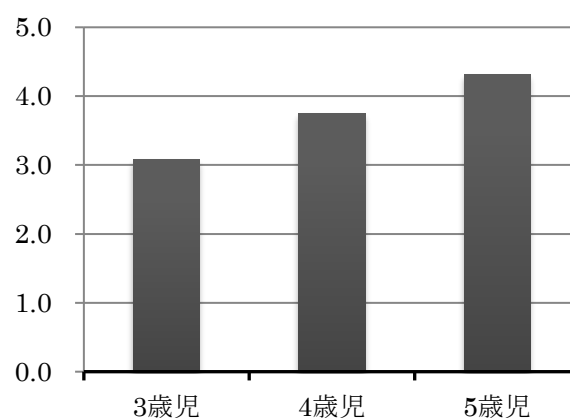


図11 社会的領域における学年に関する評定値

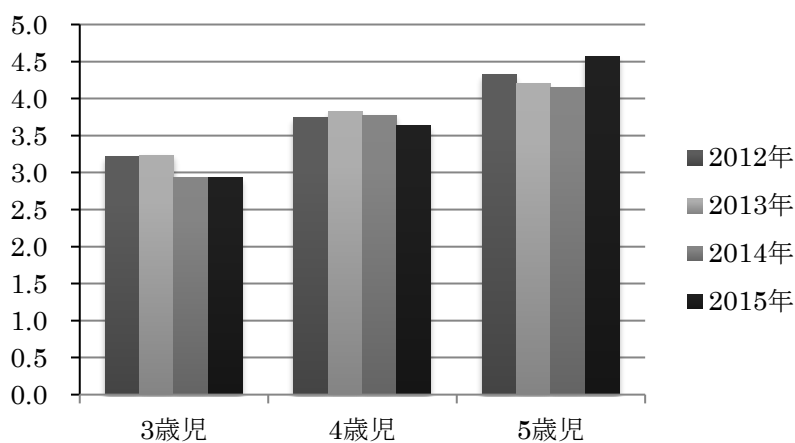


図12 社会的領域における調査年×学年に関する評定値

(5) 生活習慣領域について

表 10 に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

このデータについて、調査年（4：2012年・2013年・2014年・2015年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表 11）。その結果、調査年、学年、性別の要因の主効果が有意であった。調査年の主効果については、2015年が他のどの調査年よりも有意に低く評定されていた（図 13）。その他の調査年間に有意差はみられなかった。学年の主効果については、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児が有意に高く評定されていた（図 14）。

調査年×学年の交互作用が有意であった。3歳児では2012年と2013年が2014年や2015年よりも高く、4歳児では2012年より2013年、2014年が高く2015年が低く、5歳児では2012年より2013年と2014年が低く、2015年が高く評定されているようであった（図 15）。

その他の交互作用は有意ではなかった。

表 10 生活習慣領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年	学年	性別	平均値	標準偏差	度数
2012年	3歳児	女	3.491	0.452	98
		男	3.315	0.492	123
	4歳児	女	4.056	0.461	155
		男	3.897	0.442	134
	5歳児	女	4.618	0.418	176
		男	4.473	0.466	164
2013年	3歳児	女	3.433	0.714	107
		男	3.404	0.648	108
	4歳児	女	4.171	0.548	173
		男	3.957	0.620	183
	5歳児	女	4.522	0.458	170
		男	4.360	0.521	145
2014年	3歳児	女	3.297	1.058	136
		男	3.116	1.039	136
	4歳児	女	4.198	0.487	159
		男	4.025	0.508	162
	5歳児	女	4.474	0.515	159
		男	4.405	0.628	171
2015年	3歳児	女	3.218	0.774	53
		男	3.020	0.797	58
	4歳児	女	3.968	0.415	90
		男	3.717	0.521	116
	5歳児	女	4.725	0.420	121
		男	4.634	0.535	94

表 11 生活習慣領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	773.353 ^a	23	33.624	95.456	0.000
切片	44488.433	1	44488.433	126298.537	0.000
調査年月	4.082	3	1.361	3.863	0.009
学年	687.615	2	343.808	976.038	0.000
性別	17.009	1	17.009	48.286	0.000
調査年月 * 学年	29.032	6	4.839	13.737	0.000
学年 * 性別	0.974	2	0.487	1.383	0.251
調査年月 * 性別	0.193	3	0.064	0.183	0.908
調査年月 * 学年 * 性別	1.577	6	0.263	0.746	0.612
誤差	1115.570	3167	0.352		
総和	53444.567	3191			
修正総和	1888.923	3190			

a. R2 乗 = .409 (調整済み R2 乗 = .405)

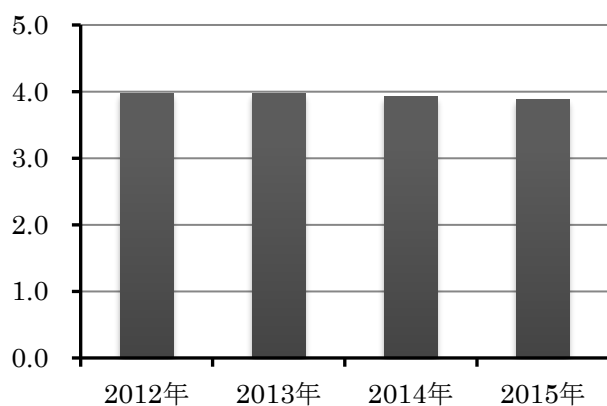


図 13 生活習慣領域における調査年に関する評定値

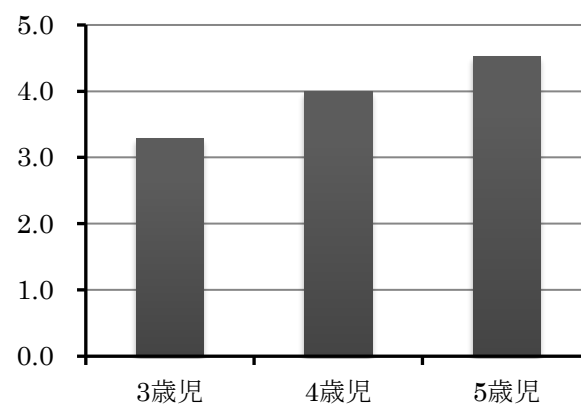


図 14 生活習慣領域における学年に関する評定値

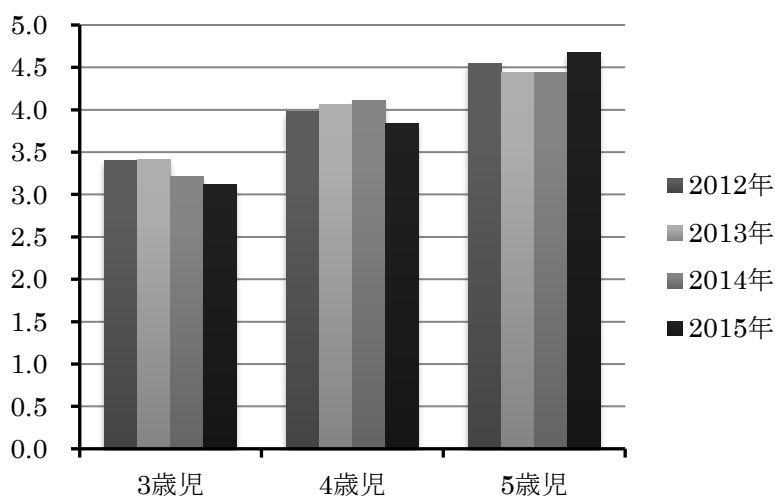


図 15 生活習慣領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

(6) 遊び領域について

表 12 に調査年ごとの学年別・男女別平均値と標準偏差及び度数を示した。

このデータについて、調査年（4：2012年・2013年・2014年・2015年）×学年（3：3歳児・4歳児・5歳児）×性別（2：男・女）の3要因を独立変数として分散分析を行った（表 13）。その結果、調査年、学年、性別の要因の主効果が有意であった。調査年の主効果について2014年は他のどの調査年よりも評定値が有意に低かった（図 16）。他の調査年間には有意差はみられなかった。学年の主効果について、3歳児より4歳児、4歳児より5歳児の評定値が有意に高かった（図 17）。

さらに、調査年×学年の交互作用が有意であった。3歳児では2012年と2013年は2014年と2015年よりも高く評定されていた。4歳児では調査年による評定値の差はみられなかった。5歳児では2012年、2013年、2014年はほとんど差はみられず、2015年は他の調査年よりも高く評定されていた（図 18）。

その他の交互作用は有意ではなかった。

表 12 遊び領域における調査年ごとの平均値、標準偏差及び度数

調査年			平均値	標準偏差	度数
2012年	3歳児	女	3.400	0.510	98
		男	3.309	0.568	123
	4歳児	女	3.813	0.578	156
		男	3.786	0.595	134
	5歳児	女	4.374	0.668	176
		男	4.221	0.636	164
2013年	3歳児	女	3.339	0.767	106
		男	3.326	0.727	108
	4歳児	女	3.927	0.541	173
		男	3.810	0.677	183
	5歳児	女	4.336	0.614	170
		男	4.151	0.774	145
2014年	3歳児	女	3.234	1.043	134
		男	3.055	0.891	135
	4歳児	女	3.922	0.545	159
		男	3.723	0.546	162
	5歳児	女	4.243	0.624	159
		男	4.172	0.773	171
2015年	3歳児	女	3.250	0.654	53
		男	3.116	0.685	58
	4歳児	女	3.865	0.395	90
		男	3.721	0.532	116
	5歳児	女	4.569	0.606	121
		男	4.581	0.649	94

表 13 遊び領域における調査年×学年×性別の分散分析結果

ソース	タイプⅢ平方和	自由度	平均平方	F 値	有意確率
修正モデル	585.896 ^a	23	25.474	57.679	0.000
切片	41436.175	1	41436.175	93821.538	0.000
調査年月	6.703	3	2.234	5.059	0.002
学年	523.148	2	261.574	592.267	0.000
性別	8.428	1	8.428	19.084	0.000
調査年月 * 学年	19.998	6	3.333	7.547	0.000
学年 * 性別	0.073	2	0.036	0.083	0.921
調査年月 * 性別	0.499	3	0.166	0.377	0.770
調査年月 * 学年 * 性別	3.004	6	0.501	1.134	0.340
誤差	1397.377	3164	0.442		
総和	49513.318	3188			
修正総和	1983.273	3187			

a. R2 乗 = .295 (調整済み R2 乗 = .290)

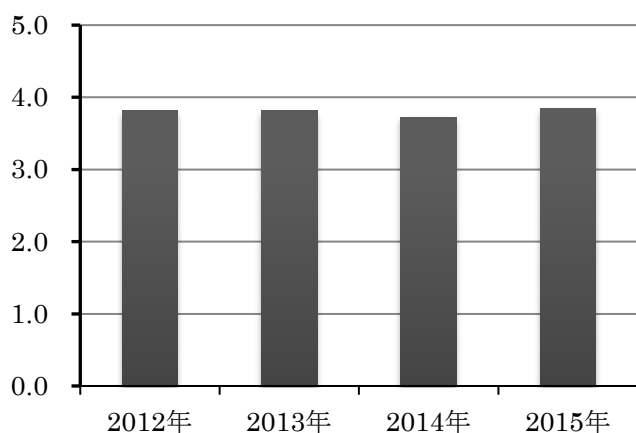


図 16 遊び領域における調査年に関する評定値

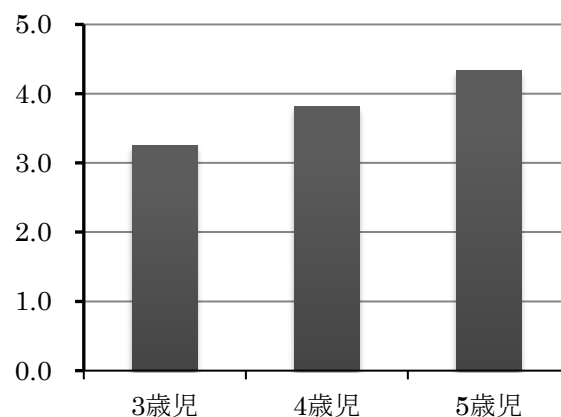


図 17 遊び領域における学年の主効果に関する評定値

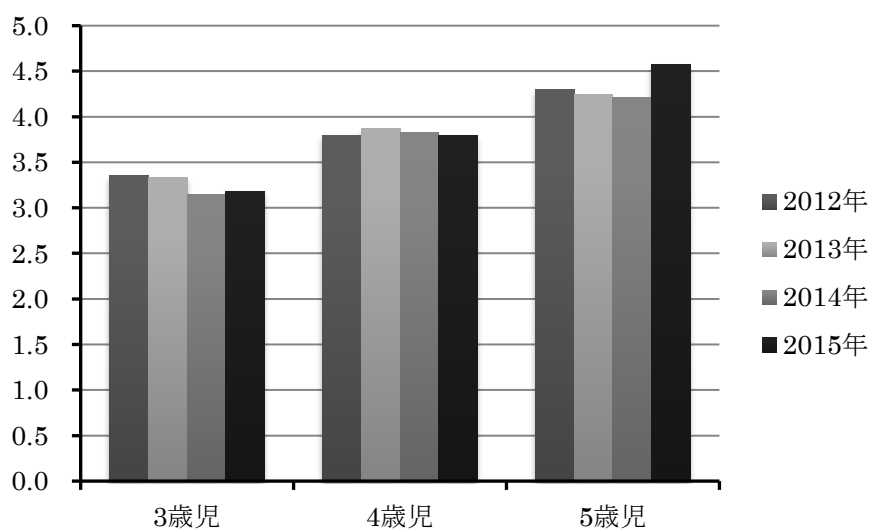


図 18 遊び領域における調査年×学年の交互作用に関する評定値

遊び領域における調査年×学年の交互作用がみられたことから、年齢によって調査年毎の評定値が異なることが分かる。

以上の結果から、生活環境変化の影響は発達時期、領域によって異なると考えられ、今後保育・養育状況との関連等の検討が必要であろう。

第3章 保育者対象調査（2012年、2014年、2015年広域調査）

加藤 孝士

災害時における保育問題検討委員会・福島ワーキンググループ（2011年5月～2013年5月）では、平成24（2012）年1～3月に福島市、二本松市、本宮市、郡山市のすべての幼稚園・保育所の保育者（園長・保育者）を対象に調査を行った（以下：2012調査）。同時に、関東圏の幼稚園・保育所も調査し、福島県中通り地区と関東との比較を通じて、保育内容の変化や放射能への対策を明らかにした⁽¹⁾。具体的には、福島県の幼稚園・保育所の保育内容の再検討や除染活動など、園をあげた様々な工夫を行っていた。そのような活動の中、保育者の体力的・心理的な疲労が蓄積され続けていることも危惧された。

その後、放射能災害にかかる保育問題検討委員会・養育環境研究ワーキンググループ（2013年5月～2017年3月）が引き継ぎ、平成26（2014）年2～3月（以下；2014年調査）、平成27（2015）年2～3月（以下；2015年調査）に、福島県中通り地区の幼稚園・保育所の保育者を対象に継続調査を行った。その中から、永井⁽²⁾は、園長調査をまとめ、震災後3年ないし4年が経過したとき、園長は「保育内容の変化をどのように捉えていたのか」「保育時間はどのように変化したのか」「活動や取り組みはどのように変化したのか」などを中心に傾向を明らかにした。具体的には、外遊びの制限が緩和され、徐々に震災前の環境に近付いていること、一方で保育者の労働環境は、未だに過酷な状態が続き、保育者への大きな負担のもとに保育が成り立っていることが示されている。

さらに、加藤⁽³⁾は、音山⁽¹⁾、永井⁽²⁾をもとに、「保育の回帰と深化」「保護者との信頼感」「保育者の頑張りとストレス」「園種の違い」といった変化に言及し、保育内容の改善に取り組む姿勢が継続していること、それらの姿勢が保育者の頑張りによって支えられていることなどを論じた。また、「大規模な災害は、『みんなが経験していること』『みんな大変なのだから、不満をいってはいけない』という空気になりやすい」とされ⁽⁴⁾、保育者は感情労働を必要とする職業ともいわれている⁽⁵⁾ことから、保育者は、過酷な状況において、自らの不安を表出できない苦しさにも苛まれている可能性も指摘している。

福島県では、福島第一原子力発電所事故の影響により、外遊びや食など多くの制限が強いられてきた。東日本大震災から6年が過ぎた現在、除染作業が進み、園外活動の制限も少なくなりつつある幼稚園・保育所がある。一方で未だ（2017年2月現在）制限が解消されず不安を抱き、新たな悩みや問題意識に頭を悩ませる保育者は少なくない。田中⁽⁶⁾は、保育者について、「福島の保育者たちの大変さは、状況が好転する見通しが立たないことと、子どもの現状の捕捉の難しさにあるのではないだろうか。いつまでと期限が見えず、子どもが適応しているのか我慢しているのかもつかみにくい状況の中で、どうすればよりよい保育になるのかを模索し続けなければならない。目標が明確であれば、覚悟と気力で進むことができる。目標が定まらないままでは走り続けることは難しい」と述べており、単に『放射能』『制限』といった震災の直接的影響だけでなく、保育者ならではの悩みについても明らかにする必要がある。

そこで本章では、福島県内の保育者の意識（震災前後の保育状況や子どもの様子など）についての調査結果を報告する。広域調査は、量的な調査が中心だが、震災後の保育の変化について、「変化した」と回答をした保育者については、具体的にどのようなことが変化

したのかを自由記述調査を行った。そこで、本章では第1節に量的調査を、第2節に自由記述を分析し、震災後、具体的にどのように保育が変化したのかを示した。

I 量的データの分析

1. 目的

- ① 調査ごとの、保育者の認識の変化を明らかにする。
- ② 園種ごとの認識の違いについて明らかにする。
- ③ 未だに残る不安について明らかにする。

2. 方法

調査時期：平成24(2012)年2～3月、平成26(2014)年2～3月、平成27(2015)年2～3月

調査対象者：調査対象者は、幼稚園及び保育所の保育者。2012年は657名、2014年は358名、2015年は215名であった。

調査手続き：2012年調査は、伊達市、福島市、二本松市、本宮市、郡山市のすべての保育所、幼稚園に調査用紙を配布し回答を求めた。2014年、2015年調査は、2012年調査で回答のあった128園を対象に調査を行った。調査用紙は、保育者調査(3～8部)を同封し調査依頼書と合わせて送付した。回答後は、同封した返信用レターパックにより回収を行った。

2012年、2014年調査は各園5～8部ずつ、2015年調査は各園3部ずつを配布し回答を求めた。これは、震災から時間が経過するごとに、震災後に保育者になった者がいるためである。

調査項目：質問紙は、フェイスシート(園環境、園種、クラスの在籍人数、保育時間)に加え、以下の①～⑤、自由記述で構成されており、それぞれに回答を求めた。

- ① 震災後の保育や子どもの様子の変化：38項目で構成され、「減った(1点)」～「増えた(5点)」の5段階で回答を求めた。
- ② 保育への考えや実践について：13項目で構成され、「そう考えない(1点)」～「そう考える(5点)」の5段階で回答を求めた。
- ③ 現在の心配事：13項目で構成され、「心配でない(1点)」～「心配(5点)」の5段階で回答を求めた。
- ④ 保育を続けていて、感じたこと：13項目で構成され、「ない(1点)」～「ある(5点)」の5段階で回答を求めた。
- ⑤ 震災による考えの変化：13項目で構成され、「変わっていない(1点)」～「変わった(5点)」の5段階で回答を求めた。

分析には、SPSS for Windows ver.22.0を使用した。

3. 結果

2012年調査は229園に調査用紙を配布し、128園（56%）から回答が得られた。2014年、2015年調査は、2012年調査において回答の得られた128園に調査用紙を配布し、それぞれ72園（56%）、79園（62%）から返送された。

(1)調査対象者

本調査の調査対象者を表1に示した。本調査は、園長以外の保育者を対象とした調査であり、2012年は657名、2014年は358名、2015年は215名から回答が得られた（2012年調査においては、配布した調査用紙を調査対象園で増刷し、回答した園が複数あったため、配布した数よりも回答の数が多かった）。

調査者の経験年数を見ると、調査を重ねるにつれて、経験年数が少ない保育者の割合が減少している。これは、2015年は、1園あたりの回答部数を減らしたことや調査項目の中に、「震災前と比較して」といった文章が含まれており、経験年数の多い保育者が率先して回答したことが予測される。

表1 調査対象者の所属施設、設置主体、経験（名）

		経験					合計	
		2年以下	3-4年	5-7年	8-10年	11年以上		
2012年調査	幼稚園	公立	21	7	10	3	24	65
		私立	35	47	45	24	72	223
	保育所	公立	25	22	15	7	136	205
		私立	21	16	22	26	79	164
2014年調査	幼稚園	公立	10	11	7	5	26	59
		私立	16	20	30	8	35	109
	保育所	公立	15	15	13	9	55	107
		私立	8	17	21	16	48	110
2015年調査	幼稚園	公立	0	4	3	3	20	30
		私立	8	6	18	12	35	79
	保育所	公立	3	4	5	3	41	56
		私立	4	4	9	12	21	50
合計			166	173	198	128	592	1257

(2)震災後の保育や子どもの様子の変化

本調査では、「保育者に震災後の子育てや子どもの様子の変化」について回答してもらった。質問項目数が38と多いため、ここでは因子分析を行い因子構造を確認し、因子ごとに各項目の得点を示した（各項目の得点を用いているため、因子分析の結果は掲載しない）。

①震災後の園児の行動

園児の行動を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表2：F値の下段は多重比較の結果）。

その結果、全ての項目に関して調査時期の主効果が認められた。その後の多重比較の結果、全ての項目で、各調査間に有意差が確認され、『遊びの中での十分な運動(12<14<15)』

は調査ごとに活動が増加し、『戸外で遊べないことでの子ども達のストレス(12>14>15)』『子どもから食物への不安の言葉(12>14>15)』『外に出る際に、子どもが放射線のことを気にする(12>14>15)』『甘えたり、依存的な行動(12>14>15)』『自衛隊や警察、救急などの仕事への興味(12>14>15)』『震災に関連した言葉(津波、シーベルトなど)を使うこと(12>14>15)』は、調査ごとに活動が減少したことが示された。

また、『子どもから食物への不安の言葉(幼>保)』『外に出る際に、子どもが放射線のことを気にする(幼>保)』『自衛隊や警察、救急などの仕事への興味(幼>保)』『震災に関連した言葉(津波、シーベルトなど)を使うこと(幼>保)』において園種の主効果が確認され、全ての項目で、幼稚園の保育者は保育所の保育者よりも変化が大きいと感じていることが示された。

さらに、交互作用が認められた項目について、Bonferroniの単純主効果の検討をしたところ、2012年において、『遊びの中での十分な運動(幼<保)』の項目で保育所の保育者は、幼稚園の保育者に比べ得点が高く、『戸外で遊べないことでの子ども達のストレス(幼>保)』『子どもから食物への不安の言葉(幼>保)』『外に出る際に、子どもが放射線のことを気にする(幼>保)』『震災に関連した言葉(津波、シーベルトなど)を使うこと(幼>保)』といったネガティブな行動を幼稚園の保育者が高く認識していることが示された。また、幼稚園・保育所共に調査時期の主効果と同様の単純主効果が確認された。このように、震災後の2012年は、幼稚園の保育者がネガティブな変化を強く認識していることが示されたが、年を追うごとにその傾向は示されなくなっている。

データの得点推移を見ると、年を追うごとに、ポジティブに変化しており徐々に震災前の環境に戻りつつあることが示唆された。ただし、2015年調査の『遊びの中での十分な運動』の平均値のように、幼稚園・保育所共に低く、震災前の状況に比べて減少したと認識しており、震災前の環境に戻ったとはいえないことが示唆されている。

表2 調査時期と園種ごとの園児の震災に関する行動(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=261)	保育所 (n=320)	幼稚園 (n=150)	保育所 (n=195)	幼稚園 (n=95)	保育所 (n=96)	調査時期	園種	交互作用
遊びの中での十分な運動	1.27 (0.56)	1.49 (0.83)	2.08 (1.07)	2.15 (1.12)	2.75 (1.09)	2.55 (1.15)	159.74*** 12<14<15	0.30	3.73* 12:幼<保 幼:保12>14<15
戸外で遊べないことでの子ども達のストレス	4.39 (0.66)	4.24 (0.74)	3.57 (1.10)	3.74 (1.02)	3.02 (1.13)	3.05 (1.16)	159.04*** 12>14>15	0.05	3.47* 12:幼<保 幼:保12>14>15
子どもから食物への不安の言葉	3.68 (0.69)	3.23 (0.47)	2.98 (0.86)	2.89 (0.74)	2.66 (1.03)	2.68 (0.98)	102.85*** 12>14>15	13.09*** 幼>保	10.38*** 12:幼<保 幼:保12>14>15
外に出る際に、子どもが放射線のことを気にする	4.34 (0.69)	3.87 (0.77)	3.11 (1.18)	2.96 (1.02)	2.54 (1.13)	2.43 (1.11)	278.69*** 12>14>15	15.75** 幼>保	4.67* 12:幼<保 幼:保12>14>15
甘えたり、依存的な行動	3.71 (0.65)	3.54 (0.64)	3.30 (0.89)	3.32 (0.86)	3.04 (0.99)	3.14 (1.06)	38.66*** 12>14>15	0.11	2.68
自衛隊や警察、救急などの仕事への興味	3.51 (0.65)	3.30 (0.55)	3.23 (0.64)	3.20 (0.58)	3.21 (0.65)	3.14 (0.73)	15.42*** 12>14>15	6.72** 幼>保	2.43
震災に関連した言葉(津波、シーベルトなど)を使うこと	4.56 (0.63)	4.14 (0.86)	3.45 (1.18)	3.28 (0.98)	2.81 (1.25)	3.00 (1.15)	215.90*** 12>14>15	4.50* 幼>保	7.48*** 12:幼<保 幼:保12>14>15

* $p<0.05$,** $p<0.01$,*** $p<0.001$

②園児の攻撃的行動の変化

攻撃的行動の調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表3:F値の下段は多重比較の結果)。

その結果、全ての項目において調査時期の主効果が認められた。その後の多重比較の結果、『関係でのトラブル(12>14>15)』では各調査間に有意差が確認され、調査ごとに減少していたこと、『友達や保育者に対して攻撃的な行動(12>14≒15)』『自己主張をしたり自分を通そうとする言動(12>15)』『子どもの乱暴な言葉遣い(12>14)』は、2012年以降低下していることが示された。このように、攻撃的な行動が減少していることが示されたことは、徐々に子どもの情緒的側面が安定に向かっていると考えられる。ただし、これらの項目においても平均点は3を超えており、問題行動の増加が示されている。

また、園種は『関係でのトラブル(幼<保)』『友達や保育者に対して攻撃的な行動(幼<保)』『自己主張をしたり自分を通そうとする言動(幼<保)』において、保育所の保育者は、幼稚園の保育者に比べ得点が高く、攻撃的な行動などトラブルが多いことが示された。保育所は、幼稚園に比べ滞在時間が長いことから様々な問題が起きていると強く感じるのではないだろうか。

表3 調査時期と園種ごとの園児の攻撃的な行動(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		調査時期	F値	
	幼稚園 (n=261)	保育所 (n=320)	幼稚園 (n=150)	保育所 (n=195)	幼稚園 (n=95)	保育所 (n=96)		園種	交互作用
関係でのトラブル	3.30 (0.58)	3.35 (0.59)	3.15 (0.56)	3.28 (0.75)	3.03 (0.51)	3.14 (0.71)	11.45*** 12>14>15	5.48* 幼<保	0.42
友達や保育者に対して攻撃的な行動	3.24 (0.52)	3.31 (0.56)	3.09 (0.68)	3.18 (0.77)	3.01 (0.72)	3.16 (0.79)	8.49*** 12>14≒15	5.58* 幼<保	0.24
自己主張をしたり自分を通そうとする言動	3.31 (0.63)	3.32 (0.55)	3.23 (0.62)	3.28 (0.64)	3.11 (0.79)	3.28 (0.68)	3.09* 12>15	3.46 幼<保	1.29
子どもの乱暴な言葉遣い	3.41 (0.68)	3.32 (0.59)	3.26 (0.70)	3.26 (0.69)	3.23 (0.74)	3.27 (0.76)	3.62* 12>14	0.07	0.79

* $p<.05$,*** $p<.001$

③園児の依存的行動の変化

依存的行動を調査時期と園種ごとに示すため、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表4:F値の下段は多重比較の結果)。

その結果、調査時期の主効果は確認されず、園児の依存性については、震災後変化がないことが示された。平均値を見るとどの項目も得点が高く、震災後に保育者の指示を待ち、言うことをよく守ったりといった受動的な行動が増加し、それが維持されていることが示唆された。また、『保育者のいうことをよく守る(幼>保)』において園種の主効果が認められ、幼稚園の子どもほど保育者のいうことを守っていることが示された。

加藤⁽³⁾、永井⁽²⁾の調査報告でも、年を追うごとに、家庭や保育内での外遊びの時間が増加しており、自由な活動は可能になっていることがわかる。しかし調査の際に通園していた子どもが生まれたときは、震災後の高放射線量の時期のため、外遊びの制限を受けていたことが予測される。そのため、大人の指示を忠実に守ることが身に付いていたと考えられる。

表4 調査時期と園種ごとの園児の依存的行動(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		調査時期	F値	
	幼稚園 (n=261)	保育所 (n=320)	幼稚園 (n=150)	保育所 (n=195)	幼稚園 (n=95)	保育所 (n=96)		園種	交互作用
保育者の指示を待つ	3.30 (0.62)	3.24 (0.60)	3.30 (0.80)	3.26 (0.65)	3.42 (0.78)	3.29 (0.77)	1.19	2.87	0.27
保育者のいうことをよく守る	3.25 (0.65)	3.12 (0.55)	3.30 (0.74)	3.18 (0.68)	3.40 (0.79)	3.20 (0.64)	2.35	11.95*** 幼>保	0.28

*** $p<.001$

④園児の社会的行動の変化

社会的行動の変化を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表5：F値の下段に多重比較の結果を示す）。

その結果、多くの項目で調査時期の主効果が示された。具体的には、『新しいことを考えたり、工夫しようとする(12>14)』『新入児の園生活への適応力(12>14)』『周囲の人への思いやり(12>14)』『子ども同士の会話の活発性(12>14)』『グループ遊び(12>14)』『歌やダンスなどをみんなですることへの興味(12>14≒15)』『読み聞かせや絵本などの回数(12>14≒15)』『文字への興味や習得(12≒15>14)』において2012年と2014年に有意差が確認され、『素直に自分の気持ちを表現する(12<15)』『集団行動のルールを守る(12<15)』は、2012年と2015年で有意差が確認された。また、『集団行動のルールを守る(幼>保)』『周囲の人への思いやり(幼>保)』『文字への興味や習得(幼>保)』『グループ遊び(幼>保)』『読み聞かせや絵本などの回数(幼<保)』は園種の主効果が確認された。

表5 調査時期と園種ごとの園の社会的行動(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=261)	保育所 (n=320)	幼稚園 (n=150)	保育所 (n=195)	幼稚園 (n=95)	保育所 (n=96)	調査時期	園種	交互作用
素直に自分の気持ちを表現する	3.00 (0.48)	3.10 (0.50)	3.09 (0.50)	3.09 (0.67)	3.16 (0.76)	3.22 (0.67)	4.13* 12<15	2.23	0.78
友だちと協力して遊びを進める	3.39 (0.71)	3.27 (0.63)	3.25 (0.72)	3.28 (0.67)	3.28 (0.79)	3.24 (0.80)	1.38	1.01	1.35
集団行動のルールを守る	3.27 (0.72)	3.14 (0.60)	3.30 (0.72)	3.16 (0.71)	3.73 (3.04)	3.22 (0.73)	4.35* 12<15	12.49*** 幼>保	2.29
新しいことを考えたり、工夫しようとする	3.28 (0.75)	3.23 (0.72)	3.13 (0.71)	3.13 (0.65)	3.23 (0.92)	3.27 (0.66)	3.45* 12>14	0.00	0.32
歌やダンスなどをみんなですることへの興味	3.66 (0.76)	3.59 (0.72)	3.49 (0.72)	3.48 (0.70)	3.43 (0.78)	3.51 (0.73)	5.42** 12>14≒15	0.00	0.74
読み聞かせや絵本などの回数	4.02 (0.78)	4.12 (0.78)	3.77 (0.79)	3.93 (0.84)	3.74 (0.75)	3.82 (0.77)	13.69** 12>14≒15	4.91* 幼<保	0.15
遊びへの集中度	2.80 (0.80)	2.92 (0.72)	2.89 (0.84)	2.99 (2.29)	3.08 (0.90)	3.01 (0.86)	1.81	0.33	0.46
身辺自立に関する発達	3.02 (0.67)	3.03 (0.60)	2.96 (0.64)	2.96 (0.61)	2.97 (0.74)	3.05 (0.70)	0.89	0.57	0.28
新入児の園生活への適応力	2.98 (0.61)	2.97 (0.41)	2.86 (0.71)	2.85 (0.57)	2.87 (0.82)	3.06 (0.72)	4.67** 12>14	2.01	2.13
周囲の人への思いやり	3.48 (0.76)	3.21 (0.57)	3.26 (0.61)	3.12 (0.67)	3.34 (0.81)	3.21 (0.61)	5.52** 12>14	16.46*** 幼>保	1.50
友だち関係の広がり	3.34 (0.79)	3.23 (0.63)	3.29 (0.65)	3.21 (0.66)	3.34 (0.79)	3.28 (0.68)	0.52	3.34	0.11
自分の目的をやり遂げようとする力	3.19 (0.72)	3.16 (0.63)	3.13 (0.67)	3.04 (0.60)	3.19 (0.87)	3.14 (0.66)	2.14	0.20	0.82
文字への興味や習得	3.54 (0.69)	3.39 (0.64)	3.39 (0.61)	3.23 (0.52)	3.46 (0.77)	3.43 (0.66)	6.97*** 12≒15>14	7.48** 幼>保	0.69
子ども同士の会話の活発性	3.43 (0.77)	3.40 (0.63)	3.28 (0.69)	3.21 (0.54)	3.26 (0.73)	3.34 (0.69)	6.83** 12>14	0.02	0.77
グループ遊び	3.56 (0.85)	3.44 (0.75)	3.37 (0.75)	3.24 (0.66)	3.39 (0.80)	3.31 (0.74)	7.57*** 12>14	4.46* 幼>保	0.07

* $p<0.05$,** $p<0.01$,*** $p<0.001$

特徴的な変化を見ると、『集団行動のルールを守る』といった集団活動について、2015年に増加しており、『グループ遊び』『子ども同士の会話の活性化』『歌やダンスなどをみんなですることへの興味』といった集団活動について2012年と比べると得点は減少している。しかし、平均値が未だ高いままで、震災前と比べるとそれらの活動が増加している。『読み聞かせや絵本などの回数』についても、2012年に比べると得点が低下しているが、平均値

は高いまま、室内で活動が増加していることが示された。また、『友だちと協力して遊びを進める』『友達関係の広がり』など調査ごとに変化が見られない項目についても、平均値が高く、子どもの共同活動に関する行動が多いことが示された。

園種においては、集団活動に関する項目は、幼稚園が高い傾向にあり、絵本の読み聞かせは保育所での活動が多いことも示された。保育所に通園する子どもの年齢は、幼稚園に比べるとより低いため、集団活動が出来にくい子どもが比率として多い。そのため、個別でも対応できる絵本の読み聞かせなどがより増加したと考えられる。

⑤園児の体験の変化

体験の変化を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表6：F値の下段は多重比較の結果）。

その結果、『家庭での、子どもの自然との触れ合い(12<14<15)』『保育の中で小動物に触れる機会(12<14<15)』『自然から感じとる音、色、形、手触りなどの経験(12<14<15)』『子どもの気持ちの安定感(12<14<15)』において調査時期ごとの有意差が、『自然の美しさや不思議さについての言葉(12<14≒15)』『自然環境への好奇心(12<14≒15)』において、2012年と、2014年2015年間に有意差が、『草や砂などに触れる活動の代わりにの経験(12<15)』『興味をもったことの質問や探究しようとする(12<15)』において2012年と2015年間に有意差が示され、徐々に体験が豊になっていることが示された。また、『保育の中で小動物に触れる機会(幼>保)』においても主効果が確認され、幼稚園の体験が多いことが示された。

加えて、『図鑑やビデオなど、自然の疑似体験』において、有意な交互作用が認められたため、Bonferroniの単純主効果の検討をした。その結果、2012年調査において保育所の子どもは、幼稚園の子どもに比べ疑似体験が増加していたこと、幼稚園において、2012年と2014、2015年間に有意差が確認され、疑似体験が増加していることが示された。

表6 調査時期と園種ごとの園児の体験(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=261)	保育所 (n=320)	幼稚園 (n=150)	保育所 (n=195)	幼稚園 (n=95)	保育所 (n=96)	調査時期	園種	交互作用
図鑑やビデオなど、自然の疑似体験	3.20 (1.01)	3.41 (0.94)	3.41 (0.97)	3.24 (0.86)	3.43 (0.81)	3.22 (0.92)	0.08	0.78	6.21** 12:幼<保 幼:1<2,3
草や砂などに触れる活動の代わりにの経験	2.62 (1.49)	2.77 (1.48)	2.91 (1.28)	2.81 (1.29)	3.01 (1.13)	3.36 (3.30)	6.52** 12<15	1.50	1.27
興味をもったことの質問や探究しようとする	2.88 (0.79)	2.94 (0.65)	3.06 (0.69)	2.95 (0.61)	3.11 (0.82)	3.15 (0.70)	7.21*** 12<15	0.01	1.61
家庭での、子どもの自然との触れ合い	1.60 (0.96)	1.62 (0.93)	2.21 (1.05)	2.00 (1.02)	2.41 (1.13)	2.30 (1.06)	51.44*** 12<14<15	2.18	1.43
保育の中で小動物に触れる機会	1.58 (0.86)	1.43 (0.79)	2.10 (1.09)	1.76 (0.91)	2.28 (1.11)	1.96 (1.00)	42.11*** 12<14<15	19.58*** 幼>保	1.50
自然の美しさや不思議さについての言葉	2.46 (0.97)	2.56 (0.89)	2.93 (0.82)	2.98 (0.87)	3.09 (0.92)	3.09 (0.88)	43.24*** 12<14≒15	0.75	0.26
自然から感じとる音、色、形、手触りなどの経験	1.64 (0.91)	1.65 (0.93)	2.32 (1.05)	2.27 (1.07)	2.75 (1.10)	2.63 (1.09)	95.91*** 12<14<15	0.69	0.34
子どもの気持ちの安定感	2.46 (0.75)	2.57 (0.67)	2.91 (0.76)	2.86 (0.74)	3.09 (0.89)	3.00 (0.78)	48.77*** 12<14<15	0.05	2.06
機敏な動作	2.65 (0.83)	2.74 (0.79)	2.58 (0.78)	2.61 (0.79)	2.69 (0.83)	2.77 (0.86)	2.41	1.36	0.16
自然環境への好奇心	2.20 (0.94)	2.32 (0.91)	2.79 (1.03)	2.77 (0.98)	2.98 (1.00)	2.93 (0.91)	53.16*** 12<14≒15	1.72	0.20

p<0.01,*p<0.001

全般的には、調査を重ねるごとに得点が増加しており、自然物との関わりが増えていることがうかがえた。これは、放射能問題が次第に改善され、保育や家庭の中で自然と触れ合うことの増加を示している。ただし、家庭での自然との触れ合いや小動物との触れ合いは、得点が著しく低く、未だに震災前の環境とは程遠いことが示された。

(3)保育者の保育観の変化

園児の体験の変化を調査時期と園種ごとに示すため、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表7:F値の下段は多重比較の結果)。

その結果、多くの項目で調査時期の主効果が示され、『自然環境との接触の減少は保育環境の中でカバーできる(12<14≒15)』『保育の中で発見の楽しみの機会を増やしている(12<14≒15)』『季節の変化を感じられるように、環境設定を工夫している(12<14)』『子どもの生命・健康を守ることを第一に考えている(12>14)』『この場で保育をしていいのかと悩むことがある(12>14≒15)』といった有意差が確認され、2014年において大きな変化があったことが示された。さらに、『津波ごっこなどの遊びをどう受け止めていいか困惑することがある(12≒14>15)』『表現遊びの環境(時間、空間)を整えることが困難に感じる(12≒14>15)』『自然物以外からの感動があるように保育内容を変えた(12>15)』『子どもの要求を受け入れることを意識している(12>15)』において有意差が示され、2015年大きな変化があったことが示唆された。

表7 調査時期と園種ごとの保育への考え(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=281)	保育所 (n=348)	幼稚園 (n=154)	保育所 (n=210)	幼稚園 (n=105)	保育所 (n=101)	調査時期	園種	交互作用
室内運動を増やせば、外遊びでの運動的発達を補える	2.65 (1.22)	2.85 (1.29)	2.75 (1.08)	2.79 (1.17)	2.62 (1.04)	2.86 (1.30)	0.03	4.24* 幼<保	0.64
自然環境との接触の減少は保育環境の中でカバーできる	1.89 (0.87)	2.03 (1.04)	2.23 (0.87)	2.24 (0.98)	2.10 (0.75)	2.53 (1.17)	15.39*** 12<14≒15	10.28** 幼<保	3.27* 15:幼<保 幼:12<14;保:12<14≒15
保育の中で発見の楽しみの機会を増やしている	3.82 (0.76)	3.81 (0.82)	3.99 (0.69)	4.04 (0.73)	3.96 (0.75)	4.03 (0.81)	9.65*** 12<14≒15	0.53	0.28
季節の変化を感じられるように、環境設定を工夫している	3.93 (0.79)	4.17 (0.80)	4.08 (0.64)	4.27 (0.67)	4.14 (0.76)	4.23 (0.77)	4.39* 12<14	12.62*** 幼<保	0.94
津波ごっこなどの遊びをどう受け止めていいか困惑することがある	3.42 (1.24)	3.05 (1.13)	3.22 (1.14)	3.15 (0.98)	2.71 (1.08)	2.74 (1.15)	16.21*** 12≒14>15	3.56	3.41* 12:幼>保 幼:12≒14>15;保:14>15
自然物以外からの感動があるように保育内容を変えた	3.43 (0.82)	3.63 (0.79)	3.36 (0.80)	3.45 (0.79)	3.27 (0.79)	3.34 (0.87)	6.93** 12>15	5.23* 幼<保	0.75
描画や製作物を室内に効果的に飾って、見て楽しめるようにしている	4.01 (0.80)	4.30 (0.81)	4.08 (0.69)	4.35 (3.41)	4.06 (0.79)	4.11 (0.87)	0.48	3.82	0.43
表現遊びの環境(時間、空間)を整えることが困難に感じる	3.01 (0.98)	3.12 (1.03)	2.92 (0.92)	2.94 (0.88)	2.54 (0.95)	2.71 (1.07)	15.50*** 12≒14>15	2.63	0.44
保護者とコミュニケーションをとることを意識している	4.40 (0.68)	4.48 (0.66)	4.44 (0.70)	4.35 (0.77)	4.28 (0.85)	4.34 (0.89)	2.58	0.22	1.59
のびのびとさせることを意識している	4.45 (0.64)	4.47 (0.69)	4.45 (0.62)	4.34 (0.75)	4.40 (0.72)	4.38 (0.79)	1.36	0.77	1.14
子どもの要求を受け入れることを意識している	3.91 (0.78)	4.12 (0.79)	3.87 (0.78)	4.11 (0.78)	3.81 (0.83)	3.90 (0.85)	3.17* 12>15	12.06*** 幼<保	0.58
子どもの生命・健康を守ることを第一に考えている	4.90 (0.35)	4.92 (0.32)	4.84 (0.41)	4.81 (0.51)	4.87 (0.44)	4.80 (0.60)	5.24** 12>14	0.92	1.07
この場で保育をしていいのかと悩むことがある	3.16 (1.23)	3.33 (1.27)	2.47 (1.07)	2.88 (1.22)	2.28 (1.04)	2.67 (1.25)	43.28*** 12>14≒15	17.78*** 幼<保	1.43

* $p<0.05$,** $p<0.01$,*** $p<0.001$

園種では、『室内運動を増やせば、外遊びでの運動的発達を補える(幼<保)』『自然環境との接触の減少は保育環境の中でカバーできる(幼<保)』『季節の変化を感じられるように、環境設定を工夫している(幼<保)』『自然物以外からの感動があるように保育内容を変えた(幼<保)』『子どもの要求を受け入れることを意識している(幼<保)』『この場で保育をしていいのかと悩むことがある(幼<保)』において有意差が認められ、保育所の得点が高かった。

さらに、交互作用が確認された項目について、Bonferroniの単純主効果を検討した。その結果、『自然環境との接触の減少は保育環境の中でカバーできる』では、2015年において、保育所は、幼稚園よりも得点が高いことも示された。また、幼稚園において、2014年は2012年に比べ得点が高く、保育所において2014年、2015年は2012年よりも得点が高いことが示された。『津波ごっこなどの遊びをどう受け止めていいか困惑することがある』では、2012年において、幼稚園は保育所よりも高いこと、幼稚園において、2012年、2014年は2015年に比べ得点が高く、保育所において2014年は2015年よりも得点が高いことが示された。

その他、『描画や製作物を室内に効果的に飾って、見て楽しめるようにしている』『保護者とコミュニケーションをとることを意識している』『のびのびとさせることを意識している』においては、主効果、交互作用は認められなかったが平均値が高く、継続して高い意識を持っていることが示された。

(4)心配事の変化

保育者の心配事を調査時期と園種ごとに示すため、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表8:F値の下段は多重比較の結果)。

その結果、多くの項目で調査時期の主効果が示され、『子どもの体力(12>14>15)』『子どもの健康(12>14>15)』『子どもの自然体験の不足(12>14>15)』『子どもの外での生活(外遊びなど)(12>14>15)』『子どもの将来(12>14>15)』『園や地域の放射線量(12>14>15)』『食材の放射線量(12>14>15)』『震災前と同じ生活ができるか(12>14>15)』において各調査間の有意差が、『子どもの情緒の発達(12>14≒15)』『保護者との意見の違い(12≒14>15)』において2012年と2014年の有意差が確認された。

また、『子どもの学力(幼<保)』『他の保育者との意見の違い(幼<保)』『子どもの体力(幼<保)』『子どもの外での生活(外遊びなど)(幼<保)』『子どもの将来(幼<保)』『園や地域の放射線量(幼<保)』『震災前と同じ生活ができるか(幼<保)』において保育所の得点が高く、心配事が多いことが示された。

『園や地域の放射線量』において、交互作用が確認されたことから、Bonferroniの単純主効果の検討を行った。2012年、2014年調査において、保育所は、幼稚園よりも不安が高いことが示された。さらに、幼稚園において、2012年調査と2014年調査、2015年調査との間に有意差が示され、保育所において、年を追うごとに得点が低下していることが示された。

心配事に関しても、多くの項目で年を追うごとに不安は減少していることが示された。ただし、「情緒」「体力」「健康」「自然体験の不足」「外での生活」「将来」「放射線量」など、2015年調査においても平均値が高く、震災による環境の変化により、非常に大きな心配を抱えていることが明らかとなった。園種に関しても有意差が確認された項目は、全て保育

所の保育者の不安が高かった。これは、低年齢の子どもの保育を行なっていることや、保育時間が長いことが影響していると考えられる。

一方で、子どもの「学力」「友達関係」「保育者との意見の違い」などは、2012年調査の段階で、平均値は3付近であり、震災によって心配が少ないことが示された。

表8 調査時期と園種ごとの心配ごと(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=289)	保育所 (n=356)	幼稚園 (n=165)	保育所 (n=215)	幼稚園 (n=105)	保育所 (n=103)	調査時期	園種	交互作用
子どもの情緒の発達	3.94 (0.82)	3.97 (0.87)	3.51 (1.03)	3.58 (0.99)	3.38 (0.93)	3.40 (1.09)	40.13*** 12>14≒15	0.39	0.08
子どもの学力	2.97 (0.97)	3.05 (0.95)	2.87 (0.91)	3.16 (0.92)	2.98 (0.91)	2.97 (1.05)	0.14	3.88* 幼<保	2.02
子どもの体力	4.66 (0.65)	4.67 (0.61)	4.25 (0.85)	4.43 (0.78)	4.05 (0.89)	4.27 (0.84)	47.34*** 12>14>15	8.76** 幼<保	2.73
子どもの健康	4.72 (0.51)	4.71 (0.57)	4.20 (0.74)	4.30 (0.87)	3.96 (0.87)	3.95 (1.08)	106.11*** 12>14>15	0.31	0.85
子どもの自然体験の不足	4.79 (0.49)	4.81 (0.40)	4.49 (0.65)	4.48 (0.68)	4.18 (0.83)	4.17 (1.05)	86.30*** 12>14>15	0.00	0.10
子どもの外での生活(外遊びなど)	4.65 (0.64)	4.78 (0.44)	4.03 (0.84)	4.15 (0.90)	3.52 (1.03)	3.70 (1.30)	182.01*** 12>14>15	8.00** 幼<保	0.09
子どもの友達関係	2.98 (0.99)	3.00 (0.97)	2.98 (0.86)	3.05 (0.95)	2.93 (0.87)	2.97 (1.06)	0.31	0.50	0.07
子どもの将来	4.34 (0.85)	4.53 (0.76)	3.79 (0.92)	4.00 (0.97)	3.67 (0.96)	3.75 (1.11)	73.05*** 12>14>15	8.20** 幼<保	0.40
園や地域の放射線量	4.34 (0.90)	4.60 (0.61)	3.68 (1.03)	3.98 (0.98)	3.50 (1.04)	3.40 (1.22)	123.94*** 12>14>15	6.87** 幼<保	3.86* 12,14<幼<保, 幼:12>14≒15,保:12>14>15
食材の放射線量	4.31 (0.86)	4.53 (0.70)	3.56 (1.04)	3.80 (1.08)	3.44 (1.05)	3.32 (1.22)	131.66*** 12>14>15	3.79	2.97
震災前と同じ生活ができるか	4.36 (0.83)	4.60 (0.74)	3.79 (1.02)	3.90 (1.03)	3.34 (1.04)	3.64 (1.07)	115.73*** 12>14>15	13.84*** 幼<保	0.90
保護者との意見の違い	3.32 (0.97)	3.44 (0.94)	3.38 (0.97)	3.29 (0.88)	3.09 (0.90)	3.17 (0.93)	5.79** 12≒14>15	0.34	1.41
他の保育者との意見の違い	2.74 (1.08)	2.98 (1.00)	2.87 (0.97)	2.97 (0.94)	2.76 (0.91)	2.83 (1.01)	1.08	4.83* 幼<保	0.94

* $p<0.05$,** $p<0.01$,*** $p<0.001$

(5)保育者としての在り方

保育者としての在り方を調査時期と園種ごとに示すため、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表9:F値の下段は多重比較の結果)。

その結果、多くの項目で調査時期の有意な主効果が示され、『子どもが可哀相だと思うことが…12>14>15』において調査間の有意差が示された。その他、『保育をすることで、自分が成長していると感じることが…(12<14≒15)』『子どもにはすごい力があると感じることが…(12<14≒15)』『保育者で良かったと思うことが…(12<14≒15)』『自分が子どもにとって必要なのだと感じることが…(12>14≒15)』において、2012年と2014年、2015年間の有意差が、『自分の将来について考えて不安になることが…(12>14)』『周りの人に守られたり、助けられていると思うことが…(12<14)』において2012年と2014年間の有意差が示された。また、『園になくてはならない人材だと感じることは…(幼<保)』『子どもが可哀相だと思うことが…(幼<保)』において保育所は幼稚園よりも得点が高く、『保育者で良かった

と思うことが…(幼>保)』において幼稚園は保育所よりも得点が高いことが示され、幼稚園の保育者が充実感を強く感じていることが示された。

『保育者で良かったと思うことが…』『保育をすることで自分が成長していると感じることが…』など保育者としての充実感に関する項目も年を追うごとに増加しており、使命感や充実感が高まっていることが示された。一方で、保育者としての在り方について、『自分の力不足を感じて、イライラすることが…』『自分が疲れていると思うことが…』『保育をすることに自信がないと思うことが…』『毎日の保育に追われ、他のことをするゆとりがないことが…』といった、保育者の辛さに関する項目において調査時期、園種の主効果が認められなかった。また、得点を見ると2012年調査で平均値が非常に高く、高い使命感と不安の中の狭間で保育をしていることがうかがえる。

表9 調査時期と園種ごとの保育者としての在り方の変化(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=282)	保育所 (n=357)	幼稚園 (n=165)	保育所 (n=212)	幼稚園 (n=105)	保育所 (n=102)	調査時期	園種	交互作用
自分の力不足を感じて、イライラすることが…	3.92 (1.18)	3.80 (1.15)	3.95 (1.01)	3.87 (0.95)	3.65 (1.05)	3.93 (0.96)	0.86	0.18	2.77
自分が疲れていると思うことが…	4.29 (0.96)	4.28 (1.01)	4.19 (0.91)	4.28 (0.80)	4.15 (0.85)	4.35 (0.79)	0.39	2.38	1.14
保育をすることに自信がないと思うことが…	3.73 (1.16)	3.64 (1.12)	3.78 (0.97)	3.70 (0.96)	3.59 (1.05)	3.70 (1.04)	0.54	0.08	0.67
保育者で良かったと思うことが…	4.41 (0.83)	4.36 (0.90)	4.69 (0.58)	4.57 (0.75)	4.70 (0.56)	4.38 (0.88)	11.43*** 12<14≒15	10.31** 幼>保	2.08
保育をすることで、自分が成長していると感じることが…	4.13 (0.95)	4.20 (0.93)	4.39 (0.68)	4.27 (0.84)	4.44 (0.73)	4.42 (0.70)	9.01*** 12<14≒15	0.17	1.57
毎日の保育に負われ、他のことをするゆとりがないことが…	3.70 (1.22)	3.66 (1.26)	3.84 (1.18)	3.67 (1.16)	3.64 (1.24)	3.74 (1.30)	0.44	0.25	0.83
自分の将来について考えて不安になることが…	3.89 (1.22)	3.88 (1.17)	3.63 (1.11)	3.69 (1.13)	3.64 (1.09)	3.90 (1.13)	4.53* 12>14	2.02	1.07
保護者に頼られていると思うことが…	3.66 (0.99)	3.66 (0.96)	3.68 (0.81)	3.68 (0.78)	3.75 (0.78)	3.74 (0.90)	0.69	0.02	0.01
自分が子どもにとって必要なのだと感じることが…	4.13 (0.95)	4.19 (0.89)	4.04 (0.73)	3.95 (0.82)	3.99 (0.79)	3.89 (0.90)	7.14*** 12>14≒15	0.50	1.21
園になくなくてはならない人材だと感じる…	3.09 (0.82)	3.22 (0.98)	3.17 (0.79)	3.28 (0.86)	3.14 (0.79)	3.23 (0.94)	0.81	3.90* 幼<保	0.08
周りの人に守られたり、助けられていると思うことが…	4.49 (0.62)	4.54 (0.61)	4.65 (0.57)	4.65 (0.65)	4.67 (0.60)	4.48 (0.75)	5.86** 12<14	1.48	2.75
子どもにはすごい力があると感じることが…	4.58 (0.56)	4.60 (0.57)	4.90 (0.30)	4.80 (0.49)	4.87 (0.39)	4.78 (0.50)	38.13*** 12<14≒15	2.97	1.90
子どもが可哀相だと思うことが…	4.01 (1.09)	4.10 (1.07)	3.21 (1.06)	3.40 (1.17)	2.79 (1.12)	3.13 (1.19)	100.39*** 12>14>15	8.44** 幼<保	1.03

* $p<0.05$,** $p<0.01$,*** $p<0.001$

(6)震災後の保育の変化

保育の変化を調査時期と園種ごとに示すため、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表10:F値の下段に多重比較の結果を示す)。

その結果、全ての項目において、調査時期の主効果が示され、年を追うごとに数値が低くなり、変化が小さくなっていることが示された。特に2012年と2014年間で有意差が確認され、大きな違いが見られることが示唆された。その中でも、『戸外活動や自然とのふれあいの重要性』や『食料や飲料水への関心』など、放射能に関わる項目については、2015年においても、平均値が非常に高く、放射能汚染による被害は未だに大きな傷跡を残しているといえる。

一方、『子どもからの要求』や『子どもの育つ力』は、2012年調査では、幾分高い得点で

あったが、2014年調査では、平均値も3程度（変化ない）まで低下しており、早い段階で震災前と比べて変化がないと認識されるまでになっていることも示されている。実際に保育者に話を聞くと、「子どもの可能性、力にはいつも驚かされる」との話を頻繁に耳にした。このように、子どもの環境への適応能力を示す結果といえる。

表10 調査時期と園種ごとの保育観(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=274)	保育所 (n=348)	幼稚園 (n=158)	保育所 (n=197)	幼稚園 (n=102)	保育所 (n=99)	調査時期	園種	交互作用
保育者の使命や自分の保育観	3.66 (1.03)	3.73 (1.07)	3.41 (1.08)	3.29 (1.13)	3.26 (1.12)	3.28 (1.13)	18.10*** 12>14≒15	0.02	0.82
戸外活動や自然とのふれあいの重要性	4.19 (1.17)	4.16 (1.22)	3.89 (1.17)	3.77 (1.22)	3.85 (1.14)	3.67 (1.30)	14.19*** 12>14≒15	2.17	0.37
保育所や幼稚園の社会における役割	3.41 (1.11)	3.51 (1.13)	3.28 (1.13)	3.24 (1.14)	3.38 (1.01)	3.14 (1.13)	4.64** 12>14≒15	0.70	1.93
食材や飲料水への関心	4.24 (0.98)	4.37 (0.82)	3.73 (1.00)	3.82 (1.02)	3.76 (0.98)	3.68 (0.97)	49.23*** 12>14≒15	0.50	1.01
保育における環境設定の仕方	4.01 (0.88)	4.25 (0.82)	3.72 (1.02)	3.69 (1.00)	3.51 (0.97)	3.63 (1.07)	39.84*** 12>14≒15	3.12	2.23
自由遊びの重要性	3.31 (1.28)	3.43 (1.21)	3.30 (1.18)	3.08 (1.11)	2.88 (1.17)	2.97 (1.05)	10.84*** 12>14>15	0.00	2.29
行事の役割や行い方	4.10 (0.97)	3.82 (1.05)	3.49 (1.08)	3.20 (1.06)	3.24 (0.97)	3.10 (1.01)	64.75*** 12>14≒15	12.41*** 幼>保	0.44
職員の協力関係の重要性	3.71 (1.28)	3.57 (1.37)	3.36 (1.24)	3.29 (1.28)	3.23 (1.17)	3.17 (1.24)	12.19*** 12>14≒15	1.09	0.12
保育の計画性や反省の重要性	3.38 (1.19)	3.45 (1.26)	3.18 (1.15)	3.08 (1.12)	2.97 (1.09)	2.98 (1.25)	12.86*** 12>14≒15	0.01	0.59
おとなの精神状態やかかわりの子どもへ影響	3.61 (1.08)	3.57 (1.22)	3.37 (1.09)	3.36 (1.15)	3.29 (1.15)	3.17 (1.11)	9.22*** 12>14≒15	0.59	0.16
子どもの内面理解の重要性	3.41 (1.24)	3.42 (1.31)	3.24 (1.18)	3.08 (1.10)	2.84 (1.09)	3.07 (1.20)	12.42*** 12>14≒15	0.09	1.64
子どもからの要求	3.12 (0.94)	3.10 (1.03)	3.08 (0.94)	2.92 (0.95)	2.98 (0.95)	2.82 (1.04)	3.96* 12>15	3.04	0.80
子どもの育つ力	3.24 (1.15)	3.20 (1.18)	3.04 (1.13)	2.98 (1.06)	2.78 (0.98)	2.91 (1.07)	9.63*** 12>14≒15	0.03	0.47

* $p<0.05$,** $p<0.01$,*** $p<0.001$

II 自由記述の分析

1. 目的

震災後の保育の変化について、具体的にどのような変化があったのかを明らかにするために、自由記述の分析を以下の三つの視点から行った。

- ①震災後の保育観の変化の具体例を挙げる。
- ②語の関係を検討し、変化のカテゴリーを示唆する。
- ③調査時期、園種、保育経験によって語の使用傾向を明らかにする。

2. 方法

調査時期・調査対象者・調査手続き：量的調査と同様

調査項目：震災による考えの変化：13項目で構成され、「変わっていない（1点）」～「変わった（5点）」の5段階で回答を求めたあと、『変わった』を意味する4、5を回答した保育者に対して、具体的な変化について自由記述で回答を求めた。

<分析方法>

自由記述の分析は、樋口⁽⁷⁾を参考に、KH Coderを使用した。手続きは以下に示す。

まず、13の自由記述すべての語を対象に修正・統一を行ない、形態素解析を経て（文章や単語を切り分ける処理）、単純集計の結果を示した。その後、すべての自由記述を対象に、茶釜を用い複合語を検出した。抽出された語を強制抽出語として登録し、再度形態素解析を行い、分析対象語を確定した。本報告書は、得られた自由記述を極力解釈せずそのままの形で示すことを目的としているため、多くの解釈を加えず、語の統一も最小限に留めた。

続いて、自由記述ごとの分析を行った。本報告では、語の繋がりを分析するため、共起ネットワークを用い、回答全体のまとまりを明らかにした。図中においては、出現頻度が高い語ほど大きな円で描写され、Jaccard係数が高いほど語同士の実線が太くなっている。共起ネットワークは、多くのまとまりが検出されるが、今回は語の関係をシンプルに理解するため、項目ごとに語同士の Jaccard 係数を限定し（.13～.15以上）、関係の強い語の共起ネットワークのみの作図に留めた（語の繋がりごとに、Jaccard 係数を図中に示した）。その後、共起ネットワークによって表出された単語のまとまりをもとに、それらの語を含んだ自由記述を抽出し、表にまとめ特徴を示した（表中の下線は、共起ネットワークの単語を意味している）。多くの語がまとまった場合は、出現頻度が多いものや他の語との結び付きが強い語を含んだ文章を優先的に抽出した。

最後に、調査時期、園種、保育の経験年数ごとの使用傾向を探るため調査時期は「2012年」「2014年」「2015年」、園種は「幼稚園」「保育所」、保育の経験年数は「4年以下」「5～10年」「11年以上」を外部変数とした対応分析を行った。対応分析は分析結果を2次元の散布図で視覚的に示し、特徴のない語が原点(0,0)の付近にプロットされ、原点から見て遠くにプロットされている語ほど特徴的な語と捉えることが出来る。

本報告書では、分析結果をシンプルに表現するため、共起ネットワークにおいて他の語の関連が認められた語で、外部変数が原点より遠く、かつ外部変数と隣接している語に注目し、本文に記載することとした。

3. 結果

(1)調査対象者

今回の調査対象者は、量的調査と同様であった。その中から、「(6)震災後の保育の変化」において、変化した（4ないし5）と回答をした人数、及びそれぞれの項目において自由記述の数を表11に示した。

表11 調査ごとの自由記述の回答数

調査項目	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13
2012年調査の記述	223	339	135	329	271	105	223	166	101	162	117	79	81
2014年調査の記述	135	186	80	190	158	69	116	93	73	91	67	34	59
2015年調査の記述	80	107	52	95	93	35	67	58	38	52	35	23	34
全体の記述	438	632	267	614	522	209	406	317	212	305	219	136	174

(2)語の前処理

分析に先立ち、回答から得られた単語の統一を行った。具体的には、質問紙回収・入力後、文章を読み直し、語の前後の文脈も含め、同じ意味を成す言葉を抽出した（例、子供⇒子ども）。今回の報告では、本来の保育者の記述をそのままの形で表現することを目的としているため、単語の統一は、最小限に留め、明らかに同じ意味を成す語のみを統一した。

次に、震災後変化したことに対する 13 の自由記述を分析対象ファイルとし、それぞれ形態素解析（文章や単語の切り分け）を行った（形態素分析の結果は、該当頁に示す）。続いて KH Coder に同梱されている茶筌(ChaSen [8]) を利用し、複合語の検出を行った。その後、各自由記述の複合語を統一した（表 12）。本章の「強制抽出語」は表 12 を意味している。

表12 本報告における複合語の一覧

子ども達	保育者	運動能力	保育所	浄水器	職員同士
大切さ	責任感	季節感	水道水	室内遊び	協力体制
保護者	震災後	再認識	放射線量	環境構成	災害時
第一	危機管理	園外保育	安全性	自由遊び	異年齢
重要性	震災前	経験不足	生産地	共通理解	
使命感	体力低下	直接体験	内部被曝	環境づくり	
戸外遊び	自然体験	自然物	飲料水	子育て支援	
必要性	協力関係	除染	福島県産	ミネラルウォーター	

(3) 保育の使命感や保育観の変化

保育の使命感・保育観の変化について形態素解析を行った。その結果、471 文が確認され、総抽出語は 8,196 語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、3,464 語が抽出された。次に、強制抽出語を登録し、3,490 語を最終的な分析対象語とした。

語の関連性から全体像を把握するため、共起ネットワークを作成した（図 1 : Jaccard. 15 以上）。その結果、「戸外」「活動」「自然」などの【遊びへの意識】、「子ども」「守る」「命」などの【命への意識】、「大切さ」「感じる」「改めて」などの【保育の再認識】、「責任」「持つ」の【責任感】、「多い」「外」や「経験」「増える」の【外遊びの様子】、「保育者」「生活」の【保育者の役割】まとまりが確認された（主な自由記述は表 13 に示す）。これらのまとまりから放射能災害による健康被害や外遊びに制限により、子どもの命や健康、発達への

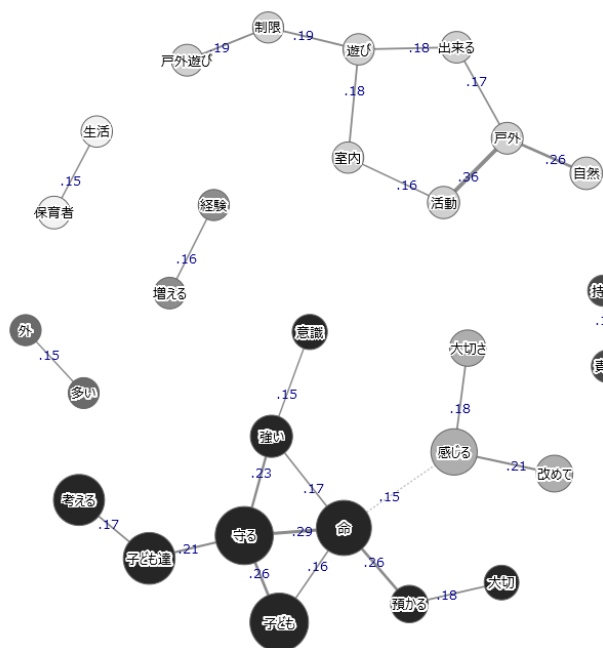


図 1 保育の使命感や保育観の共起ネットワーク

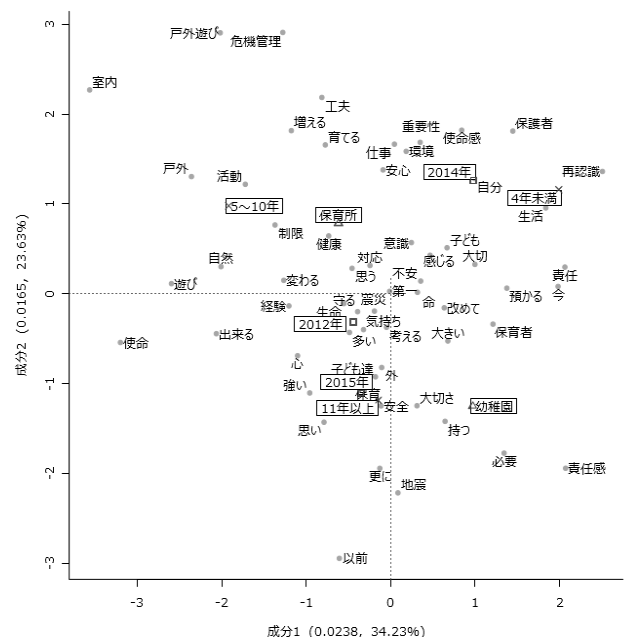


図 2 保育の使命感や保育観の対応分析

責任感が増したことが示された。

続いて、調査時期、園種、経験年数における語の使用傾向を明らかにするために、調査時期、園種、経験年数を外部変数に指定した対応分析を行った（10語以上：図2）。その結果、『4年未満』は、「責任」「生活」など【責任感】【保育者の役割】に関係する語がプロットされた。さらに、『5～10年』は、「戸外」「活動」「自然」といった【遊びへの認識】に関連する語がプロットされ、経験年数により異なる部分に着目していることがうかがえた。

表13 保育の使命感や保育観の変化における共起ネットワークの主な自由記述

【遊びへの認識】	戸外活動、自然とのふれあいについては今まで出来てあたり前だったことから突然出来なくなるといって更に重要だと考えるようになりました。又、外へ出ない分家庭の中だけでは遊びや人のかかわりも難しいので保育所、幼稚園等を利用し、かかわりを多くもったり色々な情報を発信したり交換したりする意味でも重要な役割があると思います（12年、保育所、11年以上）。
【命への意識】	子どもの命を守らなければという気持ちがより強くなった（12年、保育所、4年未満）。
【保育の再認識】	今までも保育者としての役割について考え、その重要性を理解していたつもりであったが、実際にこのような体験をしたことによって、その深さを改めて感じ、今まで以上に使命感の大切さを感じた（14年、保育所、4年未満）。
【責任感】	大きな地震や放射能など、自分の家族よりも大切に、責任を持って取り組まねばと思うようになった（12年、幼稚園、4年未満）。
【外遊びの様子】	外の遊具の使い方、ルールなどがわからない子ども達が多いと感じる（15年、幼稚園、5-10年）。外で経験できないことも増えて、できるだけ多くの経験をさせてあげたいと思った（12年、保育所、11年以上）。
【保育者の役割】	子どもが不安を感じず充実して生活できるよう、保育者の関わりや働きかけが大切だと感じた（14年、保育所、4年未満）。

(4) 戸外活動や自然とのふれあいの重要性

保育の戸外活動や自然とのふれあいの重要性について形態素解析を行った。その結果、1,966文が確認され、総抽出語は12,766語であった。次に、異なり語や助詞、助動詞を除外し、5,549語を初期の分析対象語とした。続いて、強制抽出語を登録し5,469語を分析対象とした。

語の関連性から全体像を把握するため、共起ネットワークを作成した（図3：Jaccard.15以上）。その結果、「感じる」「自然」「戸外」など、「増える」「子」などの【外遊びの認識の深まり】、「体」「動かす」や「体力」「低下」、「外」「出る」、「大切」「思う」、「成長」「子ども」

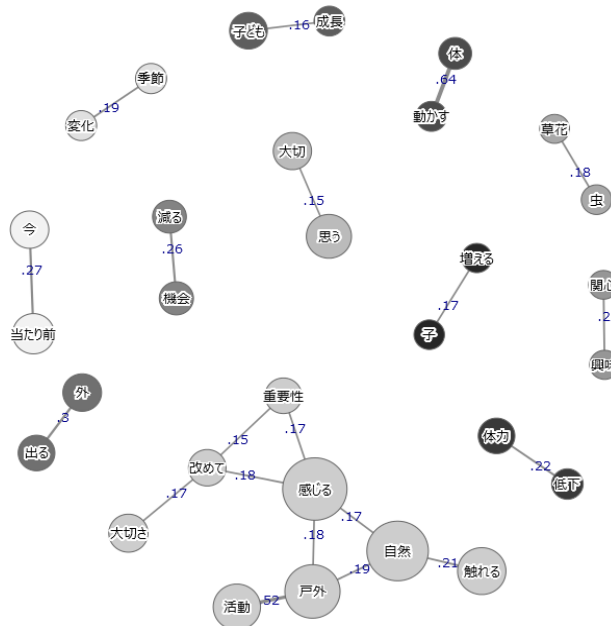


図3 戸外活動や自然とのふれあいの重要性の共起ネットワーク

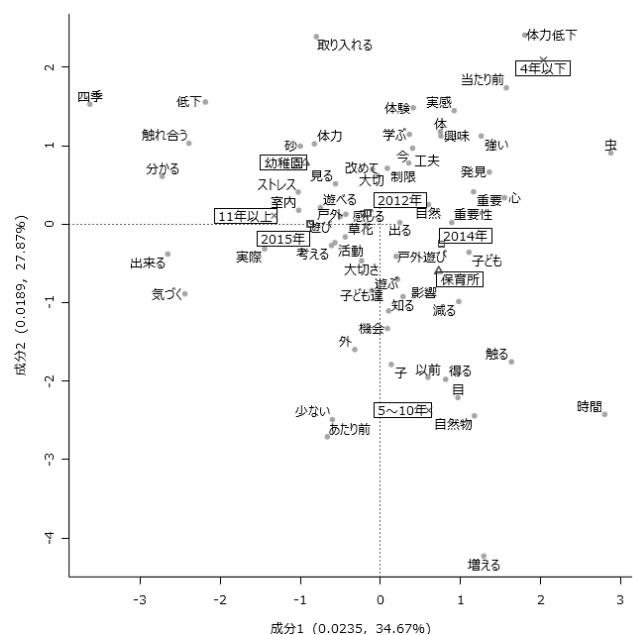


図4 戸外活動や自然とのふれあいの重要性の対応分析

も」の【運動】、「季節」「変化」や「草花」「虫」や「今」「当たり前」、「関心」「興味」など【自然】のまとまりが示された（主な自由記述は表 14 に示す）。このように放射能被害により、外遊びの制限や自然物を触れる機会の減少が大きく変化し、それによって、外遊びの認識が深くなっていったことが示された。

続いて、調査時期、園種、経験年数における語の使用傾向を明らかにするために、調査時期、園種、経験年数を外部変数に指定した対応分析を行った（11 語以上：図 4）。その結果、『4 年未満』『幼稚園』では表記は異なるものの、【運動】に関する語が隣接してプロットされた。ただし、戸外活動については、多くの外部変数が原点近くにプロットされ、「戸外」「感じる」「自然」「大切」など【外遊びの認識の深まり】に関する語が隣接しており、調査の時期や園種に関わらず、重要な変化として捉えていたことがうかがえた。

戸外活動や自然との触れ合いに関しては、量的調査を見ても非常に得点が高く、変化の大きい項目といえる。それを示すように、抽出文、抽出語も多く多様に変化していることが示された。

表14 戸外活動や自然との触れ合いの重要性の変化における共起ネットワークの主な自由記述

【認識の深まり】	戸外活動や自然とのふれあいの大切さは分かっていたが、一年間制限されたことで、実際に触れたり感じたりすることの重要性を改めて強く感じるようになった ^(15年、保育所、11年以上) 。のびのび体を動かしてあげることの大切さ。自然に関心のない子が増え、保育の中で意識して伝えることの大切さ ^(14年、保育所、5~10年) 。
【運動】	外気に触れ、十分に体を動かすことの大切さ ^(14年、幼稚園、11年以上) 。体力の低下。すぐに「疲れた」と言うようになった ^(12年、幼稚園、11年以上) 。戸外遊びは大切であるため、なかなか外に出られないことで体力が下がるのではないかと思う ^(12年、幼稚園、11年以上) 。子どもの成長や体力への影響 ^(14年、幼稚園、4年以下) 。
【自然】	季節の変化、自然とのふれあいが日常、当たり前のようにできなくなり、改めて大切さを感じた ^(14年、保育所、4年未満) 。外で草や虫に触れる事が出来なくなり、改めて自然に触れられないつまらなさを感じた。雪に触れ冷たい、草花遊びが出来なく、自然を感じる事が出来ない ^(12年、幼稚園、4年以下) 。戸外遊び、自然とのふれあいが減ったため、安全に遊べる場所やふれあえる場に行く機会が増えた ^(12年、保育所、5~10年) 。花を触ったり虫を捕まえたりなどの体験ができなくなり、興味関心があまり持てなくなった ^(14年、保育所、4年以下) 。

(5) 保育所や幼稚園の社会における役割

保育所や幼稚園の社会における役割の変化について形態素解析を行った。その結果、287 文が確認され、総抽出語は 4,750 語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、2,012 語を抽出した。続いて、強制抽出語として登録し 2,012 語を最終的な分析対象とした。

語の関連性から全体像を把握するため、共起ネットワークを作成した（図 5：Jaccard. 15 以上）。その結果、「子ども」「保護者」「思う」「子ども達」「保育所」「育てる」や「不安」「場」「子育て」、「情報」「提供」の【保護者支援の重要性】、「安心」「安全」「場所」や「役割」「大きい」「社会」などの【安全な場所の提供】、「感じる」「大切さ」の【社会コミュニティ】、「環境」「遊び」や「考える」「震災」の【発達への責任】、「命」「預かる」「守る」といった【命への責任】のまとまりが確認された（主な自由記述は表 15 に示す）。困難な状況において、不安を抱える保護者への支援や安全を守る意識が高まったと考えられる。

続いて、調査時期、園種、経験年数における語の使用傾向を明らかにするために、調査時期、園種、経験年数を外部変数に指定した対応分析を行った（5 語以上：図 6）。その結果、『保育所』は「保育所」「家庭」「安全」「安心」といった【保護者支援の重要性】や【安全な場所の提供】に関わる語が隣接しており、子どもが安心して過ごせるように配慮しつつ、保護者の支援への意識が高まったと考えられる。また、『幼稚園』は、「預かる」「子ど

も達」「命」といった【命への責任】に関する語が隣接しており、子どものへの意識が高まったことが示された。

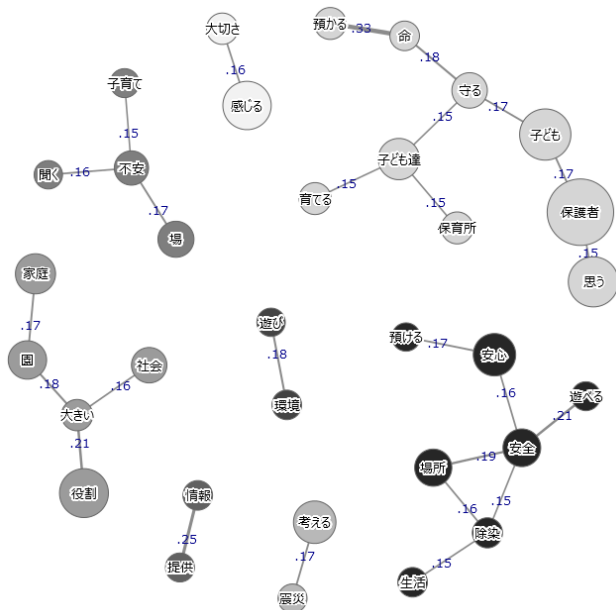


図5 保育所や幼稚園の社会における価値の共起ネットワーク

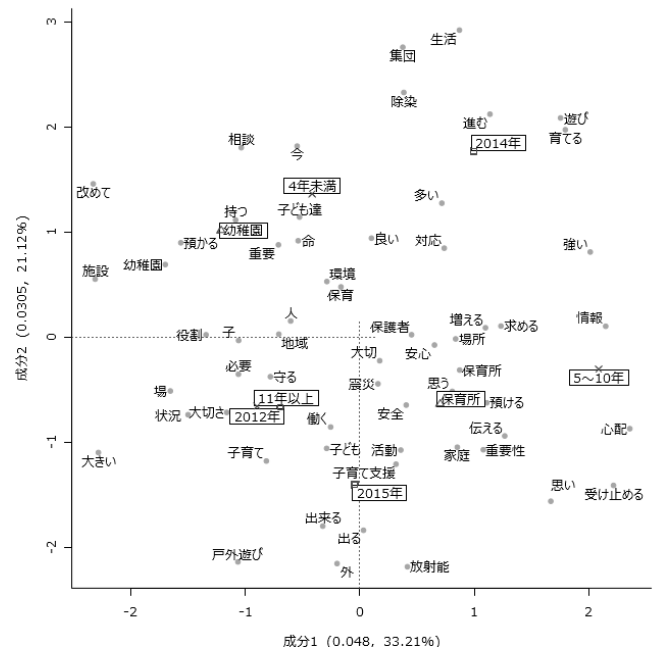


図6 保育所や幼稚園の社会における価値の対応分析

表15 保育所や幼稚園の社会における価値の変化における共起ネットワークの主な自由記述

【保護者支援の重要性】	保育における子どもの保育だけでなく、家庭での過ごし方、保護者の相談に乗る等も大切であると思う(12年、保育所、4歳以下)。家庭では経験できないことができる場、保護者の子育てへの不安に寄り添い(12年、保育所、11年以上)。家庭で不足しがちな部分を補ったり、情報を提供したり社会との仲介役を果たしている(14年、保育所、5~10年)。
【安全な場所の提供】	教育だけでなく除染が進むにつれ、線量の低い安心で安全な場所、という役割も持つようになったのではない(12年、幼稚園、4年未満)。社会の中で子ども達を守るべきなので、保育の役割も大きい(12年、幼稚園、4年未満)。
【社会コミュニティ】	地域に開かれた場所としての位置づけとして、コミュニティの大切さを感じた(12年、幼稚園、4年以下)。
【発達への責任】	震災で外に出られなくなり、今まで以上に子ども達の心身の発達を考えた保育(15年、保育所、11年以上)。室内でも全身を使った遊びが出来るよう環境を整える機会が増えた(15年、幼稚園、5~10年)。
【命への責任】	地震があったとき、預かっている子ども達の命を守るのは自分なんだと責任感を強く感じるようになった(12年、保育所、4歳以下)。

(6)食材や飲料水への関心

食材や飲料水への関心の変化について形態素解析を行った。その結果、669 文が確認され、総抽出語は 9,190 語であった。次に異なり語や助詞、助動詞を除外し 3,836 語を初期の分析対象語とした。続いて、強制抽出語として登録し、3,785 語を最終的な分析対象語とした。

語の関連性から全体像を把握するため、共起ネットワークを作成した(図7:Jaccard.13以上)。その結果、「安全」「考える」「放射能」などや「子ども達」「口」「入る」などの【食の安全性】、「水」「使用」「県外」や「水道水」「飲む」、「気」「産地」などの【産地・水】といったまとまりが示された(主な自由記述は表16)。放射能災害により、内部被曝への恐怖から、水や食材に関する意識が高まり、産地へより関心が向くようになったと考えられる。

続いて、調査時期、園種、経験年数における語の使用傾向を明らかにするために、調査時期、園種、経験年数を外部変数に指定した対応分析を行った(10語以上:図8)。その結

果、共起ネットワークでまとまりが見られた語が散らばってプロットされた。それ以外では、『2012年』は、「食べる」「飲料水」「今」といった直接口にするものに関連した語が、『2014年』は、「増える」「福島」「使う」といった産地に関する語が、『2015年』は、「健康」「意識」「以前」といった広い視点からの語がプロットされた。

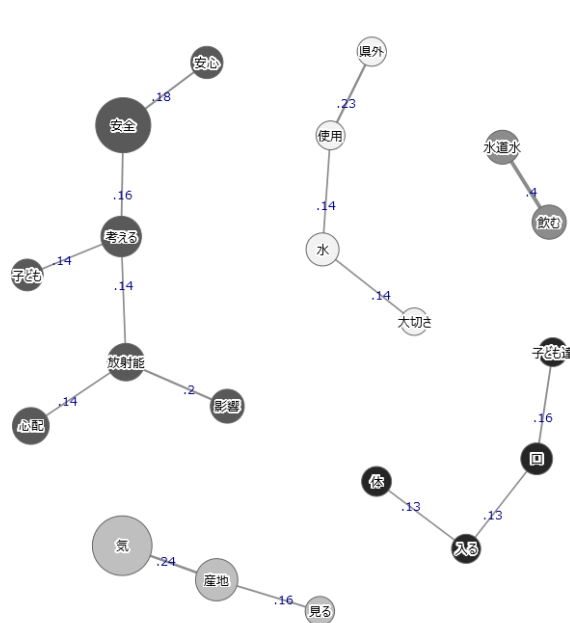


図7 食材や飲料水への関心の共起ネットワーク

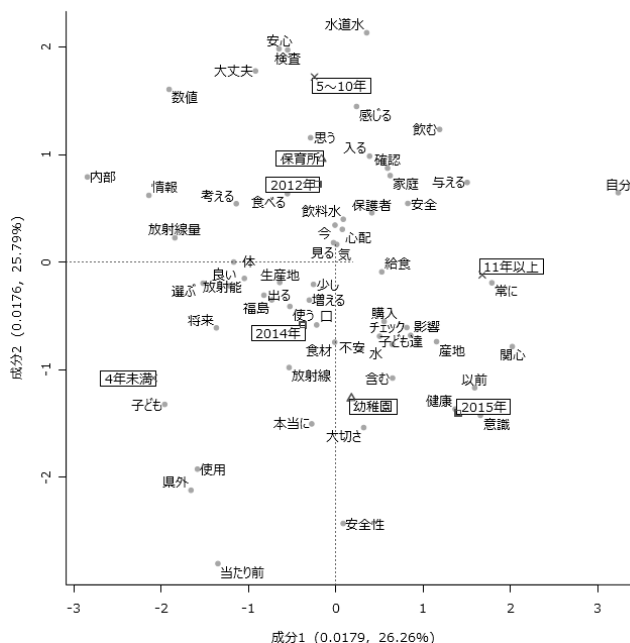


図8 食材や飲料水への関心の対応分析

表16 食材や飲料水への関心の変化における共起ネットワークの主な自由記述

【食の安全】	放射能の影響で食べても安全なのかと考えるようになった(15年、保育所、5~10歳)。子ども達の口に入るものに関しての安全性を考えて与えるように変化した(12年、幼稚園、11年以上)。
【産地・水】	放射線量を気にして乳児はミネラルウォーターを使ってミルクや離乳食を作ったり、野菜・魚も県外産を使用している(12年、保育所、4歳以下)。産地を見るようになった。水道水をなるべく飲まなくなった(12年、幼稚園、11年以上)。今まで全く気にしなかったが、産地や検査結果を見るようになった(12年、保育所、4年以下)。

(7)保育における環境設定の仕方

保育における環境設定について形態素解析を行った。その結果、546文が確認され、総抽出語は8,704語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、3,971語を初期の分析対象語とした。続いて、強制抽出語を登録し3,854語を最終的な分析対象とした。

語の関連性から全体像を把握するため、共起ネットワークを作成した(図9:Jaccard.15以上)。その結果、「室内」「工夫」「活動」などや「遊び」「運動」「取り入れる」など、「体」「動かす」「十分」など、「戸外遊び」「できる」、「室内遊び」「充実」、「感じる」「季節」など、「広い」、「スペース」など、すべて【室内の活動の工夫】に関わる内容であることが示された(主な自由記述は表17)。

具体的には、「体力に関わる工夫」「季節を感じるための工夫」「自然物や生き物に触れる工夫」が行われていた。また、工夫によって、手ごたえを感じている記述も見られたが、「戸外遊びに勝るものはない」といった記述もあり、戸外遊びの重要性を改めて感じたこともうかがえた。

以上)。その結果、「協力」「職員同士」などや「子ども達」「安全」などの【更なる連携】のまとめり、「感じる」「大切さ」などや、「今」「意識」、「避難」「災害時」、「大切」「思う」の【再認識】のまとめり、「対応」「保護者」や「以前」「増える」、「話し合い」「多い」などの【連携の効果】のまとめりに関わる内容であることが示された。震災という困難な環境を経て、職員協力の重要性が再認識され、その重要度が増したことが示された（主な自由記述は表 20）。永井⁽²⁾の報告においても、「職員間でのどもの共通理解」や「会議時間」などが、震災前に比べ増加したことが示されており、更なる連携が進んでいると考えられる。

続いて、調査時期、園種、経験年数における語の使用傾向を明らかにするために、調査時期、園種、経験年数を外部変数に指定した対応分析を行った（7語以上：図 16）。その結果、『保育所』は、「改めて」「職員同士」といった【再認識】に関する語が付置され、保育所では年齢についての重要性を改めて感じたことが示された。

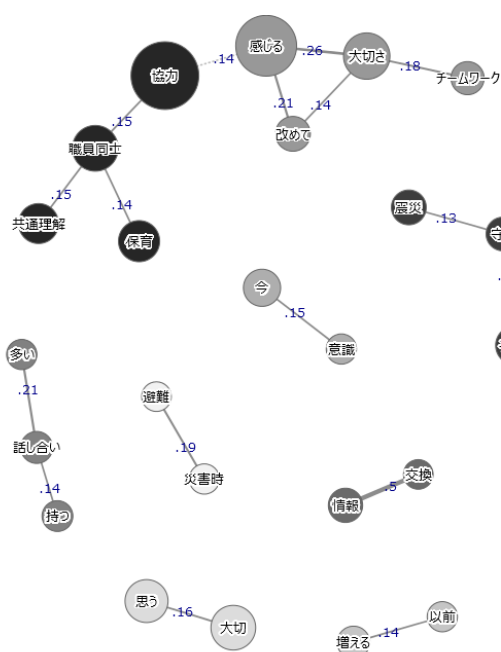


図 15 職員の協力関係の重要さの共起ネットワーク

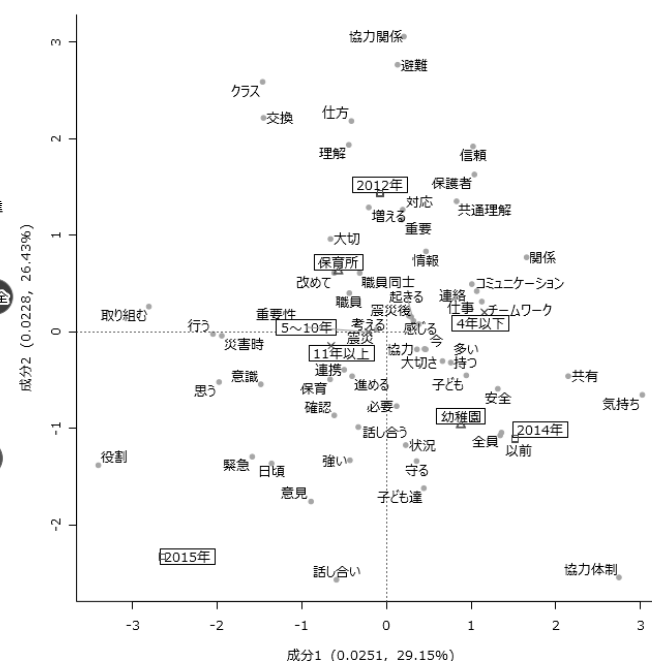


図 16 職員の協力関係の重要さの対応分析

表20 職員の協力関係の重要性における共起ネットワークの主な自由記述

【更なる連携】	職員同士の共通理解、震災に対する知識や考えをきちんと話し合い、今における状況で子ども達にとって何が必要かを考え、震災前より更に協力していくことが大切(14年、保育所、5~10年)。幼い子ども達を安全に守る為により一層の協力態勢が重要だと感じている(12年、幼稚園、4年以下)。
【再認識】	職員同士でしっかり話し合い、同じ気持ちで保育していく大切さを改めて感じた(12年、幼稚園、4年以下)。何もかも今まで通りとは行かないので、職員の意識をまとめ、方向性を同じくすることがとても大切と考えるようになった(14年、保育所、4年以下)。災害時の避難の仕方、保護者への連絡の仕方など全職員で再認識した(12年、保育所、11年以上)。危機管理等、共通した認識が大切だと思う(15年、保育所、5~10年)。
【連携の効果】	共通意識をもって保育や保護者対応を行うことで信頼関係ができる(14年、保育所、5~10年)。少しの事で動揺したり、落ち着かなくなる様な子が以前より増え、個々により違う対応法を職員全体で理解し、安心して登園出来る様になった(12年、幼稚園、11年以上)。話し合いをより多く持つようになった(15年、保育所、4年以下)。

(11)保育の計画性や反省の重要性

保育の計画性や反省の重要性の変化について形態素解析を行った。その結果、228 文が確認され、総抽出語は 4, 186 語であった。次に、異なり語や助詞、助動詞を除外し、1, 827

(12)大人の精神状態や関わりの子どもへの影響

大人の精神状態や関わりの子どもへの影響について形態素解析を行い、345 文が確認され、総抽出語は 6,002 語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、2,563 語を初期の分析対象語とした。続いて、強制抽出語として登録し、2,572 語を分析対象語とした。

語の関連性から全体像を把握するため、共起ネットワークを作成した(図 19: Jaccard, 15 以上)。その結果、「子ども」「不安」「大人」などや「影響」「保護者」「大きい」、「環境」「変化」「抱える」の【大人の影響力】のまとまり、「状態」「精神」や「口」「聞く」の【親援の重要性】のまとまり、「落ち着く」「行動」の【自身の安定】のまとまりがあることが示された(主な自由記述は表 22)。大人の影響として、親の影響の強さを感じると共に、親への支援の重要性を強く感じていることがうかがえた。また、保育者自身の精神状態の安定の必要性を感じていることも示された。

続いて、調査時期、園種、経験年数における語の使用傾向を明らかにするために、調査時期、園種、経験年数を外部変数に指定した対応分析を行った(6 語以上: 図 20)。その結果、「不安」「子ども」「感じる」「ストレス」と【大人の影響力】に関する項目が原点付近にプロットされ、調査時期や園種、経験年数に関わらず、共通の認識を持っていることが示された。

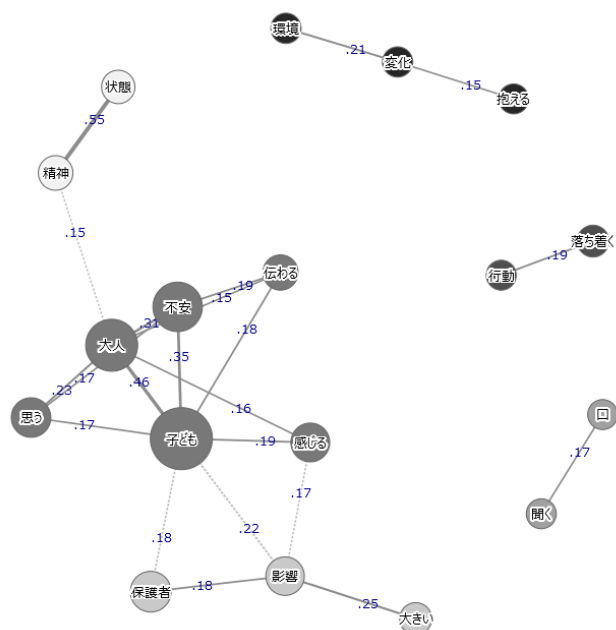


図 19 大人の精神状態や関わりの影響の共起ネットワーク

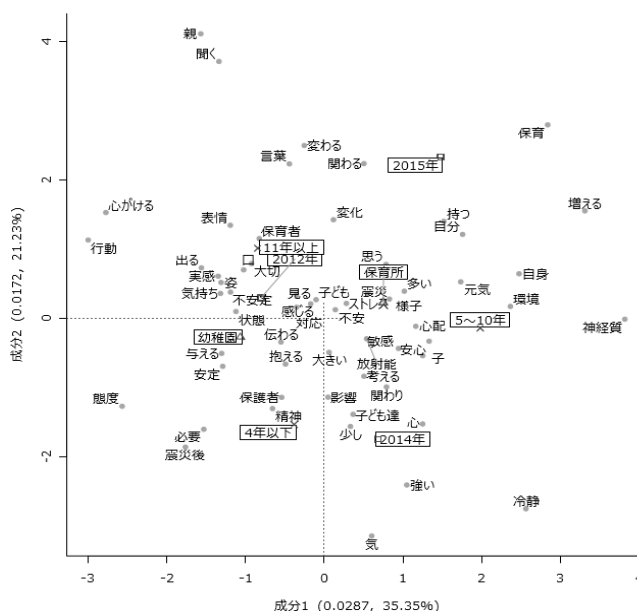


図 20 大人の精神状態や関わりの影響の対応分析

表22 大人の精神状態や関わりの子どもへの影響における共起ネットワークの主な自由記述

【大人の影響力】	放射能などに対して不安を抱いたりすることで、大人の精神状態が子どもに伝わってしまうことがあるように思う(12年、幼稚園、11年以上)。保護者が気にする方はその子どもに伝える言動があるので大人の影響力は大きいと思った(14年、保育所、5~10年)。環境の変化によるストレスを抱えた大人も増え、子どももその影響はかなり受けていると思う(15年、保育所、11年以上)。
【親支援の重要性】	大人の精神状態によって幼児の感じる不安感もあるので、大人が安心させられるような関わりが大切だと思う(12年、幼稚園、4年以下)。保護者の心配が、子どもの口から聞かれるようになった(12年、保育所、11年以上)。
【自身の安定】	大人の不安な気持ちや行動は子どもに不安を与えるので、落ち着いて子どもに安心感を与える(15年、幼稚園、11年以上)。

(13)子どもの内面理解の重要性

子どもの内面理解の重要性の変化について形態素解析を行った。その結果、235 文が確認され、総抽出語は 4,178 語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、1,820 語を初期の分析対象語とした。次に、強制抽出語を登録し、1,819 語を最終的な分析対象語とした。

語の関連性から全体像を把握するため、共起ネットワークを作成した(図 21:Jaccard.13 以上)。その結果、「子ども」「理解」などや「心」「ケア」、「関わり」「安心」、「表情」「読み取り」の【内面理解の重要性】のまとまり、「言葉」「表現」などや「目」「見える」などの【寄り添い】のまとまり、「外」「増える」の【理解の難しさ】のまとまりがあることが示された(主な自由記述は表 23)。自由記述からは、震災後子どもの不安やストレスが高まったことが推察されるものが多く、内面理解や、寄り添いの重要性が高まったと考えられる。一方で、重要さを感じつつもその難しさに苦慮した様子も見て取れた。

続いて、調査時期、園種、経験年数における語の使用傾向を明らかにするために、調査時期、園種、経験年数を外部変数に指定した対応分析を行った(7 語以上:図 22)。その結果、共起ネットワークでまとまりが見られた語は原点付近プロットされた。また、調査時期において、『2012 年』の付近には、「地震」「震災」といった語が付置され、地震への不安にたいして安心感を与えることの必要性を感じていたと推測される。

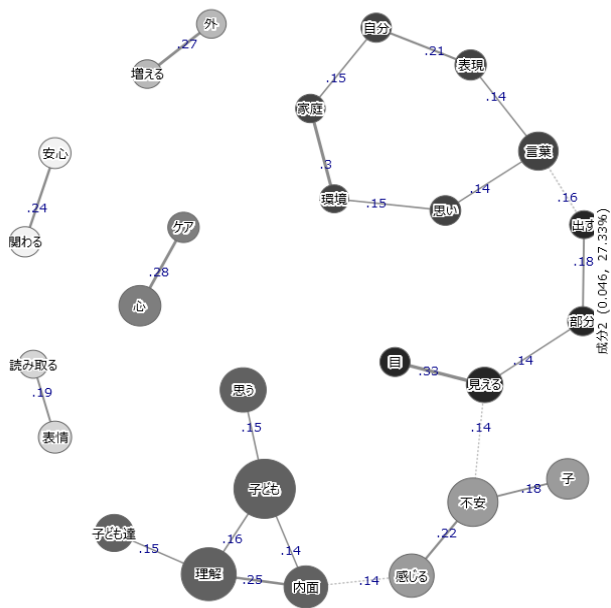


図 21 子どもの内面理解の重要性の共起ネットワーク

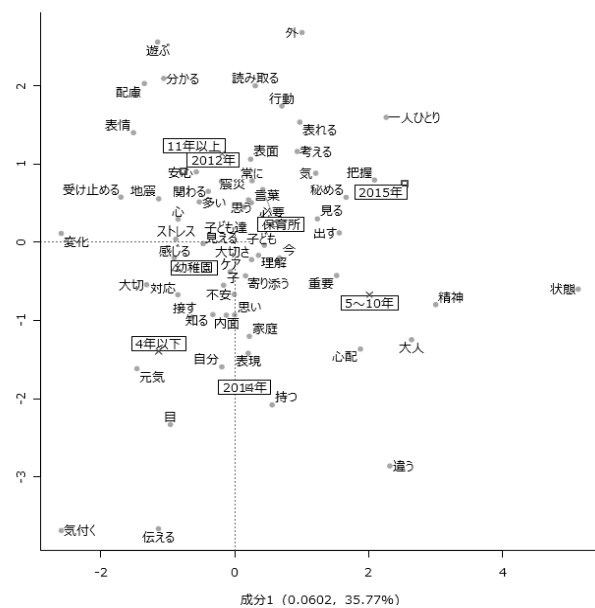


図 22 子どもの内面理解の重要性の対応分析

表23 子どもの内面理解の重要性の影響における共起ネットワークの主な自由記述

【内面理解の重要性】	子ども1人ひとりの内面を理解し関わることで子ども達も安心してすごせるようになると思う。家庭で自分を出せない子どもが増えてきている気がする(14年、幼稚園、5~10年)。子どもによって不安を感じている子もいて、一人一人の状況を捉え、適切な対応をし、安定して生活できるよう理解しようと努めた(14年、保育所、4年以下)。普段の生活ではいつも通りにしていても、家での様子が違ったり、心に秘めている思いがあるのに言えなかったりする子が、内面理解や心のケアが大切だと思う(14年、保育所、5~10年)。震災直後、地震に過敏になっている子ども達に関わり、「大丈夫」と言うだけでなく、気持ちに共感してあげることで、子ども達が安心してようだった(12年、幼稚園、11年以上)。以前から子どもの気持ちや表情などを気にしてはいたが、さらに考えて読み取っていないと思うようになった(12年、保育所、11年以上)。
【寄り添い】	スキンシップや言葉かけなどのコミュニケーションをはかって、子どもの思いを内に秘めず、表現できる環境を作る必要があると思う(12年、幼稚園、11年以上)。目で見えない秘めた部分に寄り添い子どもに関わりたいと考える(15年、保育所、5~10年)。
【理解の難しさ】	見える面と見えない面(内面)の違いがあることや、外に出せない思いがある子が(うまく言葉で)増えているように感じているから(12年、保育所、11年以上)。

(14)子どもからの要求

子どもからの要求について形態素解析（文章や単語を切り分ける処理）を行った。その結果、145文が確認され、総抽出語は2,344語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、976語を初期の分析対象語とした。続いて、表12を強制抽出語として登録し、再度形態素解析を再度行い、968語を最終的な分析対象語とした。

語の関連性から全体像を把握するため、共起ネットワークを作成した（図23: Jaccard, 15以上）。その結果、「外」「言う」「今」などや「体」「遊び」「動かす」、「要求」「受け入れ」の【外遊びの要求】のまとめり、「保護者」「不安」「求める」などや「甘え」「増える」、「自分」「見る」の【安心感】のまとめりが示された（主な自由記述は表24）。外遊びが制限されることで、外遊びの要求が増えたことが示唆された。ただし、安全面の問題から外遊びを自由に行うことが出来なかった頃から、室内環境を充実させることやスキンシップを増やすことなどを通じて、安心感を与える様な取り組みを行っていた。

続いて、調査時期、園種、経験年数における語の使用傾向を明らかにするために、調査時期、園種、経験年数を外部変数に指定した対応分析を行った（5語以上: 図24）。その結果、『保育所』の付近には、「以前」「外」「今」といった【外遊びの要求】に関する語がプロットされた。また、『幼稚園』では、「子ども」「甘え」といった【安心感】に関する語が付置された。保育所は、活動時間が長いため、外遊びに関する要求が多かったと考えられる。また、幼稚園においては、甘えなど、不安な気持ちの表出が増加したと考えられる。

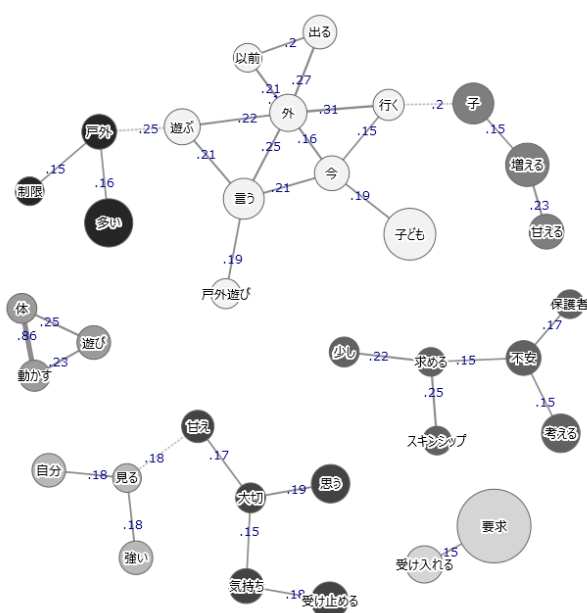


図23 子どもからの要求の共起ネットワーク

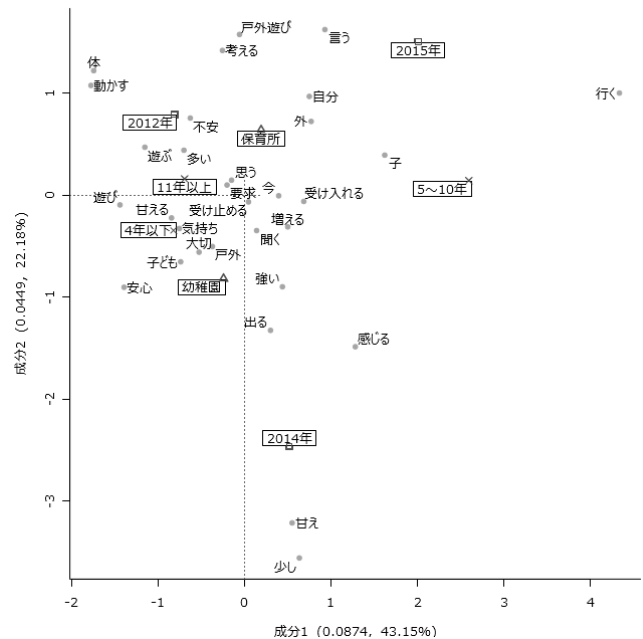


図24 子どもからの要求の共起ネットワーク

表24 子どもからの要求における共起ネットワークの主な自由記述

【外遊びの要求】	以前は「外で遊びたい!!!」と言っていたのに今は誰も言わない(15年、保育所、4年以下)。子どもから体を動かす遊びがしたいという話が出たときは、広いスペースを作ってなるべく対応してあげられるようにしている(12年、保育所、11年以上)。戸外活動などで我慢しなくてはならないことが多いため、遊びの中での要求はできるだけ受け入れたいと思った(12年、幼稚園、11年以上)。
【安心感】	保護者の不安等(放射線量を考えての子どもの将来、他)による、子どもの保育者に対する安心を求める大きさ。今まで以上に保育者が、子ども(保護者も含めて)の安心できる存在になる必要がある(12年、幼稚園、11年以上)。ストレスから来る甘えもあると思ひ、より気持ちを大切にしたいと考えている(14年、幼稚園、11年以上)。甘えが強くなったように感じる。”自分を見て”という想いが強い(14年、幼稚園、5~10年)。少しのことでトラブルが多くなり、戸外へ出る機会も減り、いろんな面で制限があるためかスキンシップを求める子が多くなった(14年、幼稚園、4年以下)。甘える子どもや、やってやってと言うことが増えた(12年、保育所、11年以上)。

(15)子どもの育つ力

保育の使命感・保育観の変化について形態素解析（文章や単語を切り分ける処理）を行った。その結果、202文が確認され、総抽出語は3,602語であった。その後、異なり語や助詞、助動詞を除外し、1,535語を初期の分析対象語とした。続いて、表12を強制抽出語として登録し、再度形態素解析を再度行い、1,521語を最終的な分析対象語とした。

語の関連性から全体像を把握するため、共起ネットワークを作成した（図25: Jaccard, 15以上）。その結果、「体力」「戸外」「遊び」など【不安】のまとまり、「子ども」「育つ」「環境」などや「少ない」「意欲」など、「制限」「増える」の【環境の大切さ】のまとまり、「環境」「子ども達」「力」などや「大きい」「心」、「姿」「見て」、「生きる」「育てる」などの【可能性】のまとまりが示された（主な自由記述は表25）。

続いて、調査時期、園種、経験年数における語の使用傾向を明らかにするために、調査時期、園種、経験年数を外部変数に指定した対応分析を行った（5語以上: 図26）。その結果、多くの語が原点付近にプロットされた。その他、『保育所』『5~10年』は「体力」「戸外」といった【不安】に関する語が付置された。

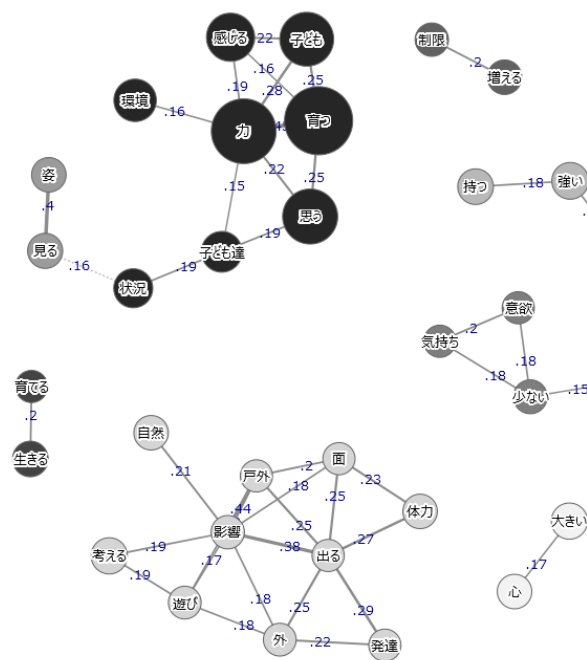


図25 子どもの育つ力の共起ネットワーク

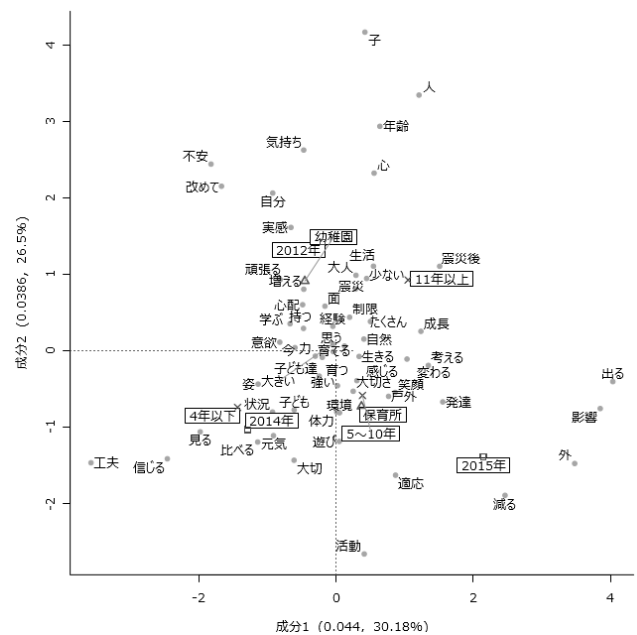


図26 子どもの育つ力の対応分析

表25 子どもの育つ力の影響における共起ネットワークの主な自由記述

【不安】	例えば、体力面での成長に不安を感じます。本来当たり前だった戸外での遊びなども減り、色々な面での発育、成長に影響が出ないか…考えてしまいます(12年、幼稚園、11年以上)。
【環境の大切さ】	子どもが育つためには環境や周囲の関わりも大切で、それがあってこそ子どもが持つ力が発揮されるのだと思った(14年、幼稚園、4年以下)。戸外遊びも少ないと、運動能力も運動への意欲も少なくなると思った(12年、保育所、11年以上)。当たり前に触れていたものに触れられなくなる等、環境が制限されるようになり、子どもの興味や関心が薄れてしまうのではないかと感じるが増えた(15年、幼稚園、4年以下)。
【可能性】	大変な環境の中、子ども達の育つ力を信じて応援していこうと強く思うようになった(14年、保育所、4年以下)。(年齢の小さい子)教えなくても自分達で学ぶことがある。震災後は特に話を聞く時静かにしたり、すぐ保育者の周りに集まれるようになった。(年齢の大きい子)大きい年齢の子は、優しい言葉、人を思いやる心がすごく育つように感じる(12年、幼稚園、11年以上)。経験不足を心配していたが、いざやってみるとあつという間に様々なことをマスターしていく姿を見て、大丈夫!と思った(12年、保育所、4年以下)。今まで以上に生きる力を育てたい。育つ力を信じたいと思うようになった(2回、幼稚園、4年以下)。

Ⅲ まとめ

ここでは、本章の内容と、関東地区との比較を行った調査報告⁽¹⁾の結果をもとに、3回の保育者調査を振り返る。

1. 保育環境や子どもの様子の改善と未だに続く制限

保護者を対象とした調査報告⁽⁸⁾⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾においても、園長を対象とした調査報告⁽²⁾においても子育て環境や保育の環境は徐々に改善していることが示されている。その要因として、除染の進行があるだろう。環境省の郡山市の除染状況報告によると、2011年9月～2012年7月までは、公共施設の除染が7割程度しか除染が進んでいなかったが、2012年8～9月の間に数値が大幅に上昇し、除染計画地域の9割以上の施設で除染が完了したことが示されている⁽¹¹⁾。そしてその後、住宅の除染も進んでいった経過も公表されている。このような環境の変化により、子育て環境は大きく変化したと考えられる。その中で、何が改善し、何が未だに問題となっているのかを示していく。

(1)保育環境の変化

まず挙げられるのが、戸外遊びなどの活動である。音山⁽¹⁾の調査では、震災後1年において、『遊びの中での十分な運動』や『自然から感じとる音、色、形、手触りなどの経験』といった外遊びに関する経験が劣悪化したことが示されている。今回の報告では、「遊びの中での十分な運動」は年々増加し、「戸外で遊べないことでの子どもたちへのストレス」は年々減少傾向にあるなど、環境の改善が示された。この変化は、先に挙げた除染の進行が影響していると考えられる。

ただし、回答された得点を見ると、「遊びの中での十分な運動」に関しては、2.6程度（幼:2.75、保:2.55）と得点が低く、未だに十分な外遊びが出来ていないと認識していることが示されている。本報告書第1章の報告においても、徐々に外遊びの制限が緩和されていることが示されているものの、2015年の段階でも、制限を加えている園があるなど、震災前と比べると外遊びは制限されており、十分な改善されたとはいえない。

(2)子どもの活動について

子どもの活動については、『甘えたり、依存的な活動』や『攻撃的な行動』は徐々に減少し、子どもの行動は、徐々に震災前の状況に戻りつつある。しかしながら、心配事について尋ねたところ、『子どもの情緒』や『体力』『健康』など子どもの将来に関する項目では、未だに得点が高いことが示されている。田中⁽⁶⁾は福島県の保育者の意識として「子どもが適応しているのか我慢しているのかもつかみにくい状況の中で、どうすればよりよい保育になるのかを模索し続けなければならない」と述べており、実際の子どもの行動は落ち着きを見せていても、それらの行動が将来的にどのような問題を生むのかを模索し続けなければいけない。そのような不安から、子どもの将来に不安を抱えているのではないだろうか。

先に挙げたように様々な調査において保育環境や子どもの行動は、完全に回復したわけではないが、徐々に改善していることが示された。その中で、『保育者の指示を待つ』『保育者のいうことをよく守る』といった子どもの受動的な態度は、震災後（2012年調査）に増加し、その状態が継続していることが示されている。加藤⁽³⁾の報告でも示される様に、

通園している子どもが生まれた時は、震災後の高放射線量の時期であり、外遊びの制限を受けていた。また、調査の際にも外遊びの制限等も多少は残っていることから、大人の指示を忠実に守ることが身に付いていると考えられる。

2. 保育者としての在り方

音山⁽¹⁾の調査において、福島保育者は、関東保育者に比べ、負担感や不安、自信喪失などの『ネガティブな感情』、自らの有能感や周りの人に守られていたという感じといった『ポジティブな感情』が共に高いことが示された。

今回の報告では、『ネガティブ感情（自分の力不足を感じて、イライラすることが…、自分が疲れていると思うことが…）』に関する項目は、調査ごとに変化がないことが示された。すなわち、先に挙げたように外遊びの時間の増加や心配事の減少など徐々に保育環境は改善されているが、保育者の心理に着目すると、震災後1年の過酷な状況において、感じていたネガティブな感情が、未だ解消されておらず、厳しい精神状態の中で保育していることが示されたことになる。

保育者としての倫理綱領では、「子どもの最善の利益の尊重」、「子どもの発達保障」などが採択されている⁽¹¹⁾。この様に保育者には、子どものことを第一に考え、子どもの発達を導くことが求められている。しかし、放射能は、体への悪影響が出るか出ないかもわからず、出るとすればそれがいつなのか、どのくらいの線量が影響を及ぼすのかもわからない。この様な多くの不確定要素に不安を抱えながら保育をしている状態は、子どものことをどれだけ考えても、答えにはたどり着くことが出来ない。このことから、慢性的な不安に苛まれると考えられる。

また、ポジティブな感情については、「周りの人に守られていると思うことが…」「保育者で良かったと思うことが…」「自分が成長出来ていると感じることが…」といった充実・サポート感に関する項目について、2014年調査は、2012年調査に比べ得点が高く、ポジティブな感情が増加したことが考えられる。その理由としては、外遊びなどが十分に行えるようになったり、子どもの成長が顕著に見えるようになったりしたことから、充実感が高まったと考えられる。

3. 保育の変化

保育の変化においては、2012年調査は2014年、2015年調査に比べ得点が高く、多くの変化が示された。具体的には、放射能対策を中心とした環境構成の変化や外遊びの意味を考えていたことが示された。また、保育者としての使命感や戸外の重要性や社会的役割については、得点が低下しているものの、震災前に比べると大きく変化していることが示された。

具体的な変化を自由記述から検討したところ、子どもの命に関する意識の高まりや、今まで日常に当たり前にあった保育環境を再度検討していることが示された。震災直後、「震災・事故以前は日常の流れの中でつい埋もれてしまいがちだった保育のねらいや内容への意識や見方が、3.11を境に一旦崩れ去ったことで、一人ひとりの保育者が『自分の保育をどうするか』を強く意識するようになった」という保育者の声も示されているように⁽¹²⁾、震災後に保育の再構成を多くの園で行っていたことが見て取れた。ただし、この様な保育

の捉え直しは、多くの労力を使う上、制限が続く状況下では、出来ないことを再認識することにも繋がり、多くの負担となる。

さらに、子育ての多様化により、保育が取り組むべき課題は、年々増加傾向にある。これらの保育の変化と震災後の保育に取り組んでいる福島の保育者の心理的疲労が累積しており、継続した支援が必要であろう。

【本章調査の役割分担】

調査用紙の作成：関口はつ江・賀門康博・加藤孝士

配布・回収：郡山女子大学附属幼稚園

データ入力：永井知子（四国大学短期大学部）・四国大学短期大学部 学生

<引用文献>

- (1)『震災に生きる子どもと保育』、Ⅱ.放射能災害地域と関東圏の比較 1.園長(所長)、教諭・保育士対象調査、日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013) 音山若穂 p.168-196.
- (2)『放射能災害下の保育問題研究—平成25年・26年調査報告書—』、第5章 I.2014年、2015年調査 園長調査、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 永井知子 p.223-233.
- (3)『放射能災害下の保育問題研究—平成25年・26年調査報告書—』、第5章 II.4年間の園長調査を振り返って、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 加藤孝士 p.234-245.
- (4)子どもの心身を守るために必要なこと、発達「特集」震災後を生きる子どもIあらためて振り返る震災後の子どもの生活 ミネルヴァ書房 (2013) 野村和代・杉山登志郎 p.18-25.
- (5)保育者のストラテジーとしての感情労働—幼稚園の3歳児クラスの分析から—、幼年教育研究年報、(33) (2011) 中坪史典・金子嘉秀・中西さやか・富田雅子 p.5-13.
- (6)『震災に生きる子どもと保育』、I.協力園対象継続調査 4.保育者の振り返りと非日常からの保育からの学び、日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013) 田中三保子 p.162-167.
- (7)『社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して—』、樋口耕一 (2014) ナカニシヤ出版.
- (8)『震災に生きる子どもと保育』、I.協力園対象継続研究 2.福島市・郡山市の幼稚園保護者の意識に関する調査報告、日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013) 加藤孝士 p.93-125.
- (9)『放射能災害下の保育問題研究—平成25年・26年調査報告書—』、第4章 協力園保護者調査 I 協力園継続調査について、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 加藤孝士 p.203-209.
- (10)『放射能災害下の保育問題研究—平成25年・26年調査報告書—』、第4章 協力園保護者調査 II 2013、2014年、新入園児保護者調査、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 加藤孝士 p.210-221.

- (11) 『全国保育士会倫理要領』、(2003)全国保育士会 <http://www.z-hoikushikai.com/about/kouryou/indeex.html>
- (12) 『震災に生きる子どもと保育』、I 協力園対象継続研究 1. 調査協力園における保育の実態 日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013) 賀門康博 p.79-92.

第4章 保護者対象調査（2012年、2014年、2015年広域調査）

加藤 孝士

災害時における保育問題検討委員会・福島ワーキンググループ、及び放射能災害にかかる保育問題検討委員会・養育環境研究ワーキンググループでは、調査協力幼稚園の保護者を対象に、平成23（2011年）年7月、平成24（2012）年1月、平成25（2013）年1月、平成26（2014）年1月に調査を行い、震災後の子育て環境を示してきた⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾。ただし、調査協力幼稚園は、震災前から保育を行なうにあたって連携を行っていた園であり、保育方針などがある程度近いと考えられる。また、震災後の保育を語る上で、幼稚園、保育所といった園種の違いに着目する必要もある。

そこで、第3章でも挙げたように、平成24（2012）年1～3月に福島県伊達市、福島市、二本松市、本宮市、郡山市のすべての保育所、幼稚園の保護者を対象とした第1回広域調査の際に保護者を対象とした調査も行った（以下：2012年調査）。同時に、関東圏の保育所、幼稚園にも同様の調査し、関東との比較を通じて、保護者の生活の変化や生活の不安を明らかにした⁽⁴⁾。その結果、関東圏の保護者に比べ、放射能に関する不安を多く抱えており、更に、将来的に支援が継続するかといった不安を抱えたまま養育をしていることが示された。

その後、本委員会やワーキンググループメンバー、調査協力幼稚園の保育者との話し合いをもとに、広域調査を行い将来への不安を含めて、どのような意識で養育を行っているかを明らかにする必要性が示唆された。そこで平成26（2014）年2～3月（以下；2014年調査）、平成27（2015）年2～3月（以下；2015年調査）に2012年と同様の調査を行い、震災後、3年後、4年後に福島の保育がどのようになっているのかを記録してきた。

その中で永井⁽⁵⁾は、園長の調査をまとめ、外遊びの制限が緩和され、徐々に震災前の環境に近づいていることを示したが、保育者の労働環境は、未だに過酷な状態が続き、保育者への大きな負担のもとに保育が成り立っていることも示された。また、本報告書第3章では、保育者の頑張りが継続していることが示されたが、多くのストレスや悩みを抱えながら保育をしていることが示されている。

そこで本章では、福島県内の保護者の意識について、2012年、2014年、2015年の調査結果をもとに、園種による違いなどにも着目しつつ、意識の変化を報告する。

I 目的

- ①調査ごとの、保護者の認識の変化を明らかにする。
- ②園種ごとの認識の違いについて明らかにする。
- ③保護者ならではの不安を明らかにする。

II 方法

調査時期：平成24（2012）年2～3月、平成26（2014）年2～3月、平成27（2015）年2～3月

調査対象者：調査対象者は、幼稚園及び保育所の保護者であり、2012年は4,113名、2014

年は1,558名、2015年は1,736名である。

調査手続き：2012年調査は、伊達市、福島市、二本松市、本宮市、郡山市のすべての保育所、幼稚園に調査用紙を配布し回答を求めた。2014年、2015年調査は、2012年調査で回答のあった128園を対象に調査を行った。保護者用調査用紙は、園長、保育者調査用紙とともに同封し、調査依頼書と合わせて送付した。回答後は、同封した返信用レターパックにより回収を行った。

調査項目：質問紙は、フェイスシート（園環境、園種）に加え、以下の①～③で構成されており、それぞれに回答を求めた。①に関しては、3回に渡る調査を行った。

- ①前年と比較した子ども、子育ての変化：24項目で構成され、「減った（1点）」～「増えた（5点）」の5段階で回答を求めた。
- ②保育への考えや実践について：13項目で構成され、「そう考えない（1点）」～「そう考える（5点）」の5段階で回答を求めた。
- ③現在の心配事：13項目で構成され、「心配でない（1点）」～「心配（5点）」の5段階で回答を求めた。

分析には、SPSS for Windows ver.22.0を使用した。

Ⅲ 結果

2012年調査は229園に調査用紙を配布し、128園（56%）から回答が得られた。2014、2015年調査は、2012年調査において回答の得られた128園に調査用紙を配布し、それぞれ72園（56%）、79園（62%）から調査用紙が返送された。

1. 調査対象者

本調査の調査対象者を表1に示した。本調査は保護者を対象とした調査であり、2012年は4,113名、2014年は1,558名、2015年は1,736名から回答が得られた（2012年調査においては、関東地区の幼稚園・保育所にも調査を行ったが、本報告書では、福島県における意識の変化に注目するため、分析には使用しない）。

表1 調査時期ごとの調査対象者の所属園種、地域（名）

		地域					合計
		伊達市	福島市	二本松市	本宮市	郡山市	
2012年調査	幼稚園	124	562	185	117	736	1724
	保育所	66	584	132	170	1437	2389
2014年調査	幼稚園	95	175	148	123	264	805
	保育所	0	158	33	65	497	753
2015年調査	幼稚園	84	200	72	132	436	924
	保育所	0	168	63	23	558	812
合計		369	1847	633	630	3928	7407

2. 震災後の子育てや子どもの様子の変化

本調査では、保護者を対象に「震災後の子どもの行動や日常生活の変化」について前年と比較してどのように変化したのかを回答してもらった。質問項目数が21項目と多いため、21項目を対象に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い項目の分類を行った。ここでは、項目まとまりごとに一つずつの項目を対象に調査時期、園種ごとの変化を示す（本報告書では、各設問の比較を目的にしているため、因子分析の結果はここに掲載しない）。

(1)震災後の子どものポジティブな行動

保護者から見る子どものポジティブな行動の変化を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表2：F値の下段に多重比較の結果を示す）。

その結果、全ての項目に関して調査時期の主効果が認められた。その後の多重比較の結果、『自立的な言動(15<12<14)』『思いやり(15<12<14)』『園での出来事を話す回数(15<12<14)』『手伝い(15<12<14)』において、2015年の値が最も低く、2012年、2014年と得点が高くなることが確認され、2014年の増加が最も大きいことが示された。さらに、『活発な言動(15<14)』においても有意差が確認された。平均値を見ると、全ての項目において平均値が3を超えており、前年よりも増加している。これは、子どもの成長に伴い、これらの行動が増加したことが背景にあるだろう。その上で、2014年の急激な増加しており、ポジティブな行動がより増したことが示唆された。

園種では2つの項目で主効果が示され、『園での出来事を話す回数(幼>保)』において、幼稚園の得点が高く、『活発な言動(幼<保)』において保育所の得点が高いことが示された。幼稚園に通園する子どもは、家での活動が長く園のことを話すことも多かったと考えられる。

また、有意な交互作用は示されなかった。

表2 調査時期と園種ごとの子どものポジティブな行動(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=1706)	保育所 (n=2337)	幼稚園 (n=772)	保育所 (n=742)	幼稚園 (n=911)	保育所 (n=793)	調査時期	園種	交互作用
自立的な言動（自分のことは自分でする）	3.45 (0.80)	3.51 (0.79)	3.96 (0.68)	3.96 (0.67)	3.33 (0.58)	3.34 (0.60)	339.84*** 15<12<14	1.24	0.88
思いやり	3.56 (0.71)	3.52 (0.67)	3.85 (0.68)	3.81 (0.66)	3.37 (0.58)	3.37 (0.59)	200.26*** 15<12<14	2.70	0.32
園での出来事を話す回数	3.57 (0.86)	3.57 (0.80)	4.07 (0.78)	3.96 (0.81)	3.51 (0.75)	3.48 (0.71)	210.89*** 15<12<14	4.86* 幼>保	2.71
手伝い	3.44 (0.66)	3.47 (0.64)	3.73 (0.65)	3.73 (0.65)	3.35 (0.56)	3.38 (0.58)	146.22*** 15<12<14	1.31	0.39
活発な言動	3.19 (0.76)	3.30 (0.75)	3.79 (0.71)	3.84 (0.71)	3.23 (0.57)	3.26 (0.59)	389.18*** 15<14	12.36*** 幼<保	2.58

* $p<0.05$,*** $p<0.001$

(2)震災後のネガティブな行動

保護者から見る子どものネガティブな行動の変化を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表3：F値の下段に多重比較の結果を示す）。

その結果、調査時期の主効果が認められ、多重比較の結果、『情緒不安定な言動(12>15>14)』『わがままな言動(12>14>15)』において、2012年の得点が高く、ネガティブな言動が多くなっていることが確認された。また、『わがままな言動(幼<保)』において園種の主効果が確認され、保育所の得点が高いことが示された。

さらに、『情緒不安定な言動』で交互作用が認められたため、Bonferroniの単純主効果を検討したところ、2012年調査(幼>保)、2014年調査(幼<保)において園種の単純主効果が示された。ならびに、幼稚園において、全ての調査時期ごとに変化が(12>15>14)、保育所において、2012年調査とその後の調査時期に主効果が示された(12>14≒15)。

加藤⁽¹⁾⁽²⁾は、情緒不安定な言動が震災後の2011年の段階で増加し、2013年を機に、大きく低下していることを示している。ただし、本調査の結果では、2015年にわずかに上昇しており、情緒不安定な行動が多くなっていることが示された。

表3 調査時期と園種ごとの子どものネガティブな行動(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		調査時期	園種	F値 交互作用
	幼稚園 (n=1714)	保育所 (n=2361)	幼稚園 (n=772)	保育所 (n=742)	幼稚園 (n=906)	保育所 (n=788)			
情緒不安定な言動	3.39 (0.62)	3.33 (0.59)	2.97 (0.64)	3.05 (0.55)	3.06 (0.41)	3.09 (0.45)	277.82*** 12>15>14	1.19	10.78*** 12:幼>保, 14:幼<保 幼:12>15>14, 保:12>14≒15
わがままな言動	3.51 (0.71)	3.57 (0.67)	3.25 (0.81)	3.39 (0.75)	3.17 (0.49)	3.24 (0.58)	166.59*** 12>14>15	25.10*** 幼<保	1.93

***p<.001

(3)震災後の外部での活動

保護者から見る震災後の外部での活動の変化を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表4:F値の下段に多重比較の結果を示す)。

その結果、すべての項目で調査時期の主効果が認められ、多重比較の結果、『外遊びの時間(12<15<14)』『ご家族での近所への外出(12<15<14)』『友達と遊ぶ機会(12<15<14)』『放射能に関する発言(12>15>14)』『ご家族での遠方への外出(12>15>14)』において、有意差が確認された。

また園種では、『放射能に関する発言(幼>保)』『ご家族での遠方への外出(幼>保)』において主効果が確認され、いずれも幼稚園の得点が高いことが示された。

さらに、交互作用が認められた項目について、Bonferroniの単純主効果を検討した。その結果、『外遊びの時間』『放射能に関する発言』『ご家族での遠方への外出』では、2012年、2014年、2015年において園種の単純主効果が、『友達と遊ぶ機会』では、2012年、2014年において園種の単純主効果が示された。また、幼稚園・保育所共に、『外遊びの時間』『友達と遊ぶ機会』『放射能に関する発言』『ご家族での遠方への外出』においては、調査時期に単純主効果が示された。

この結果、2012年に外遊びや、近所との関係など近所への外出に関する活動が減少し、2014年には増加し、一方で、放射能に関する発言や遠方への外出は2012年に増加し、2014年には減少している。この様に、震災後1年で大きく変化した環境が、その後回復したことが示されている。ただし、『外遊び』に関しては、2015年に大きく減少しており、放射能被害が解消しているにもかかわらず、活動が減少しており、認識の変化が見て取れる。

また、ネガティブな言動は、幼稚園に多い。第3章において、震災後、子どもの様子には、大人の精神状態が強く影響しているとの認識が強くなっていることが示されている。そのため、家庭での活動が長い幼稚園の子どもに放射能に関する行動が増加したと考えられる。

表4 調査時期と園種ごとの外部での活動(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=1711)	保育所 (n=2333)	幼稚園 (n=766)	保育所 (n=737)	幼稚園 (n=900)	保育所 (n=783)	調査時期	園種	交互作用
外遊びの時間	1.14 (0.46)	1.20 (0.52)	3.25 (1.05)	3.11 (1.05)	2.32 (0.93)	2.39 (0.95)	4282.04*** 12<15<14	0.07	10.48*** 12,15:幼<保, 14:幼>保 幼,保:12<15<14
ご家族での近所への外出	2.06 (0.99)	2.07 (1.00)	3.24 (0.76)	3.27 (0.80)	2.86 (0.81)	2.95 (0.82)	1124.24*** 12<15<14	2.89	0.93
友達と遊ぶ機会	2.26 (1.03)	2.49 (0.91)	3.44 (0.91)	3.24 (0.78)	2.90 (0.70)	2.94 (0.64)	735.70*** 12<15<14	1.03	33.72*** 12,15:幼<保, 14:幼>保 幼,保:12<15<14
放射能に関する発言	4.38 (0.75)	4.01 (0.86)	2.79 (0.75)	2.90 (0.71)	3.17 (0.69)	3.09 (0.71)	2170.43*** 12>15>14	33.00*** 幼>保	58.32*** 12,15:幼<保, 14:幼>保 幼,保:12>15>14
ご家族での遠方への外出	3.57 (1.24)	3.38 (1.27)	3.03 (0.88)	3.15 (0.83)	3.37 (0.83)	3.26 (0.76)	71.08*** 12>15>14	4.71* 幼>保	10.95*** 12,15:幼>保, 14:幼<保 幼:12<15>14,保:12<14≒15

* $p<0.05$,** $p<0.01$

(4)震災後の近所との関わり

震災後の近所との関わりの変化を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表5:F値の下段に多重比較の結果を示す)。

その結果、調査時期の主効果が認められ、多重比較の結果、『近所の人との交流(12<15<14)』『他の保護者との付き合い(12<15<14)』において有意差が確認され、2014年に交流が増加したことが示された。また、園種では、『他の保護者との関わり(幼>保)』において幼稚園の得点が高いことが示された。

さらに、『他の保護者との関わり』で交互作用が認められたため、Bonferroniの単純主効果の検討を行ったところ、すべての調査時期において、園種の単純主効果が示され、幼稚園の得点が高くなった。園種においては、全ての調査時期の単純主効果が示され、幼稚園においては、調査時期の主効果と同様の関係が、保育所においては、2012年と2014年、2015年に有意差が認められた。

幼稚園は、仕事に従事していない保護者が多く、一般的に他の保護者との付き合いが多いと考えられる。そのため園種に差を生じさせてと考えられる。

表5 調査時期と園種ごとの近所との関わり(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=1714)	保育所 (n=2371)	幼稚園 (n=775)	保育所 (n=740)	幼稚園 (n=908)	保育所 (n=791)	調査時期	園種	交互作用
近所の人との交流	2.75 (0.87)	2.81 (0.77)	3.13 (0.60)	3.15 (0.57)	3.01 (0.64)	2.97 (0.59)	149.50*** 12<15<14	0.16	2.92
他の保護者との付き合い	3.06 (0.91)	2.99 (0.69)	3.48 (0.78)	3.19 (0.57)	3.23 (0.64)	3.11 (0.53)	105.83*** 12<15<14	74.21*** 幼>保	11.88*** 12,14,15:幼>保 幼:12<15<14,保:12<14≒15

*** $p<0.001$

(5) 震災後の近所との関わり

家族での関わりの変化を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表6：F値の下段に多重比較の結果を示す）。

その結果、調査時期の主効果が認められ、多重比較の結果、『家の中でご家族一緒に過ごす時間(12>15>14)』『ご家族の会話(12≒14>15)』『ご家族で食事をする回数(12>14≒15)』『お子様の将来についての会話(12>14>15)』において有意差が示されて、2012年に家族での交流が増加したことが示された。園種では、『お子様の将来についての会話(幼>保)』において幼稚園の得点が高いことが示された。また、有意な交互作用は示されなかった。

この結果、2012年に変化が大きく、震災後の家族関係が深まりを見せたことがうかがえた。その後、家族の結びつきの増加率は幾分低下しているが、平均値は3を超えており、家族での関わりが増加傾向は、続いていると考えられる。

表6 調査時期と園種ごとの家族での関わり(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=1710)	保育所 (n=2364)	幼稚園 (n=775)	保育所 (n=741)	幼稚園 (n=906)	保育所 (n=792)	調査時期	園種	交互作用
家の中でご家族一緒に過ごす時間	3.68 (0.91)	3.66 (0.91)	3.19 (0.67)	3.18 (0.68)	3.29 (0.64)	3.28 (0.63)	259.09*** 12>15>14	0.27	0.03
ご家族の会話	3.39 (0.71)	3.37 (0.71)	3.36 (0.69)	3.41 (0.69)	3.25 (0.61)	3.25 (0.59)	24.16*** 12≒14>15	0.23	1.53
ご家族で食事をする回数	3.13 (0.63)	3.13 (0.57)	3.09 (0.51)	3.07 (0.49)	3.08 (0.45)	3.10 (0.46)	6.39** 12>14≒15	0.04	0.58
お子様の将来についての会話	3.78 (0.80)	3.69 (0.77)	3.49 (0.65)	3.45 (0.61)	3.42 (0.62)	3.37 (0.59)	171.07*** 12>14>15	10.64** 幼>保	0.92

p<.01,*p<.001

(6) 震災後の家庭での活動

家庭での活動の変化を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表7：F値の下段に多重比較の結果を示す）。

その結果、すべての項目で調査時期の主効果が認められ、多重比較の結果、『テレビの視聴時間(12>15>14)』『ご家族でテレビを見る時間(12>15>14)』『睡眠時間(12<15)』において有意差が示された。また、園種では、『睡眠時間(幼>保)』において主効果が示され、幼稚園の得点が高いことが示された。

さらに、交互作用が認められた項目について、Bonferroniの単純主効果の検討をした。その結果、『テレビ視聴』では、2012年(幼>保)、2014年(幼<保)において園種の単純主効果が示された。また、『睡眠時間』では、全ての調査時期(幼>保)において園種の単純主効果が、幼稚園(12<14≒15)において調査時期に単純主効果が示された。

テレビの視聴に関しては、震災後急激に増加したことが指摘されていた⁽¹⁾。その後、2012年、2013年、2014年とテレビ視聴が減少していることが示されており⁽²⁾、2014年までの変化を見ると、本調査でも同様の結果が示された。ただし、本調査では、2015年の得点は、2014年に比べ得点が高く、再度テレビの視聴が増加していることが示された。

表7 調査時期と園種ごとの家庭での活動(標準偏差)

	2012年		2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=1711)	保育所 (n=2365)	幼稚園 (n=772)	保育所 (n=741)	幼稚園 (n=908)	保育所 (n=789)	調査時期	園種	交互作用
テレビの視聴時間	4.20 (0.82)	4.11 (0.83)	3.43 (0.84)	3.56 (0.81)	3.61 (0.74)	3.63 (0.72)	491.92*** 12>15>14	0.58	11.28*** 12:幼>保, 14:幼<保 幼:12>15>14, 保:12>14≒15
ご家族でテレビを見る時間	3.78 (0.79)	3.74 (0.77)	3.16 (0.63)	3.30 (0.63)	3.34 (0.60)	3.34 (0.60)	389.51*** 12>15>14	3.38	8.53***
睡眠時間	2.92 (0.51)	2.89 (0.54)	2.99 (0.53)	2.88 (0.54)	2.99 (0.37)	2.92 (0.42)	6.57** 12<15	29.90*** 幼>保	3.50* 12,14,15:幼>保 幼:12<14≒15

* $p<0.05$,** $p<0.01$,*** $p<0.001$

3. 震災後の子どもに関する心配事

2014年、2015年調査において、「子どもの心配事」について回答してもらった。24項目を対象に因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行い項目のまとまりごとに調査時期、園種ごとの変化を示す(本報告書では、各設問の比較を目的にしているため、因子分析の結果はここに掲載しない)。

(1)子どもの社会性について

子どもの社会性に関する心配を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表8:F値の下段に多重比較の結果を示す)。

その結果、『聞き分けが悪い(14>15)』『イライラして怒ったり、かんしゃくをおこす(14>15)』『おもちゃを独り占めする(14>15)』において調査時期の主効果が認められ、不安が低下していることが示された。また、『聞き分けが悪い(幼<保)』『じっとしていられない(幼<保)』『おもちゃを独り占めする(幼<保)』において園種の主効果が示され、保育所ほど不安が高いこと示された。このように、不安は徐々に低下していることが示されたが、全ての得点は低く、相対的に不安は低いことが示唆された。

表8 調査時期と園種ごとの社会性の不足(標準偏差)

	2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=777)	保育所 (n=743)	幼稚園 (n=917)	保育所 (n=794)	調査時期	園種	交互作用
聞き分けが悪い	2.48 (1.11)	2.63 (1.12)	2.41 (1.05)	2.55 (1.08)	3.92* 14>15	14.26*** 幼<保	0.02
イライラして怒ったり、かんしゃくをおこす	2.71 (1.19)	2.74 (1.20)	2.60 (1.17)	2.68 (1.18)	4.59* 14>15	1.84	0.34
じっとしていられない	2.45 (1.18)	2.58 (1.16)	2.38 (1.12)	2.58 (1.15)	0.75	16.79*** 幼<保	0.52
おもちゃなどを独り占めする	2.30 (1.05)	2.47 (1.03)	2.18 (0.97)	2.36 (1.02)	10.06** 14>15	23.56*** 幼<保	0.01
こだわりがある	2.39 (1.06)	2.41 (1.05)	2.31 (1.07)	2.37 (1.08)	2.24	1.23	0.24
学力	2.66 (1.13)	2.62 (1.12)	2.51 (1.12)	2.65 (1.15)	1.98	1.71	5.49* 15:幼<保 幼:14>15
すぐ泣く	2.37 (1.14)	2.36 (1.12)	2.31 (1.12)	2.39 (1.11)	0.19	0.82	1.33

* $p<0.05$,** $p<0.01$,*** $p<0.001$

さらに、交互作用が認められた『学力』について、Bonferroni の単純主効果の検討をした。結果、2015 年において園種の単純主効果が（幼<保）、幼稚園において調査時期の単純主効果が認められた（14>15）。すなわち、2015 年の幼稚園の不安が低いことが示された。

(2)子どもの発達の遅れについて

子どもの発達の遅れに関する心配を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表 9：F 値の下段に多重比較の結果を示す）。

表9 調査時期と園種ごとの発達の遅れ(標準偏差)

	2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=775)	保育所 (n=743)	幼稚園 (n=916)	保育所 (n=794)	調査時期	園種	交互作用
フォークなどが使えない	1.43 (0.76)	1.52 (0.77)	1.40 (0.72)	1.52 (0.81)	0.24	14.42*** 幼<保	0.26
言葉の発達が遅い	1.66 (0.99)	1.74 (1.06)	1.67 (0.98)	1.72 (1.03)	0.04	3.54	0.24
排泄の自立が出来ていない	1.78 (1.09)	1.90 (1.14)	1.77 (1.10)	1.79 (1.05)	2.29	2.93	1.48
自分のことが出来ない	2.08 (1.01)	2.04 (0.98)	1.97 (0.96)	2.05 (1.00)	1.72	0.37	3.19
滑り台やブランコなどで遊ばない	1.62 (0.84)	1.76 (0.93)	1.53 (0.80)	1.72 (0.88)	4.78* 14<15	28.94*** 幼<保	0.49
夜泣きをする	1.54 (0.90)	1.60 (0.93)	1.51 (0.82)	1.59 (0.87)	0.54	5.13* 幼<保	0.15

* $p<0.05$,*** $p<0.001$

その結果、『滑り台やブランコなどで遊ばない(14<15)』において調査時期の主効果が認められ、2015 年の調査で不安が高くなっていることが示された。さらに、『フォークなどが使えない(幼<保)』『滑り台やブランコなどで遊ばない(幼<保)』『夜泣きをする(幼<保)』において園種の主効果が示されて、保育所の不安が高いことが示された。また、有意な交互作用は示されなかった。

これらの項目については、福島県と徳島県の幼稚園の新入園児を対象とした調査においても、調査時期（2013 年、2014 年）や他県の調査と比べても有意差は示されていない⁽³⁾。今回の調査では、有意差が認められているが、平均値は非常に低く、不安は低いことが示されている。このように、震災後の制限ある環境においても、子どもの発達に関する影響が少ないことが示された。

(3)子どもの環境への適応

子どもの発達の遅れに関する心配を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表 10：F 値の下段に多重比較の結果を示す）。

その結果、調査時期の主効果が認められなかったが、『親から離れるのを嫌がる(幼<保)』において園種の主効果が示され、保育所は幼稚園に比べ不安が高いことが示された。また、有意な交互作用は示されなかった。

本章表 4 や他の調査でも震災後⁽¹⁾⁽²⁾、地域での関わりや友人との関わりが減少していたことが示されている。そのため、経験不足から、新しい場面や新しい人物との関わりが難しいことが予測されたが、本調査においても平均値は非常に低く、子どもの環境への適応力の高さを示す結果といえる。

表10 調査時期と園種ごとの適応不足(標準偏差)

	2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=775)	保育所 (n=743)	幼稚園 (n=916)	保育所 (n=794)	調査時期	園種	交互作用
新しい場になかなか慣れない	2.41 (1.14)	2.35 (1.08)	2.32 (1.08)	2.35 (1.08)	1.25	0.13	1.53
人見知りなどをする	2.20 (1.12)	2.12 (1.06)	2.08 (1.03)	2.13 (1.05)	2.43	0.15	2.92
親から離れるのを嫌がる	2.17 (1.11)	2.29 (1.09)	2.13 (1.03)	2.24 (1.08)	1.39	9.02** 幼<保	0.04

** $p<.01$

(4)子どもの外遊びの不足について

子どもの発達の遅れに関する心配を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表 11:F 値の下段に多重比較の結果を示す)。

表11 調査時期と園種ごとの外遊びの不足(標準偏差)

	2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=779)	保育所 (n=742)	幼稚園 (n=915)	保育所 (n=796)	調査時期	園種	交互作用
寒さ、暑さに弱い	2.23 (0.98)	2.24 (0.98)	2.18 (0.95)	2.20 (0.94)	1.49	0.36	0.03
外遊びが十分に出来ていない	3.24 (1.21)	3.51 (1.18)	3.24 (1.21)	3.28 (1.18)	7.80** 14>15	13.13*** 幼<保	7.82** 14:幼<保 保:14>15
すぐに疲れる	2.36 (1.12)	2.31 (1.11)	2.30 (1.12)	2.27 (1.13)	1.41	1.15	0.08
友達と遊んでいない	2.49 (1.09)	2.57 (1.09)	2.57 (1.10)	2.55 (1.09)	0.61	0.70	1.34
虫などを怖がる	2.47 (1.11)	2.49 (1.12)	2.49 (1.12)	2.56 (1.11)	1.42	1.29	0.41
よく転ぶ	1.90 (1.04)	1.98 (1.06)	1.91 (1.03)	2.00 (1.04)	0.21	5.15* 幼<保	0.00

* $p<.05$,** $p<.01$,*** $p<.001$

その結果、『外遊びが十分に出来ていない(14>15)』において調査時期の主効果が認められ、2014年の不安が高いことが示された。また、『外遊びが十分に出来ていない(幼<保)』『よく転ぶ(幼<保)』において園種の主効果が示され、保育所の不安が高いことが明らかとなった。

さらに、交互作用が認められた『外遊びが十分に出来ていない』について、Bonferroniの単純主効果の検討をした。その結果、2014年において園種の単純主効果が(幼<保)、保育所において調査時期の単純主効果が認められた(14>15)。よって、外遊びについて

は、2014年の保育所において不安が高かったことが示された。本報告第3章（表8）の保育者調査においても『外での生活』において、保育所の方が大きな心配を抱えていることが示されていた。その理由としては、保育時間の多さから、外遊びの制限が保育所の方が多いため、外遊びが少なくなっていると考えられる。また、保育所に通園している子どもの保護者は、仕事をしている場合が多く、平日に保育時間以外に他の活動を行うことが難しい。そのため、保護者の不安も多かったと考えられる。ただし、2015年では、不安が減少しており、多くの制限も緩和したと考えられる。

(5)食の問題について

食への不安を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表12：F値の下段に多重比較の結果を示す）。

その結果、調査時期の主効果が認められなかったが、『食が細い(幼>保)』において園種の主効果が示された。また、有意な交互作用は示されなかった。

幼稚園、保育所では、食べ物の放射線量を詳細に測定しながら給食などを提供していた（第3章、表17）。そのため、安心して給食が食べられたと考えられるため、給食の多い保育所は不安が少なかったと考えられる。また、園の放射線量対策への信頼感も高いため、園で過ごす時間が長いほど、お腹も空き、ご飯もよく食べるようになった可能性もある。

表12 調査時期と園種ごとの食の問題(標準偏差)

	2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=781)	保育所 (n=744)	幼稚園 (n=918)	保育所 (n=798)	調査時期	園種	交互作用
好き嫌が多い	2.23 (1.24)	2.18 (1.15)	2.22 (1.22)	2.22 (1.17)	0.06	0.27	0.45
食が細い	2.79 (1.33)	2.56 (1.23)	2.73 (1.31)	2.55 (1.19)	0.64	20.61*** 幼>保	0.26

*** $p<.001$

4. 保護者の生活への不安

2014年、2015年調査において、「保護者の生活への不安」について回答してもらった。13項目を対象に因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行い項目のまとまりごとに調査時期、園種ごとの変化を示す（本報告書では、各設問の比較を目的にしているため、因子分析の結果はここに掲載しない）。

(1)放射能への不安

放射能に関する不安を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表13：F値の下段に多重比較の結果を示す）。

その結果、『地域（よく行くところ）の放射線量(14>15)』『食材の放射線量(14>15)』において調査時期の主効果が認められ2015年調査は、得点が低くなっていることが示された。また、『地域（よく行くところ）の放射線量(幼<保)』『幼稚園・保育所の放射線量(幼<

保)』において園種の主効果が示され、保育所の得点が高いことが示された。そして、有意な交互作用は示されなかった。

得点は徐々に低下しており、放射能に関する不安は減少しているが、平均値を見ると高く、目に見えない放射線量に関しては、未だに大きな不安を抱いていることが示された。その中でも食材に関する放射線量について特に不安が大きいことが明らかとなった。

表13 調査時期と園種ごとの放射線への不安(標準偏差)

	2014年		2015年		調査時期	F値	
	幼稚園 (n=780)	保育所 (n=727)	幼稚園 (n=907)	保育所 (n=783)		園種	交互作用
地域(よく行くところ)の放射線量	3.35 (1.09)	3.43 (1.14)	3.16 (1.13)	3.31 (1.05)	15.64*** 14>15	8.65** 幼<保	0.56
園(幼稚園・保育所)の放射線量	2.86 (1.17)	3.20 (1.17)	2.81 (1.15)	3.11 (1.09)	3.42	62.74*** 幼<保	0.21
食材の放射線量	3.92 (1.02)	3.93 (1.03)	3.79 (1.05)	3.79 (1.01)	13.44*** 14>15	0.00	0.02

** $p<.01$, *** $p<.001$

(2)地域の繋がり

地域との繋がりに関する心配を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表14:F値の下段に多重比較の結果を示す)。

その結果、調査時期の主効果が認められなかったが、『地域の活性化(または地域住民の減少)(幼>保)』において、園種の主効果が認められ、保育所の得点が高いことが明らかになった。

さらに、交互作用が認められた『地域の活性化(または地域住民の減少)』について、Bonferroniの単純主効果の検討をした。その結果、2014年において園種の単純主効果が(幼>保)、幼稚園において調査時期の単純主効果が認められ(14>15)、2014年の幼稚園の保護者は、地域の活性化について不安を強く抱いていたことが示唆された。

表14 調査時期と園種ごとの地域の繋がり(標準偏差)

	2014年		2015年		調査時期	F値	
	幼稚園 (n=778)	保育所 (n=728)	幼稚園 (n=910)	保育所 (n=782)		園種	交互作用
他の人との意見の違い	2.87 (0.93)	2.86 (1.00)	2.80 (0.95)	2.85 (0.95)	1.06	0.40	0.75
他の人との交流の機会の不足	2.76 (0.91)	2.71 (0.93)	2.71 (0.94)	2.74 (0.93)	0.04	0.12	1.36
地域の活性化(または地域住民の減少)	3.35 (0.97)	3.15 (1.00)	3.22 (0.97)	3.23 (0.99)	0.46	6.96** 幼>保	9.18** 14:幼>保 幼:14>15

** $p<.01$

(3)将来への心配

将来に関する心配を調査時期と園種ごとに示すために、調査時期と園種を独立変数とし、各得点を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表15:F値の下段に多重比較の結果を示す)。

その結果、『知人の避難(14>15)』『支援が継続するか(14>15)』『原発事故の問題の風化(14>15)』『今後の経済面や仕事(14>15)』『子育てや教育の方法(14>15)』において調査時期の主効果が認められ、2015年は2014年よりも得点が低いことが示されたが、園種の主効果は確認できなかった。

さらに、交互作用が認められた『今後の経済面や仕事』について、Bonferroniの単純主効果の検討をした。その結果、2015年において園種の単純主効果が(幼<保)、幼稚園において調査時期の単純主効果が認められた(14>15)。すなわち、2015年の幼稚園の不安が低いことが示された。

表15 調査時期と園種ごとの地域の繋がりへの不安(標準偏差)

	2014年		2015年		F値		
	幼稚園 (n=778)	保育所 (n=722)	幼稚園 (n=907)	保育所 (n=783)	調査時期	園種	交互作用
風評被害	3.60 (1.00)	3.55 (1.07)	3.54 (1.02)	3.50 (1.03)	2.02	1.54	0.06
知人の避難	2.79 (0.99)	2.76 (1.06)	2.73 (1.00)	2.65 (1.01)	5.93* 14>15	1.83	0.40
支援が継続するか	3.47 (1.12)	3.39 (1.19)	3.29 (1.13)	3.28 (1.12)	12.27*** 14>15	1.24	0.75
原発事故の問題の風化	4.10 (0.93)	4.05 (0.97)	3.88 (0.97)	3.84 (1.02)	38.86*** 14>15	1.30	0.04
自分や家族の健康	4.17 (0.87)	4.09 (0.95)	4.07 (0.92)	4.08 (0.90)	3.08	1.65	1.97
今後の経済面や仕事	3.60 (1.04)	3.54 (1.16)	3.37 (1.06)	3.53 (1.11)	8.58** 14>15	1.63	8.19** 15:幼<保 幼:14>15
子育てや教育の方法	3.46 (0.90)	3.44 (0.95)	3.35 (0.94)	3.42 (0.90)	3.92* 14>15	0.64	2.47

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

IV まとめ

ここでは、本章の内容と、保護者を対象とした調査報告⁽¹⁾をもとに、3回の保護者調査を振り返る。

1. 震災後の子育てや子どもの様子の変化

調査協力幼稚園を対象とした継続調査では、前年に比べ、子育てや子どもの行動の増減をたずねたところ、「外遊びの時間」「友達と遊ぶ時間」などは、2013、2014年は2012年よりも増加しており、年を追うごと戸外での活動や友人とのふれあいが増えていることが示された⁽²⁾。今回の調査でも、前年に比べ、子育てや子どもの行動の増減をたずねたところ、『外遊びの時間』『ご家族での近所への外出』『友達と遊ぶ機会』など、子育てに関しては、2014年調査が最も高く、次いで2015年、2012年と得点が低くなった。

環境省⁽⁶⁾によると、2012年8～9月の間に除染計画地域の9割以上の施設で除染が完了したとされており、2013、2014年に子育ての環境が改善したと考えられる。その後、除染活動は、住宅地まで進んでいることも示されており、主要な地域の放射線量は下げ止まりしている。そのため2015年において、「外遊びの時間」が減少し、「テレビ視聴」の増加に

繋がっているとも考えられる。また、子どもの行動に関しても、2015年においては、ポジティブな行動の増加が、低くなっている。

この様な観点から、除染などの復興が進んだ震災後3年間に比べ、大きな変化が目に見えないことで、行動の変化が落ち着いていると考えられる。今後、この様な状況が進んでいくことで、保護者の認識がどのように変化していくかを慎重に見ていく必要があるだろう。

2. 子どもの発達への心配事

子どもの発達に対する心配事の変化を見ると、「外遊びが十分に出来ていない」においては、心配事が多いことが示されたが、それ以外の発達に関する項目は、得点も低く心配事が少ないことが示された。この結果は、調査協力幼稚園と徳島県の幼稚園を対象とした調査の結果とも同様であった。このことから、保護者は子どもが環境に適応しつつ、順調に発達していると捉えている、と考えることが出来る。このことは、目の前の子どもの成長を素直に感じることが出来る保護者の思いが見て取れる。

ただし、第3章で取り上げた保育者を対象とした調査では、「子どもの情緒の発達」などについて不安が大きいことも示されている。第3章やまとめでも取り上げたが、福島県の保育者の意識として、子どもの行動を見た時、「子どもが適応しているのか我慢しているのかもつかみにくい状況の中で、どうすればよりよい保育になるのかを模索し続けなければならない」こと⁽⁶⁾が指摘され、保育者は将来の発達を見据え、子ども達の行動を見ており、現在の子どもの様子だけでは不安が拭えないのではないだろうか。

この様な視点の違いは、自分の子どもを見る保護者の認識と多くの子どもの成長を見てきた保育者の認識とのギャップを徐々に生じさせている可能性もある。そのため、保護者との認識の違いを念頭に置きつつ保護者支援を行う必要があるだろう。

3. 保護者自身の心配事

保護者自身の不安をみると、「食材の放射線量」「健康」といった放射能に関する健康被害について不安が高いことが示された。放射能に関する健康被害は、いつどのような影響が表出するか分からないため、健康に関する不安は常に付きまとっていると考えられる。

また、震災後、時間が経過する中で福島県には「風評」と「風化」という2つの風が吹いているといわれている。今回の調査においても、「風評被害」「地域の活性化」「今後の経済面や仕事」の得点が高いことが確認された。これらの項目は、放射能災害地としての福島県の風評被害や、それによって影響を受けると考えられる地域の活性化や今後の経済面への不安を意味している。実際に除染作業や食材の検査などが進み、様々な部分で復興が進んでいるにも関わらず、福島県の人々に対する偏見や福島県産の野菜が売れないなどの現状を招いている。そのため、放射能のことを忘れて欲しい（忘れたい）という一つの思いは、福島県で生活する保護者に存在し続けていると考えられる。

一方で、「支援の継続」「原発事故の風化」といった震災のことが忘れられることへの不安も示された。これらの項目は2013年に得点が低くなり、震災後2年経ったころに、不安が減少したことが示されている⁽²⁾。しかしながら、忘れられるということは放射能被害が収束したことを意味してしまうため、支援が得られなくなる可能性がある。そういった

忘れられることへの不安も大きいと考えられる。

この様に、放射能災害のことを忘れて欲しい思いと忘れて欲しくない思いの相反する思いの狭間で生活していることを理解していく必要がある。

【本章調査の役割分担】

調査用紙の作成：加藤孝士

配布・回収：郡山女子大学附属幼稚園

データ入力：加藤孝士・四国大学 学生

<引用文献>

- (1) 『震災に生きる子どもと保育』、Ⅰ．協力園対象継続研究 2. 福島市・郡山市の幼稚園保護者の意識に関する調査報告、日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013) 加藤孝士 p.93-125.
- (2) 『放射能災害下の保育問題研究—平成 25 年・26 年調査報告書—』、第 4 章 協力園保護者調査 Ⅰ 協力園継続調査について、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 加藤孝士 p. 203-209.
- (3) 『放射能災害下の保育問題研究—平成 25 年・26 年調査報告書—』、第 4 章 協力園保護者調査 Ⅱ 2013、2014 年、新入園児保護者調査、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 加藤孝士 p. 210-221.
- (4) 『震災に生きる子どもと保育』、Ⅱ．放射能災害地域と関東圏の比較 2. 保護者対象調査、日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013) 加藤孝士 p.197-206.
- (5) 『放射能災害下の保育問題研究—平成 25 年・26 年調査報告書—』、第 5 章 Ⅰ. 2014 年、2015 年調査 園長調査、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 永井知子 p. 223-233.
- (6) 『福島県 郡山市の除染の進捗状況』、住民の皆様へ安心出来る毎日を。除染情報サイト 環境省 http://josen.env.go.jp/zone/details/fukushima_koriyama.html

第5章 広域調査まとめ（2014年、2015年）

加藤 孝士

災害時における保育問題検討委員会・福島ワーキンググループ、及び放射能災害にかかる保育問題検討委員会・養育環境研究ワーキンググループでは、調査協力幼稚園の保護者を対象とした継続調査⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾と福島県下の幼稚園・保育所の園長⁽⁴⁾⁽⁵⁾・保育者(本報告書第3章)・保護者(本報告書第4章)を対象とした調査を行った。

これまでの報告書では⁽¹⁾⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾⁽⁵⁾、各調査をそれぞれ分析し、震災後に園長や保育者がどのような悩みを抱えながら保育を取り組んでいたのか、保護者がどのように子どもを見ていたのか、どのように生活を変化させたのか、どのような悩みを抱えながら生活していたのかを明らかにしてきた。

しかしながら、福島県を対象とした様々な調査が指摘されているように、園の置かれている環境(園の放射線量、地域の放射線量、園の保育観、園種、設置主体など)により、対応が異なっている⁽⁶⁾⁽⁷⁾。そこで、養育環境研究ワーキンググループでは、広域調査において、園長調査、保育者調査、保護者調査のデータの結び付けを試み、その関係をまとめることとした。ただし、各園で回答した保育者と保護者の数は一定でない上、保育者と保護者の関係も定かではない。そこで、調査協力園を対象に保育内容の分析結果⁽⁷⁾⁽⁸⁾や本報告書第1章で指摘されている、「外遊びの変化」「保育計画の変化」「一人ひとりの子どもを大切に保育」といったキーワードを念頭に置き、園長調査を再分析した上で、園ごとの保育者、保護者の回答を比較することによって、それぞれの関係を検討・考察した。

方法

調査時期：平成26(2014)年2～3月、平成27(2015)年2～3月

調査手続き：2012年調査(第3、4章参照)で回答のあった128園を対象に園長調査、保育者調査、保護者調査の調査用紙を調査依頼書と合わせて送付した。回答後は、同封した返信用レターパックにより回収を行った。2014年調査は72園(56%)、2015年調査は79園(62%)からそれぞれ返送された。

調査対象者：園長調査では、2014年57名、2015年69名であった。保育者調査は、2014年358名、2015年215名であった。保護者調査は、2014年1,558名、2015年1,736名であった。

本報告に用いる調査項目¹：

- ①外遊びの制限：2014年調査では、過去1年の外遊びの制限時間を回答してもらった。
- ②保育への考えや実践について：13項目で構成され、「そう考えない(1点)」～「そう考える(5点)」の5段階で回答を求めた。
- ③現在の心配事：13項目で構成され、「心配でない(1点)」～「心配(5点)」の5段階で回答を求めた。

分析には、SPSS for Windows ver.22.0を使用した。

I 園長調査の再検討

本章では、園長調査をもとに、保育者調査、保護者調査との関係を検討することを目的としている。それに先立ち、音山⁽⁴⁾、永井⁽⁵⁾で挙げていないデータや、新たな分析を加え、園長の意識を明らかにする。その際、賀門⁽⁷⁾や本報告書第1章において検討されている保育園の取り組みの変化の視点から挙

¹ 保育者調査の項目詳細は第3章、保護者調査の項目詳細は第4章を参照。

げられている、「外遊びの制限」「保育内容の変化」「活動や取り組みの変化」といった三つの視点から分析を行う。

1. 平成 25 年度4月の外遊びの制限

賀門⁽⁷⁾における調査協力園の保育内容の推移をみると、連携を図っている調査協力園においても、震災翌年（2012年）9月から外遊びの制限を解除した園もあれば、2015年3月においても制限を設けている園があるなど、各園の置かれた状態により、取り組みは様々である。今回の調査においても、2014年調査において、2013年4月～2014年1月までの10か月間を対象に、2か月ごとの外遊びの制限を調査した。

得られた回答から、未記入のものや2011年の制限について記入したと思われる回答を除き、2013年4月（震災後2年）の制限を表1に示した（回答の中で、年齢別に制限時間を設けている回答もあったが、ここでは最も制限がない年齢のクラスを対象に結果を表記した）。調査に際して、外遊びの配慮なども自由記述で記入してもらったところ、震災1年後にあたる2012年4月から制限を無くした園もあれば、震災後2年半は一切外遊びをしなかった園も存在した。このように、大きな園差が存在したことが示された。

表1 2013年4月の外遊びの制限時間

	30分未満	30分	60分	120分以上 無制限	合計
幼稚園	2	11	3	3	19
保育所	1	8	6	5	20
合計	3	19	9	8	39

2. 保育内容の変化

音山⁽⁴⁾によると、震災後1年は、地震・放射能災害による様々な制限により、『保育内容（5領域）のバランスよい実践（関東：3.3%＜福島：65.8%）』、『行事の適正な配置（関東：0.0%＜福島：53.7%）』、『日常保育の適切な環境構成（関東：0.0%＜福島：42.6%）』など様々な活動において、震災後保育が悪化したと回答していた。その後の調査では、『教育課程の作成、指導計画の立案・確認』、『保育環境の安全・衛生点検』、『保育内容（5領域）のバランスよい実践』、『行事の適正な配置』、『日常の保育の適切な環境構成』の項目で、2015年の調査では、2014年の調査に比べ得点が高く、「向上した」と認識した保育者が多くなっていることが示されている⁽⁵⁾。

これまでの報告書においては、細かな保育内容の変化を示すため、保育内容のバランスや日常の保育など、一つひとつの項目についてその推移を記載してきた。ここでは、保育内容の変化を総合的に評価するため、保育内容の変化に関する13項目を対象の回答を対象に因子分析（主因子法）を行った。

その結果、固有値の推移（3.93、2.44、1.34、0.92…）から2因子が最適解であると判断した。続いて、因子負荷量.35未満であった項目を除外することとし、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、除外される項目はなく、13項目で構成される構造を示した（表2）。第一因子は“情報公開”、“保護者の要望への取り組み”、“子どもとの信頼関係”といった語が分類され、本報告書第1章でも挙げられた「保育者一人ひとりが感じる“今必要な経験”を得させようとしている」との指摘と共通することから「一人ひとりを大事にする保育」因子と命名した。第二因子は“保育内容（5領域）のバランスよい実践”、“教育課程の作成、指導計画の立案・確認”、“行事の適正な配置”といったこれまで当たり前であった保育内容を再度検討したことを意味する項目が分類されたことから「保育計画の見直し」因子と命名した。信頼性を検討するため、 α 係数を算出したところ両因子で.80を超えており、信頼性も十分に有していることが示された。

3. 活動や取り組みの変化

表2 保育内容の変化の因子分析(主因子法、プロマックス回転、n=118)

	I	II	平均値(SD)
I. 一人ひとりを大事にする保育 ($\alpha=.84$)			
情報公開	.90	-.30	3.81 (0.66)
保護者の要望への取り組み	.83	-.07	3.69 (0.73)
子どもとの信頼関係	.63	.11	3.65 (0.75)
危機管理体制	.62	.04	4.27 (0.64)
保育記録の実践への活用	.55	.29	3.52 (0.75)
教職員間での子どもの共通理解・発達の確認	.46	.29	3.85 (0.75)
園外研修への参加	.43	.20	3.50 (0.96)
給食における安全・衛生対策	.39	.21	4.26 (0.82)
II. 保育計画の見直し ($\alpha=.84$)			
保育内容（5領域）のバランスよい実践	-.27	.85	3.09 (1.07)
教育課程の作成、指導計画の立案・確認	.03	.76	3.52 (0.85)
行事の適正な配置	.02	.75	3.28 (1.05)
保育環境の安全・衛生点検	.14	.60	3.95 (1.02)
日常保育の適切な環境構成	.30	.56	3.49 (1.06)
因子相関行列	I	.66	

第3章でも挙げたように、震災、原発事故による放射能により、外遊びの制限や室内の保育環境の見直しなど、様々な取り組みをしていたことが示された。取り組みは、園の置かれた地域の放射線量や保育施設の状態などによって異なるが、それらを総合的に評価するため、活動や取り組みの変化についてたずねた13項目を対象に因子分析（主因子法）を行った。

その結果、初期の共通性の低い2項目を除外し、再度因子分析を行ったところ、固有値の推移（4.00、1.22、1.04、0.74…）から3因子が最適解であると判断した。続いて、因子負荷量.35未満であった項目を除外することとし、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、1項目が除外され、10項目で構成される構造を示した（表3）。第一因子は“新しい遊具、教材の購入や活用”、“生活環境保全のための設備・備品の新規設定”、“新しい保育方法の取入れ”といった新しい取り組みに関する項目が分類されたため、「新しい保育の導入」因子と命名した。第二因子は“地域との連携活動”、“在園児

以外の家庭への子育て支援活動”といった外部の人との連携や子ども以外の関わりが分類されたことから「外部との連携」因子と命名した。第三因子は“園長自身の園環境整備や点検”、“園長の保育への参加や子どもとのかかわり”といった園長の関わりが分類されたことから「園長の取り組み」因子と命名した。信頼性を検討するため、 α 係数を算出したところ3因子とも.70を超えており、信頼性を有していることが示された。

4. 2014年、2015年調査の比較

続いて、2014年、2015年の取り組みの違いを比較するため、2014、2015年の得点を比較した（t検定、表4）。その結果、保育計画の見直しにおいて、有意差が確認され、2015年は2014年よりも得点が高く、保育内容の見直しや計画が行われるようになったことが示された。

表3 活動や取り組みの変化の因子分析（主因子法、プロマックス回転、n=120）

	I	II	III	平均値(SD)
I. 新しい保育の導入($\alpha=.73$)				
新しい遊具、教材の購入や活用	.86	-.05	-.06	4.17 (0.70)
生活環境保全のための設備・備品の新規設定	.65	.08	-.07	3.98 (0.71)
新しい保育方法の取り入れ	.49	-.08	.36	3.83 (0.69)
II. 外部との連携($\alpha=.75$)				
地域との連携活動	-.02	.71	-.06	3.38 (0.73)
在園児以外の家庭への子育て支援活動	-.13	.69	.10	3.41 (0.73)
在園児の保護者への情報提供や相談活動	.27	.49	.00	3.79 (0.62)
専門機関等外部関係者との交流	.22	.48	.04	3.74 (0.73)
III. 園長の取り組み($\alpha=.72$)				
園長自身の園環境整備や点検	-.02	-.02	.82	4.05 (0.66)
園長の保育への参加や子どもとのかかわり	-.06	.07	.69	3.58 (0.74)
因子相関行列	I	.64	.52	
	II		.54	

II 園長調査と保育者調査の関係

1. 保育者調査の再検討

本報告書第3章では、保育者の回答を項目ごとに示し、調査時期や園種による意識の違いを示した。ここでは、園長調査との関係を検討するため、保育者調査の回答結果を対象に因子分析を用い項目のま

表4 2014年、2015年の各得点の平均値と比較(標準偏差)

	2014年(n=51)		2015年(n=64)	t値
一人ひとりを大事にする保育	3.83 (0.60)		3.84 (0.52)	0.13
保育計画の見直し	3.20 (0.87)	<	3.72 (0.61)	3.78***
新しい保育の導入	4.08 (0.59)		3.90 (0.53)	1.69
外部との連携	3.51 (0.54)		3.63 (0.53)	1.27
園長の取り組み	3.89 (0.60)		3.75 (0.63)	1.21

*** $p<.001$

とまりを明らかにした。

(1) 保育者の心配事の因子分析

保育者の心配事を総合的に評価するため、保育者の心配事についてたずねた 13 項目を対象に因子分析（主因子法）を行った。

表 5 保育者の心配事の因子分析（主因子法、プロマックス回転、n=598）

	I	II	III	平均値(SD)
I. 子どもの成長($\alpha=.85$)				
子どもの体力	.86	-.07	-.10	4.28 (0.85)
子どもの自然体験の不足	.75	.05	-.11	4.37 (0.79)
子どもの健康	.67	.22	-.06	4.15 (0.89)
子どもの情緒の発達	.62	-.17	.30	3.48 (1.01)
子どもの外での生活（外遊びなど）	.61	.16	-.04	3.92 (1.02)
子どもの将来	.37	.36	.06	3.83 (0.99)
子どもの学力	.36	-.05	.35	3.01 (0.95)
II. 放射能の影響($\alpha=.86$)				
園や地域の放射線量	.00	.92	-.06	3.70 (1.07)
食材の放射線量	-.09	.91	.07	3.58 (1.10)
震災前と同じ生活ができるか	.16	.55	.12	3.73 (1.05)
III. 他者との関わり($\alpha=.69$)				
他の保育者との意見の違い	-.15	.10	.78	2.88 (0.96)
保護者との意見の違い	-.06	.07	.68	3.26 (0.93)
子どもの友達関係	.37	-.10	.40	2.99 (0.93)
因子相関行列	I	.53	.55	
	II	-	.44	

その結果、固有値の推移（5.59、1.45、1.29、0.99…）から 3 因子が最適であると判断した。続いて、因子負荷量.35 未満であった項目を除外することとし、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、全ての項目が分類され 13 項目で構成される構造が示された（表 5）。第一因子は“子どもの体力”、“子どもの自然体験の不足”、“子どもの健康”といった子どもに関する取り組みに関する項目が分類されたため、「子どもの成長」因子と命名した。第二因子は“園や地域の放射線量”、“食材の放射線量”といった放射線に関わる項目が分類されたことから「放射能の影響」因子と命名した。第三因子は“他の保育者との意見の違い”、“保護者との意見の違い”といった他の人との関わりに関する項目が分類されたことから「他者との関わり」因子と命名した。信頼性を検討するため、 α 係数を算出したところ子どもの成長（ $\alpha=.85$ ）、放射線量（ $\alpha=.86$ ）、他者との関わり（ $\alpha=.69$ ）となった。

(2) 保育者としての在り方

保育者としての在り方を総合的に評価するため、保育者としての在り方について尋ねた 13 項目を対象に因子分析（主因子法）を行った。

その結果、固有値の推移（2.85、2.66、1.34、0.98…）から 3 因子が最適であると判断した。続いて、因子負荷量.35 未満であった項目を除外することとし、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行

ったところ、1項目が除外され、12項目で構成される構造を示した(表6)。第一因子は“保育をすることに自信がないと思うことが…”、“自分の力不足を感じて、イライラすることが…”、“自分の将来について考えて不安になることが…”といった保育に対するネガティブな項目が分類されたため、「ネガティブな感情」因子と命名した。第二因子は“保護者に頼られていると思うことが…”、“自分が子どもにとって必要なのだと感じることが…”といった有能感の項目が分類されたことから「有能感」因子と命名した。第三因子は“子どもにはすごい力があると感じることが…”、“周りの人に守られていたり、助けられていると思うことが…”といった他の人からのサポートや充実感に関する項目が分類されたことから「充実・サポート感」因子と命名した。今回の因子構造は、音山と同様の構造であった。信頼性を検討するため、 α 係数を算出したところネガティブな感情($\alpha=.73$)、有能感($\alpha=.75$)、充実・サポート感($\alpha=.66$)となった。

表6 保育者としての在り方の因子分析(主因子法、プロマックス回転、n=594)

	I	II	III	平均値(SD)
I. ネガティブな感情($\alpha=.73$)				
保育をすることに自信がないと思うことが…	.75	-.18	.06	3.70 (0.99)
自分の力不足を感じて、イライラすることが…	.67	-.11	.14	3.87 (0.99)
自分の将来について考えて不安になることが…	.65	.11	-.20	3.71 (1.12)
自分が疲れていると思うことが…	.60	.14	.01	4.24 (0.84)
子どもが可哀相だと思うことが…	.39	.13	-.09	3.19 (1.15)
II. 有能感($\alpha=.75$)				
保護者に頼られていると思うことが…	.12	.81	-.01	3.70 (0.82)
自分が子どもにとって必要なのだと感じることが…	.07	.67	.15	3.97 (0.81)
園になくってはならない人材だと感じる…	-.04	.63	-.05	3.22 (0.85)
III. 充実・サポート感($\alpha=.66$)				
子どもにはすごい力があると感じることが…	.01	-.07	.67	4.84 (0.43)
周りの人に守られたり、助けられていると思うことが…	.05	.03	.61	4.62 (0.65)
保育者で良かったと思うことが…	-.11	.04	.56	4.60 (0.70)
保育をすることで、自分が成長していると感じることが…	-.10	.21	.43	4.36 (0.75)
因子相関行列	I	-.21	.15	
	II	—	.40	

(3)2014年、2015年調査の比較

続いて、2014年、2015年の取り組みの違いを比較するため、2014年と2015年の得点を比較した(t検定、表7)。その結果、子どもの成長、放射能、他者との関わりといった心配において有意差が確認され、2015年は2014年よりも得点が低いことが示された。よって、年を追うごとに、様々な不安が低くなっていることが示された。一方で保育者としての在り方については、時間を経ても、変化していないことが示された。

表7 2014年、2015年の各得点の平均値と比較(標準偏差)

	2014年		2015年	t値
子どもの成長	3.95 (0.62)	>	3.70 (0.75)	4.38***
放射能の影響	3.80 (0.90)	>	3.45 (0.99)	4.34***
他者との関わり	3.09 (0.73)	>	2.95 (0.76)	2.23*
ネガティブな感情	3.77 (0.68)		3.68 (0.75)	1.53
有能感	3.63 (0.67)		3.63 (0.69)	0.03
充実・サポート感	4.61 (0.44)		4.60 (0.47)	0.42

* $p < .05$, *** $p < .001$

2. 外遊びの制限と保育者調査の関係

園長調査と保育者調査の関係を検討するため、園長調査と保育者調査の両方に回答のあったものについて関係を検討した。まず、外遊びの制限と保育者の意識の関係について検討する。続いて、園長調査で行った「保育内容の変化」「活動や取り組みの変化」と保育者の意識の関係を検討する。

(1)外遊びの時間と保育者の意識

2014年調査において、2013年4月～2014年1月までの10か月に対して、2か月ごとのおおよその外遊びの制限について質問した。その結果をもとに、2013年4月の外遊びの制限ごとに、保育者の意識を比較するため、外遊びの制限を独立変数とし、保育者としての意識を従属変数とする一要因分散分析を行った(表8)。

その結果、「子どもの成長」において主効果が示され、その後の多重比較の結果、外遊びの時間を30分未満に制限をしている園の保育者は、60分に制限している保育者に比べ不安が高いことが示された。また、ネガティブ感情においても主効果が示され、その後の多重比較の結果、外遊びの時間を30分未満に制限している園は、30分に制限している園、60分に制限している園に比べ、ネガティブな感情が高いことが示された。

表8 2012年4月の外遊びの時間と保育者の意識(標準偏差)

	30分未満 ¹⁾	30分 ²⁾	60分 ³⁾	120分・無制限 ⁴⁾	F値	多重比較
子どもの成長	4.30 (0.42)	4.00 (0.62)	3.85 (0.64)	4.12 (0.51)	2.79*	1>3
心配事						
放射能の影響	4.09 (0.73)	3.80 (0.98)	3.75 (0.98)	3.83 (0.90)	0.50	
他者との関わり	3.44 (0.45)	3.12 (0.73)	3.01 (0.67)	3.29 (0.69)	2.03	
ネガティブ	4.20 (0.50)	3.71 (0.78)	3.69 (0.64)	4.07 (0.58)	3.97**	1>2≒3
在り方						
有能感	3.60 (0.98)	3.69 (0.61)	3.81 (0.68)	3.69 (0.75)	0.54	
充実・サポート感	4.77 (0.29)	4.65 (0.39)	4.56 (0.46)	4.63 (0.42)	1.24	

* $p < .05$, ** $p < .01$

(2)外遊びと保育への考え方

続いて、保育への考え方についても、外遊びの影響を検討するため、外遊びの制限を独立変数とし、

保育者の保育への考えの各項目を従属変数とする一要因分散分析を行った（表9）。

表9 2012年4月の外遊びの時間と保育者の保育への考え方（標準偏差）

	30分未満 ¹⁾	30分 ²⁾	60分 ³⁾	120分・無制限 ⁴⁾	F値	多重比較
室内運動を増やせば、外遊びでの運動的発達を補える	2.36 (1.50)	2.86 (1.15)	3.04 (1.14)	2.46 (1.10)	2.27	
自然環境との接触の減少は保育環境の中でカバーできる	1.87 (1.19)	2.25 (1.00)	2.57 (1.03)	1.89 (0.74)	3.77*	3>4
保育の中で発見の楽しみの機会を増やしている	3.80 (0.86)	4.01 (0.75)	4.06 (0.72)	3.97 (0.68)	0.49	
季節の変化を感じられるように、環境設定を工夫している	4.13 (0.52)	4.15 (0.71)	4.35 (0.59)	3.97 (0.73)	2.17	
津波ごっこなどの遊びをどう受け止めていいか困惑することがある	3.33 (0.90)	3.19 (1.16)	3.12 (0.92)	3.32 (0.98)	0.32	
自然物以外からの感動があるように保育内容を変えた	3.13 (0.74)	3.42 (0.88)	3.57 (0.89)	3.34 (0.61)	1.18	
描画や製作物を室内に効果的に飾って、見て楽しめるようにしている	3.67 (0.98)	4.68 (4.81)	4.17 (0.73)	4.07 (0.66)	0.59	
表現遊びの環境（時間、空間）を整えることが困難に感じる	3.67 (1.11)	2.99 (0.94)	2.74 (0.76)	3.03 (0.82)	4.29**	1>2≒3
保護者とコミュニケーションをとることを意識している	4.47 (0.74)	4.47 (0.68)	4.49 (0.67)	4.52 (0.57)	0.05	
のびのびとさせることを意識している	4.40 (0.74)	4.44 (0.71)	4.26 (0.74)	4.38 (0.62)	0.70	
子どもの要求を受け入れることを意識している	3.93 (0.88)	3.99 (0.81)	4.00 (0.76)	3.69 (0.71)	1.21	
子どもの生命・健康を守ることを第一に考えている	4.93 (0.26)	4.82 (0.46)	4.77 (0.51)	4.86 (0.35)	0.60	
この場で保育をしているのかと悩むことがある	2.73 (1.39)	2.68 (1.16)	2.68 (1.19)	3.00 (1.04)	0.61	

* $p<0.05$, ** $p<0.01$, *** $p<0.001$

その結果、「自然環境との接触の減少は、保育環境の中でカバーできる」において主効果が示された。その後の多重比較の結果、60分の外遊びの園の保育者は、120分もしくは無制限の園の保育者よりも、自然の減少が保育環境の中でカバーできると考えていることが示された。また、「表現遊びの環境を整えることが困難に感じる」においても有意な主効果が示され、その後の多重比較の結果、外遊びを30分以下に制限している園の保育者は、30分、60分に制限している園の保育者に比べ、表現遊びの困難さを感じていることが示された。

3. 園長調査と保育者調査

園長調査においては、園長の意識として、保育内容の変化において「一人ひとりを大事にする保育」「保育計画に見直し」という二つの因子が抽出された。また、活動や取り組みの変化についても検討したところ、「新しい保育の導入」「外部との連携」「園長の取り組み」という三つの因子が抽出された。それらの結果をもとに、園長の意識と保育者の意識の関係を検討することを目的とし、関係を検討した。その際、調査年によっても関係が異なることが予測されるため、調査年も要因に加え関係を検討した。ただし、調査年に関しては、心配事について関係が認められている（表7）。そこで、ここでは、調査時期の主効果については、考察せず、園長の意識の主効果と交互作用についてのみ文章中に記した。

(1)一人ひとりを大切にする保育と保育者の意識

園長調査の「一人ひとりを大切にする保育」の平均値をもとに、高群、低群に分類した。その後、「一人ひとりを大切にする保育」の高低群、調査時期を独立変数として、保育者の意識（保育者の心配事・在り方）を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表10）。

その結果、調査時期の主効果以外では、「他者との関わり」「ネガティブな感情」「有能感」において、「一人ひとりを大切にする保育」の主効果が認められた。具体的には、「他者との関わり」においては低群の得点が高く不安が高いこと、「ネガティブな感情」においても低群の得点が高くネガティブな感情が高いことが示された。また、「有能感」については、高群の得点が高く有能感が高いことが示された。よって、一人ひとり子どもを大切にする保育をしている園の保育者ほど、子どもの他者との関わりに不

安が少なく、ネガティブな感情が低く、有能感が高いことが示された。また、有意な交互作用は認められなかった。

表10 調査時期と一人ひとりを大切にせる保育の高低ごとの保育者の意識(標準偏差)

調査時期	2014年		2015年		F値			
	低群 (n=168)	高群 (n=142)	低群 (n=93)	高群 (n=73)	調査時期	一人ひとり	交互作用	
一人ひとりを大切にせる保育								
心配事	子どもの成長	4.00 (0.60)	3.94 (0.65)	3.71 (0.74)	3.65 (0.82)	19.80*** 14>15	0.81	0.00
	放射能の影響	3.89 (0.93)	3.75 (0.92)	3.51 (0.93)	3.38 (1.08)	16.39*** 14>15	2.04	0.00
	他者との関わり	3.16 (0.71)	3.04 (0.72)	3.03 (0.80)	2.85 (0.78)	5.06* 14>15	4.11* 低>高	0.17
在り方	ネガティブ感情	3.88 (0.64)	3.67 (0.75)	3.80 (0.65)	3.58 (0.85)	1.54	9.59** 低>高	0.03
	有能感	3.58 (0.64)	3.73 (0.68)	3.54 (0.71)	3.74 (0.69)	0.06	7.26** 低<高	0.12
	充実・サポート感	4.59 (0.43)	4.70 (0.39)	4.61 (0.38)	4.59 (0.53)	1.17	0.94	2.40

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

(2)保育計画の見直しと保育者の意識

園長調査の「保育計画の見直し」の平均値をもとに、高群、低群に分類した。その後、「保育の見直し」の高低群、調査時期を独立変数として、保育者の意識（保育者の心配事・在り方）を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表11）。

その結果、調査時期の主効果以外では、有意な主効果、及び交互作用が認められなかった。よって、保育計画の見直しをしているか否かは保育者の意識に影響を与えていないことが示された。

表11 調査時期と保育の見直しの高低ごとの保育者の意識(標準偏差)

調査時期	2014年		2015年		F値			
	低群 (n=181)	高群 (n=129)	低群 (n=54)	高群 (n=112)	調査時期	見直し	交互作用	
保育計画の見直し								
心配事	子どもの成長	3.96 (0.62)	3.99 (0.63)	3.71 (0.80)	3.66 (0.76)	17.37*** 14>15	0.01	0.34
	放射能の影響	3.80 (0.93)	3.87 (0.91)	3.57 (0.99)	3.40 (1.01)	12.94*** 14>15	0.31	1.61
	他者との関わり	3.10 (0.70)	3.11 (0.73)	3.11 (0.82)	2.88 (0.77)	2.37	2.27	2.71
在り方	ネガティブ感情	3.82 (0.70)	3.74 (0.70)	3.68 (0.80)	3.71 (0.73)	1.20	0.10	0.59
	有能感	3.60 (0.65)	3.72 (0.68)	3.61 (0.69)	3.64 (0.72)	0.27	1.17	0.50
	充実・サポート感	4.62 (0.41)	4.67 (0.40)	4.62 (0.38)	4.60 (0.49)	0.84	0.13	0.66

*** $p<.001$

(3)新しい保育の導入と保育者の意識

園長調査の「新しい保育の導入」の平均値をもとに、高群、低群に分類した。その後、「新しい保育の導入」の高低群、調査時期を独立変数として、保育者の意識（保育者の心配事・在り方）を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表12）。

表12 調査時期と新しい保育の導入の高低ごとの保育者の意識(標準偏差)

調査時期	2014年		2015年		F値			
	新しい保育の導入 低群 (n=116)	高群 (n=189)	低群 (n=78)	高群 (n=83)	調査時期	導入	交互作用	
心配事	子どもの成長	4.02	3.93	3.78	3.55	21.91***	6.17*	1.15
	放射能の影響	0.59	0.64	0.84	0.70	14>15	低>高	
	他者との関わり	3.88	3.79	3.60	3.31	16.73***	4.20*	1.23
在り方	ネガティブ感情	0.92	0.93	0.86	1.06	14>15	低>高	
	有能感	3.16	3.07	3.04	2.82	6.00*	4.57*	0.80
	充実・サポート感	0.71	0.72	0.74	0.80	14>15	低>高	
	有能感	3.85	3.74	3.75	3.63	1.95	2.58	0.00
	充実・サポート感	0.64	0.73	0.71	0.79	0.14	0.73	0.10
	充実・サポート感	3.61	3.68	3.60	3.64	0.55	0.12	4.57*
		0.68	0.64	0.63	0.78			
		4.60	4.67	4.66	4.55			
		0.45	0.37	0.38	0.50			

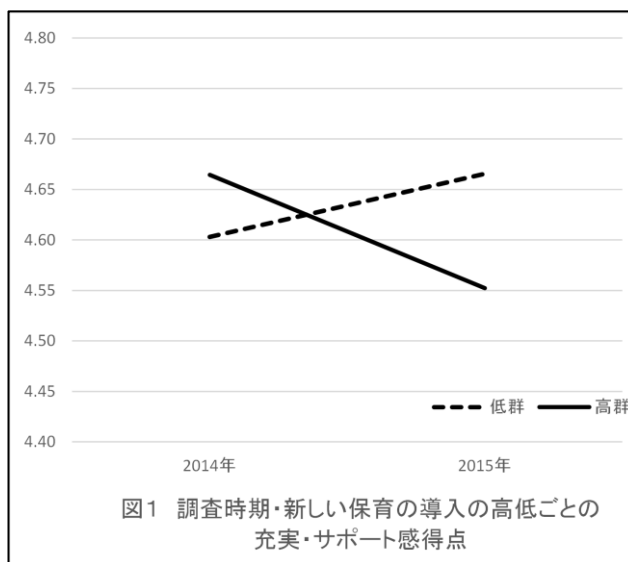
* $p<.05$, *** $p<.001$

その結果、調査時期の主効果以外では、「他者との関わり」「ネガティブな感情」「有能感」において、「新しい保育の導入」の主効果が認められ、心配事に関するすべての因子において高群の保育者は、低群の保育者よりも得点が低く、新しい保育を導入している園の保育者ほど、子どもの成長や放射能、他者とのかかわりへの心配が少なく、ポジティブな感情が強いことが示された。

有意な交互作用が認められた「充実・サポート感」において Bonferroni の単純主効果の検討を行った（図1）。

その結果、新しい「保育の導入」高群において、「調査時期」の単純主効果が認められ、新しい保育を導入している園の保育者は、2014年は2015年に比べ、充実感・サポート感が高いことが示された。その他の単純主効果は認められなかった。

除染についても一応の区切りがついたことで、新たな保育の取り組みの充実感が低下したと考えられる。



(4)外部との連携と保育者の意識の関係

外部との連携と園長の意識の関係を検討するため、園長調査の「外部との連携」の平均値をもとに、高群、低群に分類した。その後、「外部との連携」の高低群、調査時期を独立変数として、保育者の意識（保育者の心配事・在り方）を従属変数とする二要因の分散分析を行った（表13）。

その結果、調査時期の主効果以外では、有意な主効果は認められなかった。

表13 調査時期と外部との連携の高低ごとの保育者の意識(標準偏差)

調査時期	2014年		2015年		F値			
	外部との連携	低群 (n=196)	高群 (n=109)	低群 (n=86)	高群 (n=75)	調査時期	連携	交互作用
心配事	子どもの成長	3.99 (0.61)	3.92 (0.64)	3.62 (0.82)	3.70 (0.72)	18.69*** 14>15	0.00	1.22
	放射能の影響	3.89 (0.90)	3.70 (0.97)	3.33 (0.98)	3.59 (0.97)	13.08*** 14>15	0.13	5.98*
	他者との関わり	3.15 (0.72)	3.01 (0.70)	2.87 (0.80)	3.00 (0.75)	3.96* 14>15	0.02	3.40
在り方	ネガティブ感情	3.81 (0.66)	3.73 (0.76)	3.63 (0.77)	3.76 (0.73)	1.02	0.16	2.22
	有能感	3.68 (0.65)	3.61 (0.67)	3.67 (0.68)	3.57 (0.74)	0.15	1.69	0.03
	充実・サポート感	4.64 (0.41)	4.66 (0.40)	4.64 (0.41)	4.57 (0.49)	1.20	0.40	1.08

* $p<.05$, *** $p<.001$

さらに「放射能について」において、有意な交互作用が認められたため、Bonferroni の単純主効果の検討を行った(図2)。

その結果、「外部との連携」低群において、調査時期の単純主効果が示され、2015年は、2014年に比べ得点が低くなった。また、2014年において、連携の単純主効果が認められ、連携低群は、高群に比べ得点が高いことが、さらに2015年においても単純主効果が示され、連携高群が低群に比べ得点が高いことが明らかとなった。

以上のことから、外部との繋がりが少ない保育者は、2015年は放射能に関する不安が低下していることが示された。

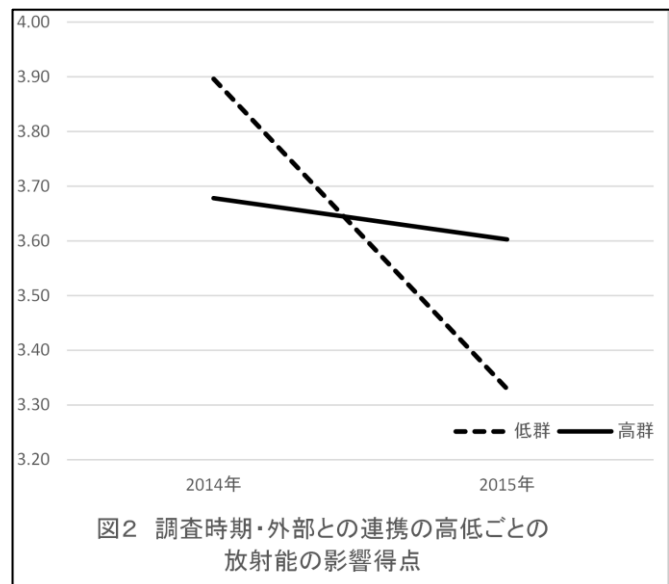


図2 調査時期・外部との連携の高低ごとの放射能の影響得点

(5)園長の取り組みと保育者の意識の関係

園長の取り組みと保育者の意識の関係を検討するため、園長調査の「園長の取り組み」の平均値をもとに、高群、低群に分類した。その後、「園長の取り組み」の高低群、調査時期を独立変数とし、保育者の意識(保育者の心配事・在り方)を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表14)。

その結果、調査時期の主効果以外では、有意な主効果は認められなかった。

表14 調査時期と園長の取り組みの高低ごとの保育者の意識(標準偏差)

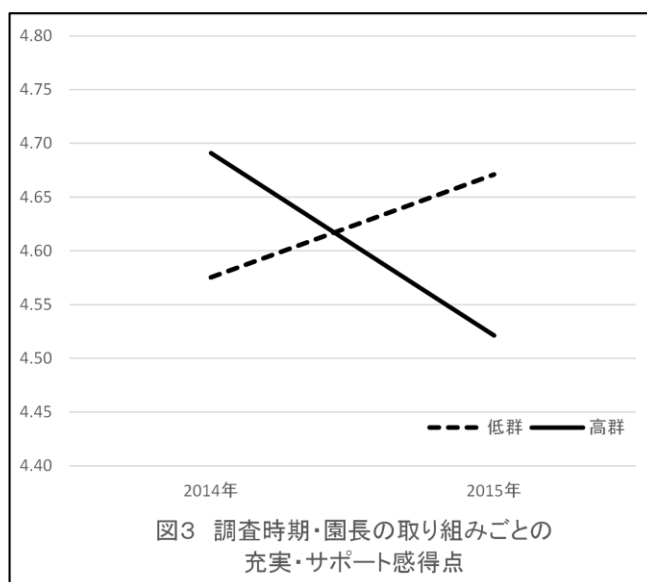
調査時期	2014年		2015年		F値			
	低群 (n=128)	高群 (n=177)	低群 (n=92)	高群 (n=69)	調査時期	園長	交互作用	
心配事	子どもの成長	3.98 (0.59)	3.96 (0.65)	3.70 (0.69)	3.61 (0.87)	21.65*** 14>15	0.63	0.25
	放射能の影響	3.89 (0.85)	3.78 (0.98)	3.46 (0.96)	3.44 (1.01)	16.97*** 14>15	0.48	0.32
	他者との関わり	3.12 (0.64)	3.08 (0.77)	2.97 (0.73)	2.87 (0.84)	6.13* 14>15	0.88	0.15
在り方	ネガティブ感情	3.77 (0.62)	3.78 (0.76)	3.67 (0.72)	3.72 (0.81)	1.36	0.23	0.13
	有能感	3.63 (0.64)	3.67 (0.67)	3.64 (0.65)	3.59 (0.79)	0.26	0.00	0.59
	充実・サポート感	4.59 (0.44)	4.69 (0.37)	4.66 (0.38)	4.53 (0.53)	1.06	0.16	7.76**

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

さらに「充実・サポート感」において、有意な交互作用が認められたため、Bonferroni の単純主効果の検討を行った(図3)。

その結果、「園長の取り組み」高群において、調査時期の単純主効果が示され、2014年は、2015年よりも得点が高いことが示された。また、「調査時期」においても単純主効果が認められ、2014年において、高群は低群より得点が高く、2015年において低群は高群より得点が高いことが示された。

以上のことから、2014年は、園長が保育に取り組んでいる園ほど、保育者の充実感が高まっているが、2015年は、園長の取り組みが充実感を下げていることが示唆された。



Ⅲ 園長調査と保護者調査の関係

本報告書第4章では、保護者の回答を項目ごとに示し、調査時期や園種による意識の違いを示した。ここでは、園長調査との関係を検討し、保護者調査の回答結果を総合的に判断するため、まず因子分析を用い因子構造を検討した。

1. 保護者調査の再分析

(1)保護者の子どもに関する心配事の因子分析

保護者の子どもに関する心配事を総合的に評価するため、子どもに関する心配事についてたずねた24項目を対象に因子分析(主因子法)を行った。

その結果、固有値の推移(8.34、1.57、1.32、1.21、1.15、0.96…)から5因子が最適であると判断した。続いて、因子負荷量.35未満であった項目を除外することとし、因子分析(主因子法、プロマックス回転)を行ったところ、2項目が除外され、22項目で構成される構造を示した(表15)。

第一因子は“聞き分けが悪い”、“イライラして怒ったり、かんしゃくをおこす”、“じっとしてられない”といった子どもの行動の中でも他者との関わりに関する項目が分類されたため、「社会性の不安」因子と命名した。第二因子は“寒さ、暑さに弱い”、“外遊びが十分に出来ていない”といった外遊びや外遊びが影響を与える事柄に関する項目が分類されたことから「外遊びの不足」因子と命名した。第三因子は“フォークなどが使えない”、“言葉の発達が遅い”といった子どもの発達の遅れに関する項目が分類されたことから「発達の遅れ」因子と命名した。第四因子は“新しい場になかなか慣れない”、“人見知りなどをする”といった初めての場に慣れないといった項目が分類されたことから「新しい場への適応不足」因子と命名した。第五因子は“好き嫌が多い”、“食が細い”といった食に関する項目が分類されたことから「食の問題」因子と命名した。

信頼性を検討するため、 α 係数を算出したところ「社会性の不安 ($\alpha=.84$)」「外遊びの不足 ($\alpha=.78$)」「発達の遅れ ($\alpha=.76$)」「新しい場への適応不足 ($\alpha=.85$)」「食の問題 ($\alpha=.72$)」となった。

表15 子どもに関する心配事の因子分析(主因子法、プロマックス回転、n=3098)

	I	II	III	IV	V	平均値(SD)
I. 社会性の不安($\alpha=.84$)						
聞き分けが悪い	.84	-.20	.08	-.01	-.01	2.51 (1.09)
イライラして怒ったり、かんしゃくをおこす	.75	.10	-.17	.05	.03	2.68 (1.18)
じっとしてられない	.69	.16	.03	-.15	-.02	2.49 (1.16)
おもちゃなどを独り占めする	.61	.05	.06	.06	-.03	2.32 (1.02)
こだわりがある	.40	.03	.07	.15	.13	2.37 (1.06)
学力	.38	.16	.10	.05	.03	2.60 (1.13)
II. 外遊びの不足($\alpha=.78$)						
寒さ、暑さに弱い	-.02	.68	-.05	.10	.09	2.21 (0.96)
外遊びが十分に出来ていない	.01	.66	-.06	-.08	-.05	3.31 (1.20)
すぐに疲れる	.02	.66	.03	-.06	.06	2.31 (1.12)
友達と遊んでいない	.07	.58	.06	-.01	-.08	2.55 (1.09)
虫などを怖がる	.02	.53	-.18	.20	.04	2.50 (1.12)
よく転ぶ	-.02	.46	.32	-.10	-.06	1.95 (1.04)
III. 発達の遅れ($\alpha=.76$)						
フォークなどが使えない	-.14	-.06	.71	.02	.14	1.46 (0.76)
言葉の発達が遅い	.07	-.05	.65	.03	-.06	1.70 (1.01)
排泄の自立が出来ていない	.15	-.13	.53	.01	-.04	1.81 (1.10)
自分のことが出来ない	.25	.08	.53	-.07	.02	2.03 (0.99)
滑り台やブランコなどで遊ばない	-.10	.33	.39	.09	-.03	1.65 (0.87)
夜泣きをする	-.03	.12	.35	.10	.01	1.56 (0.88)
IV. 新しい場への適応不足($\alpha=.85$)						
新しい場になかなか慣れない	.03	.00	.02	.88	-.06	2.35 (1.09)
人見知りなどをする	-.03	-.02	.06	.79	.01	2.13 (1.07)
V. 食の問題($\alpha=.72$)						
好き嫌が多い	.08	-.05	-.03	-.03	.82	2.66 (1.27)
食が細い	-.06	.03	.07	-.02	.69	2.21 (1.20)
	I	.64	.63	.43	.49	
	II	-	.63	.58	.53	
	III	-	-	.45	.45	
	IV	-	-	-	.42	

(2)生活の不安の因子分析

保護者の生活への心配事を総合的に評価するため、保護者の心配事についてたずねた 13 項目を対象

に因子分析（主因子法）を行った。

その結果、固有値の推移（5.81、1.20、0.90、0.87、0.68…）から四因子が最適であると判断した。続いて、因子負荷量.35未満であった項目を除外することとし、因子分析（主因子法、プロマックス回転）を行ったところ、1項目が除外され、12項目で構成される構造を示した（表16）。第一因子は“地域（よく行くところ）の放射線量”、“園（幼稚園・保育所）の放射線量”といった放射線量に関する項目が分類されたため、第一因子は「放射能への不安」因子と命名した。第二因子は“風評被害”、“原発事故問題の風化”といった風評・風化に関する項目が分類されたことから「風評・風化」因子と命名した。第三因子は“他人との交流の機会の不足”、“他の人との意見の違い”といった他者との関わりに関する項目が分類されたことから「他者との関わり」因子と命名した。第四因子は“今後の経済面や仕事”、“自分や家族の健康”といった将来への不安に関する項目が分類されたことから「将来への不安」因子と命名した。

信頼性を検討するため、 α 係数を算出したところ「放射能への不安（ $\alpha=.84$ ）」「風評・風化（ $\alpha=.75$ ）」「他者との関わり（ $\alpha=.74$ ）」「将来への不安（ $\alpha=.72$ ）」となった。

表16 生活の不安の因子分析(主因子法、プロマックス回転、n=3202)

	I	II	III	IV	平均値(SD)
I. 放射能への不安 ($\alpha=.84$)					
地域(よく行くところ)の放射線量	1.02	-.03	.02	-.07	3.30 (1.11)
園(幼稚園・保育所)の放射線量	.80	-.06	.10	.00	2.98 (1.16)
食材の放射線量	.39	.31	-.07	.16	3.85 (1.03)
II. 風評・風化 ($\alpha=.75$)					
風評被害	-.03	.74	.02	-.04	3.55 (1.03)
知人の避難	.02	.54	.33	-.18	2.73 (1.01)
支援が継続するか	-.10	.53	.07	.22	3.35 (1.14)
原発事故の問題の風化	.18	.46	-.09	.17	3.96 (0.98)
III. 他者との関わり ($\alpha=.74$)					
他の人との交流の機会の不足	.05	.01	.77	.02	2.73 (0.93)
他の人との意見の違い	.03	.05	.56	.17	2.84 (0.95)
IV. 将来への不安 ($\alpha=.72$)					
今後の経済面や仕事	-.14	-.04	.17	.71	3.50 (1.09)
自分や家族の健康	.14	.09	-.14	.69	4.10 (0.91)
子育てや教育の方法	.09	-.07	.24	.46	3.41 (0.92)
	I	.67	.43	.62	
	II	-	.54	.72	
	III	-	-	.52	

(3)2014年、2015年調査の比較

続いて、因子分析を行った各因子について2014年、2015年の変化を検討するため、2014年と2015年の得点を比較した（t検定、表17）。その結果、「社会性の不安」「放射能への不安」「風評・風化」「将来

への不安」において有意差が確認され、2015年は2014年よりも得点が低く、不安が少なくなっていることが示された。よって、年を追うごとに、様々な不安が低くなっていることが示された。全体の平均値を見ると、子どもへの心配事に関しては、平均値が低く、比較的不安は低いことが示されたが、生活の不安については、平均値が高く、未だに大きな不安を抱えていることが示された。

表17 2014年、2015年の各得点の平均値(標準偏差)

調査回	2014年		2015年	t値	
子ども 心配に 事関す る	社会性の不安	2.54 (0.82)	>	2.46 (0.83)	2.58**
	外遊びの不足	2.48 (0.74)		2.46 (0.77)	0.71
	発達の遅れ	1.72 (0.64)		1.68 (0.63)	1.70
	適応不足	2.27 (1.02)		2.22 (0.99)	1.49
	食の問題	2.44 (1.10)		2.43 (1.09)	0.29
生活の 不安	放射能への不安	3.45 (0.96)	>	3.32 (0.95)	3.66***
	風評・風化	3.46 (0.79)	>	3.34 (0.78)	4.46***
	他者との関わり	2.80 (0.83)		2.77 (0.84)	0.82
	将来への不安	3.72 (0.79)	>	3.63 (0.78)	2.97**

** $p<.01$,*** $p<.001$

2. 外遊びの制限と保護者調査

続いて、外遊びの制限と保護者の意識の関係について検討するため、外遊びの制限を独立変数とし、保育者としての意識を従属変数とする一要因分散分析を行った(表18)。

表18 2012年4月の外遊びの時間と保護者の意識(標準偏差)

	30分未満 ¹⁾	30分 ²⁾	60分 ³⁾	120分・無制限 ⁴⁾	F値	多重比較
子ども に関す る心配 事	社会性の不安	2.61 (0.86)	2.48 (0.82)	2.62 (0.84)	2.38 (0.91)	2.12
	外遊びの不足	2.63 (0.78)	2.47 (0.76)	2.53 (0.74)	2.42 (0.78)	1.21
	発達の遅れ	1.63 (0.58)	1.74 (0.68)	1.77 (0.61)	1.59 (0.62)	2.22
	適応不足	2.25 (1.06)	2.27 (1.03)	2.30 (1.04)	2.09 (1.00)	0.94
	食の問題	2.54 (1.05)	2.44 (1.11)	2.35 (1.09)	2.30 (1.13)	0.84
生活の 不安	放射能への不安	3.49 (1.02)	3.47 (0.97)	3.45 (1.00)	3.26 (0.95)	1.30
	風評・風化	3.55 (0.69)	3.45 (0.78)	3.39 (0.79)	3.41 (0.80)	0.75
	他者との関わり	2.92 (0.76)	2.81 (0.85)	2.78 (0.89)	2.61 (0.83)	2.01
	将来への不安	3.89 (0.72)	3.69 (0.83)	3.73 (0.80)	3.63 (0.76)	1.43

* $p<.05$,** $p<.01$,*** $p<.001$

その結果、全ての項目において、有意な主効果は認められず、外遊びの制限と保護者の意識の関係は示されなかった。

3. 園長調査と保護者調査

保育者調査の分析と同様に、園長調査と保護者調査の関係を検討する。園長の意識として、保育内容の変化において「一人ひとりを大事にする保育」「保育計画に見直し」という二つの因子が抽出され、活動や取り組みの変化において、「新しい保育の導入」「外部との連携」「園長の取り組み」という三つの因

子が抽出された。それらの結果をもとに、園長の意識と「子どもの不安」「生活の不安」といった保護者の不安の関係を検討した。

調査年によっても関係が異なることが予測されるため、調査年も要因に加え園長調査の関係を検討した。保育者調査との関係において、調査年の主効果は園長調査の高低によって、違いが認められなかったため、考慮せず表記したが、保護者調査においては、要因によって結果が異なったため、調査時期の主効果についても言及する。

(1)一人ひとりを大切にする保育と保護者の不安

まず、園長調査の「一人ひとりを大切にする保育」の平均値をもとに、高群、低群に分類した。その後、「一人ひとりを大切にする保育」の高低群、調査時期を独立変数として、保護者の心配事・不安を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表 19)。

表19 調査時期と一人ひとりを大切にする保育の高低ごとの保護者の意識(標準偏差)

調査時期		2014年		2015年		F値		
		低群 (n=609)	高群 (n=556)	低群 (n=787)	高群 (n=566)	調査時期	一人ひとり	交互作用
子どもに関する心配事	社会性の不安	2.56 (0.82)	2.51 (0.85)	2.49 (0.83)	2.43 (0.81)	5.14* 14>15	2.16	0.02
	外遊びの不足	2.49 (0.74)	2.46 (0.78)	2.48 (0.75)	2.44 (0.76)	0.24	1.32	0.00
	発達の遅れ	1.74 (0.65)	1.70 (0.64)	1.68 (0.62)	1.69 (0.63)	2.34	0.56	1.34
	適応不足	2.26 (1.02)	2.28 (1.04)	2.20 (1.00)	2.20 (0.98)	3.05	0.09	0.03
	食の問題	2.40 (1.09)	2.45 (1.12)	2.46 (1.11)	2.39 (1.04)	0.00	0.01	1.95
生活の不安	放射能への不安	3.48 (0.97)	3.44 (1.00)	3.32 (0.92)	3.39 (0.93)	6.78** 14>15	0.10	2.32
	風評・風化	3.44 (0.80)	3.46 (0.79)	3.33 (0.77)	3.36 (0.76)	10.56** 14>15	0.64	0.04
	他者との関わり	2.78 (0.85)	2.76 (0.83)	2.76 (0.80)	2.81 (0.86)	0.21	0.15	0.78
	将来への不安	3.69 (0.81)	3.71 (0.79)	3.63 (0.77)	3.66 (0.76)	3.79	0.68	0.01

* $p<.05$, ** $p<.01$

その結果、「社会性の不安」「放射能への不安」「風評・風化」において、調査時期の主効果が確認され、いずれも 2014 年は 2015 年よりも得点が低く、不安が低減していることが示された。また、「一人ひとりを大切にする保育」の有意な主効果、及び有意な交互作用は認められなかった。

(2)保育計画の見直しと保護者の不安

園長調査の「保育計画の見直し」の平均値をもとに、高群、低群に分類した。その後、「保育の見直し」の高低群、調査時期を独立変数として、保護者の心配事・不安を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表 20)。

その結果、「社会性の不安」「発達の遅れ」「適応不足」「放射能への不安」「風評・風化」「将来への不安」において調査時期の主効果が認められ、いずれも 2015 年調査は、2014 年よりも得点が低く、不安が低下したことが示された。「発達の遅れ」「適応不足」においては、保育の見直しの主効果が認められ、高群が低群よりも得点が高く、保育の見直しをしている園ほど、子どもの発達の遅れや適応不足への不

不安が大きいことが示された。また、有意な交互作用は認められなかった。

表20 調査時期と保育の見直しの高低ごとの保護者の意識(標準偏差)

調査時期		2014年		2015年		F値		
保育の見直し		低群 (n=688)	高群 (n=477)	低群 (n=487)	高群 (n=862)	調査時期	見直し	交互作用
子どもに関する心配事	社会性の不安	2.51 (0.82)	2.57 (0.85)	2.45 (0.84)	2.47 (0.81)	5.46* 14>15	1.16	0.36
	外遊びの不足	2.45 (0.75)	2.52 (0.76)	2.47 (0.72)	2.46 (0.77)	0.35	1.17	1.99
	発達の遅れ	1.69 (0.63)	1.76 (0.66)	1.66 (0.61)	1.69 (0.64)	4.00* 14>15	3.83* 低<高	0.30
	適応不足	2.22 (1.01)	2.35 (1.04)	2.14 (0.97)	2.23 (1.00)	5.38* 14>15	7.40** 低<高	0.19
	食の問題	2.39 (1.12)	2.47 (1.08)	2.42 (1.12)	2.43 (1.06)	0.01	0.86	0.47
生活の不安	放射能への不安	3.49 (0.95)	3.41 (1.02)	3.33 (0.93)	3.36 (0.92)	6.97** 14>15	0.45	2.12
	風評・風化	3.47 (0.79)	3.43 (0.80)	3.36 (0.75)	3.34 (0.78)	9.20** 14>15	0.96	0.06
	他者との関わり	2.76 (0.84)	2.78 (0.84)	2.77 (0.79)	2.78 (0.85)	0.06	0.17	0.01
	将来への不安	3.71 (0.79)	3.69 (0.81)	3.63 (0.79)	3.64 (0.76)	4.01* 14>15	0.00	0.21

* $p<.05$, ** $p<.01$

(3)新しい保育の導入と保護者の不安

園長調査の「新しい保育の導入」の平均値をもとに、高群、低群に分類した。その後、「新しい保育の導入」の高低群、調査時期を独立変数として、保護者の不安を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表21)。

表21 調査時期と新しい保育の導入の高低ごとの保護者の意識(標準偏差)

調査時期		2014年		2015年		F値		
新しい保育の導入		低群 (n=435)	高群 (n=718)	低群 (n=644)	高群 (n=666)	調査時期	導入	交互作用
子どもに関する心配事	社会性の不安	2.55 (0.85)	2.52 (0.83)	2.48 (0.81)	2.43 (0.83)	5.26* 14>15	1.50	0.10
	外遊びの不足	2.49 (0.77)	2.46 (0.75)	2.48 (0.76)	2.45 (0.76)	0.21	0.68	0.02
	発達の遅れ	1.71 (0.64)	1.73 (0.65)	1.68 (0.62)	1.67 (0.63)	3.00	0.00	0.29
	適応不足	2.25 (1.00)	2.27 (1.04)	2.21 (0.96)	2.18 (1.02)	2.65	0.02	0.38
	食の問題	2.37 (1.09)	2.45 (1.11)	2.46 (1.11)	2.40 (1.07)	0.19	0.04	2.17
生活の不安	放射能への不安	3.47 (0.98)	3.45 (0.99)	3.41 (0.91)	3.30 (0.93)	7.29** 14>15	2.89	1.76
	風評・風化	3.43 (0.78)	3.46 (0.81)	3.38 (0.76)	3.32 (0.77)	8.91** 14>15	0.16	1.83
	他者との関わり	2.77 (0.84)	2.77 (0.85)	2.79 (0.83)	2.77 (0.83)	0.12	0.07	0.11
	将来への不安	3.69 (0.82)	3.71 (0.79)	3.69 (0.74)	3.60 (0.79)	3.02	1.01	2.99

* $p<.05$, ** $p<.01$

その結果、「社会性の不安」「放射能への不安」「風評・風化」において、調査時期の主効果が確認され、いずれも2014年は2015年よりも得点が低く、不安が低減していることが示された。また、新しい保育

の導入の有意な主効果、及び有意な交互作用は認められなかった。

(4)外部との連携と保護者の不安

外部との連携と保護者との関係を検討するため、園長調査の「外部との連携」の平均値をもとに、高群、低群に分類した。その後、「外部との連携」の高低群、調査時期を独立変数として、保護者の心配事・不安を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表 22)。

表22 調査時期と外部との連携の高低ごとの保護者の意識(標準偏差)

調査時期		2014年		2015年		F値		
外部との連携		低群 (n=728)	高群 (n=425)	低群 (n=694)	高群 (n=616)	調査時期	連携	交互作用
子どもにも関する心配事	社会性の不安	2.50 (0.82)	2.57 (0.86)	2.47 (0.82)	2.45 (0.82)	6.13* 14>15	0.54	1.75
	外遊びの不足	2.46 (0.74)	2.51 (0.79)	2.43 (0.76)	2.50 (0.75)	0.24	4.10* 低<高	0.14
	発達の遅れ	1.73 (0.65)	1.71 (0.63)	1.66 (0.62)	1.69 (0.63)	2.82	0.05	0.82
	適応不足	2.26 (1.00)	2.27 (1.07)	2.16 (0.96)	2.23 (1.02)	2.76	1.02	0.63
	食の問題	2.40 (1.10)	2.45 (1.12)	2.44 (1.10)	2.41 (1.07)	0.00	0.04	0.67
生活の不安	放射能への不安	3.47 (0.96)	3.45 (1.02)	3.35 (0.93)	3.36 (0.92)	6.72** 14>15	0.05	0.11
	風評・風化	3.44 (0.81)	3.47 (0.78)	3.33 (0.77)	3.37 (0.76)	10.04** 14>15	1.15	0.08
	他者との関わり	2.77 (0.84)	2.77 (0.84)	2.78 (0.86)	2.78 (0.80)	0.10	0.03	0.00
	将来への不安	3.67 (0.80)	3.76 (0.80)	3.66 (0.77)	3.62 (0.77)	5.06* 14>15	0.46	4.35*

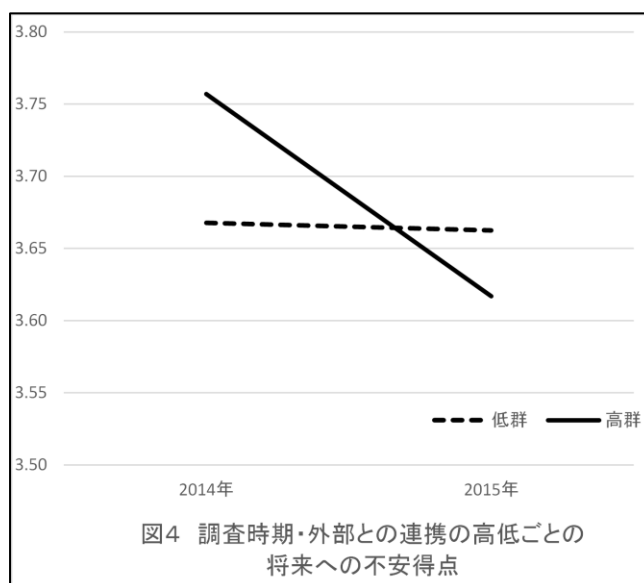
* $p<0.05$,** $p<0.01$

その結果、「社会性の不安」「発達の遅れ」「適応不足」「放射能への不安」「風評・風化」「将来への不安」において調査時期の主効果が認められ、いずれも2015年調査は、2014年よりも得点が低く、不安が低下したことが示された。また、「外遊びの不足」においては、外部との連携の主効果が認められ、高群が低群よりも得点が高く、外部との連携を図っている園の保護者ほど、外遊びの不足を不安に捉えていることが示された。

さらに「将来への不安」において、有意な交互作用が認められたため、Bonferroniの単純主効果の検討を行った(図4)。

その結果、「外部との連携」高群において、「調査時期」の単純主効果が示され、2014年は、2015年よりも得点が高いことが示された。また、「2014年」において単純主効果が認められ、高群は低群より得点が高いことが示された。

以上のことから、2014年は、外部と連携を多くとっている園の保護者は、将来への不安が高かつ



たが、2015年は、外部との連携をとっている園の保護者は将来への不安が低くなることが示された。

(5)園長の取り組みと保護者の不安

園長の取り組みと保護者の意識の関係を検討するため、園長調査の「園長の取り組み」の平均値をもとに、高群、低群に分類した。その後、「園長の取り組み」の高低群、調査時期を独立変数とする、保護者の心配事・不安を従属変数とする二要因の分散分析を行った(表23)。

表23 調査時期と園長の取り組みの高低ごとの保護者の意識(標準偏差)

調査時期	2014年		2015年		F値			
	低群 (n=469)	高群 (n=684)	低群 (n=692)	高群 (n=618)	調査時期	園長	交互作用	
子どもに関する心配事	社会性の不安	2.57 (0.81)	2.51 (0.85)	2.48 (0.80)	2.43 (0.84)	5.84* 14>15	2.65	0.02
	外遊びの不足	2.46 (0.75)	2.48 (0.76)	2.42 (0.74)	2.52 (0.77)	0.04	3.69	1.52
	発達の遅れ	1.74 (0.63)	1.71 (0.65)	1.66 (0.60)	1.69 (0.65)	3.58	0.00	1.39
	適応不足	2.28 (1.03)	2.26 (1.02)	2.17 (0.96)	2.22 (1.03)	2.99	0.05	0.67
	食の問題	2.50 (1.11)	2.37 (1.10)	2.41 (1.08)	2.45 (1.10)	0.00	0.87	3.80
生活の不安	放射能への不安	3.49 (0.96)	3.44 (1.00)	3.35 (0.92)	3.36 (0.93)	7.83** 14>15	0.27	0.39
	風評・風化	3.45 (0.80)	3.45 (0.80)	3.37 (0.75)	3.33 (0.79)	10.09** 14>15	0.32	0.19
	他者との関わり	2.79 (0.86)	2.75 (0.83)	2.81 (0.83)	2.74 (0.83)	0.03	2.62	0.19
	将来への不安	3.64 (0.81)	3.74 (0.79)	3.67 (0.77)	3.61 (0.77)	2.70	0.24	6.16*

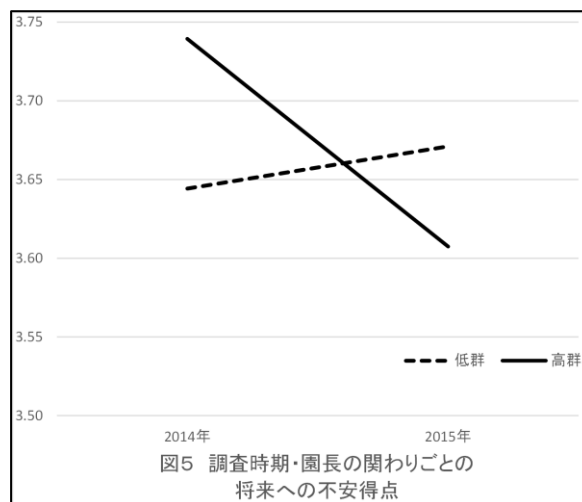
* $p<.05$, ** $p<.01$

その結果、「社会性の不安」「放射能への不安」「風評被害」において調査時期の主効果が認められ、いずれも2015年調査は、2014年よりも得点が低く、不安が低下したことが示された。また、園長の取り組みの有意な主効果は認められなかった。

さらに「将来への不安」において、有意な交互作用が認められたため、Bonferroniの単純主効果の検討を行った(図5)。

その結果、「園長の取り組み」高群において、「調査時期」の単純主効果が示され、2014年は、2015年よりも得点が高いことが示された。

以上のことから、2014年は、園長が積極的に保育に取り組んでいる園ほど、保護者の将来への不安を高めていたが、2015年は、園長の取り組みが保護者の将来への不安を低下させていることが示唆された。



IV まとめ

ここでは、「外遊びの制限と保育者、保護者の意識」「保育内容の変化と保育者、保護者の意識」「活動や取り組みの変化と保育者、保護者の意識」の三つの視点から、本章の結果を考察する。そ

して最後に、本委員会での活動について振り返る。

1. 外遊びの制限と保育者、保護者の意識

外遊びの制限と保育者の意識（保育者の心配事、保育者としての在り方）、保護者の意識（子どもへの心配事、生活の不安）の関係を検討した。その結果、保護者の意識に関しては、外遊びの制限との関係が示されなかった。一方、保育者の意識において、外遊びを30分未満に制限している保育者は、子どもの成長に不安を抱えていること、ネガティブな感情が高いことが示された。

外遊びが出来ないことは、子どもの心身に様々な影響があると考えられる。発達調査においても震災後の2012年は、震災前に比べ、多くの領域で得点が低下していることが示されており⁽⁹⁾、これらに震災やその後の戸外遊びの減少が影響を与えた可能性もある。そのため、外遊びを強く制限することで、子どもの発達への悪影響に不安を感じたと考えられる。また、「自然環境との接触の減少は、保育環境の中でカバーできる」といった項目に関して、外遊びの制限が少ない園は、得点が低いことも示されている。この場合、保育環境の中でのカバーが難しいという思いが制限を緩和することに繋がったと考えられる。

さらに統計的な有意差が示された部分以外では、外遊びが「30分未満」、「120分・無制限」といった両極端な園において、得点のパターンが似通っていることにも注目をする必要があるかもしれない。外遊びを強く制限している場合、先に挙げたように子どもの外遊びの不足を招くため、子どもの将来を考えると不安も強いと考えられる。また、外遊びの制限がない状態では、外遊びが十分に可能であり、子どもの自然経験や体力面に関しての不安は少ないと考えられる。ただし、戸外活動が多いということは、放射線量からの影響を強く受ける可能性もあり、将来的な健康被害に関しての不安は拭いきれないだろう。以上のように、不安の内容は違うが、極端な制限は、大きな不安を抱くことに繋がると考えられる。

2. 調査時期ごとの保育者、保護者の意識

保育者の心配事に関しては、調査時期ごとに減少していることが示されたが、保育者としての在り方は、年度によっても調査時期ごとに得点差は確認できず、調査から時間が経っても、保育者としての感情については、大きな変化がないことが示された。保護者に関しても、多くの分析で「社会性の不安」「放射能の不安」「風評・風化」の3因子において年々不安が減少していることが示された。これは、第3章、第4章でも述べたように、年を重ねるごとに除染が進んだことなどもあり、不安が低減しているためだと考えられる。

3. 保育内容の変化と保育者、保護者の意識

保育内容の変化において、「一人ひとりを大切にする保育」を心がけている園の保育者は、「子どもの他者との関わりへの心配」や「ネガティブな感情」が低いこと、「有能感」が高いことが示された。一人ひとりを大切にする保育を行うことで、子どもの個性を理解し、子どもに寄り添いながら子どもの発達を導き、子どもの社会性に対する不安やネガティブな感情が低下し、有能感が増したと考えられる。一方、「保育計画の見直し」においては、保育者の意識と関係が示されなかった。

保護者に関しては、「一人ひとりを大切にする保育」を独立変数に組み込んで保護者の不安について検討したところ、「社会性の不安」「放射能の不安」「風評・風化」の3因子において年々不安が減少していることが示された。さらに「保育の見直し」を独立変数に組み込んで分析したところ、「社会性の不安」「発達の遅れ」「適応不足」「食の問題」「放射能への不安」「風評・風化」「将来への不安」といった六つの因子で年を追うごとに不安が低下したことが示された。このことは、保育計画の見直しが同程度であ

れば、不安が低くなっていることを意味しており、保育の見直しが子育てだけでなく、生活を支える手助けになっていることも示唆された。

さらに、「保育計画の見直し」を十分にしている園ほど、保護者の「発達の遅れ」や「適応不足」が大きいことが示された。これは、保育の見直しをすることにより、子どもの生活環境が変化することで、発達がいったん停滞している可能性もある。しかし、近年は、発達の偏りのある子どもの問題等も指摘されていることから、子どもの発達への不安の高さから、保育計画の見直しを図った可能性もある。

4. 活動や取り組みの変化と保育者、保護者の意識

保育者では、活動や取り組みの変化において、「新しい保育の導入」を心がけている園の保育者は、子どもに対する心配事が低いことが示された。震災後、外遊びの制限など環境が大きく変わる中で、これまでと異なった環境に対応するため、新たな保育を導入することで、徐々に不安が低下していることが示された。

また、外部との繋がりが低い保育者は、2015年は放射能に関する不安が低下していることが示された。外部との連携の中には、「専門機関等外部関係者との交流」も含まれる。そのため、外部と関わりが多いことは、放射能や子どもの発達についての専門的知識を身に付けられると考えられる。その場合、現状を的確に判断できるため、放射能などへの不安はあまり変化し難いと考えられる。ただし、外部との関係が少ない場合、専門的知識が得られないため、根拠のない不安や安心感により引き起こす危険性も含んでいる。

そして、2014年は、園長が積極的に保育に取り組んでいる園ほど、保育者の充実感が高いが、2015年は、園長が積極的に取り組んでいる園ほど保育者の充実感が低いことが示された。危機的状況においては、園のリーダーである園長の取り組みや、態度は、保育者の大きな力になる。ただし、保育環境が比較的安定した中で、園長が積極的に取り組みすぎることは、保育者の役割を奪う可能性があり、充実感の低下を生むことが考えられる。

保護者では、2014年に外部と連携を多くとっている園の保護者は、将来への不安が高かったが、2015年は、外部との連携をとっている園の保護者の方が将来への不安が低くなることが示された。この結果は、保育者と逆の傾向であり、注視する必要がある。さらに、2014年は、園長が保育に取り組んでいる園ほど、保護者の将来への不安を高めていたが、2015年は、園長の取り組みが保護者の将来への不安を下げていることが示唆された。外部と連絡を取ることは、様々な情報が錯綜するため、時として大きな不安を感じてしまう可能性もある。そして、それらの情報は、園長が中心となって集めている場合が多い。そのため、2014年の段階では、情報の多さが将来への不安を高めたが、保育環境が落ち着いてきた2015年は多くの情報や園長の関わりが、保護者の不安低下に結び付いたと考えられる。

5. おわりに

本委員会に携わり、福島県を対象に質問紙調査のとりまとめを行ってきた。その中で、大きな不安と制限の中で保育を行っていた状況から、徐々にではあるが、不安と制限が減少してきたことを示された。その背景には、保育前後に除染活動を行ったり、専門機関と連携したり、保護者説明などを多くしたり、非常に大きな労力をかけた保育者の存在があった。ただし、震災半年後の段階で福島県を訪れ、保育中の子どもや子どもと関わる保育者を見ると、とても生き生きしており、調査で浮かび上がった困難な面とは異なる印象を受けたのも事実である。

それらの異なる面を表すことが難しく、もどかしい思いで報告書をまとめてきたが、震災直後から、

子ども達一人ひとりには元気に笑顔で生活し、保育者は、放射能のことを念頭に置きつつも、第一に子どもと向き合い、命を守るため、保育者自身も笑顔で子どもに関わっていた。

以下に挙げるのは、2014年2月に、四国大学の学生とともに福島県の幼稚園・保育所にインタビュー調査に行った際の結びの文章である⁽⁹⁾。

福島に行く前に調べたことは、マイナスなイメージばかりだった。それは、福島は大変だと考える自分達の気持ちがあったのかもしれない。しかし、福島の子どもたちや保育者は前に向かって日々生活していた。子どもたちが少しでもより良い環境で生活ができるように保育者や保護者、大人が努力し、工夫しているからこそ放射線量はずいぶん下がり、外遊びができるまでになった。そこまでには、保育者の多大な努力があったと考えられる。これらは、子どもたちに元気に育てほしいという願いがあるからこそ、続けてこられたのだと思う。そして、子どもたちも制限や環境の変化にも耐えて、強く生活しているのを知り、子どもの適応力の高さは素晴らしいと感じた。まだまだ、課題はたくさんあるが日々疑問をもって前に向かって進んでいかれている姿勢に触れ、自分自身の保育を考え直すきっかけとなった。

ここで述べられているように、情報や知識など一つの側面だけではなく、実際に自分の目で福島県の子どもや保育者、保護者の姿を目にすることで、自らの保育への考えや、在り方を考えていくことが大切だと強く思う。そのことが、何よりも福島県の保育を理解することに繋がるのではないかと思う。

ここまで多くの調査を行い、非常にたくさんのデータを収集し、報告書には載せきれないほどの分析を行ってきた。ここで挙げたデータだけでなく、実際の福島県の保育を照らし合わせながら、検討を続けていくことが今後も必要である。

【本章調査の役割分担】

調査用紙の作成：関口はつ江・加藤孝士

配布・回収：郡山女子大学附属幼稚園

データ入力：加藤孝士・永井知子・四国大学 学生・四国大学短期大学部 学生

<引用文献>

- (1) 『震災に生きる子どもと保育』、Ⅰ. 協力園対象継続研究 2. 福島市・郡山市の幼稚園保護者の意識に関する調査報告、日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013) 加藤孝士 p. 93-125.
- (2) 『放射能災害下の保育問題研究—平成 25 年・26 年調査報告書—』、第 4 章 協力園保護者調査 Ⅰ 協力園継続調査について、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 加藤孝士 p. 203-209.
- (3) 『放射能災害下の保育問題研究—平成 25 年・26 年調査報告書—』、第 4 章 協力園保護者調査 Ⅱ 2013、2014 年、新入園児保護者調査、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 加藤孝士 p. 210-221.
- (4) 『震災に生きる子どもと保育』、Ⅱ. 放射能災害地域と関東圏の比較 1. 園長(所長)、教諭・保育士対象調査、日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013) 音山若穂 p. 168-196.
- (5) 『放射能災害下の保育問題研究—平成 25 年・26 年調査報告書—』、第 5 章 Ⅰ. 2014 年、2015 年調査

- 園長調査、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 永井知子 p. 223-233.
- (6) 『震災に生きる子どもと保育』、I. 協力園対象継続研究 1. 調査協力園における保育の実態 日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013) 賀門康博 p. 79-92.
- (7) 『放射能災害下の保育問題研究—平成 25 年・26 年調査報告書—』、第 2 章 調査協力園実践調査報告 I. 保育の基本的内容および子どもの状況について、日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会 (2015) 賀門康博 p. 40-44.
- (8) 『震災に生きる子どもと保育』、I 協力園対象継続研究 3. 協力園幼児の発達調査 日本保育学会 災害時における保育問題検討委員会 (2013) 長田瑞恵 p. 126-161.
- (9) 放射能災害下の保育について—福島県の保育者へのインタビューを通じて—、第 55 回中・四国保育学生研究大会発表要旨集録 (2014) 石川咲・大江亜実・大西智子・大西佐季・加藤美咲・後藤志織 p. 52-53.

巻末付録：本研究で使用した調査用紙

I 協力園保育の状況調査用調査用紙

1. デイリープログラムの変化に関するアンケート（1回目）

【原発事故による保育内容の変化に関するアンケート調査】

梅雨の晴れ間にのぞく青空に夏らしさを感じる今日この頃です。

先に行われました放射能災害下における保育実践発達研究部会第1回会合で話がありました、調査のための基礎データとして、年度間の保育環境の基本的な変化を把握致したく、各協力園に対してアンケート調査を行いたく存じます。

お手数をおかけしますが、こういったデータなどから、お子さん達、保護者、そして保育者自身の現状を把握し、情報の共有、お子さん達の発達の確保のための保育の改善を目指していきたいと考えております。

お忙しいところ申し訳ございませんが、よろしくお願いいたします。

日本保育学会 災害時における子どもと保育検討委員会
放射能災害下における保育実践・発達研究部会(仮称)

注意点

- 1) 登園完了時間／降園時間に関しては、バスや早朝・延長保育を考えない、入園案内等にある時間を参考に
してご記入下さい。(各園の登園時間)
- 2) 活動の様子(一斉活動など)の時間については、以下の様な一日をモデルとして、お考え下さい。
<例> ・7月上旬の平日(午後保育)
・天候…晴れ
・登降園時間は通常通り
・一般的な日 (運動会の練習など、普段とは違う特別な一斉活動が無い)
- 3) 一斉活動とは、クラス全員が集まった状態で、同一の内容(活動)を行うものとします
- 4) 記載する時間は、厳密に計測したものでなく、記載者の方の主観で結構です。(おおよその時間で結構です)
- 5) 各園1枚の返答となります。

(返信先など)

記入が出来ましたら、お手数ですが基本情報以降を以下までFAXでお送り下さい。

返送先 : 郡山女子大学附属幼稚園(担当:賀門)

Tel/Fax:024-923-4001

返送期日: 平成23年7月22日(金)

【基本情報】

○幼稚園名: _____

○記載者名: _____

(記載者の方の立場: 園長 ・ 副園長 ・ 主任 ・ 教諭 ・ その他())

○平成22年度(昨年度)の様子

(質問1) 登園完了時間 … 時 分

(質問2) 降園時間(※曜日ごとに違いがある場合は曜日に○をつけ、別個にご記入下さい)

… (月・火・水・木・金 曜日) 時 分

… (月・火・水・木・金 曜日) 時 分

(質問3) 保育内容について

a) 学年で活動時間(自由遊び/一斉活動)の区別はありますか？(○をつけて下さい)

1:(ほとんど)無い (→bにお進み下さい)

2:少しある (→cにお進み下さい)

3:区別がある (→cにお進み下さい)

b) (aが1の方)

(1) 一日のうち、自由遊びの時間 …約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

(2) 一日のうち、一斉活動の時間 …約 時間 分

→ 一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか … 屋外 / 屋内

c) (aが2もしくは3の方)

【年少組】

(1) 一日のうち、自由遊びの時間 …約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

(2) 一日のうち、一斉活動の時間 …約 時間 分

→ 一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか … 屋外 / 屋内

【年中組】

(1) 一日のうち、自由遊びの時間 …約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

(2) 一日のうち、一斉活動の時間 …約 時間 分

→ 一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか … 屋外 / 屋内

【年長組】

(1) 一日のうち、自由遊びの時間 …約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

(2) 一日のうち、一斉活動の時間 …約 時間 分

→ 一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか … 屋外 / 屋内

○平成23年度(今年度)の様子

(質問4)登園完了時間 … 時 分

(質問5)降園時間(※曜日ごとに違いがある場合は曜日に○をつけ、別個にご記入下さい)

… (月・火・水・木・金 曜日) 時 分

… (月・火・水・木・金 曜日) 時 分

(質問6)保育内容について

a) 学年で活動時間(自由遊び/一斉活動)の区別はありますか?(○をつけて下さい)

1:(ほとんど)無い (→bにお進み下さい)

2:少しある (→cにお進み下さい)

3:区別がある (→cにお進み下さい)

b) (aが1の方)

(1)一日のうち、自由遊びの時間 …約 時間 分

→その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

(2)一日のうち、一斉活動の時間 …約 時間 分

→一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか … 屋外 / 屋内

c) (aが2もしくは3の方)

【年少組】

(1)一日のうち、自由遊びの時間 …約 時間 分

→その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間…約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

(2)一日のうち、一斉活動の時間 …約 時間 分

→一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか … 屋外 / 屋内

【年中組】

(1)一日のうち、自由遊びの時間 …約 時間 分

→その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間…約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

(2)一日のうち、一斉活動の時間 …約 時間 分

→一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか … 屋外 / 屋内

【年長組】

(1)一日のうち、自由遊びの時間 …約 時間 分

→その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間…約 時間 分

→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 …約 時間 分

(2)一日のうち、一斉活動の時間 …約 時間 分

→一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか … 屋外 / 屋内

(質問7) 以下は今年度についてお聞きします

a) 第一保育期(1学期)について

i) 中止になった行事がありましたらご記入下さい。

--

ii) 内容を変更(縮小等)したり、時期をずらして行った行事がありましたらご記入下さい。

--

a) 第二保育期(2学期)以降の今年度の行事について

i) 中止になる予定の行事がありましたらご記入下さい。

--

ii) 内容を変更(縮小等)し足り、時期をずらして行う予定の行事がありましたらご記入下さい。

--

(質問8) 今年度になり、園外の施設(公共施設など)を保育活動の中で活用する日は増えましたか？

1: 変化なし

2: 増えた

→具体的な利用施設名 (例:カルチャーパーク体育館等)

--

3: 減った

(質問9) 今年度、災害の影響のためカリキュラムを変更せざるを得なかったことがありましたらお書き下さい。

--

(質問10) 今年度の保育実施に当たり、特に配慮していることをお書き下さい。

--

お忙しい中ご協力いただき、ありがとうございました。

2. デイリープログラムの変化に関するアンケート（2回目）

【原発事故による保育内容の変化に関するアンケート調査】

明けましておめでとうございます。各園におかれましても新年への期待と共に、今年度の最後である3期に向けて気持ちを引き締めて新しい年を迎えていらっしゃるのではないのでしょうか。

さて、昨年末に行われました放射能災害下における平成25年度保育実践発達研究部会第2回会合で話がありました、調査のための基礎データとして、年度間の保育環境の基本的な変化を把握致したく、各協力園に対してアンケート調査を行いたく存じます。

お手数をおかけしますが、こういったデータなどから、園児達、保護者、そして保育者自身の現状を把握し、情報の共有による保育の改善と、福島の現状を広く発信し風化させないことを目指していきたくと考えております。

お忙しいところ申し訳ございませんが、よろしく願いいたします。

一般社団法人日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会

注意点

- 1) 登園完了時間／降園時間に関しては、バスや早朝・延長保育を考えない、入園案内等にある時間を参考にしてご記入下さい。(各園の登園時間)
- 2) 活動の様子(一斉活動など)の時間については、以下の様な一日をモデルとして、お考え下さい。
<例> ・7月上旬の平日(午後保育)
・天候…晴れ
・登降園時間は通常通り
・一般的な日 (運動会の練習など、普段とは違う特別な一斉活動が無い)
- 3) 一斉活動とは、クラス全員が集まった状態で、同一の内容(活動)を行うものとします
- 4) 記載する時間は、厳密に計測したものでなく、記載者の方の主観で結構です。(おおよその時間で結構です)
- 5) 各園1枚の返答となります。

[返信先など]

記入が出来ましたら、お手数ですが基本情報以降を以下までFAXでお送り下さい。

返送先 : 郡山女子大学附属幼稚園 (担当: 賀門)

Tel/Fax : 024-923-4001

返送期日 : 平成26年2月14日(金)

本調査は「日本保育学会放射能災害にかかる保育問題研究委員会」による調査であり、本研究に使用する資料及びデータについては、先の目的について研究する以外には使用いたしません。また、特区邸の個人情報及び園の状況などが特定されないように、園名の公表などを控えた上で検討及び報告をまとめてまいります。なお、何らかに理由で園名等を示す必要が生じた場合は、個別に許可を得た上で示すようにいたします。

【基本情報】

○幼稚園名： _____

○記載者名： _____

(記載者の方の立場： 園長 ・ 副園長 ・ 主任 ・ 教諭 ・ その他 ())

○平成25年度(今年度)の様子

〔質問1〕登園完了時間 . . . 時 分

〔質問2〕降園時間(※曜日ごとに違いがある場合は曜日に○をつけ、別個にご記入下さい)

. . . (月・火・水・木・金 曜日) 時 分

. . . (月・火・水・木・金 曜日) 時 分

〔質問3〕保育内容について

a) 学年で活動時間(自由遊び/一斉活動)の区別はありますか？(○をつけて下さい)

1：(ほとんど) 無い (→bにお進み下さい)

2：少しある (→cにお進み下さい)

3：区別がある (→cにお進み下さい)

b) (aが1の方)

(1) 一日のうち、自由遊びの時間 . . . 約 時間 分
→ その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間 . . . 約 時間 分
→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 . . . 約 時間 分

(2) 一日のうち、一斉活動の時間 . . . 約 時間 分
→ 一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか . . . 屋外 / 屋内

c) (aが2もしくは3の方)

【年少組】

(1) 一日のうち、自由遊びの時間 . . . 約 時間 分
→ その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間 . . . 約 時間 分
→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 . . . 約 時間 分

(2) 一日のうち、一斉活動の時間 . . . 約 時間 分
→ 一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか . . . 屋外 / 屋内

【年中組】

(1) 一日のうち、自由遊びの時間 . . . 約 時間 分
→ その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間 . . . 約 時間 分
→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 . . . 約 時間 分

(2) 一日のうち、一斉活動の時間 . . . 約 時間 分
→ 一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか . . . 屋外 / 屋内

【年長組】

(1) 一日のうち、自由遊びの時間 . . . 約 時間 分
→ その中で、外遊びを最もよくするお子さんの外での活動時間 . . . 約 時間 分
→ その中で、外遊びを最もしないお子さんの外での活動時間 . . . 約 時間 分

(2) 一日のうち、一斉活動の時間 . . . 約 時間 分
→ 一斉活動は、屋外と室内のどちらが多いですか . . . 屋外 / 屋内

d) 外遊び(園庭)での活動において、放射線問題による制限は現在ありますか？

1 : 外遊びを行っていない

2 : 時間を制限して行っている

→ (1日あたり… 時間 もしくは 1週間あたり… 時間)

3 : 時間制限は無い

1 (行っていない) もしくは2(制限あり)の方は、以下もお答え下さい。

(1) 現在の制限を緩める(外遊びの時間を多くする)意向はありますか？

→ ある ・ ない

2 制限を緩める際のネックになっているのはどういったことですか？以下の選択肢の頭にある ()の部分に重視している順番で1～ の数字をご記入下さい。

()放射線の情報の混乱 ・ ()保護者の不安感 ・ ()線量が高いから

()園児の健康を守る自信が無い ・ ()行政(自治体)の指示に従っている

()周辺の園や学校の状態に合わせて

f) 砂場遊びをしていますか？

1 : 砂場遊びを行っていない

2 : 室内砂場を作り行っている

3 : 屋外砂場を時間を制限して行っている

→ (1日あたり… 時間 もしくは 1週間あたり… 時間)

4 : 屋外砂場を時間制限無しで行っている

g) 放射線量の変化を以下にご記入下さい(単位は $\mu\text{Sv/h}$)

	園庭	保育室	ホール	近隣の公園等
震災直後(H23年の4～5月(除染前))				
現在(H25の11)月				

h) 震災から現在までの除染対応状況を教えてください。

1) 表土除去 回数: 回 (実施時期: 年 月頃、 年 月頃)

2) 高圧除染 ・ 市による高圧除染 … 実施した (回) ・ 実施しなかった
 ・ 園による高圧除染 …

実施した (今は行っていない・今も行っている) ・ 実施しなかった

3) その他の除染 ()

4)除染のために撤去した物(遊具、備品、施設環境等)があれば以下にご記入下さい

5)除染を行った現在の心境を教えてください

5-1)お子さんの健康は保障出来るようになったと思う

- ①そう思う ②どちらかというと思う ③どちらとも言えない
④あまりそう思わない ⑤そう思わない

5-2)上記で感じたお気持ちをお聞かせ下さい(自由記述)

〔質問4〕 今年度のためカリキュラムにおいて、以下に挙げた留意内容の内、上位3つの()内に1, 2, 3をご記入下さい。

- ()規範意識 ・ ()気持ちの安心や安定 ・ ()早期教育 ・ ()健康面
()自然との触れあい ・ ()運動能力の向上 ・ ()放射能についての教育
()地域との繋がり ・ ()言葉の使い方 ・ ()表現活動(歌、演奏、踊り等)
()子ども同士の縦の繋がり ・ ()親子の触れあい ・ ()子どもの発見と探究心
()芸術などの鑑賞 ・ ()保護者への子育て教育 ・ ()放射線教育
()防災教育 ・ ()地域との繋がり ・ ()世代間の繋がり

〔質問5〕 震災前と震災後で保育の中で感じているお子さん達の違いがありましたら、以下に自由に書き下さい。

〔質問6〕 今年度の保育実施に当たり、配慮していることを自由にお書き下さい。

〔質問7〕 震災後の保育者の様子について「よく頑張っている」と思うところがあれば自由にお書き下さい。

お忙しい中ご協力いただき、ありがとうございました。

3. 園活動の記録（1回目）

放射能災害下の保育実践記録

1 デイリープログラム ～各月の代表的な1日～（各学年毎に月1枚） 表1

できれば4月に遡って各月の1日

- ・ 教職員の出勤から登園まで、保育中、子どもの退園から職員の退勤まで、全体を含める。
- ・ 記入の仕方は適宜時間を区切る、用紙を拡大するなど園の実態に合わせる。

2 指導計画 ～ 保育のねらい、活動内容の変更～（各学年毎に月1枚） 表2

できれば4月に遡って毎月1枚

- ・ 特に指導のねらいの変更、活動の変更を中心に。
ねらいと活動を変えている場合、
ねらいは変えずに活動を変えている場合、
活動を変えずにねらいを変えている場合、
例年と同じねらい活動である場合など

3 毎日の保育中の子どもの状態、行動、ことば、表情など（毎日随時記録） 表3

- ・ 小型の記録用紙に随時記入する。
発見や考察は、できる場合のみ保育終了後に記入。
地震、津波、放射能に関わるとみられる事例を中心に。
特に今年の子どもの特徴的な状態。
- ・ 一定期間毎にまとめ、園の指導計画作成、個別指導に役立てる。
保育者の次の保育への手がかりにして、計画に反映した場合は印など。（どの様に生かしたかもできれば記入）
特に子ども理解（再認識）に役立った事例は印など。

表1 1日の生活の流れ

園名 (月) 年齢 (年少 年中 年長)

時間	保育者の活動	子どもの活動	配慮点・昨年との違い
登園 まで			
降園 後			

表2 カリキュラムの変更と評価

園名 (月) 年齢 (年少 年中 年長)

子どもの状態	保育のねらい	保育方法 (主な活動)	配慮点・昨年との違い

反省・評価

表3 エピソード (具体的な記録)

園名 (月 日) 組名

時間	クラスや活動の状況、環境設定、保育者の行動等	子どもの行動、ことば、保育者との相互作用等

考察 (保育者の受け止め、気づき、反省、計画への反映等)

4. 園活動の記録（2回目）

放射能災害下の保育実践記録

1 デイリープログラム ～各月の代表的な1日～（季節毎に1枚） 表1

- ・ 4月に遡って季節毎に各月〔4月、7月、10月、1月〕の1日
- ・ 教職員の出勤から登園まで、保育中、子どもの退園から職員の退勤まで、全体を含める。
- ・ 記入の仕方は適宜時間を区切る、用紙を拡大するなど園の実態に合わせる。

2 指導計画 ～ 保育のねらい、活動内容の変更～（季節毎に1枚） 表2

- ・ 4月に遡って季節毎に各月〔4月、7月、10月、1月〕のねらい(指導のポイント)をお書き下さい。
- ・ 特に指導のねらいの変更、活動の変更を中心に。
ねらいと活動を変えている場合、
ねらいは変えずに活動を変えている場合、
活動を変えずにねらいを変えている場合、
例年と同じねらい活動である場合など

3 毎日の保育中の子どもの状態、行動、ことば、表情など（随時記録） 表3

- ・ メモ帳など小型の記録用紙に随時記入する。
…発見や考察は、できる場合のみ保育終了後に記入。
- ・ 「地震、津波、放射能」に関わるとみられる事例に限らず「今の子どもの姿から個人的に気になっている特徴的な状態」を記入して下さい。
…写真などにとって添付していただいても結構です(プライバシーに関しては十分に配慮し、発表などに使用したい時には改めて承諾を得ます)

4 “園便り” “クラス便り”

- ・ 保育の方向や意図の分析のために、各園(学年)で配布している「園便り」と「クラス便り」をご提供下さい。
- ・ 普段、園で出しているお便りの文面の中にある、園長先生や保育者の意識を分析することで、2年以上が経った中での意識の変化と、園による保護者への意図や意識(メッセージ)の違いを分析、検討いたします。

各記録について、以下の表を元にワードやエクセルなどで枠を作って下さって記入して下さい結構です。なお、記入用ファイルが必要な方は郡山女子大学附属幼稚園の賀門(youchien@koriyama-kgc.ac.jp)までお申し出下さい。なお、手書きでも結構です。

本調査は「一般社団法人日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会」による調査であり、本研究に使用する資料及びデータについては、先の目的について研究する以外には使用いたしません。また、特定の個人情報及び園の状況などが特定されないように、園名の公表などを控えた上で検討及び報告をまとめてまいります。なお、何らかに理由で園名等を示す必要が生じた場合は、個別に許可を得た上で示すようにいたします。

表1 1日の生活の流れ

園名 ○○幼稚園 (4 月) 年齢 (年長)

- ・時間の記入 (特に昨年と違っているところはどのぐらい時間をかけているか)
- ・一日の生活の流れで子どもや保育者に負担となっている点を出来るだけ具体的に書いていただく欄を作る。(時間的、空間的)

時間	保育者の活動	子どもの活動	配慮点・昨年との違い
登園まで	<ul style="list-style-type: none"> ・保育室周囲の清掃 ・保育室での園児の迎え入れ 	<ul style="list-style-type: none"> ・制服から衣服の着替え ・荷物の片付け 	<ul style="list-style-type: none"> ・窓には水を当てることで、除染を行う ・園児を保育室に入れる前に、服をはたき、放射性物質の保育室への侵入を低減する
活動	<ul style="list-style-type: none"> ○ 朝のあいさつ ○ 一斉活動 <ul style="list-style-type: none"> ・お誕生会にプレゼントをする絵を描く ○ 自由遊び <ul style="list-style-type: none"> ・お集まりの設定から、室内の遊びの環境に整える ○ホールでの体育教室 ○お片付け ○昼食 ○おあつまり ○降園 <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">(ホールなどの環境設定例(図及び記述)) ※保育室外の意図的な活動内容があれば記入)</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 5px 0;">(保育室の環境設定(図及び記述))</div>	<ul style="list-style-type: none"> ○朝 <ul style="list-style-type: none"> ・机を並べてのあいさつ、お話 ・朝の歌、月の歌を歌う ○一斉活動 <ul style="list-style-type: none"> ・今月のお誕生日の子について話を聞き、そのこのことを思いながらプレゼントを描く ○自由遊び (ままごとコーナー、製作コーナー、粘土、ブロック遊び、ヒーローごっこ、人魚作り) ○片付け <ul style="list-style-type: none"> ・協力しながら、片付けをする ○昼食 ○おあつまり、降園 <ul style="list-style-type: none"> ・衣服の着替え ・絵本の読みきかせ ・歌をうたう ○降園 	<ul style="list-style-type: none"> ・朝のお集まりでは、手洗いやうがいについて、子どもたちに注意を促す ・外には出ない様に言葉を書け、注意を促す ・自由遊びでは室内活動のみ。ごっこ遊びが展開したときに場所が限定され、他児との接触などによるケガが考えられるので、適宜、環境を変えながらスペースを確保する。保育者も活動に加わる ・遊びの中でもマスクをつけているように注意して見る ・運動面の発達に留意し、今年度は体育教室を行う。 ・昼食前のうがいを徹底する。一人ひとりについて確認する ・降園時のマスク、長袖がきちんと着用されているか確かめる。家でも気をつけるよう話し、明日も元気で来るよう握手する。
降園後	<ul style="list-style-type: none"> ・保育室の清掃 ・通路等の清掃、高圧洗浄 ・次の日の環境準備 ・保護者へのお便り作成、今日の保育について知らせる 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 預かり保育 ○ 教室(リトミック、体育教室室(課外)) 	

表2 カリキュラムの変更と評価

園名 ○○幼稚園 (4 月) 年齢 (年長)

①子どもの状態	②保育のねらい	③保育方法 (主な活動)	④配慮点・昨年との違い
(きっかけとなる保育者の気づき)	①に対しどのような方向に持っていくか	②を実現するための方法・手段	③を実施する中での、配慮すべき点
保育室内での活動が多く、新入児との接点が少ない。	年長児として、新しい子と接し、お世話をすること、年長児としての自覚、自信を養う	ペンダントなどのプレゼントを作り、年少組に訪問しプレゼントをする	昨年にはない新しい活動。保育者からの一方的な活動になら内容、子どもたちの意見を聞きながら活動を作っていく様に注意する。

<反省・評価> (必要に応じ独自の観点で)

- 例 1 子ども全体の様子 (子どもの気分、情緒的安定、集団の雰囲気、教師との関係など)
- 2 活動への取り組み、意欲、活動性
- 3 物事への知的好奇心、興味関心
- 4 集団行動や生活習慣
- 5 仲間関係、異年齢関係
- 6 表現、創造性
- 7 特殊な状態・事例

<次の月への課題>

<保護者連絡内容と問題点>

- ・ お便り実物 (園、クラスその他)
- ・ 保護者からの質問・要望等と園の対応

表3 エピソード (具体的な記録)

園名 _____ 組 (月 日)

時間	クラスや活動の状況、環境設定、保育者の行動等	・子どもの行動、ことば、保育者との相互作用等 ・振り返りや考察(保育者の受け止め、気づき等)

II 協力園保護者用調査用紙

調査のお願い

保護者用

この調査は、お子様の現状を把握し、より良い発達のために、どのような環境が望ましいかを明らかにすることを目的としております。震災後のお子様・保育環境の変化や保護者の皆様のご意見についてご質問をしております。答えにくい質問もあると思いますが、調査結果はプライバシーに配慮した上で、統計的に処理しますので、個人が特定されるようなことは一切ありません。また、回答結果は目的以外に使用いたしませんので、ご理解の上ご協力くださいますよう、よろしくお願いたします。

この結果は、保育充実のための利用や、学会での報告などを通じて、各方面に発信させていただきます。

一般社団法人 日本保育学会
放射能災害にかかる保育問題検討委員会

用紙をお持ち帰りになったお子様について、お答えください。

(該当する番号に○をつけてください)

- 1) 居住地域をお答えください。
1. 伊達市 2. 福島市 3. 二本松市 4. 本宮市
5. 郡山市 6. 東京都 7. その他 ()
- 2) 居住環境をお答えください。 1市街 ・ 2郊外
- 3) 園種 1. 幼稚園 2. 保育園 3. その他 ()
I. 公立 II. 私立
- 4) お子様の性別 男性 女性
- 5) 入園年月 (平成 年 月)
- 4) 在籍クラス 2歳以下 / 3歳(年少)
4歳(年中) / 5歳(年長) /混合クラス

記入上の注意

- ・マークシートは、両面印刷になっています。下記の記入例を参考に直接アンケート用紙にご記入ください。
- ・マークシートの記入は、B、2Bの鉛筆、又は黒のボールペンで数字が見えなくなるまでしっかりと塗りつぶしてください。
- ・問題によっては、回答をいずれかに決めたい場合もあるかとは思いますが、考え込まず、お感じになったものをお選びください。
- ・自由記述欄は、記入できる範囲で答えてください。
- ・枠外や指定以外の場所には、記入しないでください。

記入例	どの程度でもない				
	全くない	少しある	よくある	ほとんどない	ほとんどある
1. 起きてすぐにインターネットを使用する。 当てはまる場所に●をして下さい。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2. お風呂に携帯電話を持って入る。	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3. 朝ごはんを抜いてしまうことがある。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>
4. 異性人の名前が出てこない。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
5. 賞金買いをしよう。	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>
6. ついつい長電話をしよう。	<input type="radio"/>	<input checked="" type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

①1年前と比較して、以下の生活はどのように変化しましたかをお聞きます。以下の文章を読んで程度に合う番号を塗りつぶしてください。	非常に減った	少し減った	変化なし	少し増えた	非常に増えた
1 友達と遊ぶ機会	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
2 外遊びの時間	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
3 テレビの視聴時間	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
4 手伝い	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
5 睡眠時間	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
6 情緒不安定な言動	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
7 わがままな言動	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
8 活発な言動	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
9 自立的な言動	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
10 放射能に関する発言	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
11 思いやり	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
12 幼稚園での出来事を話す回数	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
13 ご家族での近所への外出	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
14 ご家族での通方への外出	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
15 ご家族の会話	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
16 家の中でご家族一緒に過ごす時間	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
17 近所の人との交流	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
18 他の保護者との付き合い	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
19 ご家族でテレビを見る時間	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
20 ご家族で食事をする回数	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>
21 お子様の将来についての会話	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>	<input type="radio"/>

No.1

②お子様への心配についてお聞きします。以下の文章を読 読んで心配の程度に合う番号を塗りつぶしてください。	全く心配でない あまり心配でない どちらでもない 少し心配 非常に心配		全く心配でない あまり心配でない どちらでもない 少し心配 非常に心配
1 排泄の自立が出来ていない	① ② ③ ④ ⑤	14 すぐに疲れる	① ② ③ ④ ⑤
2 聞き分けが悪い	① ② ③ ④ ⑤	15 じっとしていられない	① ② ③ ④ ⑤
3 外遊びが十分に出来ていない	① ② ③ ④ ⑤	16 おもちゃなどを独り占めする	① ② ③ ④ ⑤
4 友達と遊んでいない	① ② ③ ④ ⑤	17 滑り台やブランコなどで遊ばない	① ② ③ ④ ⑤
5 よく転ぶ	① ② ③ ④ ⑤	18 人見知りなどをやる	① ② ③ ④ ⑤
6 自分のことが出来ない	① ② ③ ④ ⑤	19 新しい場になかなか慣れない	① ② ③ ④ ⑤
7 言葉の発達が遅い	① ② ③ ④ ⑤	20 虫などを怖がる	① ② ③ ④ ⑤
8 すぐ泣く	① ② ③ ④ ⑤	21 寒さ、暑さに弱い	① ② ③ ④ ⑤
9 親から離れるのを嫌がる	① ② ③ ④ ⑤	22 夜泣きをする	① ② ③ ④ ⑤
10 食が細い	① ② ③ ④ ⑤	23 学力	① ② ③ ④ ⑤
11 好き嫌いが多い	① ② ③ ④ ⑤	24 イライラして怒ったり、かんしゃくをおこす	① ② ③ ④ ⑤
12 フォークなどが使えない	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
13 こだわりがある	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤

No2

③どのようなことに心がけて子育てをされているのかを お聞きします。以下の文章を読んで、ご自身の考えに近い 番号を塗りつぶしてください。	あまりしない し ない	ど ち ら か も い え な い	強 く 心 が け た 心 が け た		強 く 心 が け た 心 が け た	ど ち ら か も い え な い	あ ま り し な い し な い
1 食材(産地)に気をつける	① ② ③ ④ ⑤			14 子どもの生活習慣を早く自立させる			① ② ③ ④ ⑤
2 出来るだけ子どもの外出を控える	① ② ③ ④ ⑤			15 外の土や植物に触れさせないようにする			① ② ③ ④ ⑤
3 子どもの嫌がることはしない	① ② ③ ④ ⑤			16 習い事、塾などを早めに始める			① ② ③ ④ ⑤
4 家周辺の除染に努める	① ② ③ ④ ⑤			17 地域の行事などふれあいの場(子育てイベントやサーク			① ② ③ ④ ⑤
5 室内で遊べる遊具をそろえる	① ② ③ ④ ⑤			18 外出後の手洗いがい、着替えなどをしっかりする			① ② ③ ④ ⑤
6 子どもの要求を否定しない	① ② ③ ④ ⑤			19 家の中で植物を育てたり、生き物を飼ったりする			① ② ③ ④ ⑤
7 しつけはきちんとする	① ② ③ ④ ⑤			20 近所の人との交流を増やす			① ② ③ ④ ⑤
8 親子の時間を楽しく過ごす	① ② ③ ④ ⑤			21 家族で過ごす時間を増やす			① ② ③ ④ ⑤
9 身体活動(運動)を多くする(スイミング教室なども含む)	① ② ③ ④ ⑤			22 育児書などの図書を頻りに読む			① ② ③ ④ ⑤
10 遠方に行って戸外で遊ばせる	① ② ③ ④ ⑤						① ② ③ ④ ⑤
11 近所への外出を増やす	① ② ③ ④ ⑤						① ② ③ ④ ⑤
12 屋内競技場(体育館、ペップキッズなど)に連れて行く	① ② ③ ④ ⑤						① ② ③ ④ ⑤
13 放射線量を確認しながら、線量の低いところに行く	① ② ③ ④ ⑤						① ② ③ ④ ⑤

No3

④生活に関する心配についてお聞きします。以下の文章を読んでご自身の心配の程度に合う番号を塗りつぶしてください。	全く心配でない あまり心配でない どちらともいえない 少し心配 非常に心配	⑤ご回答いただいている方の一か月についてお聞きします。以下の文章を読み、一番近い番号を塗りつぶしてください。(1から4の番号で評定して下さい。)	全くない ほとんどない やや多い 多い
1 風評被害	① ② ③ ④ ⑤	1 いらいらしたり、すぐに腹が立つことがありますか？	① ② ③ ④ ⑤
2 知人の避難	① ② ③ ④ ⑤	2 物音にビクッとおどろくことがありますか？	① ② ③ ④ ⑤
3 支援が継続するか	① ② ③ ④ ⑤	3 気分が落ち込んでしまうことがありますか？	① ② ③ ④ ⑤
4 食材の放射線量	① ② ③ ④ ⑤	4 日頃やっている仕事に集中しにくいことがありますか？	① ② ③ ④ ⑤
5 他の人との交流の機会の不足	① ② ③ ④ ⑤	5 突然に震災のことが思い出されることがありますか？	① ② ③ ④ ⑤
6 他の人との意見の違い	① ② ③ ④ ⑤	6 食欲がない、あるいは食欲がおさえられないことがありますか？	① ② ③ ④ ⑤
7 今後の経済面や仕事	① ② ③ ④ ⑤	7 疲れやすく、身体がだるいことがありますか？	① ② ③ ④ ⑤
8 自分や家族の健康	① ② ③ ④ ⑤	8 寝つきが悪くなった、あるいは夜中に目が覚めることがありますか？	① ② ③ ④ ⑤
9 地域の活性化（または地域住民の減少）	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
10 子育てや教育の方法	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
11 幼稚園の放射線量	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
12 地域（よく行くところ）の放射線量	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
13 原発事故の問題の風化	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤

No4

⑥普段のお子様への意識をお聞きしています。以下の文章を読み、ご自身の考えに当てはまる番号を塗りつぶして下さい。	当てはまらない ほとんど当てはまらない どちらともいえない 当てはまる ほとんど当てはまる よく当てはまる	⑦以下の質問についてお感じになっていることをお書きください。	
1 子どもが外で何をしているのか、気にならない	① ② ③ ④ ⑤	お子様の発達について気になっていることをお書きください。	① ② ③ ④ ⑤
2 夫（妻）は、もう少し子どものことを考えてほしい	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
3 友だちとどのように遊ぶか、どのように付き合うかは、子どもに任せている	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
4 子どもに対して、自分はどれほど力になれるか自信がない	① ② ③ ④ ⑤	大家族と感じることをお書きください。	① ② ③ ④ ⑤
5 子どもとゆっくり話をする機会はあまりない	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
6 子どものためにやってやれることは、親が多少犠牲になってもやってやりたい	① ② ③ ④ ⑤	喜びや充実感を感じることをお書きください。	① ② ③ ④ ⑤
7 親が厳しくしつけなくても、子どもは自然に育っていく	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
8 自分のことや他のことで頭がいっぱいで、子どものことに関心を向ける余裕がない	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
9 子どものことが気になるが、どうしてよいかわからない	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
10 子どもは、小さいうちをしっかりしつけなくてはいけない	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
11 子どもには、社会的に尊敬される職業や地位についてほしい	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
12 子どもの良いところをほめるようにしている	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤
13 子どものことを誇りに思う	① ② ③ ④ ⑤		① ② ③ ④ ⑤

No5

Ⅲ 協力園新入園児対象保護者用調査用紙

調査のお願い

今回の調査では、年少のお子様現在の状況や保護者の方の考えについて質問しております。調査結果はプライバシーに配慮した上で、統計的に処理しますので、個人が特定されるようなことは一切ありません。また、調査結果は目的以外に使用いたしませんので、ご理解の上ご協力ください。

調査により、お子様の現状を把握し、より良い発達のために、どのような保育や環境が望ましいのかを明らかにすることを目的としております。この結果は、各園の保育環境充実のための活用や、学会での報告などを通じて、各方面に発信させていただきます。これらの研究を通して今後の子育てに貢献していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

*ご回答は本調査用紙をお渡ししたお子様についてお願いたします。

一般社団法人日本保育学会 放射能災害にかかるとする保育問題研究委員会

- お答えいただく方の性別に○を、7月1日現在の年齢をご記入してください。
男性 ・ 女性 () 歳
- お子様の出生順をご記入ください(例：第1子、第2子等)。
第()子
- お子様の入園前と後(現在)の生活時間についてお伺いします。平日のおおよその時間に○をして下さい。
 - (1)起床時間 入園前 ①6:30以前 ②6:30~7:15 ③7:15~8:00 ④8:00以降
入園後 ①6:30以前 ②6:30~7:15 ③7:15~8:00 ④8:00以降
 - (2)就寝時間 入園前 ①20:30以前 ②20:30~21:15 ③21:15~22:00 ④23:00以降
入園後 ①20:30以前 ②20:30~21:15 ③21:15~22:00 ④23:00以降
 - (3)テレビ(DVD等)視聴時間
入園前 ①1時間未満 ②1時間~2時間 ③2時間~3時間 ④3時間~4時間
入園後 ①1時間未満 ②1時間~2時間 ③2時間~3時間 ④3時間~4時間
 - (4)食事の時間(平日)
朝ごはん：入園前 ①6:30以前 ②6:30~7:15 ③7:15~8:00 ④8:00以降 ⑤食べない
入園後 ①6:30以前 ②6:30~7:15 ③7:15~8:00 ④8:00以降 ⑤食べない
夜ごはん：入園前 ①18:30以前 ②18:30~19:15 ③19:15~20:00 ④20:00以降 ⑤食べない
入園後 ①18:30以前 ②18:30~19:15 ③19:15~20:00 ④20:00以降 ⑤食べない

①入園前と、現在の心配についてお聞きします。以下の文章を横線に入園前に感じていた心配の程度と、現在の心配の程度に合う文章に○をしてください。

例 元気がない	入園前					現在				
	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
1 おむつが取れない	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
2 聞き分けが悪い	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
3 外で遊びが十分に出来ない	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
4 友達と遊んでいない	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
5 よく転ぶ	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
6 靴や服の着脱など自分のことが出来ない	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
7 言葉の発音が悪い	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
8 すぐ泣く	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
9 顔から離れられるのを嫌がる	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
10 食が細い	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
11 好き嫌いが多い	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
12 フォークなどが使えない	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
13 こだわりがある	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
14 すぐに寝れる	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
15 じっとしていられない	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
16 おもちゃなどを独り占めする	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
17 滑り台やブランコで遊ばない	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
18 人見知りをする	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
19 新しい場になかなか慣れない	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
20 虫を怖がる	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
21 暗さ、暑さに弱い	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
22 夜泣きをする	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
23 学力面での遅れ	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
24 イライラして怒ったり、かんしゃくをおこす	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5

②どのような掛けで子育てをされてきたかをお伺いいたします。以下の文章を読み、ご自身の考えに近い番号に○をしてください。

	1	2	3	4	5
1 食材(産地)に気をつける	1	2	3	4	5
2 出来るだけ子どもの外出を控える	1	2	3	4	5
3 子どもの嫌がることはしない	1	2	3	4	5
4 家周辺の除染に努める	1	2	3	4	5
5 室内で遊べる遊具をそろえる	1	2	3	4	5
6 子どもの要求を否定しない	1	2	3	4	5
7 しつけはきちんとする	1	2	3	4	5
8 親子の時間を楽しく過ごす	1	2	3	4	5
9 身体活動(運動)を多くする(スイミング教室なども含む)	1	2	3	4	5
10 遠方に行って戸外で遊ばせる	1	2	3	4	5
11 近所への外出を増やす	1	2	3	4	5
12 屋内運動施設(体育館、ペップキッズなど)に連れて行く	1	2	3	4	5
13 放射線量を確認しながら、線量の低いところに行く	1	2	3	4	5
14 子どもの生活習慣を早く自立させる	1	2	3	4	5
15 外の土や植物に触れさせないようにする	1	2	3	4	5
16 習い事、塾などを早めに始める	1	2	3	4	5
17 地域の行事などふれあいの場(子育てイベントやサークルなど)に参加する	1	2	3	4	5
18 外出後の手洗いがいい、着替えなどをしっかりする	1	2	3	4	5
19 家の中で植物を育てたり、生き物を飼ったりする	1	2	3	4	5
20 近所の人との交流を増やす	1	2	3	4	5
21 家族で過ごす時間を増やす	1	2	3	4	5
22 育児書などの図書を頻りに読む	1	2	3	4	5

③生活に関する心配についてお聞きします。以下の文章を横線でご自身の心配の程度に合う番号に○をしてください。

	1	2	3	4	5
1 風評被害	1	2	3	4	5
2 知人の避難	1	2	3	4	5
3 支援が継続するか	1	2	3	4	5
4 食材の放射線量	1	2	3	4	5
5 他の人との交流の機会不足	1	2	3	4	5
6 他の人との意見の違い	1	2	3	4	5
7 今後の経済面や仕事	1	2	3	4	5
8 自分や家族の健康	1	2	3	4	5
9 地域の活性化(または地域住民の減少)	1	2	3	4	5
10 子育てや教育の方法	1	2	3	4	5
11 幼稚園の放射線量	1	2	3	4	5
12 地域(よく行くところ)の放射線量	1	2	3	4	5
13 原発事故の問題の悪化	1	2	3	4	5
④お答えいただいている方自身の1カ月について専ねたものです。以下の文章を横線一番近い番号に○をしてください。					
1 いらいらしたり、すぐに涙が立つことがありますか?	1	2	3	4	5
2 物事にピクッとおどろくことがありますか?	1	2	3	4	5
3 気分が落ち込んでしまうことがありますか?	1	2	3	4	5
4 日頃やっている仕事に集中しにくいことがありますか?	1	2	3	4	5
5 突然に異変のことが思い出されることがありますか?	1	2	3	4	5
6 食欲がない、あるいは食欲がおさえられないことがありますか?	1	2	3	4	5
7 疲れやすく、身体がだるいことがありますか?	1	2	3	4	5
8 寝つきが悪くなった、あるいは夜中に目が覚めることがありますか?	1	2	3	4	5

⑤各段のお子様への意識をお答えください。以下の文章を読み、ご自身の考えに当てはまる番号に○をしてください。

	思 て は ま ら な い	思 て は あ ま り な い	ど も も も も も も も	思 て は ま る い	よ く 思 て は ま る
1 子どもが外で何をしているのか、気にならない	1	2	3	4	5
2 夫(妻)は、もう少し子どものことを考えてほしい	1	2	3	4	5
3 友だちとどのように遊ぶか、どのように付き合うかは、子どもに任せている	1	2	3	4	5
4 子どもに対して、自分ほどれほど力になれるか自信がない	1	2	3	4	5
5 子どもとゆっくり話をする機会はありません	1	2	3	4	5
6 子どものためにやってもやれることは、親が多少犠牲になってもやってやりたい	1	2	3	4	5
7 親が厳しくしつけなくても、子どもは自然に育っていく	1	2	3	4	5
8 自分のことや他のことで頭がいっぱいで、子どものことに関心を向ける余裕がない	1	2	3	4	5
9 子どものことが気になるが、どうしてよいか分からない	1	2	3	4	5
10 子どもは、小さいうちにしっかりしつけなくてはいけない	1	2	3	4	5
11 子どもには、社会的に尊敬される職業や地位についてほしい	1	2	3	4	5
12 子どもの良いところをほめるようにしている	1	2	3	4	5
13 子どものことを誇りに思う	1	2	3	4	5

お子様の発達について気になっていることを書いてください。

大変だと感じていることを書いてください。

喜びや充実感を感じていることを書いてください。

幼稚園に入園したことによる変化がありましたら書いてください。

IV 広域調査用調査用紙

1. 園長用調査用紙

調査のお願い

この調査は、園児の現状を把握し、より良い発達のために、どのような環境が望ましいのかを明らかにすることを目的としております。震災後の園児・保育環境の変化や園長先生のご意見についての質問をしております。答えにくい質問もあると思いますが、調査結果は統計的に処理しますので、個人が特定されるようなことは一切ありません。また、回答結果は目的以外に使用いたしませんので、ご理解の上ご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。

この結果は、保育充実のために活用や、学会での報告などを通じて、各方面に発信させていただきます。

一般社団法人 日本保育学会
放射能災害にかかる保育問題検討委員会

園長先生用

該当する番号に○をつけてください

1) 園のある地域をお答えください。
 1. 伊達市 2. 福島市 3. 二本松市 4. 本宮市
 5. 郡山市 6. その他 ()

2) 園環境をお答えください。 1 市街 ・ 2 郊外

3) 園種 1. 幼稚園 2. 保育園 3. その他 ()

I. 公立 II. 私立

4) 在籍クラスの数
 ・ 2歳 以下 () 人 / 3歳 : 年少 () 人
 ・ 4歳 : 年中 () 人 / 5歳 : 年長 () 人

5) 保育時間を教えてください
 平常保育 () 時 () 分 ~ () 時 () 分まで
 開園時間 () 時 () 分 ~ () 時 () 分まで

記入上の注意

1. 回答は園長先生、または責任者の方がご記入ください。
2. 回答は、直接アンケート用紙に直接ご記入ください。
3. 問題によっては、回答をいずれかに決めたい場合もあるかとは思いますが、考え込まず、お感じになったものをお選びください。

ご協力お願いいたします。

①震災前と比較した現在の保育内容についてお聞きします。以下の文章を読み、当てはまる箇所には○をしてください。

向上した
少し向上した
変化なし
少し悪くなった
悪くなった

1 教育課程の作成、指導計画の立案・確認	1 2 3 4 5
2 保育環境の安全・衛生点検	1 2 3 4 5
3 保育内容(5領域)のバランスよい実施	1 2 3 4 5
4 教職員間での園児の共通理解・発達の確認	1 2 3 4 5
5 行事の適正な配置	1 2 3 4 5
6 園児との信頼関係	1 2 3 4 5
7 日常保育の適切な環境構成	1 2 3 4 5
8 保育記録の実践への活用	1 2 3 4 5
9 園外研修への参加	1 2 3 4 5
10 保護者の要望への取り組み	1 2 3 4 5
11 情報公開	1 2 3 4 5
12 給食における安全・衛生対策	1 2 3 4 5
13 危機管理体制	1 2 3 4 5

②震災前と比較した現在の保育時間についてお聞きします。以下の文章を読み、当てはまる箇所には○をしてください。

30分以上増えた
30分未満増えた
変化なし
30分未満減った
30分以上減った

1 職員の勤務時間	1 2 3 4 5
2 一斉での運動遊びの時間	1 2 3 4 5
3 知育にかかわる活動の時間	1 2 3 4 5
4 クラス単位での掃除(除染)の時間	1 2 3 4 5
5 園単位での掃除(除染)の時間	1 2 3 4 5
6 会議の時間	1 2 3 4 5
7 保護者への対応の時間	1 2 3 4 5
8 今年行ったプール遊びの時間	1 2 3 4 5
9 朝やおぼりの集会時間	1 2 3 4 5
10 異年齢交流活動	1 2 3 4 5
11 自由遊びの時間	1 2 3 4 5
12 保育者の記録や書類作成時間	1 2 3 4 5
13 保育者の教材研究や保育の準備の時間	1 2 3 4 5

③震災前と比較した現在の保育活動についてお聞きします。以下の文章を読み、当てはまる箇所には○をしてください。

増えている
少し増えている
どちらともいえない
少し減っている
減っている

1. 日ごろの園児の欠席者数	1 2 3 4 5
2. 遠方への園外保育の実施	1 2 3 4 5
3. 保護者への園活動や環境整備への協力要請	1 2 3 4 5
4. 生活環境保全のための設備・備品の新規設定	1 2 3 4 5
5. 地域との連携活動	1 2 3 4 5
6. 専門機関等外部関係者との交流	1 2 3 4 5
7. 在園児の保護者への情報提供や相談活動	1 2 3 4 5
8. 在園児以外の家庭への子育て支援活動	1 2 3 4 5
9. 新しい遊具、教材の購入や活用	1 2 3 4 5
10. 新しい保育方法の取り入れ	1 2 3 4 5
11. 園長の保育への参加や子どもとのかかわり	1 2 3 4 5
12. 園長自身の園環境整備や点検	1 2 3 4 5
13. 避難訓練	1 2 3 4 5

④現在の保育への考えについてお聞きします。以下の文章を読み、当てはまる箇所には○をしてください。

そう思う
少しそう思う
どちらでもない
あまりそうまらない
そう思わない

1. 建物への被害が大きい問題である	1 2 3 4 5
2. 行政の対応は保育の実態への理解がない	1 2 3 4 5
3. 災害によって園の役割は大きくなった	1 2 3 4 5
4. 保護者からの要求が大きくなっている	1 2 3 4 5
5. 医学・心理学などの専門的な情報が充分である	1 2 3 4 5
6. 保育者はよくなっている	1 2 3 4 5
7. 地域は保育園、幼稚園に対して協力的である	1 2 3 4 5
8. 幼稚園・保育園は小学校と比べて配慮されていない	1 2 3 4 5
9. 今回の災害の影響は保育園と幼稚園の違いが大きい	1 2 3 4 5
10. 職員の労働が過重になっている	1 2 3 4 5
11. 放射能の災害下でも工夫をすればほぼ適切な保育ができる	1 2 3 4 5
12. 園児の将来の発達の備りが心配である	1 2 3 4 5
13. 園児の減少が大きい問題である	1 2 3 4 5

⑤震災後の外遊びについてお伺いします。震災後各時期どの程度外出を許可していたかをご記入ください。

4. 5月 ()分 6. 7月 ()分 8. 9月 ()分

10. 11月 ()分 12. 1月 ()分

⑨今、保育に必要な支援とは何だと考えられているのかをご記入ください。

⑥外遊びを行うに当たって、どのようなことに配慮されているかをご記入ください。

⑩園児にとって重要な関わりは何だと考えられているのかをご記入ください。

⑦震災後転園した園児、及び転園後戻ってきた園児は何人程度いらっしゃったかをご記入下さい。また、どの時期に移動があったかをご記入ください。

県内転園 震災直後()人 夏休みまで()人 1年以内()人 2年以内()人
 県外転園 震災直後()人 夏休みまで()人 1年以内()人 2年以内()人
 県内転園後再入園 震災直後()人 夏休みまで()人 1年以内()人 2年以内()人
 県外転園後再入園 震災直後()人 夏休みまで()人 1年以内()人 2年以内()人

⑪園児の発達に影響があるとすればどのような面かをご記入ください。

⑧転園後の再入園の理由を分かる範囲でご記入ください。

⑫震災以降、保育者の専門能力は、どのように発揮されましたか？また、更に必要とされるのはどのようなことでしょうか？

2. 保育者用調査用紙

調査のお願い

この調査は、園児の現状を把握し、より良い発達のために、どのような環境が望ましいのかを明らかにすることを目的としております。震災後の園児・保育環境の変化や保育者の皆様のご意見をお聞きしております。答えにくい質問もあると思いますが、調査結果はプライバシーに配慮した上で、統計的に処理しますので、個人が特定されるようなことは一切ありません。また、回答結果は目的以外に使用いたしませんので、ご理解の上ご協力くださいますよう、よろしくお願いいたします。

この結果は、保育充実のために利用や、学会での報告などを通じて、各方面に発信させていただきます。

一般社団法人 日本保育学会
放射能災害にかかる保育問題検討委員会

記入上の注意

1. 回答は保育者の方がご記入ください。
2. 回答は、直接アンケート用紙に直接ご記入ください。
3. 問題によっては、回答をいずれかに決めたい場合もあるかとは思いますが、考え込まず、お感じになったものをお選びください。

ご協力お願いいたします。

保育者用

勤務園、及びご自身についてお答えください。

- 1) 園の地域をお答えください。
1. 伊達市 2. 福島市 3. 二本松市 4. 本宮市
5. 郡山市 6. その他()
- 2) 園の環境をお答えください 1市街 ・ 2郊外
- 3) 園種 1. 幼稚園 2. 保育園 3. その他()
①公立 ②私立
- 4) 性別 男性 女性
- 5) 経験年数 0-2年 3-4年 5-7年
8-10年 11年以上
- 6) 担当クラス(組) 2歳以下()組 3歳:年少()組
4歳:年中()組 5歳:年長()組 フリー

①園児の状況について、震災前と比べてどのような違いがありますか(もしくは、違いがあると感じますか?)。以下の文章を読んで当てはまる箇所には○を書いてください。

- | | | | |
|--------------------------|------------------------------------|-------------------------------|----------------------------------|
| | 少し減った
どちらともいえない
少し増えた
増えた | | 減った
どちらともいえない
少し増えた
増えた |
| 1 遊び中の十分な運動 | 1 2 3 4 5 | 14 集団行動のルールを守る | 1 2 3 4 5 |
| 2 戸外で遊べないことでの子ども達のストレス | 1 2 3 4 5 | 15 家庭での、子どもの自然との触れ合い | 1 2 3 4 5 |
| 3 子どもから食物への不安の言葉 | 1 2 3 4 5 | 16 保育の中で小動物に触れる機会 | 1 2 3 4 5 |
| 4 外に出る際に、子どもが放射線のことを気にする | 1 2 3 4 5 | 17 園庭やビデオなど、自然の擬似体験 | 1 2 3 4 5 |
| 5 甘えたり、依存的な行動 | 1 2 3 4 5 | 18 草や砂などに触れる活動の代わりに経験 | 1 2 3 4 5 |
| 6 自衛隊や警察、救急などの仕事への興味 | 1 2 3 4 5 | 19 興味をもったことの質問や探究しようとする言動 | 1 2 3 4 5 |
| 7 友だち関係でのトラブル | 1 2 3 4 5 | 20 新しいことを考えたり、工夫しようとする | 1 2 3 4 5 |
| 8 素直に自分の気持ちを表現する | 1 2 3 4 5 | 21 震災に関連した言葉(津波、シーベルトなど)を使うこと | 1 2 3 4 5 |
| 9 友だちと協力して遊びを進める | 1 2 3 4 5 | 22 歌やダンスなどをみんなですることへの興味 | 1 2 3 4 5 |
| 10 保育者の指示を待つ | 1 2 3 4 5 | 23 自然の美しさや不思議さについての言葉 | 1 2 3 4 5 |
| 11 友達や保育者に対して攻撃的な行動 | 1 2 3 4 5 | 24 読み聞かせや絵本を眺む回数 | 1 2 3 4 5 |
| 12 保育者のいうことをよく守る | 1 2 3 4 5 | 25 自然から感じる音、色、形、手触りなどの経験 | 1 2 3 4 5 |
| 13 自己主張をしたり自分を過そうとする言動 | 1 2 3 4 5 | 26 子どもの気持ちの安定感 | 1 2 3 4 5 |

②、保育をする上での考え・実践についてお聞かせください。以下の文章を読んで当てはまる箇所には○を書いてください。

- | | | | |
|-------------------------------|----------------------------------|-----------------------------------|--|
| | 減った
どちらともいえない
少し増えた
増えた | | そう考えない
そうあまりいい
どちらとも
少し考える
そう考える |
| 27 遊びへの集中度 | 1 2 3 4 5 | 1 室内運動を増やせば、外遊びでの運動的発達を補える | 1 2 3 4 5 |
| 28 身辺自立に関する発達 | 1 2 3 4 5 | 2 自然環境との接触の減少は保育環境の中でカバーできる | 1 2 3 4 5 |
| 29 新入児の園生活への適応力 | 1 2 3 4 5 | 3 保育の中で発見の楽しみの機会を増やしている | 1 2 3 4 5 |
| 30 機敏な動作 | 1 2 3 4 5 | 4 季節の変化を感じられるように、環境設定を工夫している | 1 2 3 4 5 |
| 31 周囲の人への思いやり | 1 2 3 4 5 | 5 津波ごっこなどの遊びをどう受け止めていいか困惑することがある | 1 2 3 4 5 |
| 32 友だち関係の広がり | 1 2 3 4 5 | 6 自然物以外からの感動があるように保育内容を変えた | 1 2 3 4 5 |
| 33 自分の目的をやり遂げようとする力 | 1 2 3 4 5 | 7 描画や製作物を室内に効果的に飾って、見て楽しめるようにしている | 1 2 3 4 5 |
| 34 自然環境への好奇心 | 1 2 3 4 5 | 8 表現遊びの環境(時間、空間)を整えることが困難に感じる | 1 2 3 4 5 |
| 35 子どもの乱暴な言葉遣い | 1 2 3 4 5 | 9 保護者とコミュニケーションをとることを意識している | 1 2 3 4 5 |
| 36 文字への興味や習得 | 1 2 3 4 5 | 10 のびのびとさせることを意識している | 1 2 3 4 5 |
| 37 子ども同士の会話の活性化 | 1 2 3 4 5 | 11 子どもの要求を受け入れることを意識している | 1 2 3 4 5 |
| 38 グループ遊び | 1 2 3 4 5 | 12 子どもの生命・健康を守ることを第一に考えている | 1 2 3 4 5 |
| 特に気になる子どもの状況がございましたら、ご記入ください。 | | 13 この場で保育をしいのかと悩むことがある | 1 2 3 4 5 |

3. 保護者用調査用紙（最終版）

調査のお願い

今回の調査では、現在の状況や保護者の方の考えについて質問しております。調査結果は統計的に処理しますので、個人が特定されるようなことは一切ありません。また、回答結果は目的以外に使用いたしませんので、ご理解の上ご協力ください。

調査により、お子様の現状を把握し、より良い発達のために、どのような保育や環境が望ましいのかを明らかにすることを目的としております。この結果は、学会での報告などを通じて、各方面に発信させていただきます。これらの研究を通して今後の子育てに貢献していきたいと考えております。どうぞよろしくお願いたします。

*ご回答は本調査用紙をお返しいたお子様についてお願いたします。

一般社団法人日本保育学会 放射能災害にかかる保育問題研究委員会

①1年前と比較して、以下の生活はどのように変化しましたか？文章を読んで程度に合う番号に○をしてください。

	1	2	3	4	5
例 本を読む回数				○	
1 友達と遊びの回数					
2 外遊びの時間					
3 テレビの視聴時間					
4 手紙					
5 睡眠時間					
6 情緒不安定な行動					
7 わがままな行動					
8 活発な行動					
9 自立的な行動					
10 放射能に関する発言					
11 思いやり					
12 幼稚園での出来事を話す回数					
13 ご家族での近所への外出					
14 ご家族での遠方への外出					
15 ご家族の食卓					
16 家の中でご家族一緒に過ごす時間					
17 近所の人との交流					
18 他の保護者との付き合い					
19 ご家族でテレビを見る時間					
20 ご家族で食事をする回数					
21 お子様の将来についての食卓					

1) お答えいただく方の性別に○を、年齢をご記入してください。

男性 ・ 女性 （ ） 歳

2) お答えいただく方の「就労状況」「就労時間」についてお聞かせします。就労日数や就労時間は、最も多い1週間をお答えください。（※フルタイムとは1週5日、8時間程度の就労）

就労状況（一つ選択）	就労時間
1. フルタイムで就労しており、産休・育休・介護休業中ではない	1週間あたり 日
2. フルタイムで就労しているが、産休・育休・介護休業中である	1日あたり 時間
3. パート・アルバイト等で就労しており、産休・育休・介護休業中ではない	家を出る時間 時 分
4. パート・アルバイト等で就労しているが、産休・育休・介護休業中である	帰宅時間 時 分
5. 家事は就労しているが、産休は就労していない	
6. これまで無職・無業	

3) お子様のクラスと名前を記入してください。（クラス ）（名前 ）

4) お子様の出生順をご記入ください（例：第1子、第2子等）。 第（ ）子

5) お子様の生活時間についてお聞かせします。平日のおおよその時間に○をして下さい。

(1) 起床時間 ①6:30以前 ②6:30～7:15 ③7:15～8:00 ④8:00以降

② 就寝時間 ①20:30以前 ②20:30～21:15 ③21:15～22:00 ④23:00以降

③ テレビ（DVD等）視聴時間 ①1時間未満 ②1時間～2時間 ③2時間～3時間 ④3時間～4時間

(4) 食事の時間（平日）
朝：①6:30以前 ②6:30～7:15 ③7:15～8:00 ④8:00以降 ⑤食べない
夜：①18:30以前 ②18:30～19:15 ③19:15～20:00 ④20:00以降 ⑤食べない

②お子様への心配についてお聞かせします。以下の文章を読んで心配の程度に合う番号に○をしてください。

	1	2	3	4	5
例 元気がない				○	
1 尿意の自立が出来ていない					
2 関心分けが悪い					
3 外遊びが十分に出来ない					
4 友達と遊んでいない					
5 よく転ぶ					
6 自分のことが出来ない					
7 言葉の発達が遅い					
8 すぐ泣く					
9 靴から靴紐のを履ける					
10 寒が強い					
11 好き嫌いが多い					
12 フォークなどが使えない					
13 こたわりがある					
14 すぐに疲れる					
15 じっとしていられない					
16 おもちゃなどを投げ捨てる					
17 滑り台やブランコなどで遊ばない					
18 人見知りなどをする					
19 新しい場になかなか慣れない					
20 虫などを怖がる					
21 痛さ、暑さに弱い					
22 夜泣きをする					
23 学力					
24 イライラして怒ったり、かんしゃくをおこす					

③どのような心掛けで子育てをされてきたかをお伺いいたします。以下の文章を読み、ご自身の考えに近い番号に○をしてください。

	1	2	3	4	5
1 食料（産地）に気をつける					
2 出来るだけ子どもの外出を控える					
3 子どもの嫌がることはしない					
4 家周辺の除染に努める					
5 室内で遊べる遊具をそろえる					
6 子どもの要求を否定しない					
7 しつけはきちんとする					
8 親子の時間を楽しく過ごす					
9 身体活動（運動）を多くする（スイミング教室なども含む）					
10 遠方に行って戸外で遊ばせる					
11 近所への外出を増やす					
12 屋内競技場（体育館、ペップキッズなど）に連れて行く					
13 放射線量を確認しながら、線量の低いところに行く					
14 子どもの生活習慣を早く自立させる					
15 外の土や植物に触れさせないようにする					
16 習い事、塾などを早めに始める					
17 地域の行事などふれあいの場（子育てイベントやサークルなど）に参加する					
18 外出後の手洗いがい、着替えなどをしっかりする					
19 家の中で植物を育てたり、生き物を飼ったりする					
20 近所の人との交流を増やす					
21 家族で過ごす時間を増やす					
22 育児書などの図書を読みに読む					

134

④生活に関する心配についてお聞きします。以下の文章を読んでご自身の心配の程度に合う番号に○をしてください。

	全く心配が ありません	少し心配が あります	かなり心配が あります	とても心配が あります
1 経済問題	1	2	3	4
2 知人の避難	1	2	3	4
3 支援が継続するか	1	2	3	4
4 食料の供給確保	1	2	3	4
5 他の人との交友の機会の不活	1	2	3	4
6 他の人との意見の違い	1	2	3	4
7 今後の経済状況や仕事	1	2	3	4
8 自分や家族の健康	1	2	3	4
9 地域の活性化（または地域住民の高齢化）	1	2	3	4
10 子育てや教育の方法	1	2	3	4
11 幼稚園の供給確保	1	2	3	4
12 地域（よく行くところ）の供給確保	1	2	3	4
13 葬儀事情の問題の高止	1	2	3	4

⑤回答いただいている方自身の1カ月について尋ねたものです。以下の文章を読み一番近い番号に○をしてください。

	1	2	3	4
1 いらいらしたり、すぐに泣くことがありますか？	1	2	3	4
2 物事にビクッとおどろくことがありますか？	1	2	3	4
3 気分が落ち込んでしまうことがありますか？	1	2	3	4
4 日頃やっている仕事に集中しにくいことがありますか？	1	2	3	4
5 突然に震災のことが思い出されることがありますか？	1	2	3	4
6 食欲がない、あるいは食欲がおさえられないことがありますか？	1	2	3	4
7 疲れやすく、身体がだるいことがありますか？	1	2	3	4
8 寝つきが悪くなった、あるいは途中で目が覚めることがありますか？	1	2	3	4

⑥普段のお子様への意識をお答えください。以下の文章を読み、ご自身の考えに当てはまる番号に○をしてください。

	絶対に やらせては ならない	やらせては あまり ない	やらせては よい	やらせては よい	やらせては よい
1 子どもが外で何をしているのか、気にならない	1	2	3	4	5
2 夫(妻)は、もう少し子どものことを考えてほしい	1	2	3	4	5
3 家族とどのように遊ぶか、どのように付き合うかは、子どもに任せている	1	2	3	4	5
4 子どもに対して、自分はどれほど力になれるか自信がない	1	2	3	4	5
5 子どもとゆとり関係を築く機会はない	1	2	3	4	5
6 子どものためにやってくれることは、親が多少犠牲になってもやってやりたい	1	2	3	4	5
7 親が楽しくしなくても、子どもは自然に育っていく	1	2	3	4	5
8 自分のことや他のことで話がいっぱいで、子どものことに関心向ける余裕がない	1	2	3	4	5
9 子どもが何になるが、どうしてよいかわからない	1	2	3	4	5
10 子どもは、小さいうちにしっかりしつけてはいけない	1	2	3	4	5
11 子どもには、社会的に尊敬される職業や地位についてほしい	1	2	3	4	5
12 子どもは、よいところを褒めるようにしている	1	2	3	4	5
13 子どもを叱りつける	1	2	3	4	5

お子様の発達について真になっていくことを書いてください。

大家などと関係していることを書いてください。

喜びや希望を語っていることを書いてください。

その他幼稚園への要望など何かございましたら、自由にお書きください。

震災後の家族の状況についてお伺いします

- ①震災後、避難や保護者の仕事のために、転居した方が家族が離れて生活したことがありますか？
1. あった 2. なかった
- 「1. あった」を選ばれた方にお伺いします。
- ②転居を決めた理由は次のどれですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。
- 子どもや家族の放射能からの影響を避けるため
 - 安全・自由以外で活動できないから
 - しばらく様子を見ていたが除染や収束に時間がかかりそうだったから
 - 家族、知人などのすすめで
 - 地域やまわりの人が避難したので
 - 仕事の都合で
 - その他(具体的に:)
- 「2. なかった」を選ばれた方にお伺いします。あてはまる番号すべてに○をつけてください。
- 健康や安全には問題がないと考えたから
 - これまで通り家族や地域で暮らすことが大切と考えたから
 - 適切な転居先が見つからなかったから
 - 転居後の生活の見通しがつかなかったから
 - 親や親戚の出発をするなどのために
 - その他(具体的に:)
- ご協力ありがとうございました。
- ③避難や保護者の仕事のために転居した地域は次のどこですか。あてはまる番号1つに○をつけて、()内に記入ください。
- 金津(市町村名:)
 - 中通り(市町村名:)
 - 浜通り(市町村名:)
 - 東北(宮城・山形・岩手・秋田・青森)
 - 北関東(栃木・茨城・群馬)
 - 南関東(東京・千葉・埼玉・神奈川)
 - その他(具体的に:)
- ④転居する地域を決めた理由は次のどれですか。あてはまる番号すべてに○をつけてください。
- 行政からの指導、あっせん
 - 家族や親戚がいたから
 - 放射能から安全だから
 - 以前に住んだことがあるなど比較的知っている土地柄だから
 - 自宅から比較的近いから
 - 仕事の都合で
 - その他(具体的に:)
- ⑤避難や保護者の仕事のために転居した期間は、震災後いつ頃ですか。あてはまる番号1つに○をつけてください。
- 1ヶ月以内
 - 1～3ヶ月
 - 3～6ヶ月
 - 6～12ヶ月
 - 1年～2年
 - 2年以上
- ⑥避難や保護者の仕事のために転居した期間はどれくらいですか。あてはまる番号1つに○をつけてください。(2回以上転居した場合は合計の期間を)
- 1ヶ月以内
 - 1～3ヶ月
 - 3～6ヶ月
 - 6～12ヶ月
 - 1年～2年
 - 2年以上
- ⑦転居先で幼稚園や保育所、子育て支援センターなどを利用しましたか？
- 幼稚園に通園した
 - 保育所に通園した
 - 保育所の園開放や一時保育などを利用した
 - 地域の子育て支援センターなどを利用した
 - 利用しなかった
- ⑧転居先はどのような場所でしたか。
- 家族や親戚の家
 - 個人で購入
 - 賃貸契約
 - 各都道府県等が準備した公営住宅
 - 民間借り上げ住宅
 - 仮設住宅
 - その他
- ⑨転居先は生活や支援の環境が十分あったと見えますか。
- 必要な環境は整っていた
 - ほぼ整っていたが、不自由なことや不便なこともあった(具体的に:)
 - 不自由なことや不便なことが多かった(具体的に:)
 - その他(具体的に:)

- ⑩震災や家族が離れて生活した理由について、あてはまる番号1つに○をつけてください。また、一部転居した場合は、避難した方を○してください。
- 一時的な避難のために家族の一部が転居した
 - 転居や失業のため家族の一部が転居した
 - 親や親戚などの世帯のため家族の一部が転居した
 - 転居や失業のため家族全員で転居した
 - 一時的な避難のために家族全員で転居した
 - 親や親戚などの世帯のため家族全員で転居した
 - その他(具体的に:)
- 「避難した方」を選ばれた方にお伺いします。
- 子どものみ
 - 母親と子ども
 - 父親と子ども
 - 祖母と子ども
 - 祖父と子ども
 - その他(具体的に:)
- ⑪避難した転居先から現在の住居に戻った理由について、あてはまる番号すべてに○をつけてください。
- 除染などが進み、比較的安心して暮らせるようになったから
 - 転居先での生活に見通しが出ていないから
 - 住み慣れた場所だから
 - 仕事を求められたから、仕事の都合で
 - 家族の希望で
 - その他(具体的に:)
- ⑫転居した避難先、リターン後に困ったり、悩んだりしたことについて、ご自由にお書きください。

- 震災後の仕事と所得についてお伺いします
- ⑬震災後、主たる家計支持者が失業や離職、転居、転居しなければならぬことはありましたか。
- なかった
 - 失業・離職した
 - 転居した
 - 転居した
- ⑭震災前後で世帯の総収入はどのように変化しましたか。震災の前年と現在(昨年)の世帯所得についてそれぞれあてはまるものに○をつけてください。
- 平成22年(震災の前年)
- | | | |
|----------------|--------------|--------------|
| 1. 300万円未満 | 2. 300～500万円 | 3. 500～700万円 |
| 4. 700～1,000万円 | 5. 1,000万円以上 | |
- 平成24年(昨年)
- | | | |
|----------------|--------------|--------------|
| 1. 300万円未満 | 2. 300～500万円 | 3. 500～700万円 |
| 4. 700～1,000万円 | 5. 1,000万円以上 | |
- ⑮震災にかかわる補助金、助成金を受けていますか。またそれが世帯総収入に占める割合はどのくらいですか。あてはまるもの1つに○をつけてください。
- 補助金や助成金は受けていない
 - 10%未満
 - 10～30%
 - 30～50%
 - 50～70%
 - 70%以上

ご協力ありがとうございました。

編集後記

子育て、保育は周りに何が起こっても日々営まれ、天災や人災、技術革新や制度改革などに揺す振られながら子どもを守り育てるための判断、選択、実践を繰り返しています。現場は放射能という見えないものとの戦いと共に、地域・家族の状況や情報、価値観の多様性の故に相互に表せない苦労が多かったと思われまます。今回の経験において見えてきた「子育てに大切なこと」を無にしない努力を課題とし、また、問題の大きさに比して委員会のまとめ役としての非力をお詫びし、同時に関係者のご協力に深く感謝申し上げます。

関口 はつ江

-- * --

お忙しい中、諸調査にご協力いただいた先生方に感謝申し上げます。子ども達にとって大切な環境を大人の都合に合わせて変えてはいけない…それは、福島だけではなく、どこも共通だと思います。本調査が「子どもと環境」を考えるきっかけになれば幸いです。

賀門 康博

-- * --

大震災と原発事故のあと、発達研究者の私の役割は被災した子ども達の現状の把握だろうと考えました。調査の過程で感じたことは、「やはり何かが変わってしまった」ということでした。そして、被災地以外の方々にもこの一連の出来事を「明日は我が身に起こるかもしれない」と感じてほしいと思うようになりました。「あって当然と思っていたことが突然失われる」ということの意味を、他人事としてではなく考えるきっかけにさせていただければと願っています。

長田 瑞恵

-- * --

東日本大震災と原発事故の被害を受けた人々、とりわけ子どもたちのために何かできることはないかと思っていたところ、本保育学会でこのWG研究協力者募集を知り、早速この研究に関わらせていただきました。被災地の震災の記憶も時間とともに薄れゆくものですが、この報告書に記された事実はずっと残っていくと思います。少しでも子どもたちの幸せにつながればと思いながらすすめました。これで終わりではなくさらに深めていければと思います。

山崎 晃

-- * --

報告書を書くたび、放射能災害が回復に向かっていることを強調することで「風化」を招き、未だに強い不安を抱えていることを主張することで「風評」を導くのではないかと考え、どのように表現するかを迷いながらまとめてきました。そのため、まとまりが悪く感じる部分も多々あると思います。ですので、是非、データだけでなく、実際の福島県の保育と照らし合わせながら、今後も興味を持ち続けていただけると幸いです。

最後になりましたが、本委員会の活動に際して、調査にご協力いただいた保護者、園長、保育者の皆様方、協力園の先生方に深く感謝申し上げます。

加藤 孝士

-- * --

福島に住み、福島で保育の現場に関わりを持ち生きている者の一人として、この大震災での経験を、後世に生かせるように残さねばならないと考えておりました。しかしながら、現実には日々のあれこれに追われ、今回も報告書の編集作業だけをさせていただくという我が儘を聞いていただきました。関口先生をはじめ、賀門先生、長田先生、山崎先生そして加藤先生のご尽力がなければ、この未曾有の災害の中で、保育者や保護者が子ども達のために奮闘努力し、またそのことが子ども達の育ちにどう影響していたかという結果が残されなかったと考えます。学会の活動や研究というものはかくあるべきだと痛感しているところです。

原野 明子

放射能災害下の保育問題研究

平成27年調査を中心に

発行日 平成29年3月31日
発行者 一般社団法人 日本保育学会
〒102-0073 東京都千代田区九段北3-2-2 B.R ロジェT-1
編集 放射能災害にかかる保育問題研究委員会
印刷 株式会社 日進堂印刷所
〒960-2194 福島市庄野字柿場1-1

非売品